

語り継ぐ 2

小学校 1 年生で体験した阪神・淡路大震災を

高校 3 年生の言葉で語る

兵庫県立舞子高等学校

環境防災科 3 年

震災体験集の発刊にあたって

学校長 中杉隆夫

阪神・淡路大震災から 11 年目をむかえようとしている。

仮設校舎で小学校の入学式を迎えた子どもたちも今は高校 3 年生になった。

漸くという思いと、やっとという思いが複雑に交錯し、時折、鉛を飲み込んだような鈍色の喪失感がよみがえってくる。

冬の早暁、時間も空気も凍てつき、得体の知れない不安が頬につき刺さるような光景ばかりが広がっていた。当時の体験を綴った子どもたちの文集を読むたびに、ついつい涙腺が緩んでしまう。年甲斐もなくなれるかもしれないが、大震災が私たちに突きつけた現実の過酷さ・重さを改めて思う。

自然の為す力の前に、私たちは自らの非力さや現代社会の脆さを痛いほどに知らされた。その一方で、命の尊さや助け合い精神の素晴らしさ、自然に対する畏敬の念の大切さなど、学んだことも随分多かった。

震災後から始まるこの間の道のりを「復旧・復興の十年」とすれば、これからの十年は、震災から学べた貴重な教訓を次代の子どもたちに伝え、つないでいく「継承の十年」と言えるだろう。未曾有の震災を体験した本県だからこそ、発信していかなければならないものも多い。本校「環境防災科」が、全国に先駆けて兵庫県に設置された所以であり、私たちに課せられた責任と期待も大きい。

本誌は、昨年に引き続く『語り継ぐ』の第二集である。それぞれに体験の軽重こそあれ、阪神・淡路大震災に対する一人一人の思いが詰まっている。環境防災科二期生の生徒たちが、幼い日の記憶の糸を紡ぎながら、ある時は両親や祖父母に、またある時は近隣のおじさんやおばさんに話を伺いながら、自分を見つめる目を成長させていった過程でもある。

いみじくも、「学ぶことは、ただ人から聞いた話を記録したり覚えたりするだけではない。この震災体験を書くことで、震災当時のことを今までで一番考えたかも知れない。自分で自分に学ぶことも多くあるのだと思った」と一人の生徒が書いているが、防災教育とは、「教え・教えられる」関係のものではなく、私たち自身も含めて、共に学び成長していくものであることに改めて気づかされた気がする。

終わりに、本誌が、阪神・淡路大震災の語り部として、また私たち一人一人の阪神・淡路大震災を考えるきっかけになれば幸いである。

平成 17 年 10 月 17 日

もくじ

震災体験集の発刊にあたって			1
もくじ			2
題名	震災時の住所	名前	
被災者になって10年	明石市松ヶ丘	赤瀬 晴佳	3
「もう10年」「まだ10年」	神戸市垂水区	石川 泰資	7
あの日の体験から ～過去－未来～	加古郡稲美町	井上 奈緒	11
人生を変えたあの地震	神戸市灘区	浦井 聖也	15
「僕の道」	神戸市垂水区	遠藤 寛道	21
震災体験	神戸市垂水区	太田 里奈	25
過去との付き合い	神戸市垂水区	岡 朋宏	28
感謝と恐怖の日々	神戸市須磨区	岡田 陽介	32
阪神・淡路大震災と環境防災科	神戸市垂水区	岡本賢太郎	37
絶対忘れない	神戸市須磨区	小野 綾子	41
しあわせ運べるように	神戸市垂水区	兼田奈津子	46
私の震災体験～もらった宝物～	神戸市垂水区	川口美由紀	51
今も残るもの	神戸市須磨区	河田のどか	56
忘れられない日々	加古川市西神吉町	神吉 秀幸	60
震災から・・・	神戸市西区	木原 昌昭	64
震災について	神戸市西区	小林 貴把	68
震災を通じて	神戸市北区	高木 洋輔	72
あのときの記憶、そして今思うこと	神戸市西区	瀧川 唯菜	76
「震災体験」	神戸市垂水区	田中 涼	81
『震災体験』	神戸市須磨区	谷口 晋平	86
「地震の記憶箱」	神戸市垂水区	中野 元太	91
記憶	神戸市垂水区	八田 佳澄	96
地震を体験しての教訓	神戸市北区	樋口 貴昭	101
前へ進むために後ろを振り返ってみる	神戸市垂水区	藤澤 正太	105
いま、生きている	神戸市垂水区	船橋 藍	109
あの地震から10年	神戸市西区	増本 智美	113
体験して感じたこと	神戸市垂水区	松井 佑香	118
僕の被災体験	神戸市垂水区	松田 啓希	121
蚊帳の外に居る自分	神戸市西区	松田 由貴	123
語り継ぐ	明石市魚住町	松村 清久	127
記憶に刻まれるもの	神戸市垂水区	水原 大樹	131
まち	神戸市垂水区	宮本 舞子	133
震災を風化させてはいけない	神戸市須磨区	村上恵里子	136
1月17日	大阪府高槻市	山口 幸治	140
震災から今まで	神戸市垂水区	山口 翔吾	143
「震災を忘れない」	神戸市須磨区	吉田ひとみ	146
遠くの地震	加古川市野口町	十倉 有希	150
阪神・淡路大震災	神戸市東灘区	魯山 香織	152
震えた1日	神戸市須磨区	脇田 英明	155

被災者になって10年

明石市松ヶ丘
赤瀬 晴佳

前日の様子

当時私は小学校1年生で、弟は幼稚園の年少だった。そしてお父さんとお母さんは36歳だった。私たちは4人家族で、団地の2階に住んでいた。地震が起きる前の日の事は、まさか次の日に地震が来るなんて思っていなかったから、ほとんど何も覚えていない。ただ弟の誕生日だったのに、誕生日ケーキを次の日に食べる事になったことだけは覚えている。

震災が起きて揺れが納まるまで

震災が起きた日の朝、私は揺れと、「ゴォーッ!!」というなんとも言えない今までに聞いたことのない音と、叫ぶ声にびっくりして目が覚めた。その時、今起きている揺れがいったい何なのかは全然わかっていなくて、お父さんとお母さんが「地震や!!」って叫んでいるのを聞いて、物が落ちてくるかもしれないと思い布団にもぐりこんだ。布団の中で、私は初めてのすごい揺れに何が起きているのかわからず困惑した反面、正直にいうとあまりの迫力に「ジェットコースターみたいや…」と軽く思ってしまった。怖さと楽しさが心の中で交差して、本当に不思議な気分だった。今までに感じたことのない揺れと音、そして親の叫ぶ声…。まるで夢の中の出来事みたいに思えた。それはあまりにも自分が考えている現実とはかけ離れていた。

私だけじゃなくお母さんもそうだったのだろうと思うが、お父さんがあんな風に叫んでいるのを聞いたのは初めてだった。お父さんの声は大きく、怖かった。お父さんの声が怖いというより、その声がいつものお父さんの声と違いすぎて、緊急事態が起きているのだとすぐにわかったから怖かった。でもそれでも今地震が起きていて、危ない状況なのだという事は徐々に理解していたが、これが人の命を奪うほどのことだとは全くわかっていなかった。

隣で寝ていた弟はなかなか起きず、頭の上に空の箱が何箱も落ちてきてやっと起きた。頭に箱が当たる度に、「ポコポコポコッ!!」と変な音がして、その音とかぶるように弟が「イタイタイッ!!」と言っていた。弟は当時まだ5歳だった。まだ寝ぼけている顔と「イタイッ!!」と言っているけど全然痛そうじゃない表情と声は、弟には悪いが面白かった。でも落ちてきたのが空の箱でよかった。よく考えると、もしあれが重い物なら弟は死んでいたに違いない。考えるだけでぞっとした。

あの時はとても長い間揺れている気がしていたが、後で聞くとそれほど長くはなかった。そう感じたのは恐怖のせいもあるが、数分の間に今までに経験したことのないことをたくさん経験してしまったからだと思う。

揺れが収まってすぐ

揺れがだんだん弱くなっていくと、手探りで懐中電灯を探して辺りをお父さんが照らした。どの部屋もぐちゃぐちゃになっていて、今でもそのときの光景は目に焼きついている。外に出るためにお父さんがスリッパを取りに行くと、台所は食器棚の中身がほとんど出ている状態でガラスのコップやお皿が割れて素足では歩けない状態だった。でも父は出来るだけ踏まないようにしてスリッパを取って履き、落ちている物をどけて寝室から玄関までの道を確保してくれた。そして玄関の扉が開くか確認してみんな外に出た。

家族も親戚も近所の人もみんな無事だった。私の家は他の家に比べてタンスの数が多く、4人とも下敷きになってもおかしくない位置で寝ていたから、助かって本当によかった。大きな物が倒れなかったのは寝ている部屋だけだった。勉強部屋は机が2つとも倒れていたし、台所では物は倒れてはいなかったがぐちゃぐちゃになっていた。寝ていた部屋はベランダの窓が割れていたが、ガラスはほとんど外におちていて私たちは大丈夫だった。テレビも落ちたが前には倒れなかったからだれも下敷きにならなかった。あの時、家具の固定など全然してなくて危なかったのに、まさに不幸中の幸いのような出来事がたくさん起こって助かった。「みんな大丈夫!!」と思っていたが、後になって聞くと、震災で両親の友達の子供さんが

亡くなったりしていたそうだ。そんなこと全然知らなかった。当時は本当に自分のことでいっぱいだった。

1日目

私たち家族は外に出ると落ち着くまで車で待機して、中でラジオを聴いた。そして少しすると私と弟を車に残して、お父さんとお母さんは交代で家に戻り片付けをした。最初のほうは電話が通じていたらしく、お母さんの友達から心配の電話がかかってきたらしい。でも、すこしすると電話はつながらなくなり、ライフラインは全部止まった。とても困ったがその日の午前中には電気が戻り、お母さんは朝に炊飯器のタイマーをかけていたので、昼ごろにタイマーの音が鳴ったのを覚えていると言っていた。その後、私と弟も家に入り片付けをしているとき、地震の揺れでベランダの物置が倒れて物干し竿があたり窓が割れたので、両親が新聞紙とガムテープで応急処置をしていたのを覚えている。家のガラスが割れたのは初めてだった。

その日はひたすら片付けをしていた。夜になっても家の中がまだガス臭かったので、私の通っていた小学校に避難し校庭で車を止めて寝た。車の中で寝るのは初めてだったので、キャンプをしているような気分だった。毛布に包まって車で寝るのはすごくしんどかったし、明日はどうなるのだろうと少し心配になったが、不思議と安心感があった。あの時の自分の心境を詳しくは覚えていないが、きっと家族が傍にいたし、知り合いの人もたくさんいたから大丈夫だと思ったのだろう。

2日目

次の日の朝起きると、車の中はせまいし、初めて車で寝たせいで体が少し痛かった。でもすぐに車から降りて校庭の隅にあるトイレで顔を洗ったり歯磨きをしたりした。そこでは普通に水が使えた。洗面台が外にあるのと、冬の寒さのせいで水がめちゃくちゃ冷たかった。一気に目が覚めた。

この日も家の片付けをして、その後朝霧病院の近くの溝のわきから水道管が破裂して水が噴出していたから、私とお母さんと弟で車に乗ってポリタンクを持って水をもらいに行った。そしてこっちでは水は手に入ったが、物が何も買えないから上に住んでいた家族と加古川に買い物に行った。どんな物を買ったかはほとんど覚えていないが、その時弟の誕生日ケーキを買ったことだけ覚えている。震災の前日は弟の誕生日で、17日にお祝いをする予定だった。何故17日にお祝いをする予定だったのかというと、17日は月曜日で、お父さんの仕事が休みの日だったからだ。地震が起きて大変なことになっているのに、「僕のケーキは??」とお母さんに言った弟の言葉にびっくりしたことを今でも覚えている。そして弟は、あの日大きいケーキじゃなくてショートケーキしか食べられなかったことを今も根に持っている。震災の話をするといつもその話題が出ている気がする…。その日は加古川でもポリタンクに水を分けてもらった。本当に色んな人に助けてもらった。

3日目

やっとガラス屋さんが家に来て、ベランダの割れたガラスを張り替えてくれた。この日は片付けを少しして、そして夕方は大久保の友達の家に行ってお風呂を貸してもらい、泊めてもらった。久しぶりのお風呂はとても気持ち良かった。久しぶりに少し落ち着くことが出来た。この日のことはこれ以上覚えていない。どういう風に眠ったとか、どんなものを食べたのかも忘れてしまった。

約1週間後

お父さんの仕事場は当時元町の高架下であって、地震が起きてから約1週間経ったときぐらいに、道路を走れるようになったから車に乗って家族4人で元町の仕事場まで行った。それまでお父さんは近所の人に車を借りて単車で元町まで仕事場の様子を見に行っていた。

仕事場に到着すると、あぶないからと言ってお父さんとお母さんは私と弟を車に残して、中に入っていく様子を見ていた。どれぐらい待っていたかははっきりした時間は忘れたが、そんな長くはなかった。でも待っている途中で何故か忘れたが弟に殴られて首を寝違えてしまった。どちらの方向に向いたかは忘れたけど(確か右)、すごく痛かったのを覚えている。その日は病院が開いてなくて診てもらえなかった。帰りに湊川のいこの家に寄った。首が痛くてずっと寝ていた。あの時お母さんは「大げさやなあ。心配せんでも寝違えはすぐ治るから。お母さん何回も寝違えた事あるけど、そんな痛くないで。」と言ってい

た。私はそれを聞いて、「初めて寝違えたからよくわからんけど、これが普通なんや」と思っていた。しかしそれから10年経つ間に寝違えた事は何度もあったけど、あれほど痛かったことはない。あれは異常な痛さだった。この前お母さんにその話をすると、「あの時病院にすぐ行けばよかったなあ。今考えたら何もなかってよかったわ。」と言っていた。

行きは寝ていたし、帰りはこの寝違えのせいで私は外の景色をまったく見ることが出来なかった。だから被害のすごさは朝霧と三宮しか知らない。長田など他の地域の被害の様子は全てテレビで見た。その時火があがっているところがたくさんあって怖かった。

数週間後

私は1ヶ月もしないうちにまた小学校に通い始めた。友達も先生もみんな無事で、他の学年の子達もみんな元気だった。被害がすごいところはたくさんあったが、だれも亡くなっていなかった。本当によかった。朝霧を離れる子もいなかった。

私のいとは垂水区に住んでいたんだけど、被害がひどかったため愛媛の祖父母の家に行き、愛媛の小学校に何ヶ月か通っていた。

5年後

お母さんは自然やボランティアが好きで、小さいころからよく山登りに行っていた。そんな時明石市の隣の神戸市に住んでいる太田里奈ちゃんと出会った。太田さんの親は森の小学校というボランティアに参加している人だった。そしてこの出会いがきっかけで、太田さんの家族と一緒に森の小学校や、やしろの森の里山作りなど、森林ボランティアなどに今まで以上に積極的に参加するようになった。木を切ったり何かを作ったり、自然の物を食べたり、本当に楽しいと思った。

8年後

私は阪神・淡路大震災が起きてから8年後、団地の同じ敷地内だけど、2号棟から5号棟に引っ越した。生まれたときからずっと住んでいたし、場所は近くても色んなことを経験したあの家を離れるのは少し寂しかった。

この年私は中学3年生になり、太田さんの親に薦められて舞子高校に環境防災科という学科があることを知り、興味を持って推薦を受けることを決めた。3年前に太田さんに出会っていなければ間違いなく推薦なんて受けてなかった。むしろこの学科があることすら気付かず、普通に受験して明石の高校に通うことになっていたと思う。なんだかすごい運命に引き寄せられている気がした。

阪神・淡路大震災の概要

地震の概要	a 発生年月日	平成7年1月17日5時46分		
	b 震源地	淡路島北部(北緯34度36分、東経135度02分)		
	c 震源の深さ	16km		
	d 規模	マグニチュード7.3 (各地の震度(気象庁発表)は下記のとおり) (※)平成13年4月23日の気象庁「気象庁マグニチュード検討委員会」結果によりマグニチュード7.2から修正。		
人的被害	死者	6,433名		
	行方不明者	3名		
	負傷者	重傷	10,683名	
		軽傷	33,109名	
		計	43,792名	

施設関係等被害	住家被害	全壊	104,906 棟	(186,175 世帯)
		半壊	144,274 棟	(274,181 世帯)
		一部破壊	263,702 棟	
		計	512,882 棟	
	非住家被害	公共建物	865 棟	
		その他	3,983 棟	
	文教施設		941 ケ所	
	道路		10,069 ケ所	
	橋梁		320 ケ所	
	河川		430 ケ所	
	がけ崩れ		378 ケ所	
	ブロック塀等		1,480 ケ所	
	水道断水		約 130 万戸	(ピーク時) (厚生省調べ)
	ガス供給停止		約 86 万戸	(ピーク時) (資源エネルギー庁調べ)
	停電		約 260 万戸	(ピーク時) (資源エネルギー庁調べ)
電話不通		30 万回線超	(ピーク時) (郵政省調べ)	
「阪神・淡路大震災について(第 106 報) (平成 14 年 12 月 26 日、消防庁)」より				

出典⇒ <http://www.hanshin-awaji.or.jp/>

今の心境と、そしてこれからの自分

舞子高校の環境防災科に入学してもう 2 年が過ぎた。本当に早かったが毎日がとても充実している。山のようなレポートに追われたりして大変だが、どれもやりがいがあって、本当に楽しい。知ることたくさんあってこんな良い環境で自分の学びたい事を精一杯学べたことは本当に幸せだ。

1 期生の先輩たちが作り上げてきたもの、私たちが今まで作り上げてきたもの、そしてこれから後輩たちが作り上げていくものが少しでも多くの人の支えになり、救いになればと心から願っている。私たちの役目はそれを繋げていくことにもあると思う。そのためにもこれからも語り継ぎをしていきたい。

地震にあって本当に怖かった。「なぜ自分が被災したのか?」、「なぜこんなにたくさんの人が亡くならないといけなかったのか?」など、色んなことを考えたし、いっぱい泣いた。あの時の地震の様子や火事の様子をテレビで見るたびに涙が出るし、同時に自分が生きのびることが出来たという奇跡に恐怖すら感じることがある。10 年経った今でも鮮明に覚えていることがたくさんある。でも私は立ち上がることが出来た。自ら学ぶことも出来た。これからももっともっと頑張ることが出来る。環境防災科で学べたことを誇りに思い、頑張っていきたい。

最後に

色々学んで知らなかった事実をたくさん知った。地震が起きて大変だったとき、たくさんの人達が私たちのために頑張ってくれていたことも知った。あの時は自分が生きることによって精一杯で何も気付けなかった。私たちのために頑張ってくれた人たちに心からお礼が言いたい。たくさん学ばせてくれた先生達にも。ほんとうにありがとうございました!!

「もう10年」「まだ10年」

神戸市垂水区
石川 泰資

当時私は小学校1年生で、今となってはそのときの記憶は曖昧にしか残っていない。地震に関しては、家族や身近な人に怪我也なかったから、何ヶ月かで関心がなくなったのが事実だったと思う。怖いなあ、大変やなあといった他人事のような気持ちしかなかったはず。

1月17日、その日は楽しみにしていた学校のマラソン大会があった。1年生だから初めての参加で、前日の16日は緊張したまま夜、布団に潜り込んだのをよく憶えている。確か、その日の夜に小さな地震が来たのも憶えている・・・。

地震発生当日

それは私の知らないうちにやってきた。痛いわけでもなく、苦しいわけでもなく、ただ横や縦に激しく揺れるだけ。私には揺れが何十分も続いたように感じた。それが地震だと理解するまでには時間がかかった。戸惑っていると、姉がとっさに私を押入れの中に押し入れた。その間も地震は続き、私の頭は真っ白になった。おさまった時にはそばに母親もきており、ほっとした。

まず最初に、私と母親、姉2人で1階へ降りた。台所へ行くと棚から食器が散乱していて歩くスペースがほとんどなく、全員で食器を端へ寄せた。歩くスペースができると、母親が電話へ手を伸ばした。当時、淡路島に単身赴任に出ていた父親の安否を確認するために。しかし電話はつながらない。不安がよぎった。

半年ぐらい前に父親は転勤のため淡路へ行った。週末になると神戸に帰ってきて、買い物に連れて行ってくれたり、遊んでくれたりしていた。幼かった私はとても寂しくて、週末になるのが待ち遠しかった。

姉は当時中学3年生で高校受験を控えていた。前日も夜遅くまで勉強していた。もう1人の姉は、私と同じ小学校の6年生だった。母親は、父親がいない分、家の柱としてみんなを支えていた。私はというと、自分のこともまだろくにできないようなちびっ子で、みんなを困らせていてばかりだった。父親と一緒にいない寂しさもあり、ちょっとした反抗期みたいな感じだったかもしれない。

しばらくしてリビングに集まりラジオを聴いてみると、神戸に地震が起きたことがニュースで伝えられていた。長田のほうでは、火災がものすごいらしく、かなりの数の家屋が倒壊しているとラジオから聴こえた。今自分が家族と一緒に落ち着いてラジオを聴けているという状態にとっても喜びを感じた。しかしそのラジオから聴こえてくる内容はとても悲惨で、小学校1年生にはあまりにもショックだった。これから神戸はどうなるんだろう。学校は、今日明日のご飯は、お風呂は・・・すべてが不安になった。またしばらくして、外へ出た。私の家は社宅だったため、近所には仲の良い家族が多くいた。その家族も外へ出ていて、みんなの無事が確認できた。隣のおじさんが、倉庫からおかしを大量に持ってきた。今度するはずだった社宅のお祭りで出すはずだったお菓子だ。うれしさ反面、お祭りが中止になると思い、寂しくなった。

気付いた時にはお昼になっていた。お昼ご飯はお菓子で済ませた。本当なら学校へ行っていて、給食を食べている時間だ。学校の友達への安否が気になった。

夕方になり、テレビが見られるようになった。どのチャンネルを付けても、地震の話ばかりで、ますます怖くなった。家族全員でテレビに釘付けになった。火災の状況が映し出されたときや、高速道路が破壊され、バスが落ちそうになっていたことを知り、これは夢ではないのか、夢であってほしいと強く思った。しかし、夜ホットプレートで作ったホットケーキを食べて、これが現実であることがわかった。疲れていたせいか、とてもおいしかったのだ。

夜も遅くなり、いつもならお風呂に入っている時間。しかし、お風呂には前日、洗濯機に使うために溜めてあった残り湯があった。幸い、冬場だったため、汗をかくこともなかったのでこの日はお風呂に入れなくても仕方がないと思った。

その日は家族全員がリビングに布団を敷いて寝ることにした。姉がずっと受験どうなるんやろお・・・とぼやいていたが、母親は父親のことが心配でテレビばかりみていた。淡路島も震度が強かったらしく、不安そうにしていた。そんな母親をみて私もとても不安だった。12時をすぎてもテレビでは地震のニュースばかりしていた。いい加減どないかならんのかと怒りを感じたが、その怒りは誰にぶつけるでもなく、地震にぶつけるしかなかった。他人が苦しんでいるのをニュースでみて、小学生なりに大きなショックを受けたが、それ以上に自分の家族が無事であることがうれしくてたまらなかった。父親を除いては・・・。

2日目

いつのまにか気付けば朝になっていた。母親はもう起きていて、テレビを見ていた。まだ地震のニュースをしている。今確認できているだけでもかなりの人が亡くなっただろう。地震の恐さを身をもって感じた。

母親が朝ごはんを用意した。食パンだった。文句を言えず、黙って食べた。子供たちはいつもならみんな学校へ行っている時間。とても不自然だった。みんな疲れた顔をしていて、よく眠れなかったみたいだ。

午前中に、父親から電話がきた。生きていた。とてもうれしかった。早く帰ってきてと言うと、仕事が大変やから、2、3日したらすぐ帰ると言った。待ち遠しかった。

お昼になり、給水車が近所にきていると聞き、姉とポリ容器を担いでいった。そこにはたくさんの人がいて随分待たされたが文句は言えなかった。みんな困っているのだ。帰り、水を持って帰るのがとてもしんどかった。普段、蛇口をひねると当たり前のように使えた水が、外からもってこないと使えない。ポリ容器の重たさが、水の大切さを訴えているような気がした。その日もお風呂に入らず、水の大事さをしみじみ感じながら1日を過ごした。

4日目

父親が淡路島から帰ってきた。みんなで出迎えた。スーパーで働いている友達から、カップラーメンや飲み物、お菓子を大量にもらってきた。父親の、「帰ってほっとした」の言葉に涙が出そうになった。

父親が帰ってきたことで家に活気が戻った。

しばらくして

いつものように学校に通う日が始まった。神戸に活気が戻ってきた。家にも活気が戻ってきた。トイレに行けば水が流せる。ごはんもおいしい。お風呂も・・・こんな当たり前の生活がしばらくできなかった。テレビの報道にも大変ショックを受けた。でも、私はがんばらないといけない。

ライフライン

高速道路の橋桁、生活の基盤である道路、通信、上下水道、電気、ガスなどのライフライン。これらはその形態によって大きく被害復旧の度合いが異なる。我が家の場合、電気はほとんど影響なく、水道も割とすぐに使えた。もっとも、やはり水道管の破裂などによって、1、2週間は2階への水道水の出は悪かったが。ただ、マンションや高地などでは、この水圧低下によって、水道水をポリタンクで持ってくるか、給水車を利用するなどしないと水道が使えない状態が相当期間続いた。今まで、水洗トイレのレバーをひねれば勝手に出ていた水道も、マンションなどではわざわざポリタンクで水を持ってあがり、それからおもむろに便器に水をいれなければ水洗トイレも使えない状態だった。また、ガスも同様に、我が家では何週間かストップし、すべての生活は電気に頼らざるを得なかった。もちろん、ガス湯沸かし器で入れるお風呂も使えない。ガスレンジも使えない。このような生活が長く続いた。電気のホットプレートが大活躍したが、所詮料理のレパートリーは限定されるので、母親も作るのに大変困っていた。また、同時に電気を大量に使うと容量オーバーでブレーカーが飛んでしまうため、どこで湯を沸かす、どこで煮炊きをする、どこでホットプレートを使うなど、電気容量と回路を気にする日々だった。

電気や通信は、電線ですから復旧も早い。応急措置も簡単。しかし、上下水道やガスは配管工事を必要とし、道路を掘り起こさないと修理ができないため、復旧に多くの時間を費やした。

阪神・淡路大震災の概要

平成7年1月17日未明に阪神・淡路地域を襲った「兵庫県南部地震」は、日本で初めての近代的な大都市における直下型地震であり、大きな破壊力をもって、未曾有の被害をもたらした。

発生日時・・・平成7年1月17日午前5時46分

震源・・・淡路島

震源の深さ・・・約14km

規模・・・マグニチュード7.2

震度・・・震度6（一部地域で7）

特徴・・・横揺れと縦揺れが同時に発生

神戸市の被害状況

震災は、多くの命を奪うとともに、都市基盤や建築物に甚大な被害を与え、市民に直接的な大被害を与えた。また、復旧の長期化に伴い、産業、都市機能、生活などに様々な影響を及ぼしている。

市民生活の被害

多大な犠牲者

死亡者 4,512 人

(変更前 38,977 人、H7.7.14 に 422 人、11.13 に 165 人、H8.1.8 に 28 人認定)

不明 1 人、

負傷者 14,679 人 高齢者（60 歳以上）が死亡者の約 58%

家屋倒壊による死者多数（窒息・圧死が全体の約 73%）

避難

ピーク時：

箇所数 599 箇所【H7.1.26】

避難人数 236,899 人（H7.1.24）、避難所就寝者数 222,127 人（H7.1.18）

公共施設の甚大な被害

市役所、病院等の重要公共施設の破損、倒壊

学校教育・社会教育・文化施設の甚大な被害

学校園の約 80% が被災

博物館、中央図書館旧館、ポートアイランドスポーツセンター等の破損、倒壊

酒蔵、異人館等の破損、倒壊

都市機能の被害

・建築物、構造物の甚大な被害

全壊 67,421 棟、半壊 55,145 棟（H7.12.22 現在）

・火災による焼損

全焼 6,965 棟、半焼 80 棟、部分焼 270 棟（H8.2.1 現在、最終）

延べ焼失面積 約 81.9ha

火災件数 175 件（震災とほぼ同時に 59 件発生）

・交通ネットワークの寸断

阪神高速道路 3 号神戸線、同 5 号湾岸線等の倒壊

陥没、高架構造物の落下、建築物倒壊等による道路不通

・鉄道の寸断

・海上都市へのアクセスの寸断

・港湾施設等が壊滅的被害

コンテナバース、岸壁等がほとんど全て使用不能

港湾幹線道路の寸断

埋立地の液状化

東部 2～4 工区、ポートアイランド等で液状化

・ライフラインの寸断

電気 市内全域停止

電話 約 25% 停止

水道 市内ほぼ全域停止

工業用水道 市内全域停止

ガス 約 80% 停止

下水道 管渠・ポンプ場破損及び処理場の機能停止（3/7 箇所）

クリーンセンター 全クリーンセンターの運転停止

・公園

1/3 の公園が擁壁崩壊、舗装陥没、地割れ等の被害

・河川

二級河川 117 箇所破損

準用・普通河川 27 箇所破損

・治山・砂防

緊急復旧を要する箇所 68 箇所

- ・社会・産業面の資本ストック全体の損害額(推計値)
約6兆9千億円

神戸産業の被害

- ・基幹事業所及び製造大手企業の被害
本社等中枢建築物の倒壊
生産ラインの停止
- ・中小企業・地場産業の被害
ケミカルシューズ 約80%が全半壊または全半焼
清酒造 50%以上の企業が全半壊
- ・市場・商店街の被害
旧市街地の商店街の約1/3、市場の約半数が甚大な被害
- ・観光・コンベンション施設
観光施設、宿泊施設、コンベンション施設などで建物損壊などの被害
- ・農漁業施設の破損
漁港、漁船だまり、農地、農業用施設等が多数被害

その他

上記の直接的被害にとどまらず、避難所生活に伴う精神的疲労や子ども・高齢者・障害者等への心理的影響、学校等教育機能の低下、ライフラインの復旧の遅れや交通渋滞などによる都市機能の低下、雇用の不安定化など、市民の生活に対して様々な面で、震災が影響を及ぼすこととなった。また、産業面においても、企業の市外への移転や被災による生産量の低下、港湾施設の被害に伴うコンテナ貨物の他港へのシフト、高速道路の寸断や復旧工事による交通容量の不足等により、神戸のみならず、日本経済へ深刻な影響を及ぼすこととなった。さらに、大量の災害廃棄物処理や、これに伴う環境への影響など、震災がもたらした被害は、広範囲で多方面にわたる深刻なものとなった。

出典 http://www.mineto.net/personal/shinsai/shinsai_word.html

「もう10年」「まだ10年」

阪神・淡路大震災での死者、64000余命の内、80%以上の人が自らの家屋や家具の下敷きによる圧死で亡くなっている。自らの家屋の下敷きになり「もう私を放って逃げて！」と瓦礫となった家の隙間から届く小さな声に迫る火災の炎に何もできず、身内の方を亡くした人のいることを忘れてはいけない。もう10年が経った。まだ10年しか経っていない。神戸は着実に復興しつつある。

あの日の体験から ～過去－未来～

加古郡稲美町
井上 奈緒

震災当日 ～父に感謝～

震災当時、私はまだ小学1年生。年齢にすれば、わずか7歳だった。まだまだ幼かったし、お兄ちゃんっ子だった事もある、私はいつも2つ年上の兄と同じ部屋で、ベッドを横に並べて寝ていた。震災前日も、いつもと同じように時間割を合わせて、ちゃんと学校へ行く準備をしてから、2階の兄と隣同士のベッドで眠りに就いた。

あれは5時40分を少しまわった頃だっただろうか…。まだ早朝で、太陽も全然顔を出していないというのに、いきなり父が私たちの部屋に来て、「奈緒！拓！はよ布団かぶってもぐっとけ！！」と叫んだ。その声でビックリして目が覚めた私たちは、何が何でもわからないまま、とりあえず父の指示通り、布団に潜り込んだ。…そして5時46分。体が何か強い揺れを感じた。スプリング式ベッドの上で、誰かが思いっきり飛び跳ねているような、トランポリンで遊んでいるときのような。とにかく、誰かが布団の上で飛び跳ねている、そんな揺れだった。私は、地震を体験したことがなかったので、なぜベッドが揺れているのか、なぜ私たちは逃げずに布団に潜らないといけないのかが、全く理解できていなかった。でも、とりあえず1人になるとどこかへ飛ばされてしまいそうで、とにかく必死に隣の兄にしがみついていた。

地震がおさまった後、すぐにまた父が私たちの部屋をのぞきにきた。私も兄も父も無事だった。そして3人でかたまって、1階のリビングへ降りた。そこで、和室で寝ていた母と、まだ1歳だった妹と合流した。母も妹も大丈夫だった。5人でかたまっているリビングで余震が来たとき、私だけが慌ててコタツに潜り込んだことを今でも覚えている。

後で聞いた話だが、父が私たちに地震の前に布団をかぶるように指示を出せたのは、父が地震の前に来る「ゴゴゴゴ…」という音を聞いて、飛び起きたからだそうだ。その指示がなかったら私たちはどうしていたのだろう…。父の指示があったから、まだ何かが起こることは予測できた。それに、あの時はベッドの周りに、上から倒れてくるものや、落ちてくるものがなかった。もしあの時、背の高い本棚が近くにあった、父の指示が無かったら…。きっと布団から逃げ出そうとしたに違いない。そう考えると、すごく父に感謝したくなった。揺れている間、布団に潜って兄にしがみついたままじっとしていられたのは、紛れもなく父のおかげだ。このことは、本当に感謝しているし、私もいつかそうなれたらいいと思う。

幸い、家は震源地からかなり遠いところにあったので、被害はほとんど無いに等しかった。被害があったといえば、少しの間の停電くらいだ。その停電もすぐに直った。だから、他の地域もそんなもんだろう、と勝手に思い込んでいた。でも、父は非常招集がかかったので、すぐに家を出てしまった。父がいないとさすがに不安を感じた。でも、とりあえず学校に行ったり、遊んだりして父の帰りを待っていた。

学校 ～転校生がやって来た！～

住んでいる地域の被害が少なかったのも、私と兄は震災当日から学校で授業があった。どんな授業をしたかは全く覚えていないが、校舎の壁のいろんな所に、細長いヒビが入っていたことは覚えている。（今は改修工事をしたので綺麗になったが…）私の家は全くといっていいほど被害が無かったけど、友達の中には、食器が棚から落ちて割れたり、本棚から本が落ちてきたりした家もあったようだった。でもその日、全員が無事に登校してきた。あの時の私は、その日も全員登校するのが、当たり前だと思っていた。小学生はあの時の私のように、物事を結構気楽に考えられる。でも、高校生になった今では、いろんなことを考えてしまったり、聞きたくなくてもたくさんの情報が耳に入ってきたりして、どんどんネガティブ思考になると思う。だから、あの時の私は、本当に考え方が幼かったんだな、と思う。

学校は昼までで終わりだった。いつもなら友達の家遊びに行っているが、その日は家に帰ってからずっと、父のいる神戸の様子を母と一緒にテレビで見ている。なぜ一緒にずっと見ていたかはわからない。父の姿を見たかったのだろうか…。次の日には友達と遊んでいたのに、その日だけはずっとテレビにかじりついていた。

震災から何日か経ったある日、私のクラスに神戸から転校生が来た。その子は女の子で、本来は本山第二小学校の生徒だった。でも本山第二小学校は、震災の時から避難所となって、たくさんの人が避難していたので、通うことが出来なかったらしい。私もその小学校が、テレビに映っているのを何度か、目にした記憶がある。不謹慎かもしれないが、私たちの学校では転校生が珍しく、来たときはとても嬉しかった。だから私たちは、仲良くなろうと必死だった。「プーたん。」その子に私と友達がつけたあだ名だ。1年生のころの記憶なんてほとんど無いに等しいのに、この頃の事だけは結構覚えている。プーたんの顔も、はっきりと脳裏に焼きついている。毎日休み時間は、友達とプーたんとは3人でずっと喋っていた。

プーたんは、転校してきてすぐの頃は、喋りかけてもほとんど返事が無かったり、外で遊んだりすることを嫌がったりしていた。しかし、私たちが強引に外へ連れ出して遊んだり、喋りかけたりしているうちに、段々と笑顔が増えて、喋るようになっていった。それからしばらくして、プーたんは元の小学校に帰ってしまった。

プーたんのお別れ会は、本当に泣きそうだった。確かに元々は、本山第二小学校の生徒だし、こっちに転校して来る予定も無かったはずだ。でも、プーたんは短かったけど、確かに母里小学校の生徒だった。プーたんとは出会えたきっかけが、阪神・淡路大震災だというのは抵抗がある。しかし、震災が無ければ出会えなかった。だから、震災も悪いことだけではないのかもしれない。（これは被害の少なかった私だから言えることかもしれないが。）プーたんとは、あの時からずっと連絡をとっていないので、今どこでどうしているかはわからないが、あの時一緒に遊んだ事はこれから先も絶対に忘れることは無いと思う。

父、出勤 ～父ちゃん帰ってきて～

私の父は消防官だ。当時も消防機動隊として、消防本部に勤めていた。震災の日も、リビングに集まっている私たちをよそに、父は1人で仕事に行く準備をし始めていた。父は、自分に非常招集がかかると思い、いつでも家を出られるように準備をしていたのだ。前にも言ったように、地震が起こってしばらくすると、父に甲号非常招集というものが発令され、参集の電話もかかってきたので、父はその後すぐに家を出て行ってしまった。状況が飲み込めていない私は「なんで父ちゃんは怖いのに奈緒ちゃんほって行ってまうん？」という気持ちがあった。それでも、とりあえず父を送り出した。父を見送りながら、「どうせ晩御飯までには帰ってくるし…まあええか。とりあえず仕事頑張れ～」と、とても軽く考えていた。

しかしその日の夜、父は帰ってこなかった。今思えば当たり前の話だが、小学1年生の私に理解できるわけがない。もう二度と家に帰ってこないんじゃないか、父にもう会えなくなるんじゃないかと、何度も思った。当たり前だろう。小さい頃の私は父が大好きで、何でも父の真似をしていたし、何をするのも一緒だった。でもその父がずっと家にいないのだ。いつ帰ってくるかは母にさえも解らない。今何をしているかも解らない。当時日勤だったので、父の顔を何日も連続で見ないことなんてなかった。それなのに、急に家を出て行ったきり、帰ってこないのだ。

しかし、そこはさすがに小学1年生。父が帰ってこなくて、いくら寂しくて不安でも、学校や家で友達と遊んでいるときは、父のことを考える余裕がないくらいに走り回っていた気がする。そしてちゃんと笑っていた気がする。そう考えると、友達と遊ぶのは笑顔の源だといえる。だから避難所でも、子供と遊ぶことは大切なのだ。

父は、震災が起こって家を出てからしばらくの間、家に帰ってこなかった。父に会ったのは震災が起こってから何日後だっただろう…。母が言うには、ちょくちょく着替えを取りに帰ってきてはいたらしいが、私には父と会った記憶が無い。母に聞いたところ、帰ってきていたのは私たちが寝てからで、深夜頃だったらしい。そして、帰って来た父の顔は、見たことも無いくらい疲れ果てていたそう。ずっと活動を続けていたのか、目は暗く、ゲッソリしていたらしい。それほどひどい状況だったのだろう。単に疲れていると言うよりは、精神的にも肉体的にも疲労していたようだ。

今でも父は震災の時のことを、ほとんど自分から話そうとはしない。聞けば答えてくれるとは思いますが、私もなかなか聞けない。ちょっと父に遠慮しているところがあるのかもしれない。しかし、きっと、心のどこかで私自身が聞きたくないんだと思う。私が将来就きたい「消防」という職業が、大規模災害時に感じる無力感を、父の口から直接聞きたくないから。

父が職場からもらってきた、「阪神・淡路大震災 消防隊員死闘の記 ～もっと多くの命を救いたかった

～」という本の中に、父の書いた文章も載っている。私は、今までにそれを繰り返し繰り返し、何回も読んだ。そこには、たくさんの消防官の思いが詰まっていた。その本は、何回読んでも泣けてくる。1人ひとりの文章から、様々な思いが伝わってきて胸が熱くなる。その中の父の文章によると、父は当時ヘリコプターに乗っていたらしい。そしてその日、消防力が燃え広がる火災に対抗できていないことを、上空から確認した。ヘリコプターから散水できないかとも考えたけど、地上隊とコンタクトが取れなくて、断念したことなど、父の悔しかった思いがたくさん綴られていた。その文章を何回も読んで、消防という仕事の中身を知った。決して楽とは言えない職業。見た目格好良いからという、軽い気持ちで消防に入ってはいけないと強く感じた瞬間だった。

神戸の従兄弟

私の記憶にはあまり残っていないのだが、当時神戸のマンションに住んでいた私の従兄弟は、私の家へ何度かお風呂に入りに来ていたらしい。そして、その度に発泡スチロールの大きな入れ物に水を入れ、家に持って帰っていたそうだ。残っている記憶といえば、従兄弟のあやちゃんと一緒にお風呂に入ったような気がするくらい。本当に記憶が無いに等しいくらいだ。

環境防災科に入って、たくさんのことを学んできた。そして広めることの大切さも知った。それなのに、従兄弟たちとは、震災の話をしたことがないし、私が学んだことも何も伝えたことがない。それでは広めていく大切さを学んだ意味が無いので、身近な従兄弟たちともそういう話を一度はしてみたいと思う。

父と私 ～聞きたいけど聞けないこと～

父は、家で仕事の話は中々してくれない。私もあえて聞かない。さっき父の当時の仕事のことについて触れた。私は父の記述から感じたことを書いたが、なぜ本人に聞けなかったのか。それは、聞けなかったのだ。父がその文章を書くために、ワープロを持って帰ってきていた時、父はいつも私たちが寝る頃になってから、打ち始めていた。自分の打った文章は、私たちに見せてもくれなかった。文章を見せることさえも嫌がっているし、震災のときに帰ってきた父の顔を思い出すと、聞くに聞けない。でも、父の口から直接聞きたい。今すぐには無理かもしれない。だから、少しずつ聞いていって、いつか全てを話してくれればいいと思う。

今、父は私が父の背中を追っているのが、内心嬉しいらしく、いろんな世話を焼いてくれる。でも私は、いつか父と肩を並べて歩きたい。そして、仕事の話でもしながら、楽しくお酒を飲めたら最高だと思う。だから、父に追いつけるように今は必死で、前を向いて走り続けたい。

将来 ～私の夢～

私は、さっきも書いたように、父の辛そうな姿も見てきた。でも、楽しそうな姿も見てきた。救助活動は大変だし、辛いときもたくさんあるかもしれない。でも、それを支えてくれる仲間がいる。そんな光景を見ているうちに、私も自然と消防官になりたいと思うようになっていた。

また、父の仕事の影響で、物心ついた時から毎年、出初め式へ父の働く姿を見に行っていた。そしてその出初め式には、消防隊が指揮隊の指示に従って、海に色水を放水したり、救助隊がヘリコプターからロープを垂らし、それを滑り降りて、建物の屋上に取り残されたけが人を素早く救助したりと、働く父と他の消防官の姿があった。この姿を見た私の感想は「父ちゃんの仕事ってめっちゃカッコいい～!!」だった。父や他の消防官の真剣に活動する姿は、幼い私にはとても大きく、そしてカッコよく見えたのだ。この頃から「消防官」という職業が特別なものに思えるようになり、強い思いを抱くようになった。そして同じくこの頃から、父の大きな背中を必死で追いかけるようになったのだ。

また父は、昔からよく同じ職場の人たちを家に招待していた。そのため、私は幼いころから、消防署の方と接する機会が多かった。そして、家に来る消防署の人たちは、みんなとても優しく、面白くて、私の憧れだった。でも小学校のときは、「消防＝父」で、父の仕事という気がしていたから、将来の夢というよりは、単なる憧れでしかなかった。でも、そういった体験を繰り返して、年齢を重ねていくうちに、いつしか憧れから夢へ、そして将来就きたい仕事へと変わっていったのだ。

消防を目指す、と言うのは簡単だ。しかし、私には絶対に克服すべき欠点がある。それは「血」だ。昔は大丈夫だったはずだが、最近では血が全くダメになってしまった。つい最近でも、母が包丁で手を怪我

して、血が出ているのを見ただけでバンドエイドも貼れなかった。何か特別な理由があって、血が苦手になったのかもわからない。

確かに、血が平気な人なんてそう多くはないと思う。しかし、消防官になれば、たとえ苦手でもそういった場面に遭遇せざるを得ない。そうなった時に、今の状態だととてもじゃないが耐えられないと思う。しかしそれではいけないのだ。

ではどうすればいいのか。血はそんなによく目にするものではないし、できれば見たくない。でも克服しなければならぬ。そのために、もっと精神力を鍛えようと思う。ちょっとやそっとのことでは絶対にへこたれない、強い精神力を持つことが出来れば、何とかかなると思う。だから、何があってもめげずに、精神力を鍛えていきたい。

長田のまちあるき ～ホンネ～

環境防災科で、授業の一環として、2年生の時に長田のまちあるきへ行った。長田のまちを、自分の足で歩きながら、いろんな人に震災当時のことを聞いた。そして、質問をした相手の中には、親切にたくさんのお話を教えてくださる方もいた。しかし、ある商店街のお店のおばさんに「震災当時のことを教えてくださいませんか?」と聞いたら、「震災のことなんて思い出したくもないわ!」と言われた。しかし、そのあとでちゃんと答えてくれたので、いろんな質問をしてみた。そして、「震災は私たちにとって、悪かったことだけじゃなくて、良かったこともある。って言う人もいますけど、どう思いますか?」と質問したら、「震災で良いことなんてあるわけないわよ!もう、悪いことばかり!」と強く反発されてしまった。この時、震災から10年経った今でも、まだ心の傷が癒えていないんだということを実感した。

これは私だから言えることかもしれないが、心の傷は完全に癒えることは無いと思う。完全に癒えることがあるとすれば、それは震災を完全に忘れた時くらいだろう。でも、同じ悲劇を繰り返さないためにも、震災は絶対に忘れてはいけないのだ。そして、話したくないかもしれないが、話さなければ今後に活かすことはできないのだ。亡くなられた方々のためにも、今後二度と大きな被害が出ないように、少しでもいいから、口を開いてほしいと思う。

環境防災科 ～私にしか出来ないこと～

いくら環境防災科で勉強しても、私の震災体験が変わるわけではない。と言うより、変わるわけがない。そして被災者に根強く残った心の傷も、勉強して表面上は解っているつもりでも、解ったフリをしているだけで、いくら努力をしても、全てを解りきることは決して出来ないだろう。それでも、そんな私に出来ることはたくさんあると思う。だから、これから先、震災の情報を発信していくときに、解ったフリをして広めるんじゃなくて、私だからこそ出来る、私の視点から見た震災を発信できればいいと思う。前までは、誰かと同じ視点でしか物を考えられなかった。でも、この環境防災科で学んでいくうちに、私は私の視点で物を考えて、それを発信していけばいいんだと思えるようになり、自分に自信も持てるようになった。

そして、将来就きたい消防という仕事に、環境防災科の活動をうまく消防に混ぜ込んで、勉強してきた内容が無駄にならないようにしたいと思うようになった。例えば、1つ上の先輩のように、心のケアについて大学で勉強し、災害で傷ついた心を癒せる消防官になるのも1つの手だと思う。他にも、個人ホームページを作成して、災害の起こったとき、職場で得た情報を元に、被災地で足りていない物資のリストを作ったり、正しい情報を伝えたりすることも出来ると思う。こういう風に、環境防災科と繋げて考えていけば、消防官として普通に活動するという以外にも、たくさんの活動方法がどんどん見えてくる。だから、ここで考えただけで終わってしまうんじゃなくて、実際に消防に入ったら、この今の気持ちが無駄にならないように、しっかり実践したいと思う。そして、ここにあげたもの以外にも、自分に出来ることを考えて、行動に移していきたいと思う。

人生を変えたあの地震

神戸市灘区
浦井 聖也

毎日、朝起きて最初にすることは部屋のカーテンを開けることだ。晴れた日には朝日が真っ暗な部屋に入り込み明るくなる。そして気持ちが引き締まり、「学校へ行かない」と思い、外の天気を見ながら学校へ行く支度をする。毎日その繰り返し。学校に遅刻しないため、7時45分には自宅を出る。兵庫区の自宅から舞子高校までは電車とバスを使って約45分と距離的にはだいぶ遠い。でも、防災を学びたいと思い、自分から通っているのだから辛いと思ったことはない。このように『防災』を勉強しようと思ったのも10年前の阪神・淡路大震災に大きな影響がある。

『時間』というものは、人間の思い通りには行かず、意思に逆らうことなく今も着々と過ぎている。あの震災からもう10年が経ち、まちも日々の生活も震災以前より断然によくなっている。パッと神戸のまちの風景を見ても、きれいなビルや店が立ち並んでおり、本当にここで地震があったのか？と思うほど……。でも、10年、20年、50年経ったとしても僕はあの時地震を体験したことは、事実であり忘れられないし、決して忘れてはならない。1995年1月17日午前5時46分に何があったのか。そして、地震を経験して思ったことや感じたことを伝えていかなければいけない義務があると僕は思う。

そのときの僕は

地震当時、僕は神戸市灘区のマンションに住んでいた。自宅の近くには六甲ケーブルの駅があり、阪急六甲、JR六甲道まで20分あったらいい位置にある。そして、神戸市の都心部にしては比較的緑が多く、夏は窓を開けるだけで涼しい風が吹き、虫の鳴き声があるなど住む上で非常にいいところだ。近くには小さな川があり、早朝から川遊びやバーベキューもしていたものだ。当時小学1年生だった僕は、小学校に入学するときに買ってもらった2段ベッドの下のほうで、いつも通り9時ごろには寝ていた。そのとき2歳上の姉と寝る場所でもめて、結局下のほうで寝る破目になり、羨ましかった。そんなどの家庭にもありそうな日々をすごしていた。

地震のときに何があったのか

1995年1月17日午前5時46分、あの激震が襲った。体が一瞬中に「フワリ」浮いたような気がしたが、あまりにも突然で、ついでにあの揺れでもほとんど寝ていたようで記憶があいまいだった。揺れが収まって、毛布に包まれた僕はボーっとしていた。何秒？何分？それすら覚えていない。おそらく寝ていただろう。しばらくして、周囲の異変に気づき、目が覚めた。そこにはあるはずのない本が布団の上に最低でも10冊はあった。そして、部屋全体を見ると机の上に並べていた教科書やプリント類といすが全部同じ方向に倒れ落ち、部屋は足の踏み場もない状態。そしてまず、一番初めに驚いたのは何百冊の本を入れていて父親でも運ぶのが大変な本棚が2段ベッドのほうに傾いていたのだ。もし、ベッドじゃなく、布団を敷いて寝ていたら……。間違いなく大量の本と一緒に本棚は倒れてきて姉か僕、どちらかが下敷きになっていたかも知れないと地震の後に実感した。その後、父親が大声で「ベッドにるように！」と言った。そして僕と姉のいるところに行くためにリビングを通らないといけないのだが、リビングには食器類が散乱していた。しかし幸いにも部屋に行く道には割れた食器は無かった。僕と姉は泣きそうな状態だったらしいが自分ではハッキリと覚えていなかった。そして、母はベランダから家の周りを見て状況を確認した。そしてまるで「ジェットコースターに乗っていた気分」と言っていた。

まちの状況

父が車で高羽町や阪急六甲駅のほうへ被害の状況を見に行った。そこは、まったく違う世界のようなだった。高羽町交差点は地割れで段差があったらしく、電気が通っていなかったのでもちろんすべての信号は停止していた。信号が止まっていたのは山手幹線や国道2号線とおおきな道路も止まっていた。またいたるところで渋滞が発生し、車などの流れが悪かった。いつもは電気で街全体が明るい阪急六甲が暗くて、そして電車も走っていなかった。そして、連絡をとることが出来なかった1人暮らしのおばあちゃんを迎えに車で家まで行った。通常30分ほどでいける山手幹線を使うルートが1時間30分もかかった。おば

あちゃんの家も食器が割れたりテレビが落ちていたりしていたが、ケガは無く元気だった。しかし、1人でいるのも不安だったので、簡単に食器やテレビなどの片付けをしてから僕が住んでいたマンションに1～1ヵ月半ほど一緒に住んでいた。おばあちゃんの家へ行くとき、三ノ宮・兵庫方面のほうは車の流れがよかった。しかし、帰りの芦屋・大阪方面はとても混んでいたそう。地震から数日経ったころ、家の近くの神戸大学のキャンパスに地震の救援活動など行うために全国から派遣されて来た陸上自衛隊が、グラウンドを臨時の駐屯地として使用していた。

電気・水道・ガス・電話

電気はつかなかったもので、明るくなるまで何もすることが何も出来なかった。だから朝日が出るまでとにかく待った。朝の10時ぐらいだったか、途中から電気がつきはじめた。そして、明るくなったのはよかったのだが自宅からは街がどれくらいの被害を受けたのかとか、どうなったのかがまったく分からなかった。そして、電話は不通の状態だったので兵庫区に住んでいる祖母や友人と連絡が取ることが出来ない。大きな地震だったから電話線が切れているかもしれないが、災害時には行政機関や大規模病院など連絡が必要なところを優先的にかけやすくするシステムになっていたのだから、制限されていたのだった。このことは環境防災科に入ってから知ることが出来たのだが。地震初日のライフラインの状況は水道がまだ通っていたのでお風呂やバケツに水を溜めまくった。電気はかろうじて使えることができたが、時々停電して使えることが出来なかった。徐々にだが元の生活に戻ってきて、3月末にはすべてのライフラインが復旧したが、やはり一番ガスの復旧に時間がかかり困った。その理由は、地震後にガスの大元の栓が閉鎖されたままで、開放するように要請する部署がわからなくて、通達するのに時間がかかったからだ。

そして、この地震で水の大切さというものを実感した。自衛隊の給水車などがよく家の近くの公園で給水活動をしていたが、長い列をなしていたので飲料水をもらうことができなかったことや、バケツの中の水は重くて運ぶのが大変だったことが地震のことで一番印象に残っている。飲料水として家から100～150mほどのところにあった井戸水を深夜に使わせてもらうことができた。お風呂の水やトイレの水といった雑用水は近くの川からホースで水を引いた。朝からやかんで沸かして頭を洗ったり、お風呂に入るためにお湯を沸かす電熱器を買ってきて沸かして入っていた。

「ドンキーコング」のおかげで被害を知る

午前10時ごろ。最近隣の部屋に引っ越してきた同じ学年の友達と姉と同じ学年のお姉ちゃんと一緒にいた。家族以外で最初に生存を確認した人だった。しばらく一緒に部屋の中で遊び、別れた後、電気はない、水は出ない、ガスも出ない状況で、恐る恐るテレビの電源を入れる。そしたら、なんとついてしまったのだ！そこでなぜかスーパーファミコンの「ドンキーコング」をし始めた。10分ぐらいして一瞬テレビが切れてしまったが、諦めずにテレビと格闘していると、また電源が入った。そしたら8チャンネルだったと思うが、緊急特別番組みたいなものを放送していて、ヘリコプターから被害の状況を生中継していた。その時三ノ宮が映り、JR新神戸駅方面（フラワーロード）から南下する映像が映った。阪急三宮駅が完全に崩壊している映像が映り始め、駅周辺でヘリがホバリング（空中停止）して、被害の大きさをリポーターが興奮しながら話していた。普段ならたくさんの車や人で道路はいっぱいなのに、そのときだけは「空っぽな町」になっていた。あと、倒壊した建物から粉じんが舞っていたので少しもやがかかった感じだった。両親は別のときにテレビの映像で長田、須磨地区の大規模火災のヘリコプター映像が映されていたのを見ていた。

力を集めて！

地震から数日後から僕も手伝いで水汲みをし始めた。水自体は近くに川が流れていたのだから確保できているが、どうやって取りに行くか。川まで直接行くこともできるが足場の悪いところもあったので危険だ。そこで父親や近所の人たちでホースを使って水をマンションの駐車場のところまで引いてきてくれた。その水をマンションの共同のものとして使っていた。24時間水が流れているというだけでどこか安心感というものがあつた。

でも、水汲みは大変な単純作業だった。水をバケツに入れる⇒階段を上がる⇒水を風呂に入れる⇒階段を下りる⇒水をバケツに入れるという繰り返し。まだ僕の家は2階だったからよかったけど5階の人なんか1回運ぶだけでもしんどかったはずだ。そんな水汲みだったが、いろいろな人と話す機会が増えた。同級生とその両親はもちろん、今まであいさつ程度だった人とも話をする機会ができたので嬉しかったのを

覚えている。マンションという1つの集合体に様々な人間が住んでいて、それぞれ特別な力を持っている。それを集結すれば困難なことにも立ち向かうことができるということをこのごろよく思う。近所の付き合いって今思っている以上に大切にしないとだめだと感じた。

あと少しで大被害

地震から時間が経ちだした頃、マンション全体の被害を知ることができた。すると、崩落防止のフェンスを突き破り、駐車場をふさぐように大きな岩がマンションの方向へ。小さいものでもハンドボールぐらいのものから、一番大きいものでは直径1.5m近くの岩がマンションの廊下にあと50cm弱のところまで迫っていた。もう少しそこにかかる力が大きかったら、駐車場と目と鼻の先の住民はどうなっていたのだろうか。ひとまずよかったとそのときは思った。僕が小学3年ぐらいの時に地震では避難していないのに、この斜面崩壊と地震による地盤のずれで小学校に1泊避難することになるとはこのときはまったく思っていなかったのに。

学校がスタート

小学校は1週間ほどで再開された。生徒・教職員ともに地震で亡くなった人はおらず、大きな被害を受けた人もいなかったそうだ。よくよく考えてみると、小学校のどこにも避難してきた人がいなかった。テレビでは、学校の体育館や教室に人があふれているニュースを見ていたが、僕が通っていた小学校ではそのような風景はまったく無かった。それほど、その地域の人的被害が少なかったことが分かるのでよかったと思う。

再開初日、クラス会で『みんなの1月17日』のようなテーマについて話し合う場があった。一番印象に残っているのが担任の先生の話だった。その先生は1月16日が誕生日で、誕生日の次の日に地震に遭ったということが他のどのクラスメートよりも印象に残っている。みんな話を聞いていたら、「食器が割れて家の中がグチャグチャだった」とか「水汲みが大変でしんどかった」という話が圧倒的だった。でも、みんな同じような経験をしているけど、1人1人違う思いでその恐怖の1日を過ごしたのではないかと思った。

お父さんはどうやって通勤したの？

父の仕事場は大阪だった。毎日JRを使って通勤していたが、六甲道駅は崩壊して、もちろん電車が走れる状態ではなかったそうだ。地震から何日か経ったとき、大阪～芦屋間が運転されていたので、家から芦屋まで行くためにバイクを購入して通勤していた。5月の連休明けには新しい六甲道駅も完成し、JR神戸線が完全に復旧したので父の長い通勤時間が短くなった。でも電車からの風景は今までの風景とはまったく違うものだった。建物が何も無い状態でそれが芦屋のほうまでずっと続いていったそうで今でも覚えているらしい。倒壊した家、斜めに傾いたマンションなどが地震から4ヶ月ほど経ったのにまだ復旧作業がされておらず、8月ぐらいからようやく壊れた家の解体作業の風景があらこちらで見られるようになったそうだ。

久しぶりの長風呂とたまの外食

地震のあとお風呂に入る機会があったがリラックスして入ることはまったくできなかった。そこで両親と祖母、姉と一緒に日本三大名泉の有馬温泉に行った。家から車で50分ほどで着き、早速温泉へ。大浴場に入り露天風呂に入りといつもはあまり長風呂をしない僕がそのときだけは長時間風呂に入っており、地震のことや疲れを吹き飛ばすものだった。

地震初日の夜ご飯はなにだったか覚えていなかったが、カセットコンロがあったので暖かい食べ物を食べることができた。でも、だんだん食べ物がなくなってきたので、買い物をしなければならなかった。近くにあるコープ神戸は閉まっていたので無理だったので、温泉のあとは外食と食料調達。被害の少なかった北区や三田市に行って、カセットコンロのガスをたくさん買った。そして買い物の最後には回転寿司を食べに行くというのが定番になった。

元町と三ノ宮はホコリだらけ

地震から数ヵ月後、母親と祖母、姉と僕の4人で三ノ宮のほうに出かけた。JRは六甲道駅全体が崩壊

して運転を取りやめていたが、その時阪急電車が運転をしていたのでそちらを使った。小学校1年生でも電車や乗り物が大好きだった僕は、駅のホームに阪急独特の紅色の車両が入ってきたときの喜びを覚えている。しかし、王子公園駅から春日野道駅方面大きく右方向にカーブするとJR神戸線と平行して走る形になるが、JRはいつもみたいに普通や新快速がたくさん走ってはいなかった。

阪急三宮に到着し、元町方面へ歩いていった。阪急三宮のビルは解体工事が始まっていて重機の音がうるさい。至るところでビルが斜めになって「危ないな」という状況を何度も見た。でも、一番すごかったのが解体工事などの現場から出てくる「ホコリ」だった。ホコリで霧がかかっているかのようにすごく、目がかゆくなるかと思ったほどだ。そのとき、歩いている多くの人が工事現場でよく着けている「防じんマスク」を、スーツを着たサラリーマンも、20歳代のきれいなお姉さんもみんなマスクを着けていたのだ。僕もたまらず母親にマスクを買ってもらうように頼んだ。元町駅の南口の交差点の角にあった薬局でマスクを買ってもらい、「みんなと同じマスクを着けられる」と変な意味でうれしかったのを覚えている。でも、この薬局には花粉症の季節ではないのに棚の一角にさまざまな種類のマスクが陳列されていて、それほど買っていく人がいたのだと思った。

神戸ルミナリエ

1995年12月から始まった「神戸ルミナリエ」。初めて家族全員で見に行ったとき、たくさんの人がいてずっと立ちっぱなしだったのでしんどくなった。でも、1つ1つの電球がついた瞬間のことは今でも忘れていない。奥のアーチからだんだんと灯ってきて、すべてのアーチに光が点く。暖かい色の光、きれいな色のした光が神戸のまちを照らし出す。疲れなんて吹き飛ばすほど感動した。ゆっくり光のアーチを歩いていくと、いろんな人の笑顔が見えてくる。そして自分も笑顔になる。東遊園地のところに着くと360度すべてが光で囲まれていた。なんともいえないが泣きそうになるぐらい美しく感動していた。

このルミナリエは震災で亡くなった方の追悼の意をこめて行われた行事だったが、最近は神戸の冬の風物詩のようになっている。でも、ルミナリエの様子がテレビ中継されている映像を見ると、「もう1年が終わりで、もうすぐで1月17日かぁ」と思うようになってきた。ルミナリエが地震のことを頭の中で思い出す一種のキッカケになっているように思える。

学校へ避難！？

地震から2、3年後のある日、マンション近くの裏山が斜面崩落をしていたのだ。住民は以前から崩落の予兆のようなものがあつたことを理解していた。そして崩落が起こる1年前ほどから母親が土木工事事務所や消防に異変を言っても所有地などのさまざまな問題によって何度も相談しても無駄な状況だった。大きな岩が崩落して、マスコミがこのことに注目してこの斜面の崩落の危険性というものが認識された。その日の晩に斜面崩壊が発生してしまったのだ。これによって、うちの車に岩が当たって危ないところで、またマンションにも少々被害が発生した。そのために僕は小学校に自主避難という形で避難をすることになった。震災では避難しなかったのにといいながら、薄暗い体育館で布団がなかったので、布団代わりのマットの上で思っていた。また体育館では何もすることがなく、漢字ドリルの漢字を百字帳に写していたのを覚えている。その後、崩落を起こした土地の所有者は莫大な損害を受けたそうだ。この事故の原因は地震後に所有者が点検を怠ったためこのような事故が起こったそうだ。ここで一番驚くことは、この崩落で最悪の事態を免れたのは、コンクリートの壁面にあった『1本の木』によって崩落の規模が小さくなったことだ。このことは最近まで知らなくて、奇跡的なことだと思った。たった1日しか避難しなかったが、少しはどのような感じだったかわかっている。でも、震災時にはもっと大変な状況だったと思うので、避難所生活というものを考えないといけないのではないかなと思う。

僕の人生を変えたテレビ

震災から3年後のある日、NHKのある番組を見ていた。震災から3年経った神戸で中学生が中心となって地域で防災に取り組んでいる「東川崎防災ジュニアチーム」の特集だった。消防や地域コミュニティが協力して放水訓練や救急法講習を受けているのを見て、「おもしろそうー、ついでにおばあちゃんの家近くじゃん！」とただそのときは見ていた。それから1年後、祖母の家に引っ越したのだが転校するのがいやだったので小学校まで電車とバスで通学して残りの2年間の学校生活を送った。

そして僕が入学したのは地元の中学校。その『東川崎防災ジュニアチーム』のメンバーが通う中学校だ。入学してすぐにチームに入隊の募集がかかり、すぐに申し込んだ。僕がテレビを見ていたときにこのチー

ムに入るとは思いもしなかった。これが僕にとって初めて『防災』という新しい扉に出会い開けた瞬間だった。それから知らなかったことや地域の人との新しい出会いを楽しみに毎月1回の訓練を待っていた。それから3年間ずっと防災ジュニアチームに取り組んだ。

舞子高校環境防災科との出会い

中学生生活最後の3年のとき、神戸市消防局から防災ジュニアチームの取り組みについての発表を依頼された。そこで環境防災科の1回生の先輩と初めて会い、間近で授業を受けている人が特色的な授業などの発表しているのを目にした。『環境防災科』という名前は以前に聞いたことがあり、防災を勉強したいという思いがあったので、2年の担任の先生に進路希望は舞子高校環境防災科とハッキリと言っていたのだ。担任の先生も舞子高校の卒業生で僕の進路を後ろから支えてくれた。その先輩の言葉の1つ1つに熱意がとてつもない発表で「俺も絶対環境防災科に入る」と誓った。その後も東京での防災ワークショップの発表でも環防（環境防災科の略）の先輩と一緒にいる機会がもう1回あり、ほとんど顔見知りの状態になっていた。このような発表する機会が中学3年のときに3回もあり、非常に今の学校生活において役に立っている経験になった。

3度発表した中で一番緊張したのが、舞子高校の震災追悼行事『震災メモリアル行事1. 17を忘れない』だ。依頼が来たときはその時点で決定されていなかったが、「推薦入試で受験する志望校で発表する！マジかよ！？」という驚きと、自分とほとんど年の変わらない人の前で発表する不安の両方あった。しかも、体育館で約1000人の前で発表し、そのあとパネルディスカッションと分科会計3回も話すという、ある意味プレッシャー的なものがずっと押し掛かった。このとき一緒に発表した「ひよどり台防災ジュニアチーム」の2名、そして僕を含め3人は環境防災科に合格して、毎日共に勉強している。『防災』というものでいろんな人と繋がっているのだと思う瞬間だった。

環境防災科に入れて

環境防災科に入学してからは毎日が新鮮だ。学校が見えてくると「今日は何があるのだろうか」とすごくワクワクする。そんな気持ちになるのは初めてだった。専門授業や外部講師などさすがは専門学科のカリキュラム。そして、授業以外での発表やセミナーなどに参加して、これから先の人生に大きな影響を受けるほどいい刺激を受けた。でもあと少しで自分の人生において大きな転機となった3年が終わろうとしている。そしてこの3年は走馬灯のように今でもすぐに思い出す。入学したとき、初めての専門授業のとき、初めて環境防災科に3学年がそろったとき……。震災がなければこの学科は無かった。つまり、僕にとって中学や高校時代に防災を勉強できたのは運命のように思える。だから、今環境防災科で勉強できることを誇りに思うし、感謝している。

これからの思い

阪神・淡路大震災からもう10年、しかしまだ10年しか経っていないように思う。今までの10年というのは、地震からまちを立ち直らせるための『復興の10年』だった。でも、まちの景観も震災以前よりきれいになったが、神戸市でも震災を体験していない、知らないという市民が増えてきている。ある神戸市の中学校では生徒の3人に2人は震災を経験しているがまったく覚えていないという現状になっている。つまりこれからの10年というのは『伝承の10年』のように思う。地震を知らない、覚えていないという人々には、経験した人の体験談というものが一番の教科書だ。そして、この『語り継ぐ』に書かれている生徒1人1人のまったく異なる体験がこの神戸で地震があったことをモノとして残されるし、ほぼ同じ世代の高校生の思ったことが書かれているので、読んだ人たちの心の中にも残る体験集になったのではないかな。

新潟県中越地震や福岡西方沖地震といった大きな地震が現在も発生している日本において、『備える』ということは非常に重要なことの1つだ。日本に住んでいる限り絶対に1回は大きな地震を経験することを意識して、過去の災害の体験を知ることこそこの備えだと考えているので、1人でも多くの方々にこれを読んでもらい、「人と人は助け合うことによって、時間はかかってしまうが絶対にまちを元に戻らせることが出来る」といったことなど、起こりうる災害で少しでも悲しみを増やさないようにこの体験集が役に立ってもらいたいと思う。

今回改めて地震のときのこと、初めて『防災』に出会ったことなど思い出すのに苦労した。小学校1年生で記憶があいまいだったかもしれないが、ほんの少しだが思い出すことを拒絶していたのかもしれない。

意識しているわけではないが、自然にそうなっているように思えた。もちろん当然のことだと思うが、これを乗り越えて伝えていくことが今の僕には必要なことだと思った。そして日本全国の人々にこの体験集を読んでもらって、何か感じとってもらいたいと願いたい。

僕は決してあのときのことを忘れない、そしてこれからも伝えていきたい。

「僕の道」

神戸市垂水区
遠藤 寛道

【軌跡】

僕は1987年5月14日に神戸のポートアイランドにある病院で産まれた。ポートアイランドは震災時液状化現象の被害が大規模だった。僕には父の記憶がない。初めて母に買ってもらった消防車の本がきっかけで幼い頃から消防の世界に興味を抱いていた。そして、保育所に入所して以降毎年行われていた消防官による防火指導がきっかけで消防官になりたいと思うようになった。その頃の僕のことを当時の先生方はやんちゃで元気のいい明るい子だったという。

保育所を卒所して小学生になった。同時に保育所当時の先生がしている学童に入れられた。小学校入学時は今の僕しか知らない人からは想像できないくらい悪ガキだったので先生によく怒られ授業中に廊下に立たされることもしばしばあった。

1995年1月16日夜、風呂に入ろうとしていたときに小さな揺れを感じた。普段そう地震が起こることがなかったので少し気になったが寝るころにはすっかり忘れていた。翌日は3連休明けの学校のある日だったので早く寝た。普段から一度寝るとトイレに起きることはめったになかった。それがあの日は違った。

【止まった時計】

1月17日早朝5時半ごろ、まだ外も暗く肌寒い。トイレに行きたくなくて目を覚ました。そして、トイレから戻ってきてまた再び寝床に就いた。しばらくして眠りにはいった。このとき、僕はまだそのすぐ数分後にあの惨劇に見舞われるとは思ってもいなかった。再び眠りにはいったとはいえ眠りは浅かった。5時46分、「ゴッ」という大きな音がした。ふと目を覚ますと家が飛び跳ねていた。そして、僕の体に大きな黒いものが覆いかぶさっていた。僕はその大きな黒いもののせいで部屋の中を見渡すことができなかった。しかし、大きな黒いものは重たくなかったしすぐに消えた。それは母だった。そのとき初めて部屋の中が薄暗いながらも見えた。母は僕の体を自分の体の下にすることで守ってくれたのだ。母がすぐ消えたのは、僕の隣にあった大きなタンスが動き始めたので倒れないようにタンスを体で静止するためだった。タンスは踊っているかの如く弾んでいた。何度も何度も「ドッカーン」という轟音が鳴り響いていた。それはまるで爆弾が爆発しているような大きな音だった。揺れへの恐怖より轟音への恐怖の方が大きかった。その音が鳴る度にまるで巨人がまち中を踏みつぶしているような感じがした。母は僕の体のうえに覆いかぶさったり、タンスを静止したりを繰り返した。揺れている間に外を走る単車の音が何度か聞こえた。あの揺れがたったの10数秒だったなんて今でも信じられない。

揺れが治まり家の1階に降りようと電気を点けようとしたが点かなかった。階段の下は真っ暗だった。母のあとについて1階へ降りると足元にいろんなものが散乱しているのが感じられた。外に出ると雪がちらついていた。前の家の人は家の扉が開かなかったようで同じく外に出ていた近所の人が集まって開けようとしていた。

僕は母子家庭なので寝るとき以外は祖母と祖父と曾祖母の暮らす家で過ごしていた。そうはいつでも家自体は徒歩1分ほどの距離しか離れていない。外に出てその家に向かった。道には多くの人が毛布を羽織ったりして出ていた。家の中に入ると床がぐにゃぐにゃで抜け落ちそうだった。僕らはただ呆然としながら時間が過ぎていった。そしてしばらくして気づいた。2階で寝ていた曾祖母がいない。2階に様子を見に行くと部屋の中にタンスが倒れまくっていた。そんな中で曾祖母はその倒れまくっているタンスのちょうど間にいた。無事だった。

地震発生から数時間たってテレビがついた。テレビの画面には倒れた阪神高速が映っていた。そして、後にドキュメント番組で再現までされた奇跡の観光バスの姿もこのとき目にした。長田区の燃えている様子や倒壊した家々が映し出されるなかで自分たちの身に起こった現実を恐怖として受け止めていた。その後何度も何度も地鳴りと余震が絶え間なく続いた。トイレに行きたいと思ってトイレのドアの前に行くと地鳴りと余震が起こり怖くてトイレに入らず部屋へ駆け戻った。余震が治まってまたトイレに行こうとするとまた地鳴りと余震が起こりまたしても入れなかった。そんなことが幾度となく続いた。地鳴りがする度に早朝の本震がフラッシュバックした。余震の度に家が傾いていった。壁が落ちていった。家の中の至る所に穴が開き外が見えた。しかし、まだこの時点では6443人もの人が命を落とすこととなった神戸の姿を想像できなかった。

[出会いと別れ]

翌日から毎朝、祖父とともに水汲みに中学校へ行くのが僕の日課となった。90段以上ある階段を毎朝1段1段数えながら上った。給水車が近所に来たときには急いで列にならんだ。僕の家の一帯は近所付き合いが盛んだったので多くの方々とともに毎日を歩んだ。隣の家の人々が地方に米を取りに行ってくれた。隣4軒目の人が温泉へ連れて行ってくれた。近所の人みんな歩んだ日々を一生忘れることはできない。

数日たって母に連れられて須磨へ行った。母の勤め先の美容院の様子を見に行くためだった。このとき産まれて初めて線路を歩いた。線路の側に焼けた民家があった。須磨のまちの建物の多くが今にも僕に襲い掛かりそうだった。記憶の中での須磨のまちは暗い。長田の風景を電車から見たのはいつ頃だったか記憶が明確でないが、電車から見る長田のまちはあたり一面焼け野原だった。鉄筋コンクリートの建物がティッシュペーパーの箱を上から押しつぶしたようになって焼け焦げていた。衝撃的な光景だった。神戸のまちの至る所で倒壊した家屋を目の当たりにした。

何週間たっただろうか。小学校が再開した。学校に着くとプールが半分に裂けていた。ど真ん中に大きな亀裂が入り水は抜けていた。避難者もいた。結局この年のプールの授業は近隣の舞子小学校で行われた。また、生徒全員が揃わないということでクラスがばらばらにされた。小学校が再開して数日すると道路に白い線が見られるようになった。亀裂部分にしかれた白い線は日に日に増えていった。その後、この白い線のあるところはすべて舗装された。それから何週間もたって水が出た。歓喜の声がまちに響き渡った。ガスもしだいに復旧した。テレビでは補修業者のCMがよく流れるようになった。仮設住宅が近所にも多く建設され始めた。近所の仮設住宅に入居した保育所のときの先生を何度か訪ねた。

小学2年になると僕の悪ガキぶりも少しはましになった。5月、学校に行っている間に僕の家にも祖母の兄弟が、田舎の鳥取から工務店を営む息子が家にやって来た。しかし、あまりの被害の凄さに圧倒され僕が帰宅する前には帰って行った。その数日後その田舎の手配で大工さんが2人やって来た。半壊した2軒の家の修復にやって来た2人の大工さんは僕が被災した方の家に修復が完了するまで、土日だけ鳥取に戻りそれ以外の日は家に住むことになった。大工さんたちに祖母は毎日3食の食事とおやつとビールを出した。家の1階は2軒とも床が土になった。大工さんが来てから家族が増えたみたいでにぎやかになった。多いときには大工さんや左官屋さんなど5、6人が泊まり、10数人が作業した。多いときには家族が10数人にもなった。家の修復には時間がかかった。何度も何度もジャッキアップした。ミキサー車やトラックが家に何度もやって来た。大工さんたちといっぱい話をして思い出がいっぱいできた。出会いがあれば必ず別れもある。家の修復が完了すると大工さんたちは帰ってしまう。2ヶ月程しついにそのときが来た。ともに過ごした日々を忘れるはしない。近所の家の大半は解体されて建て替えられた。

この年、僕は震災チャリティーツアーで石川県へいった。地震以降学校では今までの火災避難訓練に加えて地震避難訓練も行われるようになった。また、「しあわせ運べるように」を音楽の時間に習った。震災についての体験集の「しあわせ運べるように」も配られた。小学3年生くらいまではオートバイが家の近くを通る度に心臓がドキッとするのが治まらなかった。近所の仮設住宅に住居している子とも友達になった。近所の仮設住宅は小学5年生くらいまでであった。その後は近所に復興住宅が建設された。保育園のときの先生も入居した。この復興住宅は何度もテレビで報道され保育園のときの先生も映った。

小学校卒業の年度はいろいろあった。曾祖母は体調がよくなかったので自宅に病院から看護師の方が検診にこられていた。そんなさなか祖母が脳梗塞で倒れた。この日家には曾祖母と祖母の2人しかいなかった。しかし、検診に来られた看護師の方が発見し救急車で2人とも別々の病院に搬送された。祖母は回復したが曾祖母はその後自宅で他界した。

[歯医者]

震災当時小学生だった僕も中学生になった。僕は中学校の10回生だった。まちは外見上すっかり復興した。僕の中学校は震災を期に僕の入学前に大型防火水槽を設置した。「しあわせ運べるように」の体験集は中学校でも配られた。中学校に入学してからも1月17日が近づくと先生が震災時の話をしてくれた。特に校長先生の話が記憶に残っている。その話の内容は校長先生自身が避難所運営をしていて体験したことだった。

当時、校長先生は教員として中学校で避難所運営を行っていた。そのとき最も避難者が不自由になったのはトイレ。仮設トイレには長い列が毎日できていた。しかし、そのトイレも断水が続くについに故障までした。そんな中で避難者の多くはグラウンドでトイレをしたのだが大についてはずすがに多くの人がグラウンドでするのを拒み我慢するがゆえに多くの人が体調を崩した。また、支給されるパンをめぐる人々は殺到しついにパンが宙に舞った。当時の教職員らはその殺到する人を制止しようとしたものの人々の勢い

に押されてしまった。地震から数日して学校に東京から来たという1人の歯医者を訪れた。その歯医者にはありったけの入れ歯を持って来ていた。なぜか。震災で多くのお年寄りが入れ歯を失ったに違いない。だから自分は歯医者として神戸でできることをしに来たと言う。その歯医者は避難者1人1人の歯を検診し入れ歯を失ったお年寄りに入れ歯を支給していった。当時、教員だった校長先生は名前だけでも聞いておこうとしたがその歯医者は自分の名前さえ明かすことなく神戸から去って行ったという。

【絶望】

中学校では陸上競技部に所属し短距離の選手となった。そして、中学1年の2学期くらいから試合のメンバーに選ばれるようになり、年に1度のリレーカーニバルの学校選抜メンバーにもありがたいことに中学2年時から選ばれた。

そんな陸上競技部での中学2年の秋、僕は怪我をした。短距離ランナーは1週間練習を抜けると筋肉は元に戻ってしまうといわれている。それが、僕はその怪我した上に復帰近で更に肉離れを起こし結局3ヶ月間まともに走れなかった。この間僕は毎日1人で筋トレに励んだ。しかし、その僕の目の前を爽快に走り抜ける仲間を見るのは非常に辛かった。このとき、僕は多くのことを考えさせられた。仲間のこと、走れない自分のこと、陸上競技についてのことなど。そして、自分なりに1つの結論を出した。それは、走れないことで嘆くことではなく、走れないからこそできることをするということだ。僕は陸上競技が本当に好きなんだとそのとき心から思えた。

その日から僕は毎日の筋トレをそれまで以上に真剣に取り組み、また仲間が練習メニューを終えたのを確認すると皆がダウンを終える前にグラウンド整備を1人で行った。すると、何日か後から皆が「ありがとう」と声をかけてくれるようになった。僕は仲間のその一言に支えられ復帰の日を心待ちに一生懸命に毎日を送った。そして、僕は見事に3ヶ月後に復帰を果たした。復帰してから不振が続いたけれども顧問は僕を試合の度にリレーメンバーに選び続けてくれた。そのときの練習で顧問が言ってくれた言葉がある。「遠藤は3年間まじめに一生懸命やってきたから今がある」僕はこのとき今までの苦悩がすべて報われた。そして、ついに最後の試合で自己記録を更新した。

このときの経験は僕の人生においてこれから様々な場面で僕の心の支えとなっていくだろう。自分がどんなに絶望的な状況になってもあきらめないこと。これは震災でも同じだ。災害で絶望的な状況になっても絶対に復興するんだという気持ちを常に持ち続けることで必ず復興できると思う。この体験をこれからの人生で活かしていきたい。

【選択】

中学2年の頃から進学するなら消防防災関係の学科に行きたいと思っていた。というのも幼いときから将来は消防官になるという夢を抱いていたからだ。そんなさなかタイミングよく県立舞子高校に環境防災科が設置された。しかし、当初僕は環境防災科に進学するつもりはなかった。卒業生がなく、また一般科目数の少なさに不安があったからだ。だから、ずっと5教科の勉強をしていた。しかし、消防学校の体験入校などの課外授業の豊富さを知ったのと諏訪先生が学校説明に来られたことで気持ちが変わった。それから4ヶ月ほどして僕は同科の合格通知を手に入っていた。

2003年4月、僕は県立舞子高校の30回生、環境防災科2期生になった。高校に入学して初めての専門授業は阪神・淡路大震災だった。

被災した当時7歳の小学1年生だった僕が今やこうして阪神・淡路大震災の教訓を学び伝えようとしていることは何か不思議な感覚だ。

【真の復興とは】

高校2年生の1学期の最後に環境防災科の授業の一環として行われた「長田のまち歩き」。この校外学習で僕はまだ復興していないと感じた。

長田のまちの駅周辺は確かに高いビルが建ち外見上誰が見ても復興したと感じるだろう。しかし、駅周辺から3分程北に歩いて行けばそんな感情は消えているだろう。空き地、いびつな道路これら全てが震災の名残である。空き地は至る所に点在している。僕はそれまで多少の空き地は在るとは思っていたがその多さには驚いた。歩道の多くはその車道の幅に対して広すぎる。どういうことか。地元の人に聞くとそれは震災後の市の区画整理で各家の土地の10%を市に回収されたとのことだった。実は、それまでに長田区にはなぜ3階建ての家が多いのか気になっていたのだがその理由もこういうことからなのだとわかつ

た。更に僕が衝撃を受けたのは電信柱が歩道の真ん中にあったことだ。この電信柱には商店街名が書かれていた。しかし、その場は今まったく商店街らしさがなかった。これについても地元の人から聞くことができた。理由は前述した市の区画整理によって歩道幅が増えたものの電信柱だけがその区画整備によっておいていかれ歩道の真ん中に今こうしてあるとのことだった。そして、商店街であったこの地の店舗のほとんどが全壊し今は震災前の商店街の姿がなくなってしまったとのことだった。また、今自分たちのいる場所の周辺で数名の方が生き埋めになり死亡したとのことでも分かった。それらの名残がああ電信柱であることを知り僕は震災の記憶として是非この歩道の真ん中に立っている電信柱をそのままの形で震災の爪あととして後世に残して欲しいと感じた。

[道]

消防官になる。この意志は変わらない。僕は将来消防救助隊として多くの人の命を救って生きたい。これが僕の震災で生かされた1人としての歩む道だ。僕は人にうまく話を伝えることは得意だとは言えない。しかし、語り継ぐことだけが震災を経験した者としての使命ではないと思う。話すのがうまい人、苦手な人、運動のできる人、苦手な人、勉強が好きな人、嫌いな人、人にはそれぞれ短所もあれば長所もある。これらは全て個性なのだ。何も悪いことではない。個性は必要なもの。この個性があるから世の中は成り立っていると思う。例えばまちの防災マップをする作成する上でリーダーシップのある人がいるとする。けれどもリーダーシップをとることが苦手な人もいる。でも、人間として肝心なことはリーダーシップの有無ではないと思う。リーダーシップをとることが苦手、でも自分には得意なことが人は誰しも必ずあるはずだ。もしそれが情報収集についてだったなら自分はそのまちのいろいろな情報を収集しスムーズにマップ作成ができるように貢献すればいいのだ。自分のできることを一生懸命にする。それが人間として一番肝心なことだと僕は思っている。だから、僕は言葉でなく自分の身を張って人の命に貢献することが生かされた者の1人として僕の一番のやり方だと思うし一番やりたいことでもある。僕によって将来1人でも多くの方があのかとき死なずによかったと思え、自分の生きがいを見つけてくれればと思う。そこに到達するには多くの困難が僕を待ち受けているであろうがどんなことがあっても僕は中学2年生の頃の経験を胸にあきらめず立ち向かっていく。僕の次なるフィールドは消防にある。

震災体験

神戸市垂水区
太田 里奈

阪神・淡路大震災

発生日時 平成7年1月17日午前5時46分

震源 淡路島(北緯34°36' 東経135°03')

深さ 約14km

規模 マグニチュード 7.2

震度 震度6(一部地域で震度7) 震度7

震度6弱 立っていることが困難になる。

震度6強 立っていることができず、はわないと動くことができなくなる。

震度7 揺れにほんろうされ、自分の意志で行動できなくなり、ほとんどの家具が大きく移動し、飛ぶものもある。

特徴 横揺れと縦揺れが同時に発生

震災前日 1月16日

1月16日。家族全員(父、母、兄・中1、姉・小5、自分・小1)で掃除をしていた。この日、私は姉の学習机をおくため部屋の片付けをしていた。夜になり、そろそろご飯の時間だと思い部屋の片付けを一息つけようとしたとき、地震が起こった。これが、私が生まれてきて初めて体験した地震だったのかもしれない。未だに、あの時のことを鮮明に覚えている。父は、棚を押さえみんなに落ち着くように言った。家族みんなの動きが静かに止まった。一瞬時間が止まったかのように静かになった。今までにない緊張感だった。緊張がほぐれたのか、みんな動き出した。そして、いつもと変わらぬ様子でみんなご飯を食べた。この日は夜に2回地震が起こったことを覚えている。このときは、明日何が起こるかなど考えもしなかった。神戸に住んでいるほとんどの人がこの地震を感じたときどう思ったのだろう。私はただ明日の学校のことだけを考えていた。

阪神・淡路大震災 私の1月17日

1月17日。5時ごろ父は仕事のため起きて出勤の準備をしていた。私は物音で少し目を覚ましたり、寝たりの繰り返しだった。5時45分。父が家を出ようと荷物を持って玄関に向かうところだった。その時、マグニチュード7.2の大地震が神戸を襲った。自分が宙に浮いているような不思議な感覚だった。今何がおきているのかまったくわからない状態だった。揺れている間、怖かったのか布団から顔を出すことができなかった。何かが自分の上に落ちてきた。揺れがおさまり布団から出るとカセットテープが自分の上にたくさん落ちてきていた。そして周りを見回すと、私の寝ている横においてあったタンスが倒れかかってきていた。幸いにも、兄の学習机にひっかかり倒れなかった。そして私の頭あたりにおいてあったテレビが落ちてきていた。これも物にひっかかっていて私の上に落ちなかった。父はまず、小さい私たち兄弟を助けた。姉の上に衣裳缶がくずれていた。それほど重たいものではなかったので大丈夫だった。いろいろあったが、みんな無事だった。父が先頭にたち安全を確かめながら、外にでた。床はまたげる隙間もなく物でいっぱいだった。

家族全員で、外に逃げた。公団住宅に住んでいる人たちはもう外にでていた。私の家が最後だった。私の家は車がなかったため、外にいた。あまり覚えていないが、みんな意外と冷静だったように思う。車のラジオで地震の情報を一緒に聞かせてもらった。このころ、何も情報がなかった。どこで何が起きたかもわからない。そんな中で、余震がおさまるのを待っていた。私はまだ1年生だったからだろうか、非日常的な出来事に恐怖の反面、胸がわくわくしていた。

父はその時PHSを持っていた。長田に住むおばあちゃんの家連絡したがつながらなかった。どうしようもなかった。そして、父は近所に住む友達のところの様子を見に行った。ここの家族はお父さんがもうすでに、仕事にでていた。ドアを下駄箱がふさいでいたため、でることができなくなっていたようだ。だから、父はその下駄箱をのけた。みんな無事だった。

私は、近所の友達と家周辺を歩きに行った。そこは、今までと何にも変わりのない公園があった。もう1つ目の公園は、地面に土をえぐるほどの少し大きいひびが入っていた。初めてみた大きなひび割れにす

ごく興味を持った。そしていつも私が遊んでいる公園に行った。その公園の景色はいつもと変わらなかった。でも、いつもと違うなんだか重たい空気だと思った。何故か、みんな黙っていた。その瞬間、私の目には公園が大きく揺れたように見えた。みんなに聞いてみたけど、そう見えたのは私だけだった。実際に余震だったのか、ただの目の錯覚だったかはわからないけど、それから、地震に恐怖を感じるようになった。

車に戻るとそろそろ家に帰ろうという話になっていた。私の家は、入れる状態ではなかった。母の話によると、信じられないが、足の半分が埋まるくらい物が散乱していたそうだ。だから、私は友達の家にしとの間いさせてもらうことになった。

そのころ父は、知り合いの人に長田にわざわざ連れて行ってもらい、みんなの安否を確認しに行った。父の親の家は床が抜けていたため住める状態ではなかった。全壊だった。母の親の家は半壊。いとこの家は全壊で、2階が落ち1階がつぶれていた。でも、みんな無事だった。母と兄は家の片付けをしていた。

家に帰ると、母に靴で入ってきなさい、と言われ私は驚いた。靴で家に入るとか考えもしなかった。家の中は物だらけだった。台所に行くとき食器棚の中身はほとんど割れて残っていたのは数えられるほどだった。タンスの上においていたものも、壁に飾っていたものも全部落ちていた。

避難所生活

父が帰ってきたのは夜だった。家は寝ることのできる状態ではなかった。だから、近くの中学校の体育館に避難した。この日の月はずっと赤だった。外は静かですごく気味が悪かった。体育館ではパンとおにぎりの支給があった。私は、トランプばかりしてすごしていた。避難所での生活は2日間くらいだった。父は震災が起こったため、仕事が休みだったので毎日、自転車で長田にみんなの様子を見に行っていた。

ライフラインのない生活

3日目くらいから給水車、水を提供してくれるところがでてきた。父は自転車で水をもらいに行き、運んでいた。今思えば、自転車は災害のとき、動く手段としてすごく便利だったのだな、と思う。

母、兄、姉、私は近くにくる給水車まで水を取りに行っていた。重たいタンクを持ち、家と給水車を行ったり来たりした。ご飯は、ガスも水もなかったから、主にカセットガスコンロを使っていた。トイレはくんできた水をバケツにいれ、流していた。お風呂はしばらく入っていなかった。震災3日目くらいに、母のいとこが私の家に泊まることになった。当時は何で長い間泊まっていたのか知らなかったが、そのいとこの家も全壊だったらしい。

長田の町

数日後、姉と私と父3人で、須磨まで電車に乗って行き、そこから新長田まで歩いて行った。今考えたら、電車はすごくありがたいものだなと思う。ほとんど毎日行ったり来たりしていた。そして、おばあちゃんに会いにいった。長田の被災した町の中をいっぱい歩きながら、おばあちゃんの家に行った。長田の町がまるで、別の町に来たかのように思えるほど変わり果てていた。一番印象に残っているのは、倒れかけたビルが別のビルに寄りかかっていたことだ。そのビルの周りは、何もなくて焼け野原が広がっていた。だから余計、私の目に焼きついたのだ。

おばあちゃんの家には赤の紙が貼られていた。周辺の家も、緑の紙や赤の紙がたくさん貼られていた。私の住んでいる町では目にすることのない光景ばかりだった。おばあちゃんの家にもみんなで片付けに行った。私は、おばあちゃんの家に行ったのが、このときが初めてだった。おばあちゃんは今からどうなってしまうのだろう、ととても心配になった。

片付けは大変だった。その反面、少し楽しかった。なぜなら、おばあちゃんが父の昔の写真やいろんなものを出してきて、楽しい話をしてくれたからだ。おばあちゃんの笑っていた姿ばかりが記憶に残っている。

おばあちゃんはずっと、近くの小学校で避難所生活をしていた。長田の避難所生活を見て長田の被害の凄まじさを感じた。運動場では炊き出しをしている人がいっぱいいた。簡易トイレもあった。ひとつの学校にこんなにも多くの人が集まり、共同生活することは想像以上に大変だと思った。おばあちゃんは最後まで避難所にいた。期間は覚えていないけど、すごく長い間だったのは確かだ。

復旧・復興

生活も少しずつライフラインが復旧しはじめ水はでたけど、ガスがでないからお風呂には入れなかった。たくさんの銭湯にいった。このころは、水が出るようになったことや、電気がつくようになったことや、ガスが使えるようになったことに、ただ漠然と、「水が出た」「電気がついた」「お湯が出た」としか思っていなかった。本当は、たくさんの人がライフラインの復旧作業に携わり、水、電気、ガス、が使えるようになった。このことにとても感謝している。

仮設住宅

おばあちゃんはやっと仮設住宅の抽選で当選し、避難所の生活を終えた。嬉しいことに仮設住宅は、私の家の近くだった。毎日のようにおばあちゃんの家に行っていた。仮設住宅に移ってからおばあちゃんは周りの人とコミュニケーションをいっぱい取っていたように思う。いろいろと不便はあったが、おばあちゃんは元気に過ごしていた。私は、よくおばあちゃんの家遊びに行ったり、泊まりに行ったりした。壁が薄いから隣の家の人の声がよく聞こえた。そして、冬は寒く、夏は暑かった。でも、おばあちゃんといろんな話をすることができた。おばあちゃんは新しい家が見つからなく、避難所と同じく、最後まで仮設住宅に残っていた。

今の私

私は、今まで生きてきた中で、一番鮮明に印象に残っているできごとは、阪神・淡路大震災である。

父は、昔から災害に興味を持っていたらしい。たくさん阪神・淡路大震災の資料を買いはじめた。私はなにげなく被災地の写真集をよくみていた。何回見ても悲惨である。何回も見ると見慣れることはなかった。そして今にいたっている。

あの時と違って今は、地震が起こると過敏に反応してしまい、常に緊張した状態で夜も眠りにくくなった。

過去との付き合い

神戸市垂水区
岡 朋宏

記 憶

震災から10年が過ぎた。その10年の間に世界中でいろんなことが起こった。テロ、戦争、地震など…と書きつつもこの3つぐらいのことしか思い出せない。自分にとって良いことよりも悪いことのほうが記憶に残りやすい。人間という生き物はつくづくかわいそうな生き物だ。しかし、その『悪いほうの記憶』でさえ10年もすれば忘れてしまうものだとつくづく感じさせられる。阪神・淡路大震災の記憶…死者が6000人を超えるあの災害にも関わらず人々の記憶から忘れ去られようとしている。僕も例外ではない。当時、小学校1年生だったからというのものもあるかも知れない。しかし、それにしてもあまりにも記憶が少なすぎる。この前の1月17日にテレビで阪神・淡路大震災のメモリアル特集をやっていた。親に「あんた、あの時のこと覚えてる？」と聞かれて「あんま覚えてない。」というそっけない返事をした。はっきり言って、前のスマトラ島沖の地震のときも中越地方の地震のときもまるで他人事のように思っていた。「大変やなあ。」「かわいそうに。」そんな普通の言葉しか浮かんでこなかった。「震災のときも、他の地方の人らもこんなんやったんかなあ。」と思った。ひどい言い方になるが、スマトラで地震が起ころうが、自分の生活には何ら直接的な影響はない。自分の住んでいるこの神戸から何千キロも離れている行ったことも無い国で会ったこともない多くの人々が津波に巻き込まれて死んだ。たったそれだけの『事実』である。しかし、その人たちの人生は、そこで終わったのである。人間いつか死ぬ。当たり前のこと、早いか遅いかだけのこと。でも、それを大半の人は恐れて必死に生きようとする。

会ったこともない人々……。しかし、その会ったこともない人のために人間は何かをしようとする。その悲惨な映像を見て何かを感じ、生き埋めになった人が助け出される度にテレビの前で共に歓喜する。人間は薄汚い動物だと言う哲学者がいるが、人間には“優しさ”や“慈愛”という単純な言葉では表せない“何か”がある。その“何か”をしようとするのがボランティアだと思う。

神話の崩壊

人間は心のどこかに、「自分だけは大丈夫。」という考えを持っている。自分は死ぬはずがない。そんないい加減な考えを持っている。あの震災の前もそうだった。阪神・淡路大震災のちょうど1年前の1994年1月17日、『ロサンゼルスでM6.5を超える地震が発生』というニュースが流れた。しかし、神戸の人たちは、「神戸は大きな地震が起ころへんから安心やなあ。」という『神話』を信じていた。驚くべきことに公共のメディアさえもこの『神話』を信じていた。しかし、ロサンゼルス大地震のちょうど1年後の1995年1月17日、その『神話』は文字通り音を立てて崩れ去った…。1995年1月17日5時46分淡路島北部を中心としたマグニチュード7.3の地震が発生…震度7を観測…。

1月16日

その当時、僕は小学校1年生だった。平日は小学校に行く。休日は友達と遊び、毎日いたずらばかり。こんな日々を繰り返していた。平凡な毎日だった。家族との旅行以外、校区の外にも出たことがなかった。

僕の誕生日は1月19日だった。しかし、その週で家族が全員集まれるのは16日だけだったので少し早い誕生日会をした。誕生日会なんかケーキとプレゼントさえもらえればいつでもよかった。近所の友達や、小学校の友達を呼んで何時間も遊び続けた。時間が過ぎるのがとても早かった。

その夜もいつもと同じだった。自分、父親、母親、兄、弟、祖母の家族6人でテーブルを囲んで夕食を食べていた。すると、体を感じるか感じないかぐらいの微弱な揺れが起こった。『阪神地区でマグニチュード2.6』そんなテロップがテレビ画面の上のほうに出た。外を見ると満月がいつもの黄色ではなく赤みがかかった色で光り輝いていた。

深 夜

その日は遅めの12時ごろに床に入った。祖母は仏間で、残り5人はひとつの部屋で寝ていた。その晩は近所の犬がずっと鳴き続いていた。「ワンワン」「キャンキャン」今になって思えば異常だった。しかし、そのときは「うるさいなあ。寝られへん。」そんなことしか思わなかった。

1995年1月17日5時46分

ついに『その時』が来た。そのとき、まだ家族のほとんどは寝ていて、起きていたのは祖母1人だけだった。

ドンッ！ゴ・ゴ・ゴゴゴゴ…

あの揺れをどう表せばいいのかわからない。今までに経験したことの無い『何か』としか言いようのないものだった。なぜ揺れているのかさえ分らない。このまま家が土台ごと地面の中に沈んでいってしまうんじゃないかと思った。家具が激しく揺れ、親が3人の自分の子供の名前を叫んでいた。下の階からは、食器の割れる音と祖母の悲鳴が聞こえる。そのとき、僕は恐怖で何もできなくなっていた。地震に対する恐怖ではない。何も分らないという途方もない恐怖に駆られていた。

そんな状態がどれくらい続いたのかも分らない。何秒？何十秒？何分？そんなことも考えている余裕もなかった。また大きく揺れだした。すると、父が「おばあちゃんも心配やし、みんなで下に降りよう。」と言った。ぼくは、ただその言葉に従った。足元には、花瓶が割れたのだろう。水たまりができて懐中電灯の光できらきらと光っていた。階段を下りたところに玄関がある。子供3人と母は、身を寄せ合って震えていた。父はリビングへ行き、「おばあちゃん、どこやあ!？」と叫んだ。すると、台所のほうから、「ここや!ここや!」という祖母の声が聞こえてきた。幸いにも祖母に怪我は無く、怪我をしたのは父1人だけだった。父の背中がタンスが当たった衝撃で赤く晴れ上がっていた。

それから、余震は続いた。空が白みがかかったころ、電気が復旧した。家中の電気がいっせいに点いた。すると次第に周りの状況が分かってきた。壁には大きなひびが入り、台所の床には食器が散乱し、リビングのテレビはコード1本で台の上に踏みとどまっていた。祖母が寝ていたところには、頭のあった場所にテレビが、足のほうにはタンスが倒れてきていた。もし祖母が、寝ていたら大変なことになっていたかもしれない。

テレビをつけてみると、BSチャンネルだけが映った。特番が組まれ、そこには黒い煙を上げ続ける長田の町が映っていた。もう朝日が昇っている時間だというのに空は黒い雲で覆われ、長田の町は赤く燃えていた。「戦争?」その変わり果てた長田の街を見てみると、地震よりも戦争のほうが現実味があった。すると、ニュースキャスターが「本日未明、阪神地区を中心とした震度6を超える地震が発生しました。多くの死傷者も出て…」という原稿を読み上げた。「地震?」その時初めて地震の恐怖を知った。次々に流れてくる神戸や長田の映像を食い入るように見ていた。倒れてしまったビルや高速道路、燃え続ける長田のまち、真ん中の階がめちゃくちゃに押し潰されたビル・・・もう、その時には恐怖という言葉は消えていた。諦めともとれる気持ちだった。ただ、テレビを呆然と見ていた。

どれだけ時間が経っただろう。父が「揺れも収まってきたし外に出よう!」と言い出した。外はもう明るかった。いつものように朝霧で世界が白っぽくなっていた。玄関の前には、割れた瓦が散乱していた。道路には、ひびが入り、ところどころ盛り上がっていた。近所の人たちは、もうすでに外に出てきていた。新聞配達途中だったのだろうか。新聞配達の人もいた。そこにいる全員の顔に笑顔はなかった。それはそうだ。こんなことが起こるなんて、昨日まで誰も想像してなかったのだから。新聞配達の人が持っていたラジオに全員耳を傾けていた。ラジオから流れてくる声だけがした。誰も話そうとしない。鳥の囀りさえしない。ラジオの声だけがしていた。「何でみんな黙ってるの? 誰か何かしゃべってよ・・・。」心の中でそんなことを繰り返し思っていた。

結局、ほとんど会話のないまま解散となった。家に帰るとそこは1日前までそこにあった我が家とは、まったく違うものだった。壁には大きなひびが入り、ガラスのテーブルは割れて、食器や花瓶は床に破片となって散乱していた。何から始めたらいいのだろう。何をすればいいのだろう。

すると、母が箒で食器を掃き始めた。それを見て僕は「何でそんな無駄なことするんやろ?」と思った。そのときの気分は、言葉で正確に表せない。無気力? 絶望? わかりやすく言うと“どうしようもない”という感じだった。結局、僕はただボーッと片付いていくのを見ていた。

1月17日10時～

リビングとキッチンの片付けもほとんど終わり、家族のみんなも落ち着いてきた。すると父が「是枝のおばあちゃんが心配やから見に行こう。」と言い出した。この“是枝のおばあちゃん”というのは、僕の家から直線距離にして1kmぐらいの舞子坂に住んでいる母方の祖母である。震災の数年前に祖父が他界し舞子坂の一戸建てに1人で暮らしていた。

家族6人が乗り慣れた車に乗りこみ祖母の家に向かった。何度も通ったことのある道のり。しかし、何

もかもが違っていった。道路にはひびが入り、盛り上がっているところもあった。盛り上がりやひびを乗り越えるたびに車が大きく揺れた。僕は肩から腰に向かってかかっているシートベルトをギュッと握り締めていた。周りの景色も普段見てきたものではなかった。家々の屋根からは瓦が剥ぎ取られ、ブロック塀は無残になぎ倒されていた。途中、スーパーに立ち寄ると、飲み物やおやつやパンなどの調理不要の食べ物は全部なくなっていた。残っていたのは、カップラーメンやにんじん、大根などの調理が必要なものだった。

祖母の家に着くと、「大変やったねえ。大丈夫やった？」と祖母が出てきた。家もひび割れなどもなく無事だった。祖母の家はプロパンガスで火も使えるので水さえあればカップラーメンやちょっとした料理ができる。それに比べて僕の自宅はいつ潰れてもおかしくなかった。そこで、僕たち家族全員は祖母の家に住むことにした。

その日もまた日が沈み、夜が来た。人間にとっては大きな出来事だった震災も宇宙のような大きなものにとっては微々たる物なんだなあと考えた。

1年間

それからの2週間ほどの間で一番つらかったのは、給水車から飲料用の水をもらうために1時間ほど並ぶことだった。震災の翌日から調理・飲料水用の水を自衛隊などの給水車に貰いに行った。給水車の前には長蛇の列ができていた。ボランティアの人が最後尾の1時間待ちというボードを持っていた。

そんな状態が毎日続いた。日によっては、2時間待ちも珍しくなかった。“なんでこんなことをしているんだろう。前までこんなことしなくても水があったのに。”僕はそんなことを思っていた。

すると前にいた小太りのおばさんに話しかけられた。

「大変やったねえ。お母さんとかは大丈夫やった？」「へえ、梅干のおにぎりが好きなの？」という普通の会話がとても新鮮だった。いや、あまりにもこの2、3日の間に多くのことがあり、まるで大昔にした話のようで、どこか懐かしかったのかもしれない。ほかにも、飴をくれたり水が入ったポリタンクを運ぶのを手伝ってくれたりする人もいた。小学1年生が何時間も待って、何キロもあるポリタンクを運んでいるのを見て気の毒に思ってそうしてくれたのかもしれない。でも、こっちからしてみれば、“どうしてこの人たちは知り合いでもないのに親切にしてくれるんやろか？”という不思議な気持ちになった。後から考えてみると、やっぱり困ったときほど人間って助け合ったり、他者への思いやりができるのかなあと考えた。

しだいにいわゆるライフラインというものは修理され水道・ガス・電気などは震災前のように使いたい放題になった。もう、辛い目をする必要もない。それが実感へと変わっていくにつれ安心感にひたっていった。そして、小学校も始まり日常の生活へと戻っていった。

そして、3ヵ月後になると祖母の家を離れる日が来た。震災前から一緒に住んでいた祖母は仮設住宅に。残りの家族は舞子駅近くに家を借り、そこに引っ越した。そのときの楽しみという、1か月に1回ほどのペースで祖母の仮設住宅へ子供だけで行く1泊2日のプチ旅行だった。バスで行けば15分もかからない短い距離だったが、それが妙に誇らしい気分になって楽しかった。

その後の3、4ヶ月は慌しかった。前の家の片付け、新築の家への引越し、校区が変更になったので小学校を転校するかどうか（結局、転校はしなかった）などイベントが目白押しだった。正直に言って、大変だった。しかし、それは震災の前のような生活に戻れるという喜びと安心感があり充実感に満ちていた。

10年後

先日、神戸・三宮に行く機会があった。そこには関西電力やN T Tのビルといった大きなビルが立ち並び何百人いるかも見当がつかないほどの人が目の前を行きかっていた。あの地獄絵図のように、ビルが倒れ、焼け野原になっていた神戸が、あの美しい港町“神戸”に戻るなんて…。

“戻る？”確かにニュースなどでは、「神戸は復興の道を着実に進んでいます。」と言っているが…。“復興”という言葉は国語辞典によると『壊れたり、衰えたりしたものが、元のように盛んになること。』という意味らしい。似たような言葉に“復旧”という言葉がある。こちらは、『元通りに直すこと。元通りにすること。』という意味らしい。

“何が元通りに戻っているのだろうか。”死んだ人間は、当然戻ってこない。10年間の間に引越しで多くの人が神戸から出て行ったり、入ってきたりした。つまり、どんなに神戸が復興したと言われても、住んでいる人間はまったく違う。うちの近所でも震災前に隣に住んでいた幼馴染の子は引越ししてしまい、もういない。ご近所の顔ぶれを見ても、半数近くが新顔だ。それにまちの景観もガラッと変わってしまっ

た。今では、神戸市の中で1、2の高さを誇る関西電力のビルも震災前にはなかった。他にも、古くなったり、ひびが入ったりした建物は震災をきっかけに建て直されて最新の建物になっている。これで“元に戻っている”と言えるのだろうか。今の神戸は、震災前の神戸とは、まったくの別物で、まったく新しい“神戸”である。この“神戸”は、震災で亡くなった方や昔の建物の上に築かれたものである。震災で寝たまま自分が死んだことも分からないまま死んでいった人や病院で苦しみながら必死に生きようとしながらも死んでいった人、その人たちの人生を背負っていくと言うのは言いすぎかもしれないが、自分たちは運よく生き残って、この“神戸”に住んでいる。それは偶然なのかもしれないし、どこかの哲学者が言うように“人間の運命は生まれる前から決まっている。”という必然なのかもしれない。もしかしたら、この文章を読んでいる人の中に震災の数週間前の正月や里帰りで会ったばかりの祖父や親戚をなくした人もいるかもしれない。そんな人は特に感じるのかもしれないが、亡くなった人を過去の人にしてしまい記憶から消し去ってしまうことが最も亡くなった人にとって悲しいことだと言うことを。震災の特集の度に残された人々は亡くなった人々のことを思い出す。『震災のことを覚えている。』＝『亡くなった人たちのことを思い出す。』そうすれば、残された人は辛いかもしれないが、亡くなった人々は記憶に残っているということで、うれしい(?)のではないだろうか。“震災を風化させない。”この言葉の中には、そういうことも含まれていると思う。もしかしたら、精神論かもしれないが、そういう考え方も悪くないと思う。

しかし、神戸の町を歩いていると震災の傷跡はほとんど完治している。震災のことを思い出すことのできるものなど、ほんのわずかしかなかった。神戸に住んでいる人でも震災を体験したことのない人々の割合が増えてきている。これでは、震災のことが風化してしまうのも時間の問題である。だから、震災を経験した人たちが震災を知らない人に当時のことを語り継ぐことはとても大切なことだと思う。それは、未来に受け継がれて二度と同じ過ちを繰り返さないようにしなければならない。本当は、初めての災害でも事前に予測し被害を軽減できたら、それが一番良いのかもしれない。しかし、人間は経験したことのない痛みを正確に予測できるほど賢くない。だから、“語り継ぐ”と言う行為は重要なのだと思う。

つまり、災害が起きた後に最も大事なことは、その災害から教訓を学び、二度と無駄な被害や犠牲者や知人を亡くして悲しむ人を出さないようにすることである。世界のHONDAを創った故・本田宗一郎はこのように言っている。“成功とは、99%の失敗の上に築かれる1%だ。”失敗は必ずしも良いものではない。しかし、人間は完璧を求めても、必ず失敗する生き物である。だが、そこで失敗とどう付き合っていくかが大事だと思う。失敗の中には多くの教訓が含まれており、それを拾い集めると成功を収めることができる。反対に言えば、失敗を失敗のままで放っておいては、いつまでも失敗を重ねていくということだ。過去と向き合い、過去を一生懸命理解して、そこから得た教訓を“これから”に活かしていく。これをやり遂げたときこそ“成功”への道が開かれるのだと思う。失敗を成功への足がかりにしていく。これも防災の一部だと思う。

そして、僕も震災を体験した人々も『1995年1月17日』を忘れないだろう。いや、忘れないんじゃない。忘れてちゃいけない。それだけでなく、他の震災を知らない世代に語り継いでいかなければならない。

感謝と恐怖の日々

神戸市須磨区
岡田 陽介

冷たい風が吹き止まない1月にあの悲劇は起こった。今でも鮮明に覚えているあの日である。

僕は当時、12階建てマンションの10階に住んでいた。エレベーターが点検中だと、階段で10階まで上らなければならない以外、これといった問題のない家だった。しかし、地震がおきたときの揺れは凄まじかった。

あの日の前日1月16日、僕はいつも通り過ごしていた。その日は休日だったので、昼間は普通に友達と遊び、暗くなってからいつものように家に帰り、家で家族と晩飯を食べ、次の日の学校へ行く準備をした。その後、妹と同じ部屋で9時頃に布団に入った。何もかもがいつものようにこなされ、普通に時間は経過していった。ただ、そんな岡田家にも2つほどいつもと違っていたことがあった。

1つ目は、その日父が家に帰って来られないということだった。父はバスの運転手なのだが、その日は仕事が遅く、次の日は朝がかなり早いという仕事内容だったために、その夜は会社で過ごすことになったのである。年に数回そんなことがあるのだが、父がいない夜、僕はなかなか寝付けない。

2つ目は、午後6時30分ぐらいに少し大きな地震が起こったことだった。正直言って、そのときの地震のことについては、全く覚えていない。ただ、記憶していないだけなのか。それとも、その後に起きる“ヤツ”のイメージが強すぎるのか。なぜだかはわからない。母に聞くと、それほど大きな地震ではなく、母もあまり印象に残ってないらしい。父も仕事途中でバスを走らせていたため、全く気づかなかったようだ。この後に“ヤツ”が来るなんて誰も思いもししていなかった。こんなことが起きるなんて普通誰も想像できないのである。

そして、1月17日午前5時46分。まだ、太陽も目を覚ましていないときに“ヤツ”がきた。“ドン！”という音とともに揺れ始め、“ゴゴゴゴゴゴッ！”という地響きとともに、凄まじい揺れが神戸を襲った。小学校1年だった僕でも、あの揺れの凄まじさはしっかりと覚えている。今でも、小さな地震が起きると、このまま大地震かと思うこともよくある。そのときの僕は、怖くておもいきり布団をかぶっていた。台所からは、食器が割れる音や食器棚などのドアが開いたり閉まったりする音、いすが倒れる音。また、母と父の寝室からは、母が必死で「大丈夫か？」と叫ぶ声。全てが入り混じっていて何がなんだか分かっていなかった。

やっと揺れが収まった。でも僕はまだ恐怖に怯えていた。揺れが収まるとすぐ、母が僕と妹の部屋に来、自分の体で僕たちの上に覆いかぶさってきた。それが、どれだけ安心できたか。母に感謝である。けれども、なんだか僕の腰に痛みを感じた。それは安心とは反比例に、どんどん痛みを増していった。地震が起きたときに学習机とそのイスが僕の腰の上に倒れてきたようだ。幸いなことに、イスが倒れてくる机を支えたため、完全に机は倒れなかった。僕も、腰をちょっと痛めたぐらいの軽症だった。もし完全に倒れていたら、腰を打った程度では収まらなかったかもしれない。そんな死と隣り合わせの緊迫した状況が40秒ほどの揺れで引き起こされたのである。しばらくの間、母と僕と妹の3人で、1つの布団の中で寄り添いあっていた。母の温もりを感じた。

それから数分経過して、ドアを“トントン”と叩く音がした。僕は、父が帰ってきたのか少し思った。母は、玄関までに行くのに一苦労だった。やっとの思いで玄関につき、ドアを開けた。しかし、そこには隣の家の人がいた。少し残念だったが、心配してくれた隣の家の人に感謝だ。母と隣の人がこの後どうするかを話し合っていた。そうしている間も僕は腰の痛みを耐えながら、地震の恐怖に怯えながら布団にもぐっていた。2人が話した結果、家具があまり倒れておらず、家の中がそれほどぐちゃぐちゃではなかった隣の人の家に一時待機することになった。しかし、簡単に家の外に出られるような状態ではなかった。僕の家の中はかなりぐちゃぐちゃで、家具はあちこちで倒れていたし、食器もたくさん割れていた。また、テレビはテレビ台から落ちていたし、妹が大事にしていたぬいぐるみは倒れた家具の下敷きになっていたし、家の中はもう手のつけようのない荒れ果てた状態だった。だから、家の外に出るのに一苦労だ。それから、水・ガス・電気が断続的に止まってしまった。

そんなことが起こっている間も、母と僕と妹の3人は父の帰りをまだかまだかと待ち続けていた。父は大丈夫なのか。父はいつ帰ってくるのだろうか。そんなことをずっと考えていた。隣の人の家に待機して

いる間も、僕はずっと布団の中にもぐっていた。妹やその家の子供は仲良くしゃべっていたが、僕はおしゃべりをする余裕すらなかった。母はその人と今後どうするかを話しながら父の帰りを待っていた。「早く帰ってきて！早く帰ってきて！！」そんな思いに駆られていた。

6時半ごろだっただろうか。まだ辺りは暗かった。その時である。エレベーターから1人の男が出てきた。それは父だった。母が「お父さん帰ってきたで！！」と叫んだので僕は急いで外に出ていった。外に出てみると、そこには父の姿があった。母は泣きながら父に抱きついていて、僕も父が帰ってきてホッとした。

7時過ぎになって、ようやく辺りが明るくなってきた。明るくなったため、辺りがどういう状況かが分かった。僕が住んでいた地域は、それほど被害は大きくなかった。しかし、電気が止まっているのでテレビもつかず、ラジオもなかったため、神戸がどういう状況かが全く分からなかった。というよりも、自分たちのことが精一杯で神戸のことなど考える余裕がなかったのだ。

その後、また親同士が話し合いを始め、避難所に行くことになった。外に出てみると、辺りの様子はほとんど変わっていなかった。家が倒れているわけでもなかったし、火事が起きている場所もなかった。ただ、そこにはいつものさわやかな雰囲気とは違い、何か重苦しい異様な雰囲気だった。また、今でも鮮明に記憶している風景があった。東の空で赤と黒が交じり合っていた風景である。当時は、なぜそうになっていたか分からなかったが、後に火事によるものだという事実を知って、震えがとまらなかった。その風景は二度と忘れることのないものである。

話を元に戻すが、僕たちは近くの竜が台小学校で避難所生活を送ることになった。それは、1週間以上にも及ぶ怖く、つらい生活の始まりだった。また、それは余震にも怯えながらの生活でもあった。僕たちは、体育館の壁際で腰を下ろした。周囲にはすでに人がたくさんいて、空いている場所がほとんどないぐらいだった。僕の友達もそこにいた。いつもは一緒になってはしゃいでいるが、その時はそんな気にはまっとなれなかった。また、冬の体育館はとても寒く毛布1枚では寒さをしのげないほどだった。しかし、甘えることもできず必死に耐えていたのを少し覚えている。避難所生活の1日目は何もすることができず、というよりも何もする気になれずずっと布団にもぐっていたのを覚えている。その日は、晩飯にカップラーメンを食べてすぐに寝た。でも、余震が起きるたびに目が覚めて、恐怖に怯え、震えていたため、なかなかぐっすりとは寝られなかった。

避難所生活はやはり先ほども言ったが過酷なものだった。救援物資は続々と届けられ、ボランティアの方もたくさん来て避難所運営等をしていた。おかげで、最初に比べて楽にはなったものの、依然としてストレスのたまる、また、恐怖に怯える日々だった。しかし、避難所でじっとしているわけもいかず、地震が起きた次の日から家の中の片付けなどが始まった。地震が起きてから家の中がどうなっていたか知らなかった僕は、家の中を見た瞬間呆然とした。どこから手を付けたらいいか分からないほど、家の中はぐちゃぐちゃだった。割れた食器は台所中に散乱していたし、家具はあちこちで倒れていた。また、電気やガス、水道も地震以来止まったままだった。余震がときどき起こっていたが、そのたびに僕は父か母に抱きついていて、家の片付けはそれほどはかどらず、夕方になるとまた避難所に戻る毎日だった。

避難所生活が始まってから数日してから、垂水区に住んでいたおばあちゃんと母の弟がカップラーメンや水などをもって避難所に訪ねてきた。おばあちゃんの家への被害はそれほど小さくなく、無事だったようだ。突然きたのでびっくりしたが、おばあちゃんや母の弟と少し遊んで気持ちがだいぶ楽になったような気がした。また、地震から数日経つと、避難所の中も当初に比べピンと張っていた糸が少し緩んだかのように少しずつ笑顔が戻っていた。同じ避難所にいた友達とも話したり、他の人に迷惑がかからない程度に少し遊んだりもした。ただ、夜になるとやはり不安な気持ちになったし、怖さのあまりだんだんと寝られない日が多くなってきた。地震はこんなところにまで影響を及ぼしていたのかと今思う。

また、地震以来全然していないことがあった。風呂に入ることである。僕の家は水もガスも電気も止まった状態が続いていたため、風呂に入ることができなかった。しかし、地震発生から数日経ってやっと父の会社の風呂に入ることができた。あのときに入った風呂は格別に気持ちよかったのを今でも覚えている。当時僕は風呂に入ることが好きではなかったが、その時は風呂に入ることがたまらないくらい快感だった。ただ、そんな幸せな日が長く続くわけもなく、そのあと何日かは風呂に入れない日が続いた。でも、わがままを言うわけにはいけないのでそこはグッとこらえ我慢した。また、家の中の片付けは依然として続い

ていた。最初に比べもちろんきれいにはなったが、地震前のような面影はほとんど見られなかった。地震前のような暮らしはいつになれば戻ってくるのだろうかそんなことばかり考えていた。それから、父がときどき仕事場に行くようになった。何をしに行っていたのかは知らないが、父は誰にも言わずに仕事場に行っていたので母によく注意されていたのはしっかり覚えている。

地震発生から1週間が経過し、余震もだいぶ少なくなり家もだいぶきれいになった。僕はやっと家で寝られると確信していた。しかし、事は思い通りに行かず、ガスは付くようになったが、依然として水と電気が止まったままだったので、明石の土山に住んでいた父の兄の家に3日ほど寝泊りすることになった。明石は地震の被害がそれほど大きくなかったので、僕たちが行ったときは学校も始まっていたようだ。学校が始まっていたいいなとうらやましく思いながら、昼間は勝手にゲームをして暇をつぶしていた。父の働いている会社で風呂に入って以来、久しぶりに風呂に入らせてもらった。それはまた格別だった。また、その家で久しぶりにテレビも見したが、そのときに衝撃を受けた。その画面には、傾いたビルや倒れた家屋、泣き叫んでいる人々、燃え盛る炎などが映っていた。神戸がそのときどんな風になっていたか初めて知ったし、地震が起こったときの恐怖がよみがえった気がした。というか、神戸にそんなことが起きていたなどと信じられなかった。また、避難所へ行くときに見た東の空の光景はこれらが原因だったと分かったと余計怖くなった。目に映るものが夢であってほしいと思ったが、それは現実发生过っていたことであつた。もう二度と起きてほしくないと思った。また、1週間経ったそのときでさえも、やはり夜になると怖くて寝られなかった。けれども安心できることがそんなときに訪れた。地震以来全然連絡が取れなかった淡路島に住むおじいちゃんとおばあちゃんにやっと連絡がついた。おじいちゃんもおばあちゃんもけがはなく無事だった。ただ、家は半壊状態となり、これからは仮設住宅での生活が強いられることになってしまった。

3日後、お世話になった父の兄に別れを告げ自宅に帰った。お世話になった父の兄には感謝している。家に帰るとガスだけでなく電気も復旧していた。水道はまだ断水状態が続いていた。今後のことを家族で話し合い、だいぶ家の中もきれいになっていたので自宅で生活することになった。久しぶりに自宅で過ごす夜はなんだか緊張した。翌朝、僕たちを待っていたのは、水運びという重労働だった。屋上にあるタンクが地震で破壊されたため、断水状態が続いていたというのを後で聞かされた。復旧するのに少なくとも1週間はかかると聞かされ、どん底へ落とされたような気になった。しかし、文句を言っている暇はなく、給水車が来ている近くの竜が台小学校までポリタンクを片手に何回も往復した。あまりに多すぎて覚えていないが、気が遠くなるほどの回数であったのは確かである。このとき、初めて水の大切さを知った。それと同時に、家の中の片付けも行われた。それまでに、かなりきれいにしていたので多くの時間がかかるほどでもなかったが、以前の暮らしに戻るために家族全員が協力していた。その間風呂は、父が仕事帰りに自分の仕事場の風呂に入って帰ってきたが、僕と母と妹はわざわざそこまで行くのに苦労だったので、近くに住む友達の家風呂を借りた。迷惑をかけたけど、本当に感謝している。

地震から2週間が経過して、ついに待ちに待った学校再開の日がやってきた。僕はこの日を待ちわびていた。やっと友達と会える、やっと友達と遊べる。そんな思いに駆られていた。地震以前は学校に行くのが本当にいやだったのに、このときは学校に行くのが楽しみでならなかった。登校してみると、そこには友達がたくさんいた。みんな元気そうだった。みんなつらい思いをしたと思うし、僕もつらい思いをしたけど、みんなの顔を見てなんだか吹っ飛んだような気がした。また、被害の大きかった場所から転校してきた人も何人かいた。そのときの僕は新しい友達が増えると思っていなかった。今思うとなんだか恥ずかしい気もする。しばらくの間は、4時間目までの授業だったが、休み時間は鬼ごっこをしたり、ドッチボールをしたりして思いっきり遊んだ。家に帰ってからは、近所の友達と家の前の広場で、野球をしたり、サッカーをしたりして遊んだ。また、断水状態が続いていた水道も復旧し自由に使えるようになった。水を自由に使える安堵感と水運びが終わったという開放感に浸っていた。しかし、水を大切に使わなければならないとも思った。僕たちは、徐々に地震前の生活を取り戻そうとしていた。しかし、テレビをつけると、そこにはまだ変わり果てた神戸の様子が映っていた。復旧作業をしようとしてもどこから手を付ければいいのか分からないような状況だった。また、避難所には以前多くの人がいた。僕が通っていた小学校にもまだ多くの人生活していた。僕は、テレビに映っていたこの光景を、本当に神戸なのかなという気持ちで見ていたような気がする。

地震発生から1ヶ月経ち、僕は地震のことをほとんど忘れかけていた。余震も少なくなっていくし、テレビで放映される時間も徐々に短くなっていた。また、僕たちの生活も地震前とほとんど変わらない状況だった。ただ、夜になるとときどき地震のことを思い出すことはあった。学校の体育館には、依然とし

て避難している人が少なからずではあるがいた。僕はそのことを特に気にする様子もなかった。学校は、この頃から平常どおり5時間目まで行われるようになった。以前に比べ転校してくる人も増えた。学校が終わって、家に帰るといつものように友達と遊んでいた。しかし、この頃から仮設住宅の建設が急ピッチで行われるようになり、僕たちがよく遊んでいた近くの広い公園は仮設住宅用に使われるようになった。僕は遊ぶ場所が減ることに關してとてもいやだった。いやなことは連続するもので、垂水に住んでいたおばあちゃんが突然滋賀県に引っ越すことになった。神戸に住むことが怖くなったのかどうかは分からないが、母の姉の近くで住むことになった。さびしいと思いながらも、引越しの手伝いを一生懸命した。一生懸命手伝うことで寂しさを紛らわしていたのかもしれない。でもさびしいものは、やはりさびしい。ただ、うれしいこともあった。おじいちゃんとおばあちゃんの家が再建される事になったのである。おじいちゃんは現役の大工で、会社の同僚と一緒に建て直し始めたのである。その時はまだ仮設住宅での生活だったが、早く震災前と同様の生活に戻ってほしいと思っていた。再建開始から2、3週間して、家の骨組みが完成した。それを記念する儀式が行われた。それは、建設中の家のてっぺんからもちを投げるというものだった。僕は家のてっぺんに上がって、いっぱいもちを投げた。なんだかとても気持ちよかった。

地震発生から3ヶ月が経ち、僕は小学校2年生となった。転校してきた人もまだ数名残っていた。また、僕が進級したと同時に、妹も小学校に入学した。妹の入学式は、体育館にまだ避難している人がいたので、多目的ホールという少し大きめの教室で行われた。また、僕たちはこの時期に現在住んでいる家に引っ越した。引越しする際に家具などを移動したりするが、引越し前の家の壁にはあちらこちらに少しひびがはいっていた。僕は腰が抜けそうになった。それを見て地震の力のすさまじさを感じたし、なんだか怖くなった。神戸の様子もだいぶ変化していった。つぶれた家は撤去され、徐々に新しい建物が建設され元の姿に戻ろうとしていた。ただ、町は変化しているが、被害を受けた人たちに心の中はそんなに変化していないのだと今は思う。当時の僕はそんなことを考えず、変わっていく神戸の町を素直に喜んでいただろう。建設中だったおじいちゃんの家はほぼ完成に近づいていた。「もうすぐ完成や!!」とおじいちゃんから電話がかかってきたとき、自分のことのように喜んだ。

地震発生から1年が経とうとしていたある日の音楽の授業で、2枚つづりのプリントが配られた。題名は「しあわせ運べるように」だった。そのとき僕はもう地震のことを思い出すことはほとんどなかった。しかし、その歌について先生が説明している間、震災当時のことを思い出していた。苦しかったこと、怖かったことなどが走馬灯のように頭をよぎった。地震のことを忘れていた自分に少し腹が立った。だから、その歌を歌うことだけはしっかりしようと決めた。そして、追悼行事の当日の日が来た。僕はその歌を一生懸命歌った。亡くなったかたがたの分もしっかり生きていくためにも。

あの大地震からどんどん月日は経っていった。月日が経つにつれ、避難所で生活をする人も少なくなり、神戸の町も震災前のような町に近づきつつあった。僕も当時のことを振り返ることも少なくなっていたが、唯一地震の哀悼行事が行われる1月17日は当時のことを思い出していた。また、その日の夜は、地震のことを思い出して、怖さのあまりなかなか寝られないこともあった。だが、以前に比べれば地震のことを忘れる速さが増していたことに変わりはない。また、僕を取り巻く環境も変わっていた。地震後に転校してきた友達のほとんどが、地震前に通っていた小学校に戻ったし、僕が通っていた小学校で避難所生活をする人もいなくなった。仮設住宅が建ち並んでいた公園も元の公園のような状態に戻っていった。僕の周りには、もう地震があったと思える面影が全くといっていいほどなかった。それがいいことなのか、悪いことなのかは分からない。当時の僕は、そんなことを考える様子もなく、友達が転校することに寂しさを感じ、大きな公園で思う存分遊べることに喜びを感じていたのだろう。

そして震災から10年経った今、僕は舞子高校の環境防災科に通っている。この学科は防災教育を推進する全国ではじめての学科であった。兵庫県では阪神・淡路大震災から、命の大切さ・助け合いのすばらしさなど、震災の教訓から学ぶ「新たな防災教育」を推進してきていた。それを高校の専門学科で実践しようというものであった。中学校3年の初めは、この学科に全くと言っていいほど興味がなかった。しかし、受験も近づいてきたある秋の日に、この学科の科長である諏訪先生の講演を聞いて、興味を持ち始めた。そしてこの学科を受けようと思ったのである。震災について、忘れかけていたことを再び思い出すのにいい機会だと思ったからである。この学科を受験し見事に受かった自分が今ここにいる。

この学科に入って、震災というものはどんなものだったのか、震災時に行政や各機関がどういう行動をしていたのか、災害に対してどう立ち向かっていけばいいのかなどをさまざまな視点で学んできた。そのほかにも、人と防災未来センターや野島断層に行って、自然の脅威などを肌で感じ、目に焼き付けた。

でも、僕がこの学科で一番大切だと思ったことは、「伝えることの重要性」である。「伝える」ということは、そんなに簡単なものでもないし、自分がしっかりと知識を持たなければならないのである。つい最近、インド洋周辺で、巨大な地震と津波が発生し、多くの方々がなくなられた。また、被害にあった国々は多大な影響を受けた。多くの国が多額の援助金を出し、救助チームや医療チームなどを多く派遣してきた。しかし、僕は本当にそれだけでいいのかと思う。まちが復興していく中でも、災害に強いまちづくりを実現するために、知識や技術を伝えていくべきだと思う。ただお金を送ればいいというわけではない。知識や技術を伝えていくことが本当に大事なことである。そのほかにも、後世にも僕たちが体験してきたこと、今まで学んできた知識や技術を将来に生かすために伝えるべきことはたくさんある。地域の方にもそれらを伝えていく必要もある。自分が学んできたものを自分だけのものにするのはもったいないことである。伝えていくからこそ、それらが意味のあるものとして生かされ続けるのではないと思う。

最後に、震災から10年経って思うことは、本当に感謝の連続だったのだと思う。それは、今までいろんなことを学習してきて、改めて思うことである。さまざまな人の努力がなければ、今の神戸はないといっても過言ではない。また、僕もさまざまな人のおかげで、震災から立ち直れたといっても過言ではない。地震が発生して、多くの方が亡くなられ、多くの方が怪我を負い、多くの方が家を失った。最悪なことばかりが地震によってもたらされたが、でも人と人のつながりを感じることができた。これからも、地震が起きるのは確実だが、でも僕たちにはそれを乗り越える技術や知識、そして人と人とのつながりがあると思う。それらの力をおおいに使えば乗り越えていいけるのである。これは、僕が地震を体験し、そして地震についてさまざまな視点から学んできたことから考える今の僕の思いである。

阪神・淡路大震災と環境防災科

神戸市垂水区
岡本 賢太朗

災害とはなんなのか。この環境防災科で最も初めに学習することだ。「もしあのとき神戸で地震が起きなければ。」といつも思ってしまう。起きていなければたくさんの命も奪われなかったし、家や財産、親しい人を失ったときのなんとも言えない深い悲しみや心にいつまでも残る傷はなかっただろう。しかし起こったから得たものもある。得たというよりは得させられた。しかしその得た教訓や数々の大切なことも時間がたつにつれてだんだん記憶の彼方に追いやられつつある。だから語り継ぐ必要がある。次の世代に災害のことや備えることの大切さを理解してもらい、その次の世代にも語り継いでもらわなければならない。

いつものような生活をしていつものように僕は布団に入った。そのときは地震がその後くるなんか思ってもいなかった。むしろ地震の存在すらわからなかった。「ゴーーーーーッ」と大きな音がする。映画館で爆発音を聞いているような音。その後すぐに食器棚の食器がカタカタと音をたてる。夢か現実かもわからない。ただ布団のなかでじっとしている僕。そして家全体が大きく揺れた。もうなにもわからない。下から体を何かではじいたような感じ。だが不思議と怖いと思った記憶はない。揺れがおさまってから日ごろから頼りにしていた兄の部屋に行った。兄は僕を布団の中にいれた。窓の外から大人の男の人が「大丈夫か!!」と叫んでいる声が聞こえる。それ以外のざわめきや話し声はまったく聞こえなかった。しばらくして母が帰宅し、テレビをつけた。テレビの中で街が燃えていた。ゴジラが通った後かと思ってしまうくらい悲惨な光景。レポーターが声を大きくしてしゃべっているのがわからなかった。それから大変な生活が始まった。

何よりなくて困ったのは水。これがなくては料理、トイレ、お風呂のすべてが使えない。幸い近くのファミリーレストランで水が出ていたので、荷台に乗せたポリタンクをひっぱってもらいに行った。僕と兄は途中の坂道で荷台に乗って遊んでいた。普段兄と遊ぶことなんかほとんどなかったのもとても楽しかった。しかしそのせいで荷台が壊れてしまって母に怒られた。ガスも少しの間出なかったのでカセットコンロで食事を作っていた。おやつなんかなかったので乾パンを食べていたが、ちっとも味がしなかったしずっと同じものだったからすぐに飽きてしまった。しかしこの大変な時期は長く続かなかった。すぐにガスや水道は復旧したし学校も始まった。被害はそんなになかったし友達もみんな元気だった。それから徐々に普通の生活に戻っていった。

被害が少なかったせいか震災という出来事は僕のなかで消えつつあった。友達との会話のなかに震災の出来事はほとんどでてこなかったし、でたとしても笑い話としてだった。家庭でも話題はでることがなかったし、次の地震の備えなどしてはいなかった。近所でも震災の話をしている人はいなかったしなんの関心もなかったようだ。どこか違うところでおおきな災害が起こっても、「そこに住んでいる人は大変だなあ」とまるで人事。そのことになにも感じなかったし、別にどうでもいいというかんじであった。

そして時が過ぎて中学3年、僕は高校をどこにするか悩んでいた。ある日の担任との3者面談で、担任から「こんな学科が舞子高校に去年できたらしい。」と言われてパンフレットを出してくれた。どうしてかわからないけどそのまま話が進んで舞子高校環境防災科を受験することになった。試験内容がいまいちわからなかったのとあわせて阪神・淡路大震災のことを勉強しようと思い、いろんな書類や、祖母が持っていた震災時の写真集も見た。その写真集を見て最初に思ったのが、本当にここに写っているのは日本なのであろうかということだ。建物はほとんどつぶれて、市民は外で生活している。冬の寒い夜の公園で火をたいて、その周りに人が毛布にくるまって集まっている。僕が住んでいたところではほとんど被害がなかったため、こんな光景をみることはなかった。ほかにも避難所としてつかわれている体育館やひび割れている道路、必死で瓦礫の下に埋もれた人を助けようとしている人の姿が映っている写真もあった。こんな出来事があったのに僕はそのことを忘れてしまおうとしていた。そのことがとても恥ずかしいことだと思い、少しでも多くの人に災害の恐ろしさを理解して、次に災害が起こっても被害ができるだけでないよう備えてほしいと思った。

そして一生懸命とは言えないかもしれないけど勉強をして合格した。学校へ帰って報告すると、先生はとても喜んだ。去年同じ中学から受験した生徒がみんな不合格であったからかもしれない。入学していろいろな外部講師の方が授業をしてくれた。内容はどれも阪神・淡路大震災のときの体験、そこから得た教

訓、災害への備えであった。どこの企業の人も熱心に話をしてくれた。

授業で一番思い出にのこっていることは、地震や台風はただの自然災害にすぎない。しかしそれらの自然災害が人の住む社会でおこって被害がでたならそれが災害になるということだ。当たり前のことかもしれないけど言葉にしてみると納得してしまう。「防災」と聞くとなんとなくかたいイメージがあって、難しいことのように思える。しかし学んでみるとそうではなく、難しい部分もあるけれど、身近なことから見ていくととても簡単なことなんだということがわかった。

たとえば阪神・淡路大震災がおこったときに多かったのが家具の転倒によって下敷きになったこと。このことを防ぐには家具が倒れないようにしたらいいだけだ。家の耐震補強など規模が大きくなるとそれなりのコストもかかるけれど、家具の固定などは少しのコストでできる。しかし実際やっている家庭は少ない。僕の家でもやっていない。親も固定はしたらいいこととわかっているけれどしない。どうしてか聞くと、固定に使う道具を買いに行くのが面倒だし見てくれがわるいからだという。それに納得してしまった僕は勧めることができなかった。ほかの家庭でも多分こんな感じでしないのであろう。実際に震災を体験した都市がこんな状況なのだから、違うところではもっとやっていないだろう。しかし、そういう対策を各家庭ではなくて地域で呼びかけて行うとどうだろう。多分みんな対策を行うと思う。地域全体じゃなくてもひとつの家庭が災害に備えていて、そのことを隣に隣に増やしていけばいつかは災害に強い地域に、都市に、国になると思う。ただ備えるだけじゃなくて、そのことを近所に勧めることが大事だと思う。家族より友達のほうが、影響力があるときもある。

今思えば阪神・淡路大震災のときは備えている家なんかなかったじゃないだろうか。むしろ災害という言葉も頭にはなかったのではないだろうか。災害が起こってから備えるというのは遅すぎる。ほかの地域で災害が起こったならば被害は小さくあってほしいし死者なんかでてほしくない。阪神・淡路大震災では6433人が犠牲になったが、数字だけ見ると多いなあとかんじるだけかもしれない。けどその6433の人には6433の人生があったし6433の苦しみも6433の無念に思うこともあると思う。だからもしどこかで災害が起こって死者がでてしまったとき、その人数にかわいそうとか思うんじゃないで1人1人に想う気持ちを持ってもらいたい。

外部講師の人の中には関西電力や大阪ガスなどの企業の人もいた。みなそれぞれの対策をとっている。体験でも書いたように震災のときに一番なくて困ったのが水。電気やガスがなくてもなんとか生活ができた。できて当たり前なのかもしれない。昔は電気やガスがなくても生活ができていたのだから。そう思うと今の生活は便利になりすぎているのかもしれない。階段を上る必要がないエスカレーターやエレベーター。どこにいても話のできる携帯電話。世界中の情報がわかるインターネット。これらは生きていくには必ずしも必要なものではないと思う。便利な世の中だから急にそれらがなくなるととても不便に思うのだと思う。だからといって、昔の生活に戻るべきだとは思わない。災害が起こったときにこれらのライフラインが止まってしまっても大丈夫なように最低限の備えをしておけばいい。非常用の食料は1週間分、手持ちで3日分用意する必要があるという。水も1日につき最低でも3リットル。家族が4人ならば12リットル用意しなければならない。いつおこるかわからないような災害のためになんでそこまでして水や食料を用意しておかなければならないのかという人もいると思う。もし用意したとしても3日分の食料と12リットル、ペットボトルにすると約6本を置いておくとするとなんかのスペースも必要になる。しかしこれらの備えはそこまでして揃える価値がある。阪神・淡路大震災ではこれらの用意をしている人が少なかったため、みんな水の配給を頼りにしていた。しかし水の配給がすぐにくるとは限らない。幸い僕の地域では近くのファミリーレストランで水がでていたのでみんなタンクやペットボトルを持ってもらいにきていたが、家の水道から水がでるまではかなりかかった。この大震災で水道局は水道管の脆弱さを思い知らされたためより震災に強い水道管を開発した。より頑丈にしたり曲がりくねっても大丈夫なように連結部分を曲がる材質にしたりしている。しかしこれらが次の災害で絶対に壊れない保証はどこにもない。だから備える必要があるのだと思う。

僕は災害を想定するときはネガティブに考えるようにしている。なぜなら災害に絶対安全な場所なんかないからだ。どんなにすごい耐震設計で建てられた建物でも中に落ちる物があればそれで怪我をする。いちばんいいのは自分が今いる場所に危険がないかを常に意識しながら行動することだ。例えば道を歩いているとすれば上に落ちてきそうな看板やガラスがないか、もしあるならそれを防ぐための屋根のようなものはないか、倒れてきそうな塀やブロックはないか、もしここで地震が起こったらどうするべきか、地震がおさまってから津波がこないか、もしきたとして一番近くにある一番高い建物はどれかなど様々なことを意識する。しかし日常生活の中でこんなにたくさんのことを意識しながら生活するのは無理だし面倒だ

と思う。ならどうするべきか。いろいろな方法があるけれどとりあえず知識だけはもっておいていざ災害が起きたときにこれらのことを意識して実行すればいい。言葉にするととても簡単なように思えるけれどこれはとても難しいことだ。実際10年前の地震の時でもみんなパニックが起きたしちゃんとした対応ができた人は数える人しかいなかったと思う。

どうすればパニックを起こさずに的確な判断をして行動できるのであろうか？これまでにいろんなそのようなことを特集しているテレビを見てきたけれど全部ぱっとしなかった。中でもいちばん多く言っていたのが防災訓練をすることが重要だということだ。これはもっともだけれど、実際の防災訓練ははっきり言って身につけていないと思う。小学校のときから何回も何回もやってきたけれどみんなでふざけてやっていたのを覚えている。これで本当に効果があるのだろうか。多分実際大きな地震が発生すると机の下にもぐることくらいはできると思う。けどそのあとの並んで話さずに落ち着いて歩いてグランドにすることは難しいと思う。高校生にもなればこれらのことをこなせるかもしれないけど小学生はかなり難しいだろう。そう思うともっと小さいときからこういうような防災訓練を大切にしていればよかったなと思う。何度やっても集合したあとで校長先生から怒られる。怒られて悪かったところを反省して次に活かすかというそうではない。今でもそうだけれど小さいとき特には興味があることには真剣に取り組むけれど興味がないことには全くやる気がおきない。防災に興味がある小学生なんかいるのか？普通の勉強も嫌いなのに「防災」なんか好きになるわけもない。けど1回だけ興味を持って防災訓練に真剣に取り組んだことがある。それは神戸の震災があってから最初の訓練だった。あまり話すこともなくみんな真剣だった。訓練中はあの瞬間のことを思い出して言葉に言い表しにくい複雑な気持ちだった。環境防災科に入ってからあの瞬間のことをとても難しい数式で表していたけど、数字では表しきれないなにかがあった。体の奥から震えて揺れるような感じ。体が跳ね上げられるような感触は今でも忘れることはできない。あれからは少しの揺れでもとても恐くなってしまう。小さいときの記憶の中でもあの時のことは今になってもはっきり覚えている。こんな小さい子供でもこんなに覚えているのに大人なんかどれくらい覚えていて、どれくらい恐い思いをしたのだろうか。それとも子供だから覚えているのだろうか。どっちにしても記憶は薄れても一度あんな体験したら忘れることはないだろう。これを伝えるか伝えないかは人それぞれだが。

阪神・淡路大震災がおこってから長田では大規模な火災がおきた。授業のひとつで長田のまち歩きがあったがそのときにある商店街の人に当時の様子を聞いた。今はあまりにぎわってなくて店の数も少ない商店街だが昔はそれなりの商店街であったという。そして震災がおき、大規模な火災でアーチだけが残ったらしい。そのあとに店を再開する店も少なく今のような状態になったという。長田での火災の様子は震災後初めてテレビが映ったときに見た。どこまでも上っていく黒い煙と燃えている地面。まるで戦争映画の一場面のようにであった。そしてまち歩きでは次のようなことも聞いた。「電気が止まっていたがいつまでたっても工事をしにこないで関西電力に何日も通って工事を頼んだが結局きてくれなかった。そこで知り合いの自分より力がある人にそのことを言うと頼んでくれたのか、次の日には工事にきてくれた」という。これは企業が悪いというわけではないが多少の企業と民間に溝があるような気がした。震災直後の消防や自衛隊の救助はとても遅く、瓦礫の下に埋もれた人の大部分は近所の人に助けられたらしい。消防は道がひび割れていたり家が倒壊して道をふさいでいたりして遅れて、自衛隊は派遣までにいろいろなところを通さないといけならしく遅れたという。警察官も救助にむかったがあちこちで助けを求められたので一番被害が大きなところまでいくのにとっても時間がかかった。人の命はみんな平等なので優先順位はつけられないがもっと災害時の連絡網を整備すればもっと早く現場に行けたかもしれないと消防局の人も自衛隊の人も言っていた。しかしこのことは震災が起る前から気付かなかったのだろうか。

震災直後に一番救助活動をしたのは市民だったが、専用器具がなかったため簡単な救助しかできなかった。そのため各地域に防災資機材の倉庫が設置された。なかには斧やジャッキなど救助に必要なものが入っている。しかし使い方がわからなければ意味がないので防災訓練などで使い方の講習をしている。震災のときに火事を消すために消火器を使用したのだが、使い方がわからない人はそのまま火の中に投げ込んだという。消火器が設置されているところの多くには近くに使い方の書いている説明書も設置されている。うちのすぐ近くにもあるので読んでみるとイラスト付きでとてもわかりやすく書かれていた。ここまで詳しく書いているのにどうして使い方がわからいのだろうかと疑問に思ったが、それだけ人は説明書を読む余裕もないくらい緊急時にはパニックになってしまうのだろう。消防学校に体験入校したときに消火器をつかって火を消す訓練をしたが火のそばはとても熱くて近くによるのはちょっと勇気がいる。消火剤をだすためのレバーも意外とかたくて意外に力が必要だった。やはり説明書を読むだけより実際に使ってみたほうが記憶に残る。そういった意味では防災訓練は必要な行事であると思う。環境防災科にはいつ

からいろいろな防災訓練に参加した。学校はもちろん地域で行われる防災訓練や兵庫県の大きな規模の防災訓練にも参加した。そこで印象に残ったのは地域のコミュニティの人たちはみんな熱心に取り組んでいるということだ。もし災害がまたおこったなら一番救助に貢献するのはこういったコミュニティの人たちかもしれない。人は協力するととても大きなことができる。このことも阪神・淡路大震災から教わったことだ。

阪神・淡路大震災からはほんとうに多く教訓を得た。備えることの大切さ、地域との関わりの重要性、防災訓練の重要性など。このことは次の世代にもその次の世代にも伝えなければならない。そのために舞子高校が行っているのが震災メモリアルだ。この行事では自衛隊などの様々な機関の協力を得て震災を記憶からなくさないようにし、もう一度考え直すような内容になっている。舞子高校だけでなく、人と未来防災センターもこういう理由で設立された。

舞子高校の取り組みはほかにもネパールとの交流もある。僕はいろいろな人の協力を得てこれに参加することができた。この交流の目的は日本の防災を伝えること、ネパールの学生の意見を聞く、ネパールの都市の脆弱さを知るなど様々である。ネパールの都市は家が密集していて道は迷いそうになるくらい入り組んでいる。こんなところで大きな地震がおこれば建物は次々に壊れて、道は途絶えてしまうだろう。しかし住人は補強などの対策はあまりしない。日本と同じように地震はこないものと考えているのかもしれない。他の理由としてネパールは識字率が低い。そのため文章にして補強の方法を伝えることは難しいのだ。だからネパールでは石工を集めて実際に補強の方法を見せて教えている。教えられた人は自分の住んでいる地域に戻って他の石工に教える。こうして対策が広がるのだが、自分の家は自分で建てる人もいたので完全に広がるまでにはまだまだ時間がかかるだろう。学校もみてまわったが見た学校は補強されていた。鉄筋が入っているところには色をつけて外からでも見てとれるようになったいた。このネパール訪問を通して思ったことは、自然災害は世界中でおこるものだしどこでも被害はふせがなければならないということだ。「防災」というのは全世界共通のことなんだと思った。

絶対忘れない

神戸市須磨区
小野 綾子

1、 恐怖の朝

1995年、1月17日午前5時46分、神戸のまちは一瞬にして消えた。

“地震”なんて言葉は私の頭になかった。あの日の朝、一体何が起こったのかも分からなくてただ怖くて泣き叫ぶことしか私には出来なかった。

「綾子、起きなさい！」と言うお母さんの叫ぶ声で私は目を覚ました。その瞬間、お母さんが私に覆いかぶさってきたので一体何が起こったのか全く分からなかった。覆いかぶさる体の間から見た光景は今まで見たことがなかった。部屋が箱に入れたビー玉のように暴れまわっていた。私は怖くなってギュッと目を閉じたが、聞こえてくる食器が割れる音や家族の悲鳴に、恐怖に達して私には泣くことしか出来なかった。

ほんの20～30秒の出来事だったが私には何10分、何時間かのように思えた。何にも考えることが出来なかった。揺れがおさまってすぐに「ここは危ない、逃げるぞ！」とお父さんの声が聞こえてきた。この時私は初めて大変なことが起きたのだと分かった。でも恐怖のせい、揺れは止まったはずなのに自分の体はまだ揺れている。足がカタカタと震えてなかなか思うように動けなかった。部屋を見渡すと昨日までの自分の家ではなくなっていた。昨日そこあったはずの冷蔵庫が・・・あんなにいっぱいあったはずの食器が・・・何もかも無残に全部割れて破片の絨毯のようになっていた。部屋は薄暗くてよく見えない。それに涙がポロポロと落ちて前がよく見えなかった。父に「大事なものは持ってでろ！」と言われて私は自分の部屋に行った。ぐしゃぐしゃだった。大事なものを仕舞っていた引き出しも、昨日整理整頓したはずの机の上も、何もかもが散乱してしまっていたので床に転がっていたぬいぐるみだけを持って出た。

お父さんは転倒した冷蔵庫の中から食べものを袋につめ、お母さんは必死に靴下を探していた。咄嗟にスリッパは見つからなく、ガラスの破片と割れた食器の上を歩く私たち家族はまさに悲惨な光景だった。薄暗い部屋の中でこんなに怖いと思ったことは生まれて初めてだった。急いで逃げなくてはいけないと分かっていたが私は2つ隣に住むのぶ君の家のドアを叩いた。のぶ君は私の兄の幼馴染の1人で私が生まれたときから面倒をみてくれ、毎日遊んでくれた第2のお兄ちゃんのような存在だった。のぶ君のお母さんは前日から旅行にでていて震災当日の朝、家にはのぶ君しかいないことは分かっていた。お父さんが「大丈夫かー？」とドア越しに叫んでも返事はない。私は怖くなって兄と一緒に名前を呼んだ。もしかしたら・・・と最悪の状況が頭によぎる。ドアを引いてみるとそこには泣きながらお父さんの骨を骨壺に拾うのぶ君の姿があった。私は思わず息を飲み込んだ。私が3歳くらいのときにのぶ君のお父さんは病気で亡くなってしまったことを思い出した。一緒に逃げようと言っても首を振って懐中電灯でひたすら床を照らし、飛び散ってしまった骨を泣く泣く拾うのぶ君の姿に、私はどうすることも出来なかった・・・。

私の家族は車で逃げた。お父さんもどこに逃げたらいいのか分からなく、取りあえず車を走らせた。しかしラジオからは「津波の恐れがあるので海岸付近には逃げないで下さい」と何回も繰り返し放送されていたのを聴いて山に逃げることに決めた。行く途中のすべての公衆電話には長蛇の列ができていた。どの家の電話系統も全て寸断されていたので連絡はとれないと分かっているながらも奇跡を祈ってひたすら10円玉を入れる人であふれていた。ほとんどの道路には亀裂が入っていて、所々道路が隆起してでこぼこになっていた。私たち家族はひよどりに近い山の付近まで逃げた。この山の裏は長田の町であったこととは知らずに・・・。車から降りると、真冬の1月の寒さなのになんだか夏のように暑い。はっと空を見上げるとそこは真っ黒に立ち上げる煙の層のようになっていて空からは白いたくさんの灰が降ってきた。山の間から見たものは想像を絶するもので“焼け野原”としか言いようがなかった。この時初めて神戸に何かが起こったのだと確信した・・・。

2、ショック状態

家に戻ろうと車を走らせたのだが、私は気持ち悪くて何回も何回も吐いた。初めてみたすさまじい光景にショックで体に異変が起こっていたのだろうか。何も口に出来なくてただただ嘔吐を繰り返していた。家に戻るとやはり夢ではなく家の中はぐちゃぐちゃだった。お父さんがドアを開けるのをためらった理由がよく分かった。テレビをつけてみるとザーッと消えたりついたりする中で神戸の町がそこには映ってい

た。さっきみた光景も凄かったが、テレビで見る神戸のまちは変わり果てていた。あの倒れるなんて考えてもいなかった阪神高速道路が横倒しになっていて途切れた所にはバスが半分落ちかけている映像がでていた。私はかなり疲れきっていてもう何を見ても言葉に出来なかった・・・。

お母さんは割れた食器を1枚、また1枚と暗い顔で片付けていた。割れた数は山ほど、いや、TENCO盛りといったほうが近いかもしれない。お母さんは食器を集めたりするのが好きだったから余計に辛そうだった。実はこの1月17日、お兄ちゃんはスキーキャンプに行く日だった。もちろんスキーキャンプは中止になったが、今思ったら地震が起こったのが17日で良かったのかもしれない。もし16日から行っていたら家族1人だけ安否確認も取れず、生きているのかさえ分からなかったのかもしれないのだ。いろんな偶然が重なって身内にケガ人もいなくてみんな無事だった。たまたま電話がつながって確認したら、伊丹に住むおじいちゃんも、大阪に住むいとこも大丈夫だった。

昼前くらいからうちの前にある小学校に突如、給水車がきた。なんの情報もなく突然の出来事に、周辺の人達がタンクをもってぞろぞろと集まる人だかりがベランダから見えた。私も行こうと思ってタンクを持ってしようとしたが「危ないから家にいなさい、水くみはお母さん達に任せていいから」と言って即刻止められた。それから私以外の3人は長蛇の列に並び、水がもらえるのをただひたすら待ち続けた。私は家に戻ってただ呆然とテレビを見ていた。どのチャンネルを回しても地震の中継ばかりだった。燃え広がる長田のまち、横倒しになった阪神高速、潰れた駅や無数の建物・・・初めて地震を経験した私にとってあまりにショックが大きかった。お母さんたちはいつまで経っても水くみから帰ってこない。家にひとりでいる時間がすごく長く思えた。もし今地震がまた来たらどうしよう・・・とか、このままずっとひとりだったらどうしよう・・・と不安ばかりが募っていた。玄関にでてみんなの帰りを待ってみたがそうすぐには帰ってこない。そんなこと分かっていたけれど、私は片付けることを忘れたように玄関に座り込んでひたすら3人の帰りを待った。

3時間くらい経ってようやく帰ってきた。私はすごく嬉しかった。お母さんもお父さんもお兄ちゃんも疲れた面持ちで座りこんでいた。しかし家族4人でいられることってこんなに嬉しいと思ったのは初めてだった。本当に家族4人が無事で誰1人ケガもないことの奇跡に、私は神様に感謝するしかなかった。

3、夜の恐怖

夜になって、急に隣近所がバタバタし始めた。それは小学校の体育館に避難している人がほとんどだった。後から聞いた話、私の団地で唯一避難していなかったのはうちだけだったそうだ。お父さんが「次、地震がきたら体育館に避難したとしてもうちが倒れてどっちも潰れる。それなら家族4人、住みなれたこの家で暖かい布団の中で死んだほうがマシだ。」と言った。私もお母さんもお兄ちゃんも納得した。ひとつのコタツを4人で囲み、テレビをみながら食事をとった。テレビから流れてくるのは死亡確認が取れた人たちの名前の一覧だった。次々にでてくる名前に私は無意識のうちに涙がでて止まらなくなっていた。身内の名前や知り合い、友達の名前がそこに載っているわけでもないのに無性に悲しくてただ頬に涙が冷たく濡れていった。他人の死を自分のことのように感じていた私の姿に家族みんなも涙を流していた・・・。

この日の夜は本当に長かった。布団に入っても寝付けなくて目を閉じると朝にみた光景が浮かんでくる。また地震が来たらどうしよう・・・と不安な気持ちを持ちながら私はいつの間にか眠りについていた。明け方近くだろうか・・・地震がまた発生した。今朝のような大地震ではなかったが小さな地震が頻繁に起こっていて、そのたびに私は飛び起きていた。大型トラックが通り過ぎ去る音でさえ、目を覚ましていたくらい地震に敏感になっていた。余震は数え切れないくらい体を感じた。

その後はやはりみんな寝付けなくてテレビをじっと見ていた。まだ長田のまちは燃えていた。と言うより火の手が増していたように思えた。赤く燃え広がる被災地神戸の悲惨さが痛感した。気づくとお父さんは「仕事みにいってくる」と言って家をでた。こんな時になんで仕事にいってしまうんだろう・・・と寂しさを覚えた。「こんな大惨事の時から家にいてくれたっていいやんか・・・」と心の中でつぶやいていた。

4、お父さんの仕事場

次の日からお父さんは仕事に向かった。もともとお父さんは建築関係の仕事でトラックに乗ったり、設計などで地震前から大変な仕事だった。地震が発生したことによってまちの建物は全壊に近く、神戸のまちから建物が一瞬にしてガレキの山と化したとしかいいようがなかったとお父さんは話した。「長田の

まちは焼け焦げた炭のようで、東灘はガレキしかなかった・・・」事後処理しかできないお父さんは悔しそうにしていた。

私はこんな悔しそうなお父さんを見るのは初めてだった。いつになく下を向いて仕事にやる気の出ないお父さんの姿は私には考えられなかった。いつもなら元気よく仕事に出かけるはずのお父さんのいつもの光景とは全く違っていた。この日を境にお父さんはいつもより朝早くから仕事に出かけるようになった。すごく寂しかった。毎日同じ食卓を囲んでいたはずなのに3人で朝食をとるのは本当にはじめてだった。きっとお父さんも寂しいだろうから帰ってきたら私はいつもお父さんに飛びついて帰りを出迎えた。私はよくお父さんの仕事場へ休みがあれば一緒についていくようになった。その理由は今でも分からない。でも何でか一緒に行ってみたかったのだ。お父さんのダンプの助手席に座ってただ1日中神戸の町を眺めていた。神戸の町はテレビの画面で見えるものとは全く違っていた。地震がきたらこんなになってしまうんだ・・・とただあっけにとられていたことを覚えている。神戸の町は壊滅していた。あたりからは火事で焼けた家屋が一面に広がり、もう何日もたっているのにまだ煙があがっているところもある。ガレキの特有の匂いが鼻につく。「どうしてこんなことになってしまったの・・・？」と涙を流したこともあった。

何よりも覚えているのが、ある全壊した家屋のガレキをダンプに積んでいるとき、私は窓からその全壊した家屋のガレキの中からあるものをみつけた。それはたくさんのアルバムだった。よく見えなかったがぎっしりと写真が詰まっていたそれが何十冊と埋まっていた。私はこの時涙が溢れて止まらなかった。お父さんも隣で悔しそうに唇をかんでいた。「大事な家族のものを俺の手で本当に片付けてしまっているのだろうか・・・」とお父さんは疲れきった様子で私に話しかけた。私は何て言っているのか言葉が見つからなかった。でも、この地震で奪ったものは計り知れないんだと改めて実感した瞬間だった。家族の命、財産、それから思い出・・・住み慣れた家・・・何もかもを奪った地震のことを憎く思った。もし、私がこの家に住んでいて撤去されるとなったら私は冷静でいられるのだろうか、嫌だといって泣き崩れていたかもしれない。初めて人の痛みを自分のことのように感じた。そんな人たちが神戸には溢れているんだと思うとすごく胸が痛んだ。

5、学校

震災が起きて2週間くらい経ってからだろうか、ようやく学校が始まった。教室に入ってなによりも嬉しかったのが友達に会えたことだった。大丈夫やった？と確認しあうみんなの姿は本当に嬉しそうだった。幸いにも、私の小学校では犠牲となった生徒は誰もいなくて、けが人くらいですんだ。テレビのいろんな報道ではクラスの半分の生徒が犠牲になってしまった学校もある。教室に花束が添えられる、そんなテレビ画面は悲惨と言うほかになかった。

そんなある日、1人の女の子が私のクラスにやってきた。その子は兵庫区で被災し、家が半壊し、学校も避難所となってしまったため、私の地区に疎開してきたようだった。それに、今暮らしている家は私と同じ団地で5階下に住むことになっていた。私はすぐに声をかけにいて友達になった。美加ちゃんというこの女の子は地震のせいか、やはり元気がなかった。地震の時の話を聞きたかったけどなかなか聞き出すことが出来なかった。被災した場所も違うし、被災した程度も違うのは分かっていた。だからストレートに聞くことが出来なかった。私から話すときは必ず楽しい事やおもしろい話を進んで話していた。

ある日、美加ちゃんは私にこんなことを尋ねてきた。「綾子ちゃんは地震で大丈夫だったの・・・？話、聞いてくれないかな・・・」と私に話しかけて来てくれたのだった。私はこの時、自分自身から声をかけていくべきだったかな・・・と頭をよぎった。でも私はどうやら間違っただけではなかったようだ。美加ちゃんが話しているなかで、「こっちにきたとき、正直みんなに地震のことを聞かれるのが辛かった・・・。花谷小学校のみんなは元気だし、被災もあまりしてないようすごく羨ましかった・・・」といい、「綾子ちゃんだけが私の地震のことを聞かなかった。すごい私のことを考えてくれているんだ・・・ってすごく嬉しかった。」と話してくれた。私は嬉しかったというより、美加ちゃんがどんなに辛い体験をして、ここにきてからも大変な思いをしていたんだなあと痛感した。それから2時間くらいだろうか、美加ちゃんはずっと私に震災当時のことを延々と話してくれた。この時わかったことが2つあった。1つ目に被災の温度差があるということ。2つ目に本当に大変なのがこれからだということだった。神戸でもいろんな地域があってそれぞれ違った被災をしている。私の住んでいる須磨区でも山側と海側では全く被災状況が異なっている。この被災地における温度差は埋めることはできるのだろうかと思った。それにこれからが本当に大変なんだと言うことが、始めは分からなかった。でもよくよく後から考えるとこれから復興は始まっていくけれど、この壊滅した神戸の町は何年かかって元に戻るのだろうか、心に出来た深い傷は癒えることができるのだろうかといろんなことが考えられた。これからが大変なんだということを小学校1年生の同じ子供に教えられるとは思ってもいなかった。それから数ヶ月が経って美加ちゃんの住む兵庫区も

学校が再開し、仮設住宅が建ったため、元の兵庫区に帰ることになった。すごく寂しかったけど、私は嬉しかった。美加ちゃんとの出会いは私を大きく成長させてくれたように思う。これから私も美加ちゃんもそれぞれ違う場所で、違う歩調で歩いていくのだなぁとつくづく感じた。「これから何年経っても友達でいようね」と約束を交わして別れを告げた・・・。

6、それから・・・

阪神・淡路大震災が発生してから長い年月が経ち、私は中学3年生になった。地震のことは頭の片隅にあっても記憶が蘇ることはなかった。中学3年生と言えば高校受験が迫っていた。私はバレーボール部を引退し、自分の進路に向けて新たなスタートを切る所で立ち止まっていた。「どうしよう」と思い悩む日々が続いたそんなある日、私はあるテレビをみた。それは舞子高校の環境防災科の先輩が報道されているテレビだった。私は目が釘付けになった。この学科は阪神・淡路大震災の教訓を生かした、全国初の防災学科だということを始めて知った。私はこの時、「この学科だ!!」とひらめいたように決意した。今まで消えかけていた震災の記憶が再び私の中で動き始めた。震災7年目のことだった。この7年間、自分の中で震災のことを消し去ろうとしていた自分がいたのかもしれない。もうあんな恐怖は二度と経験したくないと思っていたから余計に自分の中で震災は風化していたのだ。しかし、この特番をみて、私はこれではいけないんだと気がついた。阪神・淡路大震災を経験した私たちは生きている最後の証人なんだということ。震災での教訓を未来に発信することが私たち被災した子供たちの使命なのだと感じさせられたのだ。

私はこの日を境に、地震について調べるようになった。自分の記憶はもちろん、阪神・淡路大震災の記録を見たり、図書館にいったら震災の資料をみたり、この7年間の空白となっていた部分を補うことが私には必要だと思って私はいろんな所に足を運んで震災について調べるようになった。そしていよいよ試験日がきて私は自分の思いを全て話し倒した。それから、私が環境防災科にはいったら私自身の手で環境防災科を広めたいということを宣言して・・・。私は合格して、晴れて舞子高校の環境防災科二期生となった。私は合格発表で自分の番号があったことを本当に嬉しく思った。けど、私はこの学科でやるべきことはたくさんあるのだと改めて決心でき、目標をもって私は桜の舞う4月に、舞子高校に晴れて入学をした。

7、環境防災科

私は環境防災科にはいって大きく変わったように思う。地震発生メカニズムを学び、いろんな視点から話をきき、そして校外学習に出かけて実践で学んできた。多くの外部講師の先生に来ていただいて震災当時のことを話していただき、様々な分野の授業から環境問題や温暖化などにも目をむけてきた。情報学習では南海地震のシミュレーションを行ったり、英語で防災を学ぶこともしてきた。そして今では、自分からいろんなシンポジウムや行事自主的に行事に参加するようになった。今春には国会議員の方々と環境についてのシンポジウムに参加させていただき、大変貴重な経験をさせてもらえた。防災という切り口から様々な視点について考えることで、今思えば、阪神・淡路大震災は確かに多くのものを私たちから奪い去っていったが、しかし、私たちはこの震災で学んだこともあったのではないかなと思う。人との助け合い、協力する事の大切さ、それから希望をもって生きること・・・たくさんのことを私は震災を学んだように思う。震災以前は隣近所のつきあいなんてそうそうなかった。しかしこの地震で多くの人が地域住民に助けられた。災害の時だからではなく、普段から協力し合う仲を作っていけないといけないのだと改めて考えさせられた。何より震災は私たちに忘れていた大事な何かを取り戻させてくれたのではないかなと思う。

6000人以上の犠牲者をだした大震災だったが、私たちはこの犠牲となった人の分まで生き抜くことを任された。人はいつまでも倒れたままではいけない、何かをつかんで必ず立ち上がる、と私は思う。震災から長い年月が経ち、神戸の町は元通りになっている。町並みや人の流れに私たちは震災のことを除々に忘れ去ってしまっている。でも、それではいけない。私たちの体験を未来に、全国に、世界に発信しなければいけない。それが私たちに課された使命なのだと思う。

私は初めて阪神・淡路大震災の追悼式典のボランティアに参加した。10年目でやっと被災地神戸の一員のように思えた。しかし、10年ともあって毎年テレビでみていたものとは違い、空気も違っていったような気がする。神戸の町は10年かけて復興したんだなぁと歳月を感じた。

しかし、これから先もずっと変わらないことがある。それは震災がおきたということ、大切な人やものを亡くした傷みはこの先もずっと変わらない。しかし、この傷みをずっと痛いままにするのではなく、自分なりに、自分の歩調で立ち上がっていけばいいと思う。無理に立ち上がろうなんてしなくていい。自分の思うように立ち上がっていけばそれでいいと思う。その手助けは私たちにもできるのではないだろうか。

心の扉を自分で開けられない人だっているし、自力で立ち上がれる人も、人がいるだけ方法はあると思う。その鍵になってあげられるような存在になることはできると思う。話を聞くだけでもいい。何か手伝うことでもいい。その人と同じ立場になって行動を起こしていけば何かがかかわると私は信じている。将来は兵庫県の職員になって防災・環境関係の仕事に携わろうと思っている。この3年間で学んできたことを私は生涯学び続けたい。私は誰かの太陽のような存在になりたい。みんなを元気付けてくれる、そっと背中を押してあげられるような、そんな人になっていきたい。この3年間を見つめなおすと、私は阪神・淡路大震災からたくさんのことを学んだように思う。そんな学科で学べたことを誇りに思う。これから地震を知らない子供たちが増えてくる。そんな子供たちに私たちは震災の経験を、教訓を発信していかななくてはならない。それが私たちに与えられた最大の課題ではないだろうか。

今年で阪神・淡路大震災から10年という節目を迎えた。しかし、それは単なる通過点であること。これからも阪神・淡路大震災は語り継がれていかなければならない。この先10年、20年先これからもずっと、私はこの気持ちを変えさせないでいたい。

しあわせ運べるように

神戸市垂水区
兼田 奈津子

1. 兵庫県南部地震 阪神・淡路大震災が起きて

あの日、母の叫び声で目が覚めた。発生当時、私は母と同じ部屋で寝ていた。私はベッド、その横に布団で母というように。母は地震が発生したことに気づいて、すぐに起きたらしい。しかし私は、あのすさまじい揺れにもかかわらず寝ていた。相当深い眠りについていたのだろう。母の叫び声が「きゃ〜っ」だったか「わぁ〜っ」だったか定かではないが、「なっちゃん！」と名前を呼ばれたことだけははっきりと覚えている。長い揺れの間、母は横に寝ている私をかばおうと布団から起き上がったんだと思う。だが、あの揺れでは自分の意思で動けるわけがなく、寝相が悪かった私がベッドから落ちないようにと取り付けられた手すりの隙間から手を伸ばすしかなかった。母は今までに見たことがないぐらい必死だった。発生した瞬間の記憶にあるのは、目が覚めると母が叫んでいたこと、怖がりだった私が毎日つけっぱなしで寝ていた豆電球はまだついていて、その電球に照らされた母のオレンジがかった顔が揺れに揺れていたこと、電気につけられていた長い紐が飛び回っていたことだ。

地震が収まると、電気は消えていたが、父が部屋にやってきた。そして居間でかたまって寝ておくことになった。居間にはこたつが置いてあったが、それは端に寄せて布団を敷いていた。私は父と母の間で川の字になって再び眠りにつきそうだった。だが、地震には余震というものがつきものであり、落ち着く間もなく立て続けに余震が襲ってきた。親に「もうしばらくは揺れたりするかも」と説明された。今では震度2や3でも心臓がドキドキし、冷や汗が出てくるが、そのときはしばらくするとその揺れにも慣れてしまった。

太陽の光で家の中が見渡せるほど明るくなると、家の中の様子ががらりと変わり果てていた。台所では食器棚に入っていたガラス製の食器が割れて散乱していた。廊下では母と祖母が好きで花を生けていた花瓶がことごとく粉々になっていた。特にその2つの場所では足の踏み場がないほどガラスまみれになっていた。「食器や花瓶が割れたぐらいか」と思う人もいるかもしれない。だが、これは実際に体験してみないとわかってもらえないことだと思う。

2. ライフライン

地震が発生して、電気・水道・ガスのライフラインは止まった。電話は地震が発生して少しの間は普通に通じており、親戚の家や幼馴染のところから電話がかかってきた。だが、少し時間が経つともう回線がパンクして使えなかった。必要になると、10分ぐらい歩いて公衆電話を使った。今は携帯電話が普及し、公衆電話が撤去されていって少なくなっている。私も携帯電話を使う人のひとりだが、こういう非常の場合なら携帯電話はあまり使えないだろうし、公衆電話も必要なのではないかと思う。

私の家のあたりでは電気だけは2時間ぐらい経つとすぐに回復した。それを確認すると、親はテレビをつけた。時間は8時すぎではないかと思う。親は真剣な面持ちでニュースを見ていた。当時の私には地震というものが何なのか自体も理解できていなかったし、ニュースを見ていても余震、震度、マグニチュード、津波といったような難しい言葉ばかりで本当につまらなかった。時間が8時すぎだったはずだというのは、親がニュースを見終わったころには、私が幼稚園のころ見ていた「にこにこぶん」という番組が放送されていたからである。電気がすぐに回復したのは本当に運がよかったとしかいいようがない。私の家にはホットプレートやお鍋の下に敷いて使える移動式の電磁調理器があり、それが使えることで加熱調理には問題なかった。

電気はすぐ回復したが、水はそういうわけにはいかなかった。水がなければ人は生きられない。飲料用の水はもちろん、トイレを流す水だって必要なのだ。私の家では地震が起きる前、環境問題が騒がれる前から、お風呂の残り湯を洗濯に使う習慣があった。そのため、残り湯を少しずつトイレのタンクに移し、上手に使っていった。いつまでそれで乗り切ったかは覚えていないが、あの残り湯がなかったらトイレを流すのにも相当苦労しただろうし、助かった。

トイレは残り湯で済ませられたが、飲料水はそれで使えるはずがなかった。非常用の簡易食料と一緒にペットボトルの水を用意していたが、その数も限られていた。結局は水の出るところを探し回ることとなり、六甲の方やどこかの湧き水も汲みに行き使っていたと思う。毎日毎日探しに行くのも無理な話であ

り、集会所や小学校に来てくれた給水車までペットボトルを抱えてもらいにいった。私の家から小学校は今では徒歩10分ちょっとであるが、当時ならおそらく倍はかかっていただろう。その時間に水の重さがプラスされる。しんどいことではあったが、小学1年生なりに親の手伝いをしようと頑張っていたのだ。地震から2週間後ぐらい経って水道は回復したが、すぐに「蛇口をひねれば水が出る」といった状態にはならなかった。給水制限されていたのだ。母はその時間にあわせて一斉に蛇口を捻って、バケツやペットボトルなどのいろいろなものに水を汲んで貯めていた。

最後まで回復しなかったのがガスだ。ガスがないと普通に調理もできないし、好きなときにお風呂にも入れない。ガスが回復するのをみんな待ち望んでいたはずだ。回復するまでのお風呂は、学園都市（西区）の友達のところや鈴蘭台（北区）の母の知り合いのところで入れてもらったり、銭湯へ行ったりした。食べ物については家にあるものを消費していき、なんとか生きていたのだが、電気の暖房器具だけでは全くといっていいほど部屋が暖まらず、ガスの威力と重要さを知った。ガスが回復した時のこと、家のお風呂に久しぶりに入れたときのことが、小学1年生のころに日記のようにして学校でつけていたものに書かれていた。

～2月10日（金曜日）～

きのう、やっと、ガスが、できました。25日ぶりに、いえの、おふろに入りました。やっぱり、いえのおふろは、ゆっくりできてきもちよかったです。

ということは、2月9日に私の家のガスが回復したということになる。ご飯も普通に炊けるようになったし、料理も普通にできる。この日は家族の誰もが家のお風呂に入れ、「ゆっくりできて気持ちよかった」と感じたと思う。さらにガスの暖房器具が使えるようになり、冷え切っていた体と、そして心も暖かくなったのではないかなと思う。

3. 学校生活

学校は地震の日から休校となった。小学校に水をもらいに行った時に、体育館には避難している人もいると聞いたこともあったし、小学校の被害がはっきりどうなっているかはわかっていなかった。連絡がどう来たのかもわからないが、1月30日、再び学校が始まった。親戚の家へ行ったりした子もいたが、久しぶりにみんなに会え、話がはずんだ。当分は私の大好きな給食はなかった。

給食が再開されたのは3月2日だと思う。これもまた「あのね帳」だ。給食のメニューはパン、はちみつ、アーモンドチーズ、はっさくだった。その日は、おかずはなく、牛乳もなかったのだと思う。本格的に再開されてからも牛乳はびんのものからパックのものに変わり、仮再開のころはいつもよりずいぶん少なく感じた給食だったが、とても満足していた。まわりに友達がいるからだ。ひとりっこの私は家の中に遊び相手がいない。ゲームもなかったし、親は地震の後の対応で忙しい。近所の子と遊んでいたとは思いますが、1日中友達という学校生活に慣れてしまっていて淋しかったのかもしれない。だから早く学校に行きたかった。好きなだけはしゃいで遊びたかった。そう感じていた子もたくさんいたはずだ。その分、学校が再開されると、毎日が楽しくなった。

私の通っていた小学校で、避難所から物資が届いた。みんなお揃いの「くもん」のマークが着いた、ピンクの背負える布製かばんだった。家の被害がほとんどなかった私たちの地域になぜ届いたのかはわからない。結局ランドセルばかり使っていて、そのかばんを使うことはなかった。だが、日本のどこかの人が被災者のことを考えてくれたことだ。ちょっとした気持ちがありがたかった。

4. 当時の思い

文中にもうすでに出てきているが、小学1年生のころには「あのね帳」というものがあった。何を基準で書く・書かないを決めていたのかはわからないが、その日にあったことを神戸市の国語帳に書き、先生に見せるというものだった。文章だけでもいいし、絵を描いてもいい。個人個人が好きなようにつける日記のようなものだ。今読み返してみると「なんでこんなこと書いているんだろう」と笑ってしまうこともあるし、字が間違っている。あのころはこれで合っていると思っていると思うと、自分のことなのにとてもおもしろいし、いろんなことが思い出される。「あのね帳」には、先生がみんなの作文を打ち出して貼り付けているものもある。10年以上昔のものなので変色して黄ばんでいるが、その中から震災のことについて書いた自分の作文を見つけた。

わたしは、17日のじしんにびっくりしました。うまれてはじめてのじしんでした。

おかあさんもこんなでっかいじしんは、はじめてだといっていました。

あさおきて、トイレにいてみると、わたしのすきな、ねこのおきものが、おちてこわれていました。他にもいろいろこわれていましたが、だれもけがをしなくてよかったです。

ガレキの中にいる人よりわたしたちのほうがいあわせだなとおもいました。

この中にある「ねこのおきもの」はトイレに置いてあった15センチぐらいの高さのかわいらしい置物だった。気に入っていたこの置物が壊れたのがとても衝撃的だったらしい。「だれもけがをしなくてよかったです。」この通り、私の家族や親戚で怪我をした人は幸いいなかった。しかし、地震の発生時間があと2時間から3時間遅い時間帯だったらそれはどうかかわからない。なぜなら当時、父は伊丹駅の近辺のビルに勤めていたからだ。伊丹駅ではホームが中央から折れ曲がるように陥没したり、高架橋がくずれたりした。もし時間がずれていたら…と考えると、被害に遭った人のことも全く人事というわけにはいなくなる。「ガレキの中にいる人よりわたしたちのほうがいあわせだな」これは作文を読むまで、当時こんなことを思っていたなんて覚えていなかった。だが、たまに見るニュースでは被害のひどかったところの映像や、下敷きになった人の救出される様子が映し出されていた。

そして、いつごろだったかははっきりしないが、人を捜しに長田区の避難所を回ったことがあった。1つ目ではその人は見つからなかった。母は「下敷きになって助けられず、そのまま火に巻かれて焼け死んでしまった人もいた」という話を聞いてショックを受けたらしい。まるで生き地獄だ。

その1つ目の避難所で他の避難所にいると聞いて歩いて移動した。ガレキが山積みのところやがたがたの道、ガレキの焼けた臭いの漂う道、母によると長くて30分ほどしか歩いていなかったらしいが、相当疲れて足が痛くなったことを覚えている。

さらに、私の家の近くでは火事は起きなかった。だが庭に灰が飛んできてうっすらと積もった。須磨区や長田区の大規模な火事のものだったからだろう。これを見たとき「なんだろう」と思い、親に説明してもらったが、あっけにとられてしまった。何もひどい被害を受けなかった私が「しあわせだな」と思うのも当たり前だ。

5. ボランティア

震災が起きて、この年が「ボランティア元年」と呼ばれるようになる程日本中がボランティアに沸いた。私の母も私の幼稚園の同級生のMちゃんのお母さんと「被災者ボランティア」を神戸外国語大学で行った。このことも印象的だったのだろう、「あのね帳」に書いてある。

～2月8日(水)～

ボランティアのこと

きょう、おかあさんと、こうべがいこくごだいがくへいきました。じしんでこまっている人へのにもつを、たくさんの人があつまって、わけたり、はこんだりしていました。わたしは大きなふくろにはいった、ゴミが、でているのをMちゃんとわたしではこびました。はやくみんなが、ふつうのせいかつにもどってほしいとおもいます。

震災当時、ボランティアという言葉の意味をしっかりと理解していたとは思えない。だが、私が小さいなりにゴミを運んだりしたのも事実である。自分のできることを自分なりにするのがボランティアであったのだ。母は2週間ぐらい毎日通っていた。その間はずっと支援物資の仕分けをしていたそうだ。その支援物資の中に水着が入っていたことがあり、ひどく腹が立っただと言っている。あのね帳に書いてあったのはその2週間ほどのうちの1日のことだろう。聞くところによると、私と友達とは外でうろうろしていたのを、大人の人に「これ運ぶぐらいできるでしょ。」と言われて手伝っていたそうだ。私たちのような幼い子供でもできることがあるんだと知った瞬間だった。

そして2004年10月、またしても大きな災害が兵庫県を襲った。TOKAGEと名付けられた台風23号だ。特に豊岡や洲本の被害が大きかった。環境防災科で勉強してから今まで以上に身近に感じた災害だった。発生時期は中間テストと重なったが、先生方の決断により個人の自由参加でボランティアに行くことになった。私はもちろん行きたいと思い、進んで参加した。

一番初めに行ったのは豊岡だった。テレビで見えるもしくは聞くのと、実際に行ってみるのは全く違った感じがした。これこそ百聞は一見にしかず。午前中は避難所となっていた公民館の掃除。午後は被害が大きかった地域の公民館の掃除をした。川を挟んで、被害のようすががらりと変わっていた。午後の方の家

屋には泥でうっすらと線がついていた。もちろん私の背のはるか上に。それを見て驚きが隠せなかった。公民館の中はうまく説明できないぐらいすさまじい光景だった。床がどろどろ、棚は傾いているし本はべちゃべちゃではりついている。ひとまず中にあるものすべてを持ち出すことになった。畳や紙類のものは特に水を含んで重くなっていた。災害の怖さを改めて実感し、思い知った。帰路につく時間となり、立ち去らなければならなくなった時、館長さんが涙を流してお礼を言ってくれた。私も胸が熱くなって涙がこぼれそうだった。

震災当時、神戸は本当にたくさんの方から助けられ、自分達でも助け合った。このボランティアはほんの恩返しのみだった。自分がすこし動くことでこんなにも喜んでくれることがあるのかと思い、胸を打たれた。震災のボランティアをしていた人の本を読んだことがあるが、その人たちもこんな思いだったのではないだろうか。本当のところ、このような大きな被害があってはいけない。だが、将来絶対起こらないと言い切れない。もし起きた場合は自分から進んで、自分のできること、身近なことからサポートしていけたらと思う。

6. 前に住んでいた家 神戸市灘区大石東町

私は幼稚園に上がる前までは灘区に住んでいた。家はこじんまりした一戸建てで大石駅または大石川からすぐのところだった。幼稚園からは垂水区に引っ越してきたが、当時幼馴染はみんな大石にいた。灘は酒造がさかんな町で、昔からキンパイの酒蔵が家の前にあった。そして裏側には商店街があり、小さい私によくしてくれるお店の人もいた。

地震が起こった。灘区の震度は6～7だった。メモリが1変わるだけだが、それだけで揺れも被害も段違いな大きさとなる。家の前にあったキンパイの酒蔵が潰れた。酒蔵と家の間の道が4m～5mあるにもかかわらず、瓦礫が押し寄せてきた。玄関のある南部分がぐちゃぐちゃになり、半壊だった。裏側の商店街も見ても無残に壊れていた。地震後初めて灘の家に行った時、高速道路を出てからも渋滞が続き、瓦礫の山がたくさんあった。家に到着すると、とても大きいと思っていた酒蔵が跡形もなかった。見渡す限り瓦礫とビニールシート。遊び慣れたまちがすっかり知らないまちに変わってしまっていた。ショックだった。

家の柱や玄関の扉、窓の取替えなどの専門的なところは業者に頼んで直してもらった。だが、自分でできそうなところ、つまりふすまや壁は自分で直した。ホームセンターへ行って材料を買い、今の家から車で通った。特に壁は砂状のものに水を入れて塗っていった。当時は小学生で土日に部活などなく、毎回親と一緒にについて行った。向こうには幼馴染もいたし、親が家の工事などで忙しいために遊びにいったこともあった。今でも昔の家から友達の家への道のりをはっきりと覚えている。そして短い時間ではあるが、いつも住んでいるところから離れるというのは、子供心としてとてもわくわくして楽しいものだった。

私が灘の家へ行ったのは震災から時間が経ってからだったが、母は家の様子を見るため、知り合いに会うために、はやいうちから行っていた。当初、まわりの人はほとんどみんな避難していた。私が引越しなければ通っていた、西郷小学校と烏帽子中学校だ。発生時期が1月と冬の真っ只中で、寒さが身にしみる時だったため、いたるところで焚き火をしていた。避難所にいる人はいつも焚き火を囲んでいたのも黒い顔をしていたという。

大石の家のことを思い出すと一緒に頭に浮かぶのは、阪神高速道路だ。大石駅から南を向くと自然と目に入るぐらい大きく、堂々としていたものだった。それが地震で横倒しになった。テレビで初めて現場が映し出されたとき、信じられなかった。あれだけ太い柱が、あれだけ頑丈そうなものが。人間は、人間の作ったものは、自然の威力には立ち向かえないのだろうか。言葉を失った。

7. 音楽とのかかわり

先日、久しぶりに車の中でラジオから流れてきたあの音楽を聞いた。10年前はラジオをつけるたびに自然と聞こえていた気がする。「We love Kobe がんばろうや」というフレーズのある、聴いていて癒されるような、今はやりのヒーリングのような曲だった。

震災が起きてからある冊子ができた。1995年に発行された「しあわせはこぼう」というものだ。それは震災のことやボランティアのことなど短い物語風に書かれていた。中には「しあわせ運べるように」という神戸の復興と亡くなられた方のご冥福を祈って、小学校の先生が作った歌もあった。この曲は小学校のころ毎年毎年歌い、高学年になると2部構成にもして歌い続けた。

高校に入ってから、震災10年となる年の1、17メモリアル行事において、環境防災科の3学年全員で歌った。中学校の時は歌っていなかったのが、久しぶりに歌ったものだった。改めて歌詞をかみしめな

がら歌っていくと、たいした被害を受けていないにも関わらず泣きそうになった。怪しまれると思って必死にこらえた。日ごろから音楽が好きで吹奏楽を続けているし、毎日のように音楽を聴いている。うまい学校の演奏を直接聴いて鳥肌が立つことはある。だが、泣きそうになることはあまりない。自分の何かが思い起こされる。自分に合った音楽はこれほどにすごいものなのだと感じた。

8. ルミナリエ

神戸ルミナリエ。日本の人なら誰でも知っているのではないだろうか。神戸ルミナリエとは、阪神・淡路大震災で犠牲になった方々の鎮魂を込めるとともに、都市の復興や再生への夢と希望を託し、開かれたものだ。地震が発生した1995年の12月に初めて開催され、神戸の人々に勇気を与えた。私も勇気を与えられた人のうちのひとりだ。開催初年ということもあり、とてもすごい人だった。人の波に飲み込まれてしまうのではないかと思ったほどだ。あのような光の芸術を見たのは初めてのことだった。父に抱き上げてもらい、なにかの上に登った。自分の上にさえぎるものが何もなく、光に包まれていると感じた。感想を言うならたった一言「きれい」だった。

震災が起きてから10年、小学生だった私が高校生になった今でもルミナリエは行われている。高校2年生の冬、9年ぶりに行った。幻想的な点灯の瞬間を見た。点灯前には「しあわせ運べるように」が流れた。他府県からのルミナリエツアーも組まれており、人気があるという。それだけ神戸ルミナリエは愛されているのだ。

景気の問題もあり、運営の続行が危ぶまれているが、私としてはぜひ続けていってほしい。なぜなら、今の10歳以下の子供たちは震災のことを何も知らない。親が子供をルミナリエに連れて行き、なぜ開かれるようになったかを説明することがあれば、少しではあるが、語られていくこととなる。もし子供が震災のことに興味を持てば、もっと詳しく教えてあげればいい。こんなに大きな被害を出したというのに、忘れられていくのは一番怖いと思うからだ。

9. 将来の夢

私の一番の将来の夢は犬の訓練士、ドッグトレーナーになることだ。私がこの仕事に就きたいと思ったきっかけは阪神・淡路大震災であり、環境防災科である。

ライフラインのガスの所で触れたが、母の知り合いの鈴蘭台の家へお風呂を入れてもらいにいったことがあった。そのとき、そこには「ランディ」という可愛らしい犬がいた。今はもう老犬だが、震災後どたばたしていてなかなか遊べなかった私の相手をしてくれた。その犬は相当遊ぶのが好きだったのか、思う存分一緒に遊んでくれて、とても楽しかったとこをはっきり覚えている。今考えると、精神的に疲れていた私の心を癒し、セラピードッグの役割をしてくれたのだ。セラピードッグとは第1回の震災メモリアル行事に参加したときに話を聞くことができた。

震災当時は災害救助犬のことは知らなかった。だが、その後に起こった地震のときに外国から救助に来ていた災害救助犬のことを知った。小さいころから動物を飼ってはいなかったものの、動物が大好きだった私には惹かれるものがたくさんあった。犬をうまく使いこなす。犬とコミュニケーションを取り気持ちを读む。人と動物との間で結ばれる信頼関係がとても大事な職業だ。初めて知ったのはそのときだが、初めて触ったのは三宮駅だった。家の近所にいる犬より数段も賢そうで、いろんな人がむやみに触っても吠えないし、嫌がっている気配を見せずにじっとしている。災害救助犬ならこれぐらい当たり前ののだが、私にとっては驚きの連続だった。訓練士になれば、災害救助犬やセラピードッグはもちろんのこと、警察犬、盲導犬、介助犬、聴導犬、麻薬探知犬など、さまざまな育成ができる。日本の仕事を持つ犬は、他の国に比べるととても数が少ない。訓練士になる希望を持つ人がたくさんいるのは事実だが、最後まで残る人や試験にパスできる人は少ない。それだけ難しく、場合によっては危険と隣り合わせということもある厳しい世界なのだ。それでも私にとっては夢であり、叶えることは努力次第で不可能ではない。災害後のいちはやい対応、現場での人命救助、防災を広めるということ、心のケア。環境防災科に入って「動物に関わりたい」という自分の夢がひとつの仕事としてはっきりでできた。

「しあわせ運べるように」の歌詞で「亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていこう」とある。私には身近に亡くなった人がいるわけではないのだが、これから先「毎日を大切に」していけたらいいと思うし、誰かに「しあわせ」を与えられるような人になりたいと思う。

私の震災体験～もらった宝物～

神戸市垂水区
川口 美由紀

阪神・淡路大震災は、私の記憶にある中で生まれて初めて経験した地震であり、1番大きな地震でもある。当時7歳だった私も、今は18歳。震災から今年で11年目に入る。私は、まだまだ色んな事を覚えている。震災や防災に関連した施設がたくさん建てられたと思うが、世間ではすっかり風化してしまって、思い出す機会も少なくなっているように思う。でも、決して忘れてはいけない大切な出来事だったと思う。私にとってはとても大切な思い出だ。このとき貰った宝物は、今でも宝物であり、大切に保管している。これからもこの思い出を大事にしていきたい。

当時私が住んでいた家は、2階建て構造の14階建ての高層団地だった。A、B、C棟の3棟あり、1番高い棟はB棟で1階はピロティや駐輪場になっていて、A棟の1階は駐車場、C棟の1階は児童館になっていた。B棟の南側に福祉センターがあった。ここは、この団地の人以外の人もたくさん集まって、色んなイベントをしたり、講習をしたりしていた。児童館には、よく遊びに行っていたけど、学童保育の子たちと対立していて、ケンカをしたこともある。ここでは毎月、学年別に塗り絵が用意されていて、私もよくやっていた。それにうまく塗れた人だけ掲示板に張られるから、頑張って塗った記憶がある。

私の家はB棟の11階と12階で、玄関は11階だった。私の家族は、両親と2つ上の兄、1つ下の弟と私の5人だ。当時、いつもは、私は11階にあった3段ベッドの1番下に一人で寝ていて、弟は2段目、兄と両親は12階の寝室で寝ていた。私は、その日はたまたまベッドの1段目に弟と2人で寝ていた。

震災の前日まで家族と祖父母で、日本海へ旅行に行っていた。震災の日は連休明けでまたいつものように変わらぬ朝を迎え学校へ通うはずだった。5時46分、激しい揺れで目が覚めた。私は何かなんだか分からなかったが、とにかく電気を付けようと思った。しかし、ベッドに寄りかかるように、すぐ隣に置いていた2つの大きなタンスが倒れてきていて、2人ともベッドから出られなかった。真っ暗闇に弟と2人。私たちはギャーギャー泣いていた。しばらくして、父が助けに来てくれた。ベッドの小さな隙間から、私たちを引っ張り出してくれた。そのときもまだ、部屋は揺れていた。今思えば、もし私と弟がベッドではなく布団で寝ていたら、当然タンスに押しつぶされ、今このような体験談を語ってはいなかったと思う。私たちの命をベッドが守ってくれた。そして、母も間一髪で死を逃れることができたのである。寝室に置いてあったテレビと鏡台とタンスが同時に母めがけて倒れてきたそう。もし1秒でも先にタンスが倒れたら、母も死んでいたかもしれない。3つが同時に倒れ、隙間ができたことにより、母は助かったのだ。しかし、倒れたテレビなどを起こそうとして、ぎっくり腰になったそう。私の家族で大きな怪我をしたのは、母1人だった。

家の玄関はしばらく開かなかった。度重なる余震で歪み、力持ちで何でもできると思っていた父でさえ、開けるのに苦戦していた。窓も歪んでいた。電気は当然つかなくて、家中に足の踏み場もないくらい物が散乱していたのだ。階段の下にも、いろんな物が山積みになっていた。12階の子供部屋に置いてあった本やおもちゃ、台所にある冷蔵庫の中から転がってきたと思われる冷凍食品、割れた食器類、母の鏡台にしまってあった化粧品…何でこんなところにあるのか、とても不思議で仕方なかった。玄関に置いていたザリガニも、怖い思いをしたらと思う。水換えの度にいつも揺らされまくっていたけど、今回の揺れはそんなもんじゃなかっただろう。散乱したもののなかから見つけ出すのはとても困難だったと思うけど、見つけたかどうか記憶がない。

最高に散らかった部屋、ボロボロのふすま、壁にはいくつもの穴が開いていた。家の中でも靴を履いて歩いた。お気に入りの服が破れて汚れていた。食器棚は中身が全部飛んで行ってカラっぽだったのに、棚自体のガラスは割れていなかった。今もその食器棚を使っているけど、お箸やスプーンなどをしまっている引き出しは、とても開きづらい。本当に部屋中ぐちゃぐちゃだった。昨日までとは全く違う部屋。普段から散らかってはいるけど、そんなの比じゃなかった。

エレベーターは、当然止まっていた。明るくなってから、階段で下に降り外へ出ると、住人がみんな、でこぼこになった駐車場や道に集まっていた。私はすぐ友達のところへ駆け寄り「何なんやろう?」「頭打った」などと話をしていた。児童館の横の階段にも、道にも至るところにヒビが入っていたり、地面が盛り上がり上がっていたりした。とても歩きづらかった。この団地を支えている大きな柱の鉄筋がむき出しになって

いた。ピロティの壁は穴があいていたり一部剥がれ落ちたりしていた。クリーンステーションの塀もヒビが入り、いつもちゃんと並んでいたコンテナもバラバラになっていた。駐輪場の自転車やバイクももちろんぐちゃぐちゃだし、駐車場の地面もでこぼこになっていた。でこぼこの地面にタイヤが挟まっていて、車を駐車場から出すのにかなり時間がかかった。

団地の前にある広場と道路の一部（神明大橋）は第二神明道路の真上にあり、トンネルのようになっていた。その道路と橋のつなぎ目が若干、上下にずれていた。他の場所もでこぼこだったから、最初はあまり目立っていなかった。しかし、1台のバスが通った瞬間、私たちの目の前で地面が沈んだ。ガクンというか、ズドンというか、どう表現していいかわからないけど、とにかくびっくりした。友達と「今下がったな!!!」と言ってかなり盛り上がった。橋の方が1メートル位高くなった。広場の方も、団地の敷地と広場の境目が同じように上下にずれていた。

私たちがキャーキャー言って騒いでいる目の前をまた、今度は猛スピードで1台の乗用車が通った。その車は一瞬飛んだ。道路に着地したとき、火花が散った。みんな叫んだ。私は爆発してしまうのではないかと思ったけど、その車は普通にその場を過ぎて行ってしまった。すごいとしか言いようがなかった。このことは、私にとって一番の衝撃だった。

その道路と広場が今どうなっているかという、いつ直ったのか正確には覚えていないけど、すっかり元通りになっている。あの時それを見ていなかった人は本当に1メートルもずれたのか絶対に分からないと思う。道路の方は完全に平らだが、広場の方は微妙に坂になっている。

でこぼこになった団地の南側の駐車場は、半分くらいが公園になった。

外の公衆電話には、長い行列ができていた。私たちもその列に並んで電話の順番を待った。私たち家族は、近くの小学校へ避難し、普通教室でしばらく過ごした。思ったより電気の回復は早くて、その教室はすぐに電気もテレビもついた。よく覚えていないが、その学校はあまり被害を受けていなかったような気がする。窓ガラスも割れていなかったし、壁もそんなにひどく壊れているところはなかった。しかし、かなりたくさんの方が避難してきていて、さっきまで話していた友達の姿もすぐに見えなくなった。そのときは、自分のことに必死で、まだ小さかった事もあるけど、もっとちゃんと被害の状況を見ておけば良かったと思う。

それからは、どうやって過ごしたのかほとんど覚えていない。だけど、何とかして祖父母と連絡を取って、神戸まで来てもらった。道路はかなり渋滞していたらしく、いつもより時間がかかったみたいだった。途中でご飯やジュースなども買って持ってきてくれた。その後、いったん家に帰って、部屋を少し片付けて必要なものをかばんに入れて、すぐに祖父母の家がある、揖保郡太子町に向かった。家はやっぱりさっきのままぐちゃぐちゃで、玄関は開けっ放しだった。もし玄関を閉めてまた大きな地震が来て開かなくなったら困るからだ。神戸を出るときはちゃんと鍵も閉めた。窓はサッシが歪み、鍵がかからなかった。ベランダから見る景色はいつもと違って、町が灰色っぽかった。海も作りかけの明石海峡大橋も灰色に見えた。汚かった。

いつ神戸を出たのかは分からないが、太子町に着いた時はもう夜になっていた。普段なら1時間程度で行けるのに、バイパスが通れないせいで何時間もかかった。でこぼこになった道路は家の周りだけじゃなかった。潰れている家を何軒も見えた。

私はしばらく祖父母の家に住むことになった。ここで新しい学校に仮入学することも決まった。制服がある石海小学校。すぐに入学手続きをして、私と兄は小学校、弟は幼稚園に通うことになった。地震の次の週から通い始めた。私は1年2組。毎朝近所に住むお姉さんが迎えに来てくれた。そのお姉さんの事は名前も何年生だったかも忘れたけど、とても優しくしてくれたし、私が準備に時間がかかっても玄関でずっと待っていてくれた。

石海小学校は、わりとキレイな学校だった。仮入学初日、私は速攻家に帰った。当たり前だけど、知っている人が誰もなくて、みんなに話かけられるのが嫌で仕方なく、母に迎えにきてもらい午前中に泣いて帰ってきたのだ。今思うととても情けない。私はすぐ泣く子だった。

2日目も私はずっと泣いていた。しかしクラスのみんなは私をほっとこうとはしなかった。この時期に、しかも被災地神戸から転校してきた私が珍しかったのだろうか。でも、みんなは地震のことには一切触れ

ず、とにかく一緒に外で遊びたかったみたいだった。

1年2組のみんなはとても優しくかった。人見知りが激しく、比較のおとなしい私も3日目には元気よくみんなと走り回っていた。たくさん友達ができたし、先生方もとても優しくしてくれた。

クラスみんなはチューリップか何かの球根を植木鉢で育てていた。私の分は当然なかったけど、ある女の子が「一緒に観よう」と言ってくれて、私はその子と一緒に鉢植えの観察日記をつけることになった。その子の鉢植えは他のみんなのより成長が早かったような気がする。

校舎の隣には今はもう使われていない木造の校舎があった。ここはおばけが出ると教えてもらった。私は本気でおばけが出るんだと信じてしまっていた。だからこの木造校舎を取り壊せばいいのにとずっと思っていた。

給食センターが学校のすぐ隣にあった。私は石海小学校の給食が大好きだった。なぜかという、作りたてって感じがしたし、食器がプラスチック製だったからだ。神戸で通っていた西脇小学校は、遠い所から給食を運んできていたし、食器が金製だったから、ご飯がとても食べづらかった。しかも、給食係は重い食器やおかずを2人がかりでぶらさげて運ばなくてはならなくて嫌だったけど、石海小学校は給食を運ぶ台車（カートみたいなやつ）があったので、遠い教室でも楽に運べた。しかも押すのが楽しかった。西脇小学校にもあったらいいなと思った。

私は校外なかよし会が好きだった。放課後に生徒が住んでいる地区別に集まって集団下校をしたり、集会をしたりする会で、定期的にしていたと思う。ここだと家の近所にどんな人が住んでいるのか分かるし、その子の家の前の道も通るので家が分かって楽しかった。クラスの子は数人しかいなかったけど、兄も一緒だったから心細くなかった。なかよし会が同じで、私の祖父の家から一番近いところに住んでいた女の子とは、放課後よく遊んだ。学校が終わって家に帰ると、どちらかが誘いに行って、近所の空き地で遊んだ。その空き地には今は病院が建ってしまっているけど、大切な思い出の場所である。

私は掃除の時間も好きだった。多分、給食のあとに昼休みがあってから掃除だったと思う。石海小学校は上履きだったので、床をほうきで掃いて雑巾がけをした。その雑巾がけで、みんなでバラバラに床を拭くのが楽しかった。教室の後ろに運ばれた机の中でまだ給食を食べている子もいた。

石海小学校は季節的には2月の行事が多かった。学年集会で長縄大会と空き缶積み大会があった。空き缶積み大会は体育館で空き缶をできるだけ高く積んでいく競技で、私たちのチームは優勝した。長縄大会は、いくつかのチームに分かれてそれぞれのチーム全員で飛んだと思う。それも優勝した。そのときもらった表彰状は今でも家に置いてある。ちなみに、大縄大会は、2月6日で、空き缶積み大会は、2月16日。すごく強いクラスだなと思った。それから、何かの授業で、紙でリュックサックを作った。そしてそれを、近くの幼稚園の子にプレゼントした。あと、遠足も印象に残っている。3月にお別れ遠足で学校の近くにある朝日山をみんなで登った。とてもしんどかったけど、みんなのおかげで楽しかった。

みんな本当に仲が良く、私も最初からこのクラスに居たような気がしてきた。泣いてばかりいた日がウソみたいに、私はすっかりクラスに溶け込んでいた。ついでに言うと、このクラスの時間割表も家にある。

私の中で1番印象に残っている行事は、マラソン大会だ。2学年ずつ男女別に走った。自分で言うのも何だけど、私は足が速いほうだった。先生を先頭に学校の外へ出て、とても長い距離を走った。太子町は、山はあっても坂道はない。当時は田んぼだらけで、高い建物もなかった。同じような景色の中を私は前の方で走っていた。私は2位になった。1、2年の女子の中で2位。1位は同じクラスの子だった。その子と同じくらい先生に褒めてもらった。私は走るのが好きだった。マラソンはとても辛いししんどいけど、ゴールしたときの喜びは大きいし、走っている最中は何も考えなくていい。長距離だと、途中で何度も諦めそうになるけど、ゴールに好きな人が居ると思ったら自然に足が進んでいく。私は昔も今もこの方法でマラソンを頑張っている。このときのマラソンの時はどうだったか覚えていないけど、私は昔から走るのが好きだった。ゴールの場所は学校のグラウンドだった。クラスの男の子たちも応援してくれていた。すごく嬉しかった。

私は毎日がとても楽しかった。授業にもちゃんとついていっていたし、クラスでの自分の役割も居場所もちゃんとあった。私は1年2組の32人みんなと先生が大好きだった。今でも大好きだ。

毎日がとても充実していた。短い2ヶ月間だったが、私はこの時のことは絶対に生涯忘れないと思う。とても居心地のいいクラスだった。この時友達になった1年2組のみんなは、今頃どうしているだろう

う・・・私のことを覚えてくれている子は何人くらいいるだろう・・・ずっと年賀状のやりとりをしていた担任の先生とも、今は連絡をとっていない。それだけは、すごく残念なことだと思う。みんなと一緒に何かをしたんだという記録がどこかに残っていたらいいなあと思う。例えばみんなの思い出の中とか、誰かの作文とか。

私が神戸に帰ることが決まると、手紙を書き合うことになった。みんなは私に、私はみんなに。先生が1人1枚ずつ便せんを用意してくれた。多分書きたいことはいっぱいあったと思う。でも、なんて書いたか全く覚えていない。というか、本当に書いたかさえよく覚えていない。でも、みんなが手紙をくれたことは事実で、題名にもある「宝物」とは、この手紙のことだから。1人ずつ、私宛に書いてくれて、先生と何人かの女子が、全員分の手紙を冊子にしてくれて、お別れの日に私にプレゼントしてくれた。本当に嬉しかった。

私は何度も何度もこの手紙を読んだ。涙が出そうになった時もあった。悲しい事があった時とか、急にみんなのことを思い出したくなったとき、繰り返し読んだ。みんなそれぞれ、自分の想いを込めて、丁寧に書いてくれたんだなあと思う。小学1年生だから、もちろん字は汚いけど、みんなの気持ちが伝わってくるような気がする。

「こうべにかえっても、がんばってね。わたしもはやくこうべにかえりたいなあ。」Kちゃん。この子も地震で被災して、太子町に来ていたみたいだった。被災した子へインタビューするみたいな感じで小学校に来た某テレビ局の取材と一緒に受けた。

「みんなのことをずっとおぼえていてね。またせっかいしょうがっこうにあそびにきてね。」T君。この子は、「痛い」を「アウチ」と言っていた。それに全部の「へ」に「ゝ」こんなのを付けている。

「わたしや、ともだちや、先生を、こうべへいっても、わすれないでね。できたら、手がみをかいて、おくってね。」Gちゃん。住所が分からないから手紙は書いてないけど、こんな風に言ってもらえて嬉しかった。

「ぼくのかおもわすれないでね、げんきでね。」T君。この子には、私の兄と同年の兄がいて、クラスが一緒だったみたいで、手紙にそのこともちょっとだけ書いていた。

「ともだちみんなをわすれないでください。わたしも川口さんをわすれません。またあそびにきてください。」Tちゃん。放課後よく遊んでいたのはこの子。すごく気の合う子だった。

「てんこうしても、がんばってね。また、石海小学校にもきて下さい。」R君。R君だけ、わたしの名前を間違っていて、手紙の宛名が「みき」だった。

「またあえたら、いいのに、なあ。いつまでもげん気でね。」R君。便せんの塗り絵のリスが赤と青なのがおもしろい。

「むこうの学校で、チャイムはなりますか？」Tちゃん。この子は、クラスのリーダーっぽい子だった。長縄大会も空き缶積み大会も私はこの子のチームだった。それに、マラソン大会で1位だったのはこの子。ハキハキしていてかわいい子だった。

「はじめにきたときはうれしかったですか。またいっしょにあそぼうね。」Y君。転校初日は嫌でずっと泣いていた私のこと、忘れたのかなあ。笑”

「もし木がおちてきたらたいへんだから、きょうつけろよ。」S君。どんな子だったか、よく覚えてないけど、おもしろい子だったと思う。

「いっしょにつるをおったことも、いっしょにあそんだこともわすれないでね。」Yちゃん。一緒に球根の観察をした子。すごく気の利く子で、1番お世話になったような気がする。

「ぼくもまた川口さんとあえるはずですのでまっといてください。」M君。

「ちがう学校に、いっても、おともだちをたくさんつくってください。」Sちゃん。

「学校にずうっといれないってちょっといやだな。もうちょっと石海小学校にいたらいいのにな。」Yちゃん。

「川口さんがきて、うれしかったよ。でもそのころ川口さんないていたけどね。ともだちになれてうれしいよ。」Mちゃん。

「ぜったいにわすれないでね。ぼくは、おとなになってもわすれないよ。」K君。

本当は、全員文の手紙を全文載せたいけど、このくらいにしておこうと思う。あとは、私の思い出の中で・・・この手紙は、もらってから10年以上も経つから、表紙が色褪せてしまったけど、思い出はずっと色褪せないと思う。ちょっと大げさかもしれないけど、いつも私の心の支えになっていた。それくらい、この手紙が大事。もし、地震が起こらなくて、ずっと神戸で普通の生活をしていたら、出会えなかった人

達だし、もらえなかったものだから。この手紙は今までも、これからも、わたしの1番の宝物だ。ほんの2ヶ月間しか一緒に居られなかった私のために、ここまでよくしてもらって、本当に感謝してもしきれない。地震があって良かったなんて、そんな無神経なこと言えないけど、ここでこっそり言う。みんなに会えてよかった!!!みんなは、私ほど大きなことに思っていないかもしれないけど、みんなと出会えた事は、本当に大切な思い出だ。もし、1年2組の誰かが、この震災体験を読む機会があったら嬉しい。そして、またどこかで会えたたらいいなと思う。私は大人になっても、絶対みんなのことを忘れないと思う。

神戸に帰ってきた。2ヶ月前とあまり変わってない。両親は、ちくちく神戸に帰ってきていて、家の片付けをしていた。私は、3月の中ごろに帰ってきた。部屋はキレイに片付いていたけど、壁の穴や、ひびはそのまま。物が少なくなったような、増えたような不思議な感じがした。

私はまた西脇小学校に通い始めた。みんな元気そうで、すぐ元通りのクラスに戻った。授業で、地震の体験の絵を描いた。私はぐちゃぐちゃの部屋を思い出しながら描いた。隣の席の男子が楽しそうに描いて、「お前の部屋よりキレイや」とか言っていたような気がする。別に私が散らかしたわけじゃないのに、何が嬉しかったのか。それから、作文も書いた。多分まだ家のどこかにあると思う。1年のとき、1年間で描いた絵や、作文や、撮った写真などをまとめて、1冊の本を作った。多分捨ててないと思うから、探してみようと思う。

給食の牛乳がビンから紙パックに変わった。それくらいしか、思い出せない。

団地の工事が始まった。14階まで足場を組んで、工事がされた。8月中旬、北側の工事が終わり、それから南側の工事が始まった。カーテンは閉めっぱなしで窓が開けられない日もあった。工事のおじさんと会うのが恥ずかしくてベランダに出られなかった。家の中も工事をしにきてくれて、壁の穴もひびも、窓の歪みもすっかり元通りになった。団地の中の階段や道路もだんだんキレイになっていった。新しい水道タンクができた。そのとき、全体的に茶色かった団地が白くなった。

今は引っ越してしまっているけど、たまにその団地の前を通る。すっかりキレイになっていて震災の傷跡は残ってないと思う。明舞高層団地の周りは低い団地や家だから、かなり目立っている。よくあの地震で倒れなかったものだなあと思う。でも、次に阪神・淡路大震災くらいの大きな地震がおきたらやられてしまうのではないかなと思う。

改めて、地震の威力のすごさと、人間の技術のすばらしさを知った。

また、人間の温かさや強さも知った。

今、私が生きているのは運命なのか、奇跡なのか。震災で亡くなった方は、それが運命だったのか。どっちにしろ、私はたくさんの人に支えられて生きていることに変わりはない。震災を経験しなかったら、今まで歩んできた道、これから進んでいく道が違ったかもしれない。私は今の生き方でよかったと思う。でも、もう少し人の痛みを分かってあげられる人になりたい。これからも、震災を忘れずに自分や人を大切にして生きていきたいと思う。

ずっと震災を語り継いでいきたい。

今も残るもの

神戸市須磨区
河田 のどか

あの日ほど、1日の出来事を鮮明に覚えている日はない。これからもきっとそうだろう。何歳になっても7歳で体験した地震の記憶だけは、私は忘れない。

○ 1995年1月17日、早朝

『じゃあ行ってくるわ』父が言い、立ち上がろうとした。朝が苦手な私が、起こされたわけでもないのに珍しく目を覚ましていた。体を半分起こし、目をこすりながら父を見た。次の瞬間。“ゴー”という地鳴りみたいなものが遠くから近付いてきた気がした。そして『どんっ!!』という大きな音と共に家が上下左右に激しく揺れた。何かが割れる音が聞こえ、台所に目をやった。食器が飛び出し、大きな音を響かせながら次々と床に落ちていった。スローモーションで時間が流れているように見えた。何が起きているのかわからず、辺りをキョロキョロ見渡した。『地震や! 布団にもぐれ!!』父の大きな叫び声が聞こえてハッとした。『地震』という意味はわからなかったが、父の叫び声にビックリして頭からスッポリと布団をかぶり、枕を抱きしめた。まるでジェットコースターに乗っているようだとのんきなことを思っていた。大きな地震が収まり、布団から顔を出した。そして父の支持で洗面所に行ったが兄の姿がない。父が兄の名前を呼んだ。兄は地震に気付かず、父に起こされるまで寝ていた。私は洗面所の冷たい床に座り込み、父が引っ張り出した布団に包まった。〔ドクンッ。ドクンッ。〕自分の心臓の音が大きく聞こえた。『怖い。』と泣きながら震える私の背中を、母はずっと擦り続けてくれた。兄は起きたばかりで、なぜ私が泣いているのかも、どうして家族が洗面所にいるのかもわからないみたいだった。

しばらくして布団のある部屋に戻った。スイッチを押しても電気はつかず、蛇口をひねっても水がでない。電気、ガス、水道、電話回線もすべてのライフラインが止まっていた。『会社が心配やから見てくる』と言い、父は仕事場へと出て行った。母と兄と私の3人は同じ布団に入った。「どうしてお父さんは行ってしまったのだろう」という疑問だけが頭の中を何度も回っていた。余震の恐怖心は父が見えなくなっただけからさらに大きくなった。

父はすぐに帰ってきた。会社までの道はガス臭く、とても前に進める状況ではなかったらしい。父が帰って来たこともあり、余震と余震の間隔が長くなると少し落ち着いてきた。父は割れた食器の後片付けを始め、母は布団を畳んだ。家は食器が割れるぐらいの被害だったので、この時はまだ地震の大きさ、神戸の町がどれだけ大きな被害を受けたのかまったく知らなかった。お昼前だったのだろうか。急に電気とテレビがついた。「良かった。」安心したのはほんの一瞬だった。一番最初にテレビに映ったのは、“どんな地震が来ても絶対に壊れない”と言われていた高速道路が倒れている映像だった。リポーターの男の人の声が悲鳴のように聞こえた。そして次に、父方の祖父母が住む長田の火事の現場が移った。父の食器の破片を拾う手が止まった。ゆっくりと立ち上がり、ボソッと呟いた。『生き埋めになっとおかもしれへん…。』唾を飲み込み、父を見上げた。いつも堂々としている大きな父が、とても小さく見えた。つりあがった眉毛は下がり、肩を落として目の前に立っていた。生き埋めという言葉の意味を、当時の私が理解していたかどうかはわからない。しかし、父と母の青ざめた表情を見て大変なことが起こったのだということは理解できた。祖父母の家は古い木造の1階建。高速道路が潰れるほどの大きな地震に耐えられるとはとても思えなかった。父はそわそわと家の中を歩き回り、落ち着かない様子だった。『みんなで長田まで行ってみよう』危険だとわかっていても、電話も繋がらないこの状況で、安否を知るにはもう行くしかなかった。家族全員で車に乗り込み、祖父母の家へと急いだ。

○ 祖父母の家

車の中では、ラジオの音だけが響いていた。どのチャンネルもこの震災の状況を伝えていたのだろう。ラジオを聞けば地震の被害の大きさがわかって不安になる。しかし、音を無くしてしまえば気持ちが減入り、悪い方向にしか考えられなくなってしまう。とりあえず、車のラジオは付けっぱなしの状態だった。長田の被害を伝える声が聞こえる度、父の体が小さく震えているように見えた。みんな無言で窓の外を見ている。倒壊した家屋の瓦礫が道路にまではみ出していた。たくさんの車が行き交う中、ゆっくりと進ん

でいた。倒れかけているビル。ひび割れた道路。いつも通り慣れていたはずの道なのに初めて通るみたいだった。ある交差点の曲がり角。母が独り言のように呟いた。『ここ、前は2階建の家やったのに…』母の視線の先に目をやると、その家の屋根がすべるように道路に広がっていた。2階建だったなんて信じられないぐらい、ペシャンコになっていた。父のほうをチラッと見た。まっすぐに前だけを見つめていた。ハンドルを握る手に、力がいっているように見えた。私の記憶の中で、車の中での会話は母の一言だけだった。兄も私も何も言わなかった。窓の外に目をやり、いつもの景色を探したが知らないまちにしか見えなかった。

普段の倍近くの時間をかけ、ようやく祖父母の家に到着した。父はいつも車を置いていた場所から少し離れた位置に車を止めた。『ちょっと見てくるから』と父は言い残し、1人で車を降りた。父はこの時、祖父母と妹の死を覚悟していたらしい。潰れているだろう家を、幼い私たちに見せたくなかったのだろう。母は静かにうなずき、うつむいた。兄も無言のまま、父が戻ってくるのを待った。そのたった2、3分がどれほど長い時間に感じただろうか。「早くおばあちゃんに会いたい。」私は心の中で祖父母と叔母の無事を祈り、つぶやいた。

しばらくして車のドアが開いた。『降りといで』父の言葉を聞き、無事だったのだとわかった。硬かった母の表情が少し和らいだ。私は車のドアを勢いよく開け、走って祖父母の家に向かった。瓦が割れ落ちた細い道の奥に祖母は立っていた。水が入ったペットボトルを両手で抱え、少し疲れた表情で立っていた。『おばあちゃん、それどうしたん!!?』水道は止まっているはずなのに…私は驚いて叫ぶように言った。すると、『いざという時のために汲み置きしとったんよ。』と祖母は答えた。後から聞いた話だと、戦争を体験し、食料がない時代を生きてきた経験からの知恵だと笑いながら言っていた。しかし、タイミングの悪いことに、『こんなもの置いといてもしゃあないやろ』と祖父は言い、地震の前日に何本か水を捨ててしまったらしい…。今まで水を汲み置きしていても役に立っていなかったのだから、祖父がそう思うのも無理はないだろう。震災前に水を汲み置きしていたり、防災対策を行っていた人は果たして何人ぐらいいたのだろうか。

祖父母の家が半壊してしまったので、みんなで近くの中学校の体育館に避難するために向かった。途中、私はふと空を見上げた。太陽の色でもなく、火の色でもなく、真っ赤な色をしていた。異様な景色だった。私はあの日の空の色を今でもはっきり覚えている。ひび割れた道路を通る時、危ないからと言われ、道の端っこを歩かされた。体育館はすでに人で埋め尽くされていた。「これからどうなるんやろう?」そんな不安が頭をよぎった。体育館に座っていると、1人の人が声をかけてきた。祖父母の近所の人は『菓を飲みたいけど水がないんです。少しだけ水を分けてもらえませんか?』と言った。祖母は『たくさんありますからどうぞ。』と言って、2リットルのペットボトルを1本渡した。『ありがとうございます。』と深々と頭を下げるその人に、『困った時はお互い様ですから。』と祖母は笑顔で答えた。

避難所に届いた最初の食糧支援は冷え切った具の入っていないおにぎりが1つだけだったらしい。祖母はそれがおいしくてありがたくてたまらなかったと話していた。今、たった1つのおにぎりを渡されて、喜ぶ人などいないだろう。震災当時の生活は不便だったが、人々の心は豊かで、お互いを思いやる気持ちがあった。信号が止まっていたにもかかわらず、交通事故が起こらなかったのがいい例だろう。

『近所の中でうちだけが瓦が1枚も割れんかってんよ。優秀な職人さんが造ってくれたから。』祖母はよく自慢気にこう話していた。古びた家の瓦は、割れるどころか1枚もずれてさえいなかった。しかし見た目は大丈夫でも、もう住める状態ではなかった。思い出の詰まった家にはもう住めない寂しさを紛らわすために、祖母は何度もこの話をしていたのかもしれない。

○ 震災から1年

元旦は家族で鷹取山に初日の出を見るために登り、祖父母の家に従兄弟たちと集まる。そしてお年玉をもらってから長田神社に行くのが恒例行事だった。しかし、もう家はない。『おばあちゃんの家があった所に行きたい。』何度も言う私に『行っても何もないで。』父は決まってそう答えた。でもあまりに私がしつこく言うので父がとうとう折れた。そして、連れて行ってくれることになった。

『ここがホンマにおばあちゃんの家やったん?』何もないがらんとした空き地を見て、私は立ち止まった。祖父母の家は、跡形もなくきれいになくなっていった。近所の人の自転車がいくつか置かれていた。家の隣の崖の下にあった花はなくなり、その崖の上に建っていた一軒家は集合住宅になっていた。兄が産ま

れた時に祖母が植えたどんぐりの木もなくなっていた。何もかも違って見えて、この場所に祖父母の家が建っていたなんて信じられなかった。毎年従兄弟たちと背を比べ、その成長を祖母は柱に残していた。地震は建物だけでなく、思い出までも奪ってしまった。

○ 長田のまち歩き

長田のまち歩きで長田神社に行った。祖父母の家に行きたかったけど行けなかった。自分ではきちんと覚えているつもりだった。長田神社まで行けば、道を思い出し、たどり着けるはずだと思っていた。しかし、途切れ途切れの記憶はつながらず、どの方向に進めばいいのさえわからなかった。新しく立ち並んだ家、きれいに整備された道路。知らないまちのようだった。何回も通った道を全く思い出せない自分が情けなかった。10年という年月の長さを思い知った1日だった。

『いつおばあちゃんの家建てるん?』これが地震直後の私の口癖だった。数年間、何度この質問を繰り返してきたのだろう。だけど大きくなるにつれて口にすることはなくなった。「もうあの場所に家が建つことはない。」と、心のどこかで思うようになったからだ。夏休み、震災当時の話を聞くために祖父母の家に行った。地震の話聞くのはこの時が初めてだった。電話で「震災の話を聞かせてほしい」とお願いするのにとても戸惑った。長田のまち歩きとき、友達がまちの人に『震災の話を聞かせてほしい』と頼むと断られたという話を聞いたからだ。10年経ったとはいえ、心の傷が癒えている人は少ない。忘れた記憶をもう一度思い出させていいのだろうか。そう思った。とても不安だったが、祖父母は快く了承してくれた。震災当日の話を祖父は事細かに覚えていて、全てを話してくれた。

一度大きな縦揺れがきて、その後に横に激しく揺れた。重い置物が倒れてきて、祖母の寝る位置があと数十センチずれていたら死んでいたかもしれないそうだ。床は抜けて天井が落ち、空が見えていた。

『地震や!地震や!』動揺した祖父は懐中電灯がなかったためライターを片手に部屋を歩き回っていたが『火事になる!』と祖母に注意されてやめたらしい。食器が飛び出して割れていた。外に出ようにもドアが歪んでしまっていて開かなかった。どこか外に脱出できる場所はないか探すと、窓が開いた。そのまま出ようとする父に、当時一緒に住んでいた父の妹が頭に何かかぶるように注意したらしい。祖父は座布団を頭に載せ、やっとの思いで外に出たところに、私たち家族が到着したらしい。家の下には断層が走っていたため、家は歪んで住めなくなった。だからあの家は取り壊したのだと話した。

家の話になった時、隣に座っていた祖母が口を開いた。今、祖父母は駅の近くの復興住宅で暮らしている。しかし、本当は昔ながらの付き合いがある元の場所に家を建てたかったのだ。だけど私の両親にそれを反対された。『反対された時はすごい腹が立ったよ。建てたいって言っとおねんから建てさせてくれたらいいのになって思ったわ。』祖母はその時の気持ちを隠さず、正直に話してくれた。祖父母の家は坂道の多いとても不便なところだった。これから年を取り、足が悪い祖父母を心配しての父と母の判断だった。父も自分の長い間暮らしていた家を失うのは辛かっただろう。できることならもう一度同じ場所に家を建ててあげたいと思っていたと思う。だけど、諦めるしかなかったのだ。祖母は『今は、あの時のんちゃんのお父さんとお母さんが反対してくれたことに感謝しとおよ。』私の目を見てこう言った。父と母の判断は正しかったのだ。そんな事情を知らなかったとはいえ、『いつ長田に家建てるん?』という私の質問は祖父母を、両親をずっと苦しめていたのかもしれない。10年経って初めてそのことを知った。

ある日、家族で地震の番組を見ていた。私は『長田の家の下には断層が走って、それで家が歪んでんよね?』と両親に話した。2人共、そのことを知らなかった。祖父母は、自分の子供にさえ話していなかったことを私に話してくれたのだ。地震で祖父母が心に傷を負ったのは確かだ。だから両親も地震のことを聞かなかったし、祖父母も自分から話そうとはしなかったのだろう。まち歩きの最後に、私は『地震のことを話すのはいや?』という質問をした。祖父は『できたら思い出したくない』と答えた。はっきりそう答える祖父を見て、申し訳ないことをしたと思った。しかし、話を聞かなければよかったとは思わなかった。貴重な話を聞かせてもらえたことを感謝している。今までずっと避けていた地震の話題。まち歩きがなければ聞くことはなかっただろう。このことをきっかけに、長田の家のことを聞くことができてよかったと思う。

○ 1. 17 追悼式

震災から数日経ったある日の新聞に、犠牲者の方の名前が並んでいた。その中の1人を指差し、母は静

かにこう言った。『保育園の先生や…』私は新聞をのぞきこんで母が指差す方に目をやった。先生と先生のお父さんの名前があった。直接担当してもらったことはなかったが、優しくてかわいい先生だった。初めて経験した身近な人の死だった。当時、先生の死を知り、どう感じたかは覚えていない。亡くなったという現実を受け入れるとか、受け入れられないとかというのはまた違った気がする。ただ、先生はもういない、保育園に遊びに行ってももう会えないのだと単純に思っただけだった。誰かに「先生は父をかばおうとしたが、結局2人とも倒れてくるタンスの下敷きになって亡くなったらしい」と聞いた。いつどのようにしてこの話を聞いたのかはわからない。事実かどうかは確かではない。もし、家具の固定さえしていれば先生は死なずにすんだのかもしれない。助かるはずの命だったかもしれないのだ。

1. 17 追悼式に高校2年の時、初めて参加した。朝まで特に仕事はないらしく、のんびりしていた。夜中にトイレに行き、そのまま震災の犠牲者の方の名前が刻まれている慰霊碑のところに行った。1人の中年女性がいたが他には誰もいなかった。その人の後ろを通り、私は先生の名前を探した。『これや…』先生の名前を見つけ、その前で立ち止まった。先生の名前の下には、先生のお父さんの名前もあった。私は慰霊碑に手を合わせながら泣いた。先生の死を知って10年。初めて泣くことができた。先生の分も生きるとかは私には難しくよくわからない。ただ、先生のことは大人になっても絶対に忘れないと心の中で誓った。

○ 震災から10年

震災からもう10年なのか、まだ10年なのか・人によって感じ方が違うのは、心に負った傷の違いからなのだろうか。私は震災についての講義を受けた時などは「まだ10年なのか」と思う。当時の話を聞くと、震災の日のことを昨日のことにように思い出すからだ。逆に自分が小学生などに話をする立場になるときは「もう10年も経ったのか」と感じる。どんどん震災を知らない世代が増えていくからだ。

まちは完全に復興したと感じている人が多いだろうが、まだまだ空き地が目立つ地域もある。空き地を見ると、「ここ、震災前はどんな家が建っとったんやろ？」とふと思う。そして、長田の家と重ねて見てしまう。10年経っても震災の傷が癒えていない人は多くいるだろう。私もその中の1人なのかもしれない。震災の映像を見ると眼に涙がたまる。胸が苦しくなる。きっと何年経っても傷が癒えることはない。それはそれでいいのだと自分勝手に思う。私は心に傷がある限り、絶対に震災を忘れることはない。しかし、1人1人思いは違うだろう。震災のことを絶対に忘れてはいけないということはないと思う。忘れたいという気持ちも、忘れてはいけないという気持ちもどちらも同じくらい大切だと思う。

私は地震の知識を学び、そのことを多くの人に伝えたいという理由で環境防災科に入学した。そして授業の中で、自衛隊、消防、ライフラインなど、多くの方々から震災当時の話を聞き、防災についての知識、教訓を学ぶことができた。しかし、いつからか「伝えること」に必死になり、自分で「学ぶ」ことを忘れていたのかもしれない。学ぶことは、ただ人から聞いた話を記録したり覚えたりするだけではない。この震災体験を書くことで、震災当時のことを今までで一番考えたかもしれない。そのことで、忘れていた当時の記憶を思い出すこともでき、もう一度地震について見つめなおすことができた気がする。自分で自分に学ぶことも多くあるのだと思った。地震についても教訓についても防災についても、何にしても、ただ伝えるだけではない。まず、自分自身が正しい知識を身につけなければいけないと思う。

阪神・淡路大震災は、多くの被害を出し、たくさんの人を傷付けた。しかし、この災害で私達が得たものが多くあるのも確かだと思う。“災害は無くすことはできないが減らすことができる”これは環境防災科に入って一番心に残っている言葉だ。100%でなくてもいいのだ。1つ1つの小さな積み重ねが減災に繋がっていく。そのことを忘れず、これからも災害・防災について学んでいきたい。

忘れられない日々

加古川市西神吉町
神吉 秀幸

① 震災の概要

- 1995年（平成7年）1月17日、兵庫県南部を中心とした大地震が発生した。震源は淡路島の北淡町の野島断層で数キロに渡って大きな断層面が地上に現れた。
- マグニチュード7.2という大型の地震で、史上初めて震度7が適応された。
- 後に阪神・淡路大震災と呼ばれるこの災害によって6000人を超える人が亡くなり、何十万という家屋が崩れ、焼失した。この地震では地震後15分以内に死亡した方がもっとも多く、家屋やタンスなどの家具の下敷きによる圧死が大きな原因となった。
- この災害では、情報がうまく伝わらず、政府も適切な判断が下せず、自衛隊や消防隊員の方々も救助活動などには苦勞した。他には、救助用の機材不足や食料や水の不足などで多くの住民が辛い日々を送った。
- この災害は戦後最大の被害を出す災害となった。
- この災害では、たくさんのボランティアが全国各地から駆けつけた。そのボランティアの人数の多さからこの年は、『ボランティア元年』と呼ばれるようになった。
- 阪神・淡路大震災で被災され、家の下敷きになった人々を助け出したのは消防士でも自衛隊でもなく近隣に住んでいる地域の住民だった。僕が考える大事な教訓として、『日頃から近隣の人との仲を良くし、いざというときはお互いに協力し合って、乗り切っていこう』というのがある。これは災害のとき以外でも協力することが大切だ。実際、淡路島の北淡町の方々は震災のとき、「この家のおじいちゃんはこの時間は一番奥の部屋で寝ていて、頭は南を向いている」など、細かなことまで的確にわかったそうだ。

② 地震が起きるまで

僕は、兵庫県の加古川市に住んでいる。地震が起きた年、僕は小学1年生だった。前年までは近くにある小さな幼稚園に通っていたが、そんな小さな幼稚園も卒園し、これからは新しいランドセルを背負い、新しい制服を着てすべてが新しいことだらけの小学校に入学することになった。幼稚園とは違い、並べられた机、たくさんの友達、大勢でする運動会や音楽会など、すべてが新しいことばかりで、毎日わくわくしながら学校にかよっていた。小学校では、友達や先生以外にも「先輩」という自分より年が上の人たちとの交流もあった。幼稚園までは自分と年の同じ人とばかり遊んでいたし、先輩との交流もなかったので、「お兄ちゃん」や「お姉ちゃん」ができたみたいな感覚だった。そんなこんなで毎日、楽しい日々をおくっていた。

③ 地震発生

1月16日は月曜日だったが、成人の日が休日と重なっていたために代休となっていた。前日に新しく買ってもらった大き目の自転車に乗って近所を走り回っていたのを覚えている。小さいときは新しい物を買ってもらったらうれしくなってはしゃぎたくなる。僕は、感情がものすごく表に出やすい子だったので、うれしくてうれしくて、大きくてまだ慣れない自転車をおもいきりこいで…おもいきりこけて、おもいきり泣いていた。しかし、いくら転ぼうがうれしさのほうが勝っているので馬鹿の一つ覚えのように繰り返し自転車に乗って走っていた。

今思えば夜になればいつも天井裏をドタバタ走り回っているネズミがこの日の数日前から急にいなくなったり、裏山に群れている鳥たちの姿がどこにもなかったりしてとても静かだったように思う。

そして夜になった。次の日は久々の学校だったのでとても楽しみだった。宿題を済ませてすぐにランドセルへ放り込み、時間割を合わせて用意もランドセルへ放り込んで、パンパンになったランドセルを自分の机のうえに置いて、晩御飯を食べ、テレビを見て、その後風呂へ入り、次の日をワクワクしながらその日は床に就いた。

そしてもうそろそろニワトリが鳴くころの夜明け前、運命の1月17日午前5時46分、ゴォーッと爆弾が落ちたかのような音と、台所で食器が割れる音、そしてトラックが家に突っ込んできたのでは

ないかというような激しい揺れで目を覚ました。その揺れで掛け時計が落ちてきて頭をかすめた。けどそのときは「地震や!」という意識があったので痛みさえも感じなかった。それくらい強い地震だった。たぶん今まで生きていうちに体験した地震の中で一番大きな地震だった。

地震はかなり長い揺れだった。地震に気づいてから揺れているあいだはずっと布団の中に潜っていた。学校で学期に1回ほどやる避難訓練では、「家が壊れたりするほど大きい地震は身近では起きないだろう」と不真面目になっていたが、実際に今、掛け時計が落ち自分の頭をかすめ、食器が割れガシャーンというものすごい音が響き、今にも家が潰れそうなほど強い地震が起きている。僕はものすごく怖くなって地震がおさまってもしばらく布団から出ることができなかった。

地震がおさまり、時間が経ち、もう揺れがこないと思った僕と父は、食器が割れる音のした台所へと試してみた。すると食器棚が半分倒れかけて椅子に引っかかっている状態だった。椅子があったから倒れるのは免れて食器が何枚か割れただけの被害だった。タンスやテレビやほかの家具や置物も少し傾いていたり、ずれてはいたが、壊れたりしたものはなかった。あれだけ大きな揺れであれだけの被害だったというのは運が良かったのかもしれない。その家具を2人で直し終えると6時前ということもあって再び床に就くことにした。

④ 地震が起きてからの1日

僕は、毎日7時過ぎ頃に起きて朝食をとり、洗面、トイレ、着替えを済ませて、時間が余ればテレビを見て、地区の集合場所へ行くのが日課だった。そしてその日もついさっき起こった地震がなかったかのように朝食をとり、洗面、トイレ、着替えを済ませて時間があつたので7時半ごろからやっている番組を見ようとしてテレビをつけた。そしたら黒い煙を上げて燃えているビルが映っていた。はじめは「火事かぁ」くらいにしか思っていなかった。しかしどのチャンネルに換えてもテレビに映っているのは激しく燃え上がるビルや家の映像ばかりだった。父も母もはじめは大きな火事としか思っていなかったらしいがあまりにもすごい火事だったので家族全員でニュースに見入ってしまった。すると今までヘリコプターから映されていた映像が、地上からの映像に切りかわった。その映像に映ったのは悲惨な状況だった。ほんの一部しか映っていなかったものの周りの家はほとんど崩れ落ち、ちゃんと建っているのは鉄筋コンクリートで固められたビルだけだった。その映像を観て祖母が「戦争でもおきたんとかうか?」とつぶやいた。本当にそういっても過言ではないくらいにテレビの中で長田の町が燃えていた。そうしているうちに学校へ行く時間がきた。(僕の住んでいる加古川では学校や道路などに少し亀裂が入ったが、地割れや家屋の倒壊、火災、停電もなくいつもどおり会社や学校があつた。)いつものように集会場に集まり、班のみんながそろそろ学校へ出発する。いつもは漫画の話や遊ぶ約束などを会話するのだがその日は早朝の地震のことが話題になった。そういえば地震のときは恐怖と緊張で痛みを忘れていたため全然なんともなかった背中の痛みが、恐怖と緊張が解けて次第に痛くなってきていた。その痛みで地震のすごさを思いだして話題が途切れることはなかった。

学校へ着くとまず担任の先生が連絡などをする『朝の会』というものが僕の小学校にはあつた。その朝の会では週明けということもあって、掃除当番を決めたりその日の日番を言ったりその日の予定など、たくさんの連絡があつた。その最後の連絡にやはり早朝の地震のこともあつた。当時の担任の先生は、神戸よりに住んでいたため僕の住んでいる加古川より揺れがひどかったらしい。食器棚は倒れ、テレビや置物も棚から落ち、自宅の壁に少しのヒビが入ったそうだ。そして朝に放送していたテレビのことも話された。あのテレビは同じ兵庫県の40キロほどしか離れていない神戸市の街の様子で、今朝の地震によって、木造の家屋や鉄筋コンクリートでできたビルまでが倒れていたこと。2次災害として、地震によってガスや石油ストーブなどが破損し、火災が発生してその火が次々に燃え移っていったテレビのような大火災になったということ。詳しい情報はまだそのときにはわからなかったが少なくとも今朝の大きな地震で同じ県内の大都市がめちゃくちゃになっているということはわかった。そして先生は教室にあつたテレビをつけた。そこに映っていたのは学校に来る前に観たときよりも火力を増した炎と、その炎の周りに集まったたくさんの消防車、そして空からも炎を消そうとしている消防隊のヘリコプターだった。朝、テレビを観てから1時間以上が経っていて、地震発生からは3時間以上が経っていたのに火が消えていないということもあって「どれだけすごい火やねん!」と思いつつ「消防士の人はなんで早く火を消さないんやろう」という疑問もあつた。テレビでは「放水用の水がなくなりつつある」といっていたが、小学校の僕から言わせれば、「テレビに海が映るほど近くに海があるのに海から水をくんで火を消したらいいやん。」と思う。今思えば、やはり小学生の考えることは単純なんだと思う。

僕らがテレビに見入っていると先生が「神戸のほうは大変なことになっているようですがもし神戸に家族関係の人がおられるなら先生のほうまで報告しに来てください。」とおっしゃった。そこで僕は須磨の

おじさんのことを思い出した。そのころはまだ須磨がどこにあるのかは知らなかったけど、神戸のほうにあるということは聞いたことがあった。僕は先生に「須磨ってどこにおじさんが住んでる」と言いに行った。僕以外にも5人ほどが神戸のほうに家族関係の人がいることを伝えにいった。するとそれを聞いた先生は大慌てで職員室に走っていった。そしてその時間は自習になった。大変な状況なのはわかったが、自分のおじさんが被害を受けているとは思えなかったので僕たちはその時間は教室で暴れたり、喋ったりしていたのを覚えている。

次の時間の半分が過ぎたくらいに先生が職員室から戻ってきた。そして神戸に家族関係の人がいるといった人1人1人を呼んで話をされた。後から聞いた話だが、ほとんどの家族の方とは連絡が取れたらしいが、1人の家族の人とは連絡が取れなかったそうだ。その人は長田に住んでいたらしく、運悪く亡くなられたそうだ。

そんな長かった朝の連絡が終わると何事もなかったかのようにいつもの授業が始まった。そしていつものように学校が終わりいつものように家に帰りいつものように家族に迎えられた。そしてテレビを付けてみるとそこにはまだ激しくも燃え盛る炎があった。「うそーッ!」と叫んでしまったのを今でも覚えている。もう半日以上が経っているのに朝と何一つ変わらない光景があった。違ったのは朝よりもさらに広範囲に広がった炎だけだった。僕はその光景が信じられなかった。このときに僕は「大きくなったら絶対に消防士になってこんな火なんかすぐ消してやる」と思った。このときの気持ちは今も変わっていない。「絶対に消防士になって1人でも多くの人を救ってやる!」と心に決めている。そんなことを思いながらこの日も終わりをむかえた。

⑤ 地震から1週間

地震から1週間が過ぎても地震のニュースは絶えなかった。1週間も経つと地震の背景がだんだん見えてきた。震源や地震の規模、被害の状況などもニュースで放送されるようになった。小学生の僕には何を言っているのかがあまりわからなかったが、震度7という地震の大きさがニュースで流れていたことははっきりと記憶に残っている。そして僕の住んでいる加古川では震度4だったということもこの時にわかった。震度4でさえ食器棚が倒れ、テレビなどがずれるほどの大きさなのに震度7なんてとても想像ができなかった。このころにはボランティアの人が続々と被災地に集まってきていた。そしてこの年は「ボランティア元年」と呼ばれるようになった。それ以外の僕の日常の生活は地震前と何一つかわらなかった。

⑥ 地震から3年

大きな被害を出した阪神・淡路大震災から3年が経った。このころのことは今でもはっきりと覚えている。復興が淡々と進み震災によって神戸の町から離れていた人たちも少しではあるが神戸の町に戻ってきていた。神戸から離れるといえば、僕の小学校の同じ学年にも3人の転入生が来た。そのうち2人は全く面識のないまま、再び転校していったが1人だけ同じクラスになった男の子がいた。彼は長田区からやってきたらしく、家は半壊だったそうだ。しかし彼は転入してきてから転校して行くまでの1年間、地震のことに對しては辛い表情は一度も見せなかった。僕は単純に「すごい」と思った。まだ小学4年生で人に気を使ったりするのも難しい年なのに彼はそれがちゃんとできていた。もしかしたら家では辛い表情を見せていたかもしれない。僕はそんな彼を今でも尊敬するとともに最高の友達だと思っている。1年間という短い期間ではあったがたくさん遊んでたくさん笑った。災害では別れもあり辛いことのほうが多いけど、新しい出会いや、災害によって気づかされることもあることをこのときに初めて知った。

このとき僕は剣道を習っていた。そして進級試験のために神戸の町にきたことがあった。神戸の町には至る所で復興の工事が行われていた。そして仮設住宅もたくさんあった。テレビではそこまで多くないと思っていた仮設住宅だが実際に見てみるとすごい数だった。大きな公園いっぱいには白い仮設住宅が並んでいた。震災から3年が過ぎてもこれだけたくさんの仮設住宅があるなんてやっぱり一度壊れたものを直すには大変な時間が必要なんだなということがわかった。

⑦ 中学生になって

震災からかなりの時間が過ぎて僕も中学生になった。僕は加古川市内の神吉中学校に入学した。中学校に入るとまた新しい友達がたくさんできた。そして中学校に入ると学校紹介があって、クラスごとに中学校の中を歩いて回った。その紹介で中庭を通りかかった時に担任の先生が立ち止まり、中庭の真ん中を指差した。そこには中庭に敷いてあったレンガを真っ二つにして、校舎にヒビいれている1本の亀裂があっ

た。先生の話によれば阪神・淡路大震災の影響で校舎の継ぎ目にあたるところに亀裂が入ったそうだ。そして地震発生当時は上の階で水などをこぼしたら下の階に流れてくるほど亀裂が大きかったそうだ。他にも水道管が破裂して3階が水浸しになったりと震災の影響が出ていた。

神吉中学校では毎年1月17日に阪神・淡路大震災の記憶を風化させないように追悼行事を行っている。そのために毎年1月12日に三宮の旧外国人居留地に行って「命の火」をもらってきていた。その火を1月17日に体育館で1人1人がもったロウソクに付け、震災のビデオを見ながら、亡くなった方のご冥福を祈った。他にも道德学習などで震災のことを取り上げたりもしていた。

⑧ 高校、そして今

僕は消防士になるのが夢だ。そのための近道になるかもしれないと思い今の舞子高校に入学した。舞子高校には震災後にできた世界でひとつだけの学科、環境防災科がある。僕はこの学科で阪神・淡路大震災のことや他にもたくさんの災害について学んできた。たくさんの講師の方のお話を聞き、実際に現地などで自分の目で確かめたりして新たに発見したことや、改めて地震の強さ、自然の恐ろしさを知った。阪神・淡路大震災での教訓もたくさん勉強することができた。たとえば、災害が起きてから対処するのではなく、その災害の被害を減らすために日ごろからの備えが重要になる、とか、震災での救助活動をもっとも行ったのは、自衛隊でも消防士でもなく近所の住民だったことから、日ごろからの付き合いというものがとても大切だということ。それに阪神・淡路大震災では情報がうまく伝わらなかったのが今後の災害では情報伝達手段の確保が大事などだ。どれも簡単そうだが完璧にできている家庭は少ないし、こんなことを知らない家庭も多いはずだ。だから身近なところからこつこつとやっていくことが重要だということ。

日本に住んでいる以上、地震や火山や台風などから逃れることは不可能だから災害とは常に隣り合わせにあるということを忘れてはいけない。阪神・淡路大震災だけではなくほかの災害のことも風化してしまったら、また同じことの繰り返しになってしまうし、そのときまで生きていた人も存在が忘れられてしまうことになる。これからまた大きな地震、東海・東南海・南海地震が来ると言われている。そのためのために阪神・淡路大震災で学んだ教訓を活かしていかなければならない。

自然を理解して、災害と僕らの生活とは常に隣りあわせだということを忘れてはいけない。

震災から・・・

神戸市西区
木原 昌昭

「あけましておめでとう」1995年、1月1日、0時0分。新年が始まる。そしてその17日後、おめでたい気持ちとはまったくの逆になってしまうあの大地震が神戸を襲った。1995年、1月17日、午前5時46分。阪神・淡路大震災発生。

1月16日、阪神・淡路大震災の前日。この日は家の片付けをしていた。自分の部屋、リビング、台所などきれいに整理整頓をしていた。そして夕方。家族全員で食事。そのとき、少し「グラッ」と小さい地震がおきた。震度1だったのだろうか。その辺はわからないが自分が今覚えている地震はこの地震が最初だ。そのときは揺れたことを喜んでいたような気がする。その地震は家族全員の頭からすぐに忘れられていた。そしていつものように寝た。父親は自分の部屋で、母と自分と姉は一階で寝ていた。

ハッと目が覚める、そしたら真っ暗で何も見えない。しかし、母に布団のなかに入れられてその中でわけもわからずに着替えをした。「なにをしているんや？」と思った。さっぱりわからなかった。そして2階から父の声が聞こえた。その時何が起こったかを知らされた。大地震だった。その時寝ていた。おきなかった。熟睡だったのだろう。少しして外に出た。出る最中に家の中の状況が見られた。タンスなどの家具は倒れていて、台所は一面真っ白。そう、食器類がほとんど飛び出し割れていたのだ。決していつものようにはだして入っていける状態ではなかった。今思うに食器類があれほど割れていたのに気づかずにいたとはすごい。

自分の家族は外に出るのが近所で一番遅くて仲のよい近所の人が呼びに来てくれた。その人は焦っていたような感じだった。出ると外は寒かった。1月の明け方は家の中でも布団から出たくないほどなのだから非常につらかった。外に出ると近所の人たちみんな出てきていた。近所に住んでいる人全員亡くなっていなかったし怪我もなかったと思う。よかったことだ。すこしみんなパニックになっていたような感じだった。そろそろとたくさんの人が学校に向かっていた。家から小学校までは近くて玄関を出るとすぐ学校がある。だから家の前の道は小学校に行く人の通路になっていた。その家の家族と自分たちの家族もとらずにその小学校に避難した。

体育館ではすでに多くの人がいた。狭いスペースではあったが何とか自分たちの場所を確保した。毛布などの防寒具が配られ寒かったのが少しましになった。体育館の印象としてはいつも暗かったように思う。昼でも何か暗かった。寝ている人、しゃべっている人いろいろいた。自分は何をしていたかというところと近所の一番仲のいい人の子供と人生ゲームをしていたことがうっすらと記憶にある。体育館での人生ゲームはたぶん一生でもう体験しないだろう。体育館の中は暇だった。なにも楽しめるものがないわけで面白くなかった。いつもだったら学校は学校でも教室にいるはずがいまは体育館にいてなにもしていないのだから。マンガもないところで1日を過ごすのはしんどかった。他にも子供はいたがみんな退屈そうに寝ている子もいた。だが全体的にテレビを見ている人が一番多かった。ここには1台のテレビがあった。そこではニュースがずっと放送されていた。自分もテレビを見に目の前までいった。いった理由はテレビを見るためでもあるのだが、前に「セーフティーマット」がありそこに寝転がりたかったというのもある。ちょっと見に行ってみようと軽い気持ちで思っただけでいったのだが、そのときの映像ははっきりと今も覚えている。というか忘れられない。真っ赤で映っているところがどこかさえもわからない。ヘリコプターの音と火、アナウンサーの何度も同じようなことをいっている言葉しかないのだ。当時はどう思ったのか覚えていないが悲しい思いや、絶望感みたいなのはなかったように思う。だが自分たちがいた場所の上に電気があった。それが、数回余震が起き、大きく揺れて今にも落ちてきそうだったのが怖かった。今、親にきくと「体育館で熟睡していたのはあんただけや」と言う。恐怖というものがなかったのであろうか。

自分とは正反対の位置にいる一番つらい思いをしたのはやはり高齢者だろう。寒さや空腹はつらかったと思う。自分たちがいる隣に高齢者がいてなにも食べるものを持ってきていないようだったので「どうぞ。」とせんべいをあげた。「ありがとう」と言ってくれてうれしかった。せんべいは結構非常食にはいいかもしれない。のどは渇くと思うが長持ちするし炭水化物なのでエネルギーも補給できるからだ。せんべいはもし家にあったら非常時にはもっていきたい。

避難所での生活は1日だけだった。しかし、1日の間にもパン、おにぎり、水の配給があった。水はボランティアの人が持ってきてくれたと聞いた。車いっぱい水を持ってきてくれて本当にありがたかった。自分がボランティアをみたのは震災中でこれが最初で最後だった。「震災のときに避難所生活をした。」という人に比べれば短い時間だったが早く家に帰りたいし、体育館での生活はしんどいものだった。自分たちが避難所で生活中、親がいないときがあったので多分それはいろいろ家にいたりして働いていた

のだと思う。小学1年生は食料をとりに行くことしかなかった。ほかにもなにかやれることはあったのではない。最近授業をしていて思うときがある。今の小学1年生はもし震災が起ったらどういう行動をするのだろうか。正直自分の震災体験は人よりも少ないと思う。ほとんどおぼえていないものもあるが、あまり被害が出なかったのでいったん引っ越すとかいうことはなく、この学校での1日だけの避難所生活が主な震災体験だ。思ったことや感じたことも忘れてる。もしかしたらもっと他になにかあるのかも。そう思うときがある。もっとちゃんと覚えておくべきだった。

地域の震災による行動としては良いとはいえなかった。震災が起こって食料はどうしたら良いのか。水は？今からどうすれば良いのか。そういうことをほとんどしてくれなかった。結局どうしたかという隣の地域の助けで、そういう問題を解決することができた。1つの地域としての役割を果たしていないと思った。地域をまとめる人がいないと思う。そういう地域は何が起こっても対応しきれない。自分が住んでいる地域がそれぐらいだったということで今は不安だ。地域のつながりは重要な要素だというのはわかったはずなのにいまだになにも対策をとっているようには感じられない。まったくこの地域は大丈夫なのか。

震災から1日たった日、家に戻った。そうすると、まだ水は出なかった。だからトイレに困った。なぜかという水が出ないから流すこともできなかったからだ。だから小学校のプールの水を持って帰って流していた。そのときは水だけが出なくてほかのガス、電気は大丈夫になっていた。地震発生直後のあの時は暗くてよく見えなかった家の中がはっきりと見えた。台所の食器の破片の散乱。台の上においていたものがすべて落ちていた。テレビなどは落ちていなかったと思う。内側の壁の一部がはがれており外にはひびが入っていた。2階に行くと姉の部屋のドアが開かない。何とかして開けてみるとピアノが地震の揺れでドアにまで移動していたのだ。それだけではなくほかにもものが落ちたり壊れたりしていた。幸い自分の部屋はガラスケースの上においていた「LEGO」のバケツが落ちただけだったのですぐにかたづけることができた。ほかの部屋は物が落ちていたりこわれていたりでめちゃくちゃだったのになぜ自分の部屋だけほとんど被害がなかったのかは今でも不思議で謎だ。屋根は瓦がところどころ割れてはがれていた。外から見た家は地震前とは違っていた。被害を受けたというよりはひびがいつているだけなのだがどうも雰囲気は違っていた。もう一度同じ地震がきたらつぶれそうだなと思えるものだった。

地震後初めて小学校が始まった。始まったのは何日後か覚えていない。学校に行くと幸い怪我をして入院した子やなくなった子はいなかったのよかったが2人ぐらいが九州のほうに行っていていなかった。しかし同じ校区に住んでいる人の家でも被害の大きさがかなり変わるのだなと今思う。特に地震前と後とで何か変わったというものではなかった。授業も普通に行われたが、歌を覚えさせられた。「しあわせ運べるように」という歌だ。学校での避難訓練のときはいつも歌っていた。地震のあとに特別なことをしたというのはこの歌と道徳の時間に地震の本を読んだことぐらいしか覚えていない。もっと他にもいろいろしたりしたのだと思うが小学校1年生の記憶は少ないものだ。

地震から数週間。家の壊れた部分を直した。壁のはがれている部分をぬって補強をし、新しい瓦をつけた。1日中かかった作業はしんどかった。しかしそのときに初めて家の屋根の上に登った。そのことだけが楽しかった。瓦はずれていて割れているものもあった。それを取り除きとりあえず新しい瓦をおいた。「ゆれただけなのになんで瓦が割れるのだろう」と思ったのを覚えている。そして一応作業は終了した。周りの家はまだ途中のところやまったくしていないところもあった。それぞれ被害の少ない多いはあったが作業は必要な家ばかりだった。家だけではなく被害があったところの撤去作業も行われていた。

そのころ、JRはもとどおり運行していたので母と三宮方面に出かけていっていた。明石、朝霧、舞子、垂水、須磨……。どんどん三宮に近づいていくと須磨をこえたぐらいからショベルカーとかが見えてきた。高いビルはほとんどなく、一面灰色化していた。一番ひどかったのは兵庫で、目に見えるものは工事をする機械とガレキのみ。本当にそれだけしかなかった。人もいない。そこには機械の動く音しかなかった。この風景は今でも覚えている。よっぽど衝撃的なものだったからだ。三宮についてもほとんど同じだった。人は多くはないがいる。しかし駅前の「そごう」の1階はめちゃくちゃで歩道に崩れだしていた。街全体をみると戦争でもあったかのような感じだった。栄えていた三宮がこんなことになるとは。テレビで見た風景と同じ。そしてここも機械の音が聞こえる。今の三宮といえば震災から復興してきれいな街になっている。まるで地震がおこっていないかのような。少し西にいった兵庫のほうではまだ復興できているのかよくわからない。街はそんなにきれいとはいえない。三宮に用がある場合、西明石から電車に乗っていくので兵庫あたりを通ると地震で大変な被害が出たのだと思うのだが三宮駅につくと地震のことは頭に浮かんでこない。震災を風化させないようにすることは三宮に住んでいる人とかは少し難しいのではないだろうか。そこまで三宮が復興したことはすばらしい。できれば兵庫も三宮のように地震があったのかわからないようにまでなってほしい。けど、まちはそうなくてもそこに住む人々はずっとあのがれきだらけだったまちの光景を忘れずにいてほしいと思う。

小学校3年生から中学校1年生ぐらいまでは震災のことを忘れていた。だが中学1年生の1月17日ぐらゐに担任の先生が「1月17日は休日にしたほうがいいと思う」といわれてから震災のことを少しずつではあるがとてもつらいことなのだなと思ひ興味を持ち始めた。主に震災体験の本を読んだ。当時中学生の人や大人のひとといろいろな世代の人が書いていた。その中で一番真剣によんだのは同い年の子が当時書いた震災体験だ。読んでみるとその子は親を亡くしていた。その文章の中身とは違って自分は誰も怪我もなしで大丈夫だった。あたりまえだがその自分と文章を書いていた子との震災の感じ方はちがっていた。自分は小学校の文集で地震のことを書いた。そこには辛いことというか非日常的なことが起こったことに対して楽しかったような作文だった。自分の書いた文章とはちがうその文章を読んでいると自分もなにか悲しい気持ちになった。ただ、住んでいる場所によって人が亡くなったり亡くならなかったり。「自分たちは運がよかったですねなのだ。」と思った。それだけに悔しい思いがあるだろう。もし違うところにすんでいれば大丈夫だったかもしれない、そう思ってしまうのではないか。中には地震の数日前に神戸に引越して被災したという人もいた。なんともいえない気持ちだった。

地震から数年たつとテレビはほとんど阪神・淡路大震災のことを放送しなくなった。だから忘れる人も多いのだろう。被災した人でさえも記憶が薄れてきているのに、東京などの他の地方の人は完璧に忘れていると思う。だから次に大きな地震が起こったときに対応が遅れたり死者が増えたりしてしまうのだ。どんなことをしたら役に立ったのかなど、いろいろためになることがあるのにそれを忘れてしまうのはもったいない。今年震災から10年がたったということで地震がいろんなところで取り上げられてきた。それを見てそういえばこんなことあったなどとテレビで思い出すことができた。家族ともう一度震災のことを思い出して地震対策をした人もいるだろう。忘れかけていた記憶を取り戻した人もいるだろう。それは良いことだ。だがテレビでは「震災の記憶が風化している。それではいけない。」などということをよく言う。そんなことをいうのであればなぜ震災のことを10年目になるまであまり放送しなかったのかと思う。テレビは非常に大切なものだ。情報を得るためには欠かせない。だからこそもっとテレビで地震の恐怖やつらさ。非常時にはどうすればいいかなどを放送してほしい。人は1回言われただけでは長い間覚えておくことはできない。だから10年目だからくぎりの時期しか放送しないのでなくいつでも定期的に放送してほしいものだ。ただテレビがいくら放送しても人々がそれを見なければいけない。人々が震災の意識を持つことがまた重要になってくる。難しいことはわかっているがどうすれば意識が高まるのかを考えて答えを出したいと思う。テレビのほうも同じように人が災害に興味を持ち意識を持っていくためにはどうすればいいのかを考えてほしい。そしてわかったらそれを実行してほしい。

「しあわせ運べるように」この歌はさっきにも触れたように地震で大きな被害を受けた神戸の復興を願って作った歌で小学校のときに覚えさせられた歌だ。「覚えさせられた歌」確かに小学生のときはこうだったのだ。しかし今ではそうは表現しないだろう。小学生のころは地震でたいした被害を受けなかったし身内が亡くなったりしていなかったので震災を大きなものと思っていなかった。だから避難訓練のときに歌うのはなぜかわからなかったし、正直めんどくさいものだった。去年震災10周年ということだったのでメモリアル行事でこの歌を歌った。「しあわせ運べるように」を歌うことになった。と聞かされたとき高校生にまでなってまで歌うのかと思った。小学生のころから長い間歌っていなかったしほとんど聞いたりしていなかったのに歌詞やメロディーは覚えていたことが自分でもびっくりだった。練習をしていくうちに歌詞の意味をよく理解できるようになった。環境防災科に入って震災で大きな被害を受けた人のことや復興作業をした人などの話を聞いてその当時の大変だったことを覚えているからだ。そうしてじっくりと歌詞の意味を理解していくと、被害を受けた人にとっては本当に勇気づけられる歌だなとわかった。この歌で励まされる人が1人でも多く出てきたらいいと思えるようになった。小学生のころとは違うこの歌の重さを感じ取ることができメモリアル行事のときは感情をこめて多くの人に頑張ってもらいたいと思って歌うことができた。小学生のときに歌っていたからこそこういう風に感情をこめて歌えたのかもしれない。申し訳ないという気持ちがあるからだ。もっと真面目に歌っていたらよかったとおもった。「地震にも負けない強い絆をつくり、なくなった方々のぶんも毎日を大切に生きてゆこう。」一番好きなどころである。何が起ころとも切れない強い絆を作って最後の最後まで一生懸命生きていきたいと思う。

震災を体験した自分たちにとってとても助かったのはボランティアの存在だった。だからというかはわからないがボランティアには興味がある。最近起こった台風23号の水害の被災地、豊岡へボランティアに行った。そこの光景はすごいものだった。地震の光景とは当然だが違っていた。水が来たというドロの線が民家の2階にあってすごいところまで水がきたのだと思った。台風23号の水害のボランティアに行った人のなかには神戸の人がたくさんいたらしい。その人たちに何で来たのかを聞くと、「阪神・淡路大震災のときにたくさんのボランティアにきてもらってたくさん助けてくれた。今度は自分たちがボランティアをしてあのときのお礼をしたい。」という人がほとんどだったらしい。こういう風な人が増えていってくれたら災害に強い国になると思う。阪神・淡路大震災の被災者は日本のどこかで災害が起こったらボ

ランティアに駆けつけている。前の新潟中越地震のときもそうだった。だからこれからも災害があったらボランティアにいくだろう。そうするとその被災地の人がまたお礼としてどこかにボランティアに行く。という風になると災害には日本全国から多くの人がボランティアにくるようになるということから思うのだ。人が人を助けるということの大切さ。その人とは専門の仕事をしている人だけでなく一般の人も助け合うということが災害復興には一番の近道になる。というのが震災を体験してまた、高校で勉強してわかってきた。だからもっと多くの人が日本全国、いや世界中でおこる自然災害に興味を持ち、直接現地に行くことができなくても募金をするとかの援助をすることが大切なのである。

阪神・淡路大震災でたくさんのものを失ったが得たこともあった。だから地震がおこってよかったこともある。という風に聞くと自分はそう思わなかった。地震が起こっていいことなんて絶対はない。人が死んで建物が倒れて……。だめになったことばかりなのにどこにいいことがある。と思う。けど、「じゃあ震災によって人々の助け合いが生まれたではないか。ボランティアができたではないか。」といわれると今まで「確かに……。」と、しか思えなかった。これは震災の勉強をしてきて高校1年からずっと思っていたことだった。けど、ようやくこの文章を書いていてその答えというものがわかった。それはやはり阪神・淡路大震災がおこって得たことや良かったことはない。ただ、震災がおこって復旧、復興するときの過程で得たことがたくさんあるのだと。地震が起こって人と人とのつながりがあったら大丈夫だというのがわかったし、避難所での心のケアが大切だとうのもわかった。他にもいろいろある。過程によって神戸の人がいろいろなことを得たのである。だから今日までにわかった強い地震に対する建物の対応やどういうところが安全で危険なのかということはすべて自分たちで見つけ出したことなのである。日本中の人を知っていなくても自分だけが知っている震災対策とかがあるかもしれない。自分はせんべいが結構避難所でやくにたつとわかったし、ボランティアがいかに大切な存在になっているか。それに基本的なことだが家具の固定。こうすれば大丈夫ということがわかった。1人ひとりがそういうことを自分の中で増やしていくことが大切だ。ただ、記憶は忘れやすい。風化というものだ。震災の記憶が風化してしまったら全く震災で得たことの意味がない。自分も小学校1年生のころの記憶が風化していると思う。だが完全には風化していないので避難所生活のしんどさや家の修正をしたことはしっかりと覚えている。風化していないのは環境防災科に入ったからであると思う。もし他の高校に行っていたら阪神・淡路大震災のころのことは全く忘れていると思う。だから震災の記憶を風化させない環境をつくりだすことが大事なのかもかもしれない。

地震は恐ろしい。地震で多くの人が命を落とす。しかしそこでずっととまっていたはいけない。地震が起こって人が命を落としたことは過去になり過去を見るのではなくこれからはこの先を見ていかなければならない。それが亡くなった方々のぶんも毎日を大切に生きていくことにつながる。過去を振り返りなにか得ようとするのも方法のひとつではあると思う。しかし復興に向けてこれから生きていってその途中になにか次の地震に対しての方法がわかってくると思う。多くのことを得ることができるかもしれない。多すぎて全部は無理だ、とは言わずに全部自分のものにしてほしい。それが必ず自分自身を地震から守るものとなるし大切な人を守ることもできるからだ。

あの震災を体験して今、上で書いたようなことを感じたり得ることができた。なかでも一番震災から感じ取ったこと、それは「命」を大切にすること。自分の命を一番に。そして他人の命も大切にすること。命があればなんでもできる。だから震災が起こったらなにがなんでも命を守り直後はつらくて死にたいことがあるかもしれないけど必ず楽しいことがこの先起きると信じて生きていきたい。

震災について

神戸市西区
小林 貴把

1、震災当日

阪神・淡路大震災が起こったのは1995年1月17日で僕は小学校の1年生だった。小学校1年のこの学校生活などの出来事の記憶はほとんどないけれど、阪神・淡路大震災直後からのことは今でもかなり鮮明に思い出すことができる。人は恐怖体験を忘れないというけれど、小学校1年の自分も例外ではなかったようだ。それだけ、衝撃、ことの重大さが大きかったように思う。

このとき僕は、神戸市西区の西神中央駅から程近いマンションの3階に住んでいた。このマンションには12階建ての大きい棟と、3階～5階建ての小さい棟に分かれていた。父は姫路に単身赴任していたので、家に居たのは母と、2歳の弟と、自分の3人で暮らしていた。

震災の日の朝、いつものように母と弟と畳の部屋で寝ていた。地震にはまったく気づかなかった。その後あった余震でもすごく怖かったので、震度7を経験しなくて幸運だったように思う。ぼくが気づいたのは母に起こされてからだ。僕は何がなんだかかわからず、まだ暗い窓の外を見ながら「何なん？」母に尋ねたけれど、母は「リビングには、行ってはいけない」というだけだった。明るくなり始めてからわかったけど、リビングはガラスが散乱していた。母は「地震が起きたの」といっていたけどたぶん、地震が何かあまりわからなかったような気がする。それに、そんなに深刻には考えていなかった。それからすぐに着替えた。布団に座っているともう夜が明けていた。地震が起きてすぐ、いや、地震のあったときにはすでにかなり明るくなっていたのだろう。すぐに外に出て、隣のTさんの家に少しの間居させてもらった。父がずっと姫路に単身赴任をしていたので、母、弟、僕では余震に対して心細かったのだろうと思う。Tさんの家には、そこのお父さんがいたので大人の男の人がいると心強かった。Tさんの家に行ったら少し安心できた。しかし、Tさんの家は食器棚から食器が飛び出してほとんどが割れてしまっていた。そのほかに塩が散乱していたり散々だった。その、高校のお姉さんが、自分の何かが割れていたらしく「最悪やあー」などと言っていた。何か切なかった。その後30分ぐらいてから、家族3人で外にでて自分の家がある3階から外を見渡した。すると、見た感じではマンションにあまり変化はなかった。しかし、隣の棟の、同級生の友達が学校へ行こうとしていたので、母が「今日学校ないよー」と叫んだが、聞こえていなかったようなので僕も同じように叫んで、やっときづいて、「そーなん？」というような顔をして帰って行った。

「学校がなくなるなんてすごいことだな」と思った。それから、3階から下に降りてみた。すると僕の家のある棟の目の前にある草木に水やり用の水道にマンションの人たちが大きなごみ用のバケツなどを持って行列を成して並んでいた。そこでやっと水道が止まっているのだということに気がついた。その水道は何とか出るようだった。うちも、すぐに水を汲みにいった。列は長かったけれど、すぐに順番は回ってきて水を汲むことができた。その後、大きい12階建ての棟のマンションを見上げながら、人が集まって何かを話しているのを聞いた。それによると、大きい棟のつなぎ目の鉄板がはがれているというものだった。僕は急に不安になった。なぜなら、僕の住んでいる4階建ての棟は大きい棟の正面にあったのだ。倒れてきたら、ひとたまりもなかった。けど仕方ないので、一端家に帰ったけど、食器棚から、かなりの食器が飛び出し割れていた。ここで、やっと地震直後に母がリビングには、行ってはいけないといっていた意味がわかった。

その後、しばらくの間、寝ていた部屋に居た。その部屋は大きな家具があったけれど、重すぎて、倒れなかったようだった。電話がつながらなかったで、父や祖父に連絡をとることができなかった。そうして、何時間が、たっただろうか。水道がつかえるようになった頃、父が姫路からバイクで帰ってきた。父は「無事でよかった」と安堵の表情で3人を抱きしめた。父が帰ってきてすごく安心した。それからすぐに、自宅から、父の母と、父の祖母がいる長田へ車で向かった。渋滞、渋滞、また渋滞に巻き込まれながらも、通常なら当時35分ぐらいていける道のりを2時間ぐらいかけて祖母のいる長田区西山町の家に着した。2人とも無事だった。行ったとき、祖母は、2階ではがれた壁などで砂だらけだった床などを掃除していた。それを見て父は「こんなときに何しとんねん」と祖母に怒鳴った。この家は一戸建てで、かなり築年数は経っていたけれど、壁がはがれるくらいしか被害がなかったのは本当によかったと思っている。やはり、ここも電気がきていないようで、祖母の母の電気毛布が使えないのに困っていた。ここよりみんなで西神にいたほうが安心だろうということで、みなで西神に行くことになった。隣の家の祖母の友達のSさんの家は半壊状態だった。なので、困っている人はほって置けない父がSさん夫婦もつれて

帰ることになった。

西の空を見ると赤く染まっていた。黒煙がでて誰が見ても火事が起こっているのがわかった。それは今にもこっちに迫ってきそうな勢いで恐怖を感じた。車は5人乗りだったので、家族4人と祖母とその母が乗って6人。小さい弟は母のひざに乗っていた。Sさんには「おばちゃん、すぐ迎えにくるからな。火が迫ってきたら東に逃げとけよ、絶対行つたかならな」と父は言った。そして車をとばし、渋滞に巻きこまれ、西神に到着した。そこで父はみんなを下ろし、すぐまた、長田へ向かった。僕も父や、Sさんが心配だったので、一緒についていった。長田へ行くと火はまだまだ迫ってきておらず、ほっとした。しかし、火はこちらへ近づいてきている感じだった。すぐにまだ若いSさん夫婦を連れて帰った。長田を出るとき「もたもたせんとはやく」とSさんに父が言っていたので、小1の僕は単純に「このへんも次来るときは焼けてないのかも」と思って寂しく、複雑だった。こうして無事、長田の4人は西神に避難した。

夕方頃になると、電気、ガス、水道のライフラインがすべて回復していた。またとまるかも知れないので、母は風呂、ペットボトル水をためた。それから、叔父、叔母もこっちに避難してきて、一気に、家族が10人になったけどにぎやかで楽しかった。いや、正確には11人いた。叔母のお腹の中にはもうすぐ生まれる赤ちゃんがいたのだ。叔父たちも長田に住んでいた。アパートにすんでいて、本当の家は当時人に貸していた。しかし、そのアパートはライフラインがまったく通じておらず、困っていたので父が呼んだらしい。

広島市の北の東城町には母の父母がいる。電話がつながって母がどうかきいたら、あっちは震度4でほとんどなんともなかったらしい。今考えれば淡路で起きた地震が広島市の北まで影響を及ぼすとはよっぽど大きな地震だったということがうかがい知れる。でも、広島もなんともなくて本当によかったと思った。

テレビをつけると阪神高速道路が倒れたことや倒れたビルのこと、何より印象的だったのは、高速道路が切れて、崖っぷちでバスが止まっている光景だった。ニュースは悲惨な被害の状況を伝えていた。ここで、やっとことの重大さを痛感した。自分たちの知らないところで、しかも近くでこれだけのすごい被害が出ているなんて、信じられなかった。あの長田で見た火事のことだと思われることも、何回もやっていた。僕の家は自分の部屋の本棚の引き戸が壊れたり、さっき書いた食器が割れたというものだった。しかし、ニュースを見ているとそんなのは被害のうちでないと思った。本がばらばらになったけどそんなのまた直せばよかった。ひとつショックだったことはこの3日ぐらい前に、初めて自分で買ったガラスのコップが割れてしまったことだった。値段は500円だったけど、小学校の1年のときには大金だった。それから、このことをたくさんの人に言った。本当に落ち込んでいた。今ではどんなコップだったか定かに覚えていないけれど、それがあったから、この文を書くのに地震のことを思いだすきっかけとなっているような気がする。それと、最悪の地震をいつまでも忘れない糧になっていけばいいと思う。

2、それからの生活

ここから、新たな生活が始まった。小学校は、1ヶ月ちょっとは休校だった。理由は体育館や教室が避難所になっているためだった。地震の翌日、朝早くに家の前のダイエーに買い物に行くと、開店前から行列ができていた。水のコーナーが入り口の目の前にあったり、1人何個までという商品が多々あったり、人の数が半端じゃないなど、いつもとぜんぜん違う雰囲気だった。教科書の写真で見たことがあるオイルショックの時のような感じだった。しょうがないので買えるものは買えるだけ買った。レジもすべてフル稼働だったけれど、今までに見たことがないぐらいの長い列ができていた。それに、買い物したものをダンボールに入れてもって帰ったのも初めてだった。いつ水が出なくなるかも知れないので、寝るときは、風呂などに水をためた。10人いたのでリビングから横の畳の部屋まで布団を敷いて雑魚寝だった。足りない分はコタツを布団代わりにした。けれど全然不自由なく寝ることができた。僕はコタツが好きだったのでコタツで寝た。普段だと風邪ひくと確実に叱られるので、そこで寝れてうれしかったのを覚えている。

地震から何日かして、祖母と父とSさんとで長田の家に行ってみた。あの西に空を赤く染めていた火事はいつの間にか消えていていつもの空に戻っていた。僕は興味本位でSさんの家に上がらせてもらった。電気はついたけれど隙間風が寒く、2階はかなり壊れているみたいで上にはあがらせてもらえなかった。2階がどうなっているのかすごく気になった。けれど、もし上がって、みたことがないぐらいすごいことになっていて、恐怖を覚えるのも怖かったので、それ以上は何も言わなかった。「怖いものみたさ」という言葉があるけれど、まだ小さかったので、今思えばみてショックを受けなくてよかったと思う。祖母の家の被害はというと2階の壁がはがれ落ちていたことと、風呂のタイルがはがれていたことぐらいだった。その状況を見てから、その近くにある父の同級生のやっている工務店にいった。話によると、ライフラインがまだ完全に回復しておらず、風呂に入れなのだという。祖母もその工務店と仲がよく、その家族3人に西神で風呂に入りに来てもらった。父は「泊まっていけばいい」と言っていたけれど、さ

すがに人数が多かったのに気を使ったのか、帰っていった。それから、何日間かは風呂を借りに来た。人数が多くにぎやかで楽しかった。帰っていくとき「すっきりした」といって喜んでくれていたので自分は何もしていないけれど何かいい気分だった。

このころのニュースはビルが今にも倒れそうだというもの、避難所の様子、地盤が沈んで液状化現象になっているところに、車をはまっているところなどの映像を見ることができた。このころ友達とも遊べず、すごく暇だったので、ニュースをずっと見ていた。というより、テレビをつければ、すべてが地震関連のニュース・情報だった。ずっと震災のニュースばかりだったけれど身近なことなのですごく興味をもって毎日見ていた。今では「ボランティアしよう」などということも考えるけれど、この頃はボランティアという言葉さえも知らなかったように思う。しかし、ニュースを見ていて、「ボランティア」という単語を聞かない日はなかった。それだけ、この震災でボランティアが活躍していたように思う。

地震から3、4日すると父は姫路に仕事にいき、それまで、ずっと単身赴任だったけれど、一段落するまでは毎日帰ってきた。Sさんのおじさんも、仕事に出かけるようになったが毎日西神に帰ってきた。働いている男2人は、帰ってくるのは10時を回ったりすることもあったけれど、寄り道をせず帰ってきてくれた。まだ、余震が続いたので男の大人がいると心強よかった。

2週間がたった。一番早く帰っていったのは叔父と叔母で、この頃になると住んでいたところに戻って行った。叔母の出産はこれから、1ヶ月ぐらいいしてからだったと思う。地震を乗り越え、無事で本当によかったと思う。その娘はいま、小学校5年生になって、元気に育っている。この時期のニュースはというと避難所（学校の体育館）の様子を伝えるものが多かった。避難している人々は長い期間いることで、精神的にまいって疲れた様子だった。テレビの取材に対して、何が欲しいというのを訴えていた人がいた。食事は、おにぎり、焼きおにぎり、炊き出しの豚汁や、パンなどで、被災者は並んで、ボランティアが均等に配っていた。あるものしか食べられない戦争の配給のようだった。避難所にはやっと自衛隊の建てたお風呂ができていて、被災者は声をそろえて「すっきりした、ありがたい」といっていた。僕はテレビ越しに「よかった」と思った。避難所では自衛隊の活躍が目立っていたように思う。

3、震災から1ヶ月

震災から、1ヶ月をたってもテレビは、避難所、焼け跡などのニュースを映し出していた。避難所では、仮設住宅の抽選が行われていた。倍率が高いようで、「ぜんぜんあたらへん」といっている人が多くいた。子供ながら何とかならないものかと思った。体育館など、プライバシーがないところで、何ヶ月もいるなんてストレスが溜まらないわけがない。政府はもっと緊急に、仮設住宅なり、簡易住宅なりをつくらなければならないかと思った。

このとき、決まりが悪い事件が起こっていた。壊れた住宅への空き巣だ。いろんな人がいるけれど、こんなときに盗みを犯すなんて、どうかしていると思う。警察などがパトロールしているといっていたけれど、絶対に捕まえてほしいと思った。

4、震災から3ヶ月

震災から2ヶ月ちょっとたってやっと小学校が再開した。幸い学校で大きな被害を受けた生徒はいないようだった。このときは、まだ昼までで、3ヶ月たったぐらいでやっと通常の授業が戻ってきた。けれどまだ特定の教室には避難している人がいるということで、「そこには行かないように」という指示があった。早く避難している人の仮設住宅が見つかりたいと思った。

テレビではまだ仮設住宅の抽選が続いていた。早く見つかるようにと願った。

うちに来ているSさんは家を建て替えるために、家を壊した。壊すのを僕も見に行かせてもらったけれど、機械でつついただけで、簡単に壊れていった。まるでスプーンでプリンを突っついているようだった。

5、震災から半年

震災から半年がたった。テレビやニュースでは少しずつではあるが震災関連の番組が減ってきていた。内容は避難所のことや、1人の被災者の震災からこれまでなど様々だった。自分の住んでいるまちはほとんど被害はなかったけれど、唯一の大きな被害と断言できる高層のマンションの鉄の板が外れていたのが直った。

長田のSさんの半壊した家は建て替えが始まっていた。依然として西神で一緒に住んでいたのもまるで家族のようだった。おばちゃんにはたまに買い物に連れて行ってもらったりして楽しかった。祖母は家の

事をしに家に帰るようになった。やっと片付いたようで西神から長田に帰っていった。

小学校ではクラスに転校生がやってきた。転校前は灘区に住んでいたAくん。地震で被災してこっちにきたらしく、その子は、小学校の前の広い公園に、地震後出来た仮設住宅に住んでいた。仮設住宅は駅に近い広大な公園にも多く造られていて、地震があったのだということを痛感させられた。Aくんの仮設住宅にお邪魔したことがあったけど、中は狭かった。我慢すれば住めないことはないと思ったけどやはりちゃんとした家がベターだと思った。A君は幸い直ぐ引っ越していった。寂しかったけどちゃんとした家に住めることになってよかったホッとした。

6、震災から1年

震災から1年がたつころには、Sさんの家も完成し、西神から出て行った。帰る時、毎日いて親しくしていた人がいなくなる寂しさから少し泣きそうになった。

家の近くの仮設住宅にはまだ、多くの人が残っていて撤去される見込みはなかった。その後、2年半ぐらいたって撤去されていった。仮設住宅がなくなるとその敷地の広さに驚いた。

7、現在

今年で震災から10周年になる。1年ほど前に、灘の人と防災未来センターに見学に行った。その時、震災シアターというようなところで地震の再現をみて、凄まじさに驚いた。これだけの凄い地震は日本でもなかなかないと思った。これだけの地震が残した教訓は大きい。日本、特に神戸の防災力は、教訓を生かして格段に向上したと思う。これから絶対にくるとされる東南海地震、南海地震にも役立つだろう。

この未曾有の大惨事を運んだ阪神・淡路大震災は、未来に多くのことを残した。絶対に同じ事を繰り返さないように、努力を怠ってはいけない。地震大国で生きていくには、地震対策は必要不可欠なのだから。

震災を通じて

神戸市北区
高木 洋輔

1995年1月17日5時46分、これから、生きていく内で忘れられない出来事は起きてしまった。そう、それが阪神・淡路大震災である。まさか、自分がこのような大規模な災害に巻き込まれるとは思っていませんでした…。この阪神・淡路大震災は、僕に色々なことをもたらしてくれた…。自分の人生観が変わるくらい。それほど、すごい災害だった。

その前日、休日ということもあり、家族で外出していた。一家の大黒柱の父親、母親に2歳年上の姉、そして、当時小学生1年生だった私が外出していた。家には、父親方の祖父とペットとして飼っている犬が、留守番をしていた。沢山の買い物をし、美味しいものを食べ、気分が上々だったことを、今でも憶えている。家に帰り学校の用意をして、就寝した。

朝、急に目が覚めた。そう、あの阪神・淡路大震災が起きたからだ。5時46分という早朝だった。ゴウゴウゴウと地面が唸っていた。当時、私は2階建てベッドの2階にいた。いつ落ちるのではないのかと、内心落ち着かなかった。必死に敷布団を掴み、振り落とされないように踏ん張った。グラグラとベッドの1階と2階を繋ぐ間接部分が揺れていた。ガシャガシャと何かが割れる音がした。急に、父親の声と母親の声が聞こえてきた。「大丈夫かぁ!!」と大声で、尋ねてきた。すぐさま、「大丈夫だよ!」と答えた。

ガガガガガガガガガガガガオォン、ドドドドドオォン、グラグラグラグラ、ガシャガシャガシャガシャという強烈な音がこだました。その爆発したような音と振動は、今後絶対に忘れることは無いだろうというほどの、凄いものであった。

突き上げられるような地震だった。2階建てベッドの上は、かなりの衝撃だった。

地震が収まった後、すぐに家を出ようという結論になった。親の寝室と子供部屋はすぐ隣だったので、すぐ集合することができた。私も2階建てベッドを降りるとき、階段がグラグラしていたけれど、無我夢中で駆け下りた。今思えば、本当に危なかったと思う。姉と私が親の寝室まで行くと、父親と母親は懐中電灯とある程度の財産を持って、待っていてくれた。姉と私の姿を見るなり、安心した様子だった。そして、リビングへ向かった。

リビングに向かう途中、子供部屋を見ていると、テレビ台の上にあった物がすべて床に落ちていた。テレビのプラスチック部分にかなりのひび割れがあり、花瓶が割れていた。正直、親のいる寝室に行くまで、周りの状況が見えていなかった。それだけ、気が動転していた。

リビングには、犬小屋がある。本当に古い犬小屋で、簡単に潰れてしまうようなものだった。けれども、犬小屋をテーブルの下に入れていたこともあって、犬はまったくの無傷だった。しかし、犬自体はかなり怖かったらしく、犬小屋から出ようとしなかった。プルプルと震えていたのを覚えている。このままでは埒があかないので、無理やりにでもいいから、父親が引きずり出した。すると、尻尾を丸め込み、滅多に鳴かない犬だったが、クーンと鳴いていた。

そして、少し部屋が離れている祖父のところへ向かった。途中で本棚があり、1000冊を悠に超えていた本棚が、見るも無残な姿へと変貌していた。本棚に本がない。普通なら考えられないことだった。床には大量の本が散乱していた。そのため、足の踏み場がなくなっていた。しかし、移動しなければいけなかった。散乱している本の上を歩くことに、少し警戒していた。本の下に何らかの破片があるかもしれないと、警戒していた。

そうすると父親が真っ先に移動し、家族の分のスリッパを用意してくれていた。すぐさま、スリッパを履き、散乱している本の上を歩いた。本には申し訳ないことをしたと思っている。

祖父の部屋に着くとすぐ、祖父の安全を確認した。祖父は何事もなかったように平然としていた。それにしても、祖父の部屋は何も変化がなかった。家具が倒れてもいなければ、装飾品すら何にも変化がなかった。

ようやく家族がすべて揃い、家を出ることになった。祖父の部屋から玄関までは非常に近く、距離にすれば2メートルもない。すぐさま、スリッパから運動靴に履き替え、玄関のドアを開けた。

玄関を開けると、外はまだ暗かった。確かに冬ということもあり、太陽はまだ昇ってはきていなかった。辺りはシーンと静まりかえっていた。そして、階段を駆け下り、すぐに建物から出た。

歩いて、10歩ほどのところに近隣の人達が集まっていた。みんな何かに怯えているように、顔が引きつっていた。よく見ると、みんながパジャマだった。明け方の冬空の下で、パジャマはあまり保温に関しては意味をなしてはいなかったと思う。

近隣の人達は口々に、「すごかったなあ」や「こわい、こわい」と口にしていた。父親は持ってきた懐

中電灯を使用した。この時の懐中電灯は、どちらかといえば、手に持って移動するときに使うような物とは異なり、キャンプで使うランタンのような懐中電灯だった。そのため、地面に置いても灯りがはっきりと見えた。

懐中電灯を点けた途端に、近隣の人達は安心したように思う。それから、いっぺんに喋り始めた。

地震が収まってホッとしているのも束の間、余震が次々にきた。その度に、どよめきが起きた。「こわいねえ～」と言う小母さんもいれば、泣きじゃくる赤ん坊。何故か怒っている小父さんまでいた。色んな人達がそれぞれ思っていることや言動は違うにしても、気が動転していて、怖かったということだと思う。

外に出てから、1時間ぐらいい経過し、ようやく家に帰ろうということになった。家に帰ってみると、やっぱり、本の散乱が目立った。さすがに、このままじゃ歩みにくいということもあり、父親と母親が歩ける程度に本棚へ本を戻した。それでも床には、まだまだ沢山の本が散乱していた。片付けても最初より半分減ったかどうかという微妙な感じだった。

何とか普通に歩けるようになり、各自、自分の部屋に戻った。子供部屋と親の寝室は隣接していたので、途中まで一緒に戻った。

戻る途中に台所に立ち寄った。テーブルに置いていた和菓子の数々が、無残に床に散っていた。本当にもったいないと思い、すぐさま、拾い上げた。光の関係で、和菓子にセロハンで加工されているのが分からなかった。持ってみて、まだ食べられると思い、さっさとテーブルの上に置いた。

子供部屋に戻るとすぐに、父親が、落ちていたテレビを抱え上げ、元の場所に戻した。その時は、すごいと言いやうがなかった。

すぐに、部屋の片づけを開始した。何かあると危険だからと、軍手をはめて作業をした。特に勉強机の本棚から落ちた教科書を片付けるのに苦労した。割れた花瓶を片付ける時は、緊張した。しかし、意外にも他はこれといってすることがなかった。大体1時間ぐらいで終わった。

父親がテレビの配線を直し、テレビをつけた。意外にもテレビはついた。しかし、いつもの時間なら、普通にテレビ番組しかないが、その時は、ずっと地震の特番をしていた。そこでようやく、ほかの地域の状態が分かった……。

テレビから映し出された映像は、まるで映画を見ているようなものばかりだった。ビルが粉々に砕け、高速道路が倒れていた。そして、町が延々と燃えていた。はっきり言って、自分の住んでいるところで、火事は見たことがなかった。

火事の現場は、とても辛かっただろうと思う。火事に巻き込まれた人やその人の家族。そういった人達のことを考えると、どうもやるせない思いになってくる。そう実感した。

一通りテレビを見終えると、父親が会社に行くと言った。特に止めることはなかった。普通なら、会社で勤務している時間なのだから。しかし、母親は「こんなときまで、会社に行く必要があるの？」と少し怒っていた。当然、私は学校を休んだ。みんなそれどころではなかったと思う。

片づけをして、のどが渇いたので、水道の蛇口をひねってみた。すると、ガバババ…ギュという訳の分からない音がした。蛇口から流れてきた水は、もはや水とは言えなかった。茶色のように、黒色のような水が勢よく出てきた。「うわっ!!」とびっくりしたのを覚えている。このままでは、どうしようもないので、団地の共同で使える水道に水を汲みに行った。しかし、結果は同じだった。

どうしようかということになり、母親は近くのスーパーが開いているかもしれないと、出掛けていった。

母親がいなくなり、何もすることのなくなった私と姉は、ずっと犬と遊んでいた。犬と遊んでいた時、一応は安心してはいたけれど、心のどこかで次にまた大きな地震が来るかもしれないと思っていた。

それから、1時間以上経ってから母親が帰ってきた。両手に買えるだけの食料が入ったスーパーの袋を持っていた。その中には、少量の缶詰や大量のお菓子が入っていた。結局、一番欲しかった水は手には入らなかった。その代わりに、ジュースやスポーツドリンクがちょこちょこ買っては来られたらしい。

母親は、「こんな時に、スーパーが開いているなんて思わなかった。ほんとに助かったわ。」と満足している様子だった。

しかし、水は飲む以外に、トイレや風呂といった衛生面に関係していくので、どうしようということになった。トイレの水程度であれば、水道の汚い水でも流すことはできるという結論にはなったものの、風呂をどうしようかということになった。特に答えが見つからないまま、時間は刻々と過ぎていった。

それからして、どこで聞きつけたかは知らないけれど、近くに給水車が来ているということで、母親と姉は家を出て行った。

そして、することといえば廊下の本棚の整理くらいだった。母親と姉はいつ帰ってくるか分からなかったもので、祖父と一緒に整理を始めた。

床に散らばった本は小ささまざまなものがあり、整理をしている時は意外にも楽しかった。作家順で並べたり、本の大きさや出版社の種類別に分けたりして、完成してみると地震が起きる前よりもきれいに

なっていた。なんだか、気持ちがよかったことを覚えている。

本の整理も終わり、家を片付けるということができなくなった。そこで、祖父と私はボードゲームをすることとなった。普段はあまり、祖父と喋る機会はなかったので、色んなことを沢山聞いたり話したりした。

地震は起きたら厄介ではあるものの、新たな発見や人と親しくなるには、意味のあるものだと思う。お互いに考えや行動も違うけれど、結束みたいなものが生まれると思う。

それから、何時間かして母親と姉が帰ってきた。確かに給水車は来ていたらしいが、並んでいる人数がとてもすごく、かなり待たされたようだ。そして、それに加え、給水車から貰ってきたという水は微々たる量だった。

何とかその水だけでやっていかなければならないと、水の大切さというものを、初めて実感した。また、日頃の水の備えは大切だということが分かった。

それから、ライフラインの回復を待ったのを覚えている。意外にも、水以外のライフラインはすぐに直ったと思う。

そして、時間が経つにつれて、テレビで詳しい地震の情報が流れてきたのを覚えている。しかし、子供過ぎた姉と僕は、何を言っているのかまったく分からなかった。けれども、テレビから流れてくる映像のほとんどは衝撃的なものばかりだった。

しかし、そのような映像ばかりを観ていて、姉と僕は退屈そうにしていたらしく、母親がビデオに録画しておいたアニメを流してくれた。それを見て、姉と僕はだいぶおとなしくなったと聞く。

その日から、2階建てベッドを使うのを当分控えた。いつまた、地震が起きてくるかは分からないからだ。そして、家族揃って同じ布団で寝ることとなった。

しかし、地震が起きて気が高ぶっていたことと、次いつ地震が来るか分からないという不安や心配で全然眠ることができなかった。そんな時、母親が優しく手を握り締めて、僕が寝るまでずっと一緒に起きていてくれた。これには、本当に安心した。そして、その手の温もりは忘れることが無いだろうと思う。

それから、しばらくして学校が再開した。内心わくわくしていることもあったけれど、学校が、どうなっているのだろうという不安もあった。

学校に行ったのは、かなり久しぶりのことだった。学校に行けて一番良かったことは、友達と会えたことだった。幸いにも、僕の友達は何人かとして亡くなった人はいなかった。

学校の外観は自分が思っていたほど変わってはいなかった。しかし、一歩中に入って行くと壁は軽く亀裂とかヒビが入っていた。それを見たとき、改めて地震というものが怖いと思った。こんな頑丈そうな建物にヒビが入るなんて思いもしなかったからだ。

また、渡り廊下が通行不可能になった。これには、みんなが驚いた。今にも崩れそうだったらしい。修復するにも長い年月がかかった。

学校自体の機能は正常だった。しかし、阪神・淡路大震災が起きてから、学校の体育館や多目的室を被災者に開放していた。それと、阪神・淡路大震災以降かなりの数の転校生が来た。彼らの中には、ずっと住み着く者もいれば、すぐに去って行く者もいた。友達になって、今も関わりのある人もいれば、今どうしているのだろうと思う人もいる。それだけ、色々なことを考えて、今に生き、繋がってきているのだと思う。

僕の住んでいる地域で、僕の知っている人たちは、みんな無事だった。しかし、転校生の中には、知り合いの人が亡くなってしまったり、自分の住んでいた家が全壊や半壊して、心が傷ついている人がいた。その人のことを考えていると心が痛い。亡くなった人たちのことを考えると、やるせない思いになってくる。

その分を僕が、頑張って生きようと思う。失くしたくて失くした生命ではない。生きたくても生きることのできなかった人たちもいるのだと考えると、それが、僕の励みにもなった。その分も生きてやろうと。

本当に阪神・淡路大震災が起きてから、生活が変わった人が多いと思う。そのような人たちが安心して暮らせることのできるまちを作らなければいけないと思う。

当時、阪神・淡路大震災が起き、色々な変化の中で色々なことを学んだ。しかし、人の記憶はいつまでも、保たれているわけではない。

阪神・淡路大震災が起きてから、何年か経過した…。その間、はっきり言って阪神・淡路大震災のこと、記憶が風化していたと思う。何事も無い日常がそうさせたのかもしれない。

けれども、中学校に上がってから、阪神・淡路大震災のことを学ぶようになり始めた。

一度は、風化した、又は忘却してしまった記憶だが、阪神・淡路大震災のことを学ぶに連れて、どんどん記憶を取り戻した。また、それに加え、新しく知ることや学んで良かったと思うことが沢山あった。

そして、中学校から進学する際にどこにしようか迷っていたら、ふと舞子高校の環境防災科というものが目に留まった。そこでどんなことが学べるのかと思って、色々と調べてみた。そうすれば、なんと自分に合った学科なのだと思った。そして、ここに入学しようと決意した。

それから、何とか勉強をして、第一希望である舞子高校環境防災科に入学することができた。これまでの経験を生かし、新たなことを学ぼうと思った。

高校に入学してから、専門授業という科目ができた。そこでは、普通では学べないライフラインのことやフィールドワークで六甲山に行くなどといった興味を引く授業ばかりだ。その中で学ぶということは、本当に面白かった。それに机の上だけでない授業というもの、現場を知りながら、現場に近づいて学べたということが、一番良かったと思う。

授業を受けて思ったことは、色々な人の思いというものがあったということだ。特に、ライフラインの講義を受けたときに、そう感じた。

人が思っていることは色々と違っていた。そういうところを学べるというのは本当に違った考え方を持つことに繋がっていったと思う。

それから、舞子高校に入ってから一番のイベントは1. 17の10周年の行事だった。そこでは、普通科の生徒、環境防災科の生徒関係なく、1月17日に起きた阪神・淡路大震災を忘れないために、色々な講演が行われた。

僕は、国際交流の分科会を担当した。舞子高校では、ネパールと交流をしているからだ。ネパールには有志で行き、防災の意見交換などをする。そのしたことを、分科会の一部で発表することとなった。本当にいい出来だったと思う。

また、全体会のときに『しあわせ運べるように』という1月17日の阪神・淡路大震災を忘れないという意味を持つ歌を歌った。この歌を歌っているときに、いろんなことを思い出した。それだけ、意味のあるものだったと思う。

歌の題名の通り、幸せがいろんな人たちに届いたらいいなと思った。

この歌を歌った後、環境防災科の歌った生徒はもちろんのこと、先生やその他の来賓、普通科の生徒のほとんどの人が感動したという話を聞いた。本当にみんなに歌の持つ意味を伝えることができ、よかった。

みんなが心を1つにしたら、本当に素晴らしいものが出来上がるのだと、改めて実感した。そして、このことはこれからも続けていかなくてはならないことだと思う。語り継ぐということに重要性があると思う。

自分自身が、阪神・淡路大震災を経験して、色々と考えることがあった。それが今の私に繋がっていると思う。今までに経験した良いことも悪いことのすべてが私という1人の人間を作り上げているのだと思う。

そのことを無駄にするのではなく、自分のために、または人のために何かできることを探し、役立てようと思う。

本当に自分のしてきた経験は、素晴らしいものだと思う。阪神・淡路大震災もそのほかのことも、すべてが素晴らしい。

あ那时的記憶、そして今思うこと

神戸市西区
瀧川 唯菜

【阪神・淡路大震災】

1995年1月17日AM5:46、観測史上初となる震度7の大地震が兵庫県南部地域に壊滅的な被害をもたらした。私たちの神戸は一瞬にして姿を変えた。阪神・淡路大震災、正式名称兵庫県南部地震がもたらした被害は6400人を超える死者、4万人にのぼる負傷者、さらに家屋の全半壊・焼失数は40万戸以上となり、ガス・電気・水道などのライフラインも痛恨のダメージを受けた。地震はかけがえのない多くのものを奪い、人々は胸に深い傷を負った。地震は恐ろしく忌々しいものとして今でも多くの人々の記憶に残っている。しかし、地震の悪いところばかりを指摘して人間社会の災害に対する脆弱さを無視してはならない。多くの課題が残った。また、地震によって見つかったものもあった。たくさんの学生も参加したボランティアは40万人を超え、ボランティア元年と呼ばれた。避難所では見知らぬ者同士が声を掛け合い、多くの人が人の心の温かさに触れた。

これらの記憶は今でも私の記憶から消されることはない。私たちは震災を知る最後の世代であり、震災の経験・記憶を次世代に伝えていく義務がある。小学1年生にとっての震災は次のようなものだった。

【地震発生】

地震が起こったとき、私は神戸市西区の自宅にいた。AM5:46、もちろん起きているはずはない。2段ベッドの上の段で寝ていた。私は起きるのが苦手ですいつも母に起こされていた。母は地震が起こる直前（正確にいうならば地震はこのときすでに起こっている）、揺れよりも先にとどろき渡る大きな音で目を覚ました。そのとき母が見た光景は、しっかりと壁に引っ掛けてあった時計や額縁が落下する様子だった。そんな中、別室で寝ていた私と弟はまだ夢の中にいた。まだ日の差し込まない、薄暗い部屋に母が入ってきた。私はその気配で目が覚めた。そのとき、ベッドが異常な音をたてて揺れているのに気づいた。恐怖心よりも疑問のほうが大きくて母に尋ねたが、母もはっきりと状況を把握しているわけではなかった。「なんで揺れとん」「地震かなあ」という感じで2人とも冷静だった。それどころか、まだ寝ている弟を笑う余裕さえあった。その後、弟は叩き起こしたが私の疑問はまだ解けていなかった。「地震」という言葉を出されたところで私は地震が何なのかわからなかった。しかし、猛烈な眠気のせいでそんなことはどうでもよくなってしまった。

【家の中】

弟を起こし、母と3人で1階に下りた。何も考えずにリビングのドアを開けると、そこはまるで、空き巣にでも入られたかのように荒れていた。食器棚は観音開きの扉が全開となり、ほとんどの食器が落下して床の上で粉々になっていた。飼っていた金魚は地震の揺れで飛び出して何匹かが死んでしまった。その他にも、大きな家具類が倒れることはなかったが細々としたものが部屋中にばら撒かれていた。片付けるのにそう時間はかからなかった。外では当時築1年ほどだった我が家の屋根瓦が2～3枚落ちていたが、被害はこの地震が大震災であることなどこの時点では気づかないほどのものであった。

【ライフライン】

被害が少なかったとはいえ、やはり電気・ガス・水道などのライフラインは寸断された。電気とガスは当日の午後には復旧した。水道は復旧に4～5日間かかったが、地震発生直後しばらくは使えた。飲み水とトイレのために、お風呂いっぱい水をためた。（トイレは大の方を新聞紙の上でするように言われたのが印象的だった。実際にはしていない）

昼過ぎにやっとテレビがつき、はじめて深刻な事態であることに気づいた。小学1年生でもわかるくらい、その映像はインパクトがあった。まるで戦争でもあったかのように破壊された神戸。一体、何が起こったらこんなことになるのだろう。ああ、これが地震なのかと疑問は解かれた。ひたすら繰り返される地震のニュースは私にとってはひたすら同じことを言っているようにしか聞こえなかった。しかし、数字くらいは読める。時間が経つにつれて死亡者数、負傷者数など、被害が拡大していくのがわかった。正直、こ

んなニュースばかり見ているのは退屈でおもしろくなかった。いつもなら放送されるはずのアニメやバラエティーの多くが地震の中継のために潰れてしまった。しかたがないことだというのは重々承知していたが、やはり子供にとってのテレビのない生活は不満足なものだった。

テレビで情報を得るまではラジオを利用していた。これは高校生になった今初めて知ったことだが、3軒隣に住んでいる方は車のラジオの音量を最大にして近所の人も聴けるようにしていたらしい。教師をしている人なのだが、さすがだと思う。このような判断が出来る人というのは震災から10年経った今でも少ないのではないだろうか。もし平常時にこのような行動が思いついたとしても、非常時には出来ないのではなかろうか。

【離れている家族】

地震が起こったとき、父は家にいなかった。父が地震発生時にいたのは消防署だった。消防の仕事といえば火を消したり、人を助けたり…子供なりに持っていた父の仕事のイメージである。朝のうちは、今日はお父さんが帰ってくる日だ、と思っていた。しかし、父の友達で消防士の人からの電話で高速道路が倒れるほどの大規模な地震であることを知ったとき、しばらくは父に会えないということを悟った。実際、10日間くらい帰ってこなかった。父に会えないことは物凄く寂しかったけど、テレビで流れる救出活動の映像で消防士が映ると、もしかしたらお父さんかもしれないと思い応援したくなった。瓦礫の山のなかで人命救助をしている父を誇らしく思ったが、心配する気持ちも大きかった。救出活動も一段落し父が帰ってきたときとてもうれしくて父に飛びついたが、父はとても疲れているようだった。父を含め多くの人々が夜も眠らずに作業をしていたのだと思うと、何も出来なかった自分の無力さをひしひしと感じる。

父方の祖父母は同じ家で暮らしているが、母方の祖母は長田区のマンションに1人で暮らしている。この地震が大きなものだと知ったとき真っ先に脳裏に浮かんだのはその祖母のことだった。テレビでも長田区の被害は深刻であると報道されていたため、もしかしたら…と考えだすと怖くてしかたなかった。一刻も早く無事を確認したかったが、電話がつながらない。私や家族はどうすることも出来なかった。ただただテレビを見ながら無事を祈るくらいのことしか出来なかった。テレビでは残念ながら死亡が確認された方々の名前が次々と流されていく。念のために確認することにした。長田区で確認された死亡者数は絶望的なものだった。この中にばあちゃんの名前がありませんように。そう思いながら食い入るように画面を見つづけた。次々にページが変わり残り数名となったとき、一番見たくないものを見てしまった。祖母の名前があった。年齢もなにかも同じだった。母の顔色が変わり、電話のダイヤルを押しつづけた。しかし一向につながり気配はない。母は受話器をおいた。失望しているようだった。そのとき、電話が鳴った。母が、さっきまで握り締めていた受話器を再び手にした。すると、また、顔色が変わった。今度は希望を取り戻していくようであった。なんと電話をかけてきたのが祖母だったのだ。テレビで流れた祖母の同姓同名同年齢は別人だったのか。私たち家族は一気に肩の力が抜けた。祖母は避難所にいて、怪我もなく元気にやっているとのことだった。ただ、マンションの屋上から見た駅周辺の様子は見るに耐えがたいほど悲惨なものだったそうだ。マンションが崩れることはなかったが、ライフラインがすべて使用不可能だったために避難所で生活していたらしい。

何日かして祖母が我が家に泊まりに来ることになった。私と母と弟で途中まで迎えに行くこととなり、地下鉄に乗った。いつもなら長田まで車で行く。私は少し不思議な感じがした。しかも地下鉄は板宿で下車した。電車で行くときは長田駅で降りるはずなのに。理由はすぐにわかった。板宿駅から歩いているとテレビで見たような光景が飛び込んで来た。すごく怖くてあまり見たくはない光景だった。遠くのほうまで見渡せる広い空間が印象的で、そこに少し前まで家が建っていたとはまるで思えなかった。何とも言いようのないまちの様子に言葉を失い、無言で歩き続けた。しばらくして祖母が向こうから歩いてくるのが見えた。遠くからだっただけははっきり祖母だとわかった。私は走っていき、やっと祖母の顔を見ることが出来た。いつもと変わらない元気な様子で安心した。それからまた、もと来た道を歩いて帰った。帰り道の風景を見て、17日にマンションの屋上からみた長田区はあちこちで煙が上がっていて、夜になっても赤い炎が燃え広がっていたと祖母は言い、私が見たものは震災のほんの一部分で知っている以上に恐ろしいものなのだと感じた。祖母は1日だけ我が家で過ごし、お風呂に入って避難所に帰っていった。それにしても、地震発生時、部屋の中に1人で寝ていたとはどれだけ心細かっただろう。地震発生から数日たっても大きな余震が続くなかで私は、1日だけと言わず祖母が自宅で何の心配もなく暮らせるようになるまで一緒にいたいと思った。

【余震】

地震発生から何日たっても余震は続いていた。日に日に揺れは小さくなっていったが、学年が変わる頃になっても小さな地震は度々起こっていた。揺れを感じるたびに一瞬ヒヤッとしていたが、怖いと感じたことは一度もなかった。被害が大きかった地域では、瓦礫の隙間などで緊迫した空気が張り詰めていたに違いないが、神戸全体の被害の大きさをなんとなくしか理解できていない小学1年の私にとってはむしろ遊園地のアトラクションのような錯覚を覚えた。あれだけ恐ろしい光景を目にしたのに、あの時の心の余裕は何だったのだろう。今でもよくわからない。確かに近所ではあのような光景を目にすることはなかったが、揺れに対して敏感になるのが普通だと思う。大げさに言うと当時は余震を楽しんでいたのだが、今では大型トラックが通過した程度の揺れでも一瞬緊張してしまう。高校生になり震災について多くのことを学んだからだ。大人に近づくにつれて地震に対する恐怖心が増していく。地震が起こったとき冷静に行動していた大人たちがどれだけ凄いのかということを経験になって気づくことが出来た。あのとき私は、知らず知らずのうちに周りから学んだことがあったようだ。そのときわからないことでも、いつか理解できるときが訪れる。人生にはそんなことがたくさんある。

【買出しと差し入れ】

大きな地震だと知り、母は当分の食料を買いに駅前まで出かけた。店は開いていたが長蛇の列が出来ていた。母は買えるだけのものを買い帰ってきた。主に水やインスタント食品を買ってきたようだった。例えば、レトルトカレーやラーメンばかり食べた日々が続いていたような気がする。しかし、食事が出来るというごく日常的なことがその時はすごく有難いものなのだと、インスタント食品に飽き飽きしながらも感じていた。今考えると地震があったそのときだけではなく、普段から世界では何万という子供が飢えて死んでいるというのだから、毎日食事が出来るというのは本当に有難いことで、メニューを選ぶなんてことはすごく贅沢なことである。

母は家の食事だけでなく、消防署への差し入れも用意した。地震発生から7日目くらいに、父の勤務先である消防署にサラダの差し入れをしたそうだ。弁当ばかりで野菜が食べられていないのではと思い、衣装ケースにキャベツとレタスを各10個ずつ、キュウリ20本等をきざみそのまま入れ、紙皿、お箸、ドレッシングなどをつけて持っていった。

当時は母がこんなことをしていたなんて知らなかったが、この話を聞いたときすごく母を羨ましく思った。私もどんなかたちでもいいので誰かの力になりたかった。小学生のうちはそんなことを考えたことはなかった。しかし、今では様々なことを学び誰にでも1つくらいは出来ることのあるのではと考えるようになった。もし、あのとき防災教育を受けていれば出来ることがあったかもしれない。きっと今では10年前よりも防災教育が推進されていて、小学生でも防災にふれる機会が多くなってきている。いざというとき活躍してくれる小学生がこれからどんどん増えていって欲しい。

【たくさんの知らなかったこと】

私は被害をそんなに受けていなかったせいか、阪神・淡路大震災について知らなかったことがたくさんあった。高校生になり環境防災科で学んだことには初めて知ることも多くて、知るたびに強い衝撃を受けた。環境防災科の授業では様々な分野から講師を招き、講義を聴く。あまりにも多くの分野から講師が訪れるので震災との関連性を疑いたくなるほどだった。小学1年のときは“消防士の人が人をたすけているんだ”くらいのイメージしかなかったが、警察や自衛隊、ガス・電気・水道などのライフライン関係からも講師の方に来て頂き、私たちの生活は陰で多くの人々に支えられているのだと感じた。

私は勉強を続けていく中であることに気づいた。今までは被害の大きさをなんとなく数字だけでみていて、原因やそこから読み取れる多くのことを考えようとしていなかった。この今まででしていなかったことをすることが、1つの災害から多くの教訓を学ぶのに必要なことであるということにようやく気づいた。例えば神戸市消防局のホームページによるとこの地震による死者数は4571人であった。なぜこれほどまでに多くの命が奪われてしまったのか。死亡原因をみると家屋倒壊による圧迫、窒息死が過半数を占め、その他の主な死因は、焼死、全身火傷、頭部損傷、外傷性ショックなどであった。また、全体の死者を年代別に見ると、65歳以上の高齢者が全体の約半数を占めている。この結果から、今後の災害に備えるための教訓はいくつも見つかる。家屋の耐震補強、家具類の固定または配置の考慮、そして災害弱者を守るために必要なこと。教訓から少なくとも以上のことを学び、次の災害に対応できる能力を身につけなければ教訓は生かされず、多くの人々の死を無駄にしてしまうのだ。そんなことは絶対にあってはならない。

人間は何においても教訓を得て進化してきたのだと思う。しかし、阪神・淡路大震災では人間の暮らしがあまりにも進化しすぎた結果、被害を拡大させてしまった。自然環境のなかではありえない被害が、社会環境の中ではいくつも起こってしまうのだ。けれども、この地震で得た教訓を市民1人ひとりが、もっと言えば世界中の人が学び、悪いところを1つずつでも改善していけば少しずつでも被害は減らすことができるのだ。社会環境のなかでも被害を食い止めることができるに違いない。

災害について学んだり考えたりすることは、1つのある災害が起こるまで忘れられているように思う。もちろん、一部の専門家たちの間では日々研究が重ねられているのだろう。しかし、一般の人々はそれに興味を示さない。というよりも、興味を示すきっかけがないのではないだろうか。私は環境防災科に入るまでに、防災に関してそれほど興味があったわけではなかった。たいして興味を引くような分野ではないからだ。現在、興味を持てるようになったのは学校で多くのことを学び防災の重要性を知って、他人事ではない、自分の身とその他たくさんの大切なものを守るのに大切なことだとわかったからだ。生きていくうえでの楽しみはすべて命あってのものなのだ。防災は人任せにはできない。自分でやらなければ自分の命を守ることができない。だから1人ひとりが学ぶべきものなのだ。それも災害がやってくる前に。やってくる災害はどうしても防ぐことができない。しかし、人間の知識と知恵で被害を最小限に抑えることは可能なのだ。可能な限り被害を小さくするために、多くの人が防災に触れるきっかけを、防災を学ぶものが与えていかなければならない。環境防災科で学んでいる私は、すでにきっかけを与える側に立たなければならぬ。もっと勉強して、幅広い人に防災を伝えられたらと思う。

本当に防災は老若男女問わずすべての人に関わっていることなので、それぞれの人にあった防災を考えなければならぬ。小さな子供と大の大人が同じことをするということは世の中のどんな場合においても滅多にないことだ。大人ならできて当然のことがあれば、子供にしかできないことだってある。それは防災においても同じことが言えるのではないか。しかし防災においてはどうか考えても大人のほうがすべきことがたくさんある。子供を守るのも結局は大人の役目だ。地震における防災で地震対策というものがある。家庭での地震対策なら家の耐震化、家具の固定、食料・飲料水・非常持ち出し品の準備、地震が起きたときの心得などである。防災は災害が起こる前にするのが重要で、これらのことは地震が起こる前にしておくからこそ意味をなすのだ。例として1つ心得ということをやったが、これがある、ないは地震発生後の対応に大きく影響を与える。例えば救出・救助のとき。阪神・淡路大震災では9割近くの人が倒壊家屋の下敷きとなり命を奪われたが、多くの人が瓦礫の下から救出されたと言われている。そしてその4分の3の人たちが家族や近所の人など一般の人に助けられた。大災害で消防や警察の手では足りないとき、自分の身を守るだけでなく地域の安全も守らなければならぬ。日ごろから自分の命は自分で守るという意識とともに、地域の安全は地域で守るという心得が必要なのだ。自分の命を守ろうとするとき、知識のない人間はどうするのだろうか。間違った方向へ飛び出し、落下物が直撃すると命を落としかねない。人間がパニック状態に陥ったときとる行動は、じっと動けないままにいるか、何も考えずに慌てて逃げ出すかのどちらかだろう。しかし、知識があれば少しでも冷静に行動することができる。少しでもと言うが、知識プラス経験があればもっと冷静に行動できる。つまり、積極的に訓練に参加しさまざまなシチュエーションでそれを実行してみることで自分の命を守る際に余裕ができる。

環境防災科で防災については最低限のことを知ることができたと思っている。そして、入学以前よりも防災に興味を持つようになり、もっともっと勉強したいと思うようになった。また、防災と同じくらい大切だと思うものがあった。それは心のケアである。震災で被災した人々が傷を負ったのは目に見える部分だけではない。外傷はなくても、想像を絶する大地震で大きなショックを受けた人々は心に深い傷を負う。地震によるショックだけでなく、避難所での集団生活によるストレス、今後の生活に対する不安、孤独など被災者が抱える心の負担は様々である。そんなとき、そのような人々は話を聞いてもらいたいと思うらしい。そこで難しいのが聞き手である。被災者が話したがらないことを無理に聞き出してはいけぬ。目の高さをあわせなければならぬ。発言に注意しなければならぬ。聞き手は細かなところまで気をつかい、被災者の気持ちを理解しなければならぬ。どんな小さなことでも被災者の精神を不安定にしたり苦しめたりする場合がある。多くの人が少しでも早く、心にゆとりを持って以前のような生活に戻れるように心のケアというのは注目すべき対応だと思う。心のケアにあたる人というのは専門家でなくてもいい。ただ話を聞いてくれる人を必要としている人もいるのだ。ただし、先ほど述べたような最低限の知識は必要だろう。今まで目に見える被害ばかりが目立ち、心のケアの面には目を向けることがなかった。勉強を重ねやっとな心のケアに行きついたとき、本当に災害というのは考えることがたくさんあるものだと感じた。

【最後に】

よく、阪神・淡路大震災は多くのものを奪ったが震災のおかげで見出されたものもたくさんあると言う。

舞子高校に環境防災科が設置されたのも、震災の教訓を生かし防災力を持った市民を育成するためである。私にとって環境防災科で学ぶことには難しいこともたくさんある。しかし、環境防災科に入学したことは震災のことを思い出す良いきっかけとなった。震災のことだけでなく、あらゆる災害における防災、またそれだけではなく、高校生としてなにをすべきかなどということも考えさせられ、様々な面で成長することができた。環境防災科で多くのことを学び私が思ったことは、やはり震災の記憶は風化させてはいけないということだ。忘れたいことはたくさんある。しかし、忘れてはならないことが山ほどあり、それを忘れてしまうとまた同じ悲しみを味わうことになるのだ。何度も言うようだが、このような悲劇が繰り返されてはならない。震災から10年が経ち、神戸にも活気が戻ってきた。多くの人の笑顔があふれている。この笑顔を絶やさないためにも、教訓と何だったかをときどき振り返り身の回りをよく見てみる必要がある。もしもまた大地震にあってしまったら、私は自分の身は自分で守り、家族やかけがえのない大切なものを必死になって守りたい。そして後に後悔しないよう、自分にできることは何かと考え、多くの人の力になりたい。

「震災体験」

神戸市垂水区
田中 涼

■ 震災当時を振り返る

阪神・淡路大震災から10年、まだその当時のことを思い出ただけ疲れる。身体的ではなく、精神的に疲れてしまう。たまに家族でも阪神・淡路大震災の思い出を話す。「精神的にしんどかった。」「これからのことを考えるとすごく疲れる。」阪神・淡路大震災の話になると「しんどい。」という言葉は絶対に出る。それから、「寝室の家具を全部固定していた良かった。」というのも話によく出てくる。当時、もし寝室の家具を固定していなかったら僕は、家具の下敷きになっていたかもしれないと思うと……。僕は家具の固定のありがたさをたくさんの人たちに伝えていけたらと思う。

阪神・淡路大震災で多かったのが家屋などによる圧死だった。このころから家具を固定していた家は何件ぐらいあったのだろうか。もしも、神戸市民全員が家具の固定をしていたら、どれだけ被害が少なくすんだのだろうか。と、いろいろと考えてしまう。

当時、ほとんどの人たちが、地震について無知だった。いまでも、まだ地震について知らなかったり、自分が住んでいるところには地震が来ないと甘く思っている人がいると思う。最近では、地震関連のテレビ番組やニュースが増え、人々が関心を寄せていると思うが、実際に、防災関連のこと、たとえば、家の耐震化、災害保険、家具の固定などを行っている人は何人いるのかが疑問である。

■ 阪神・淡路大震災の概要

発生日時	平成7年1月17日 午前5時46分 水曜日
震源	淡路島 北緯34°36′ 東経135°03′
震源の深さ	約14キロメートル
規模	マグニチュード 7.2
震度	震度6（一部地域で震度7）
特徴	横揺れとたて揺れが同時に発生 都市直下型地震

阪神・淡路大震災による死者は 5,500人（関連死を含めると6,000人）を超え、負傷者は4万人以上であり、自然災害による被害としては戦後最大の規模になった。そのうち 89%は圧死であると伝えられている。主な原因は老朽木造家屋の倒壊にあり、そのことが高齢者と貧困者へ被害が集中する要因になった。24万軒（世帯としては約44万世帯）の家屋倒壊などの被害をもたらし、被害総額はおよそ10兆円に達した。避難者は、ピーク時で316,678人 1,153箇所であった。

大都市を直撃した大規模地震のため、電気、水道、ガスなど被害が広範囲となるとともに、鉄道、新幹線、高速道路、新交通システム、都市間交通・地下鉄が損壊し、生活必需基盤（ライフライン）に壊滅的な打撃を与え、古い木造住宅の密集した地域においては、地震による大規模な倒壊、火災が発生し、特に、神戸市兵庫区、長田区などでは大火災が多発した。神戸・阪神地域という人口密集地で発生したため、多数の住民が避難所での生活を余儀なくされた地震であった。

この地震によって明石市、神戸市、芦屋市、西宮市、そして尼崎市までの兵庫県の沿海部とその周辺地域、および淡路島北部が最大震度7の激しい揺れに襲われ、各地で甚大な被害が発生した。この大地震は被災地域の名称を取って「兵庫県南部地震」、その後「阪神・淡路大震災」と呼ばれるようになった。

当時、日本は災害関連法規や制度では、全く対処できない事態であった。被災者のメンタルヘルス・ケアの必要性について、初めて注目された災害であった。そして、ボランティア活動の関心を一挙に高めた地震であった。

■ 震災発生日！！

1995年1月17日水曜日午前5時46分、今までに聞いたこともない音、今までに感じたこともない大きな揺れ・・・まるで怪獣が暴れ、街を壊しまわっているようだった。自分はいま上を向いているのか、下を向いているのかもわからないほどのすごい揺れを感じた。何が起きたのかわからない中で、僕は何をしたらいいかまったくわからなかった。そのとき、父親の声が聞こえた。「地震や！！！」このとき初めて地震という存在を初めて知った。

気がつくと、僕は布団の中で一生懸命布団を握りしめていた。何秒間・・・いや何分間だったのだろうか・・・。僕には長い時間揺れているように感じた。こんなに1分が長く感じたのはいままでも初めてだった。揺れがおさまり、自分の心臓の音が聞こえるぐらいドキドキしてじっと助けを待っていると、母親がスリッパを履き助けに来てくれた。その光景が写真を見ているぐらい今でもはっきりと頭に焼き付いている。「たすかった・・・。」と、このとき初めて思った。家族全員無事であった。

すぐに、僕は窓の外を見た。消防車や自衛隊の車が次々と国道2号線を走っているのを見た。自衛隊では、「ガス漏れをしているので、タバコをすわないでください。」と何度も放送しながら車を走らせていた。それでもタバコを片手に持ち吸い続けている人がいて、ものすごい腹が立たと父が言っていたのを覚えている。

軽く朝食を終わらせた後に、車で舞子のまちをまわった。いつものまちではなかった。アスファルトは隆起し、信号は機能していない、そして、「シーン・・・」としていてまち全体が機能をしていないように感じた。しばらくすると街灯がついているのに気がついた。午前9時半ぐらいだったのだろうか。電気が復旧していた。急いで家に戻り、テレビをつけた。テレビで見る光景はまるで怪獣映画のワンシーンのような光景であった。長田のまちが燃え、ビルが倒壊し、人々が恐怖で震えていた。僕もいつくるかわからない余震が本当に怖かったのをいまでも覚えている。いつになったらこの余震がおさまるのか・・・。

■ 生活

地震発生の次の日から家を離れ友達の家や知り合いの家を泊まり歩く日々が始まった。友達の家に行っては泊まらせてもらい、また知り合いの家に泊まらせてもらう。こういった生活が1週間以上続いた。

地震がおきてから、あまり外に出て遊ばなかった。外で地震にあったらどうしていいかわからないようになるからであった。だが、地震の回数が減るにつれて外で遊ぶようになった。思いっきり遊び、ストレス解消をしていた。

今度は叔母の家で生活をした。近くの小学校に少しの間いることになった。また新しい環境での生活の始まりだった。僕と兄以外にも数人が転入していた。

「正直しんどい・・・。」これが本当の本音だった。もちろん、両親も気を使ったりしてものすごくしんどい、両親の前では「しんどい」は言わないでおこうと思っていた。

しかし、1週間もすると学校生活にも慣れ、友達もできて楽しくすごしていた。学校の休み時間になると一目散に運動場まで走り、みんな仲良く遊ぶのが当たり前になっていた。でも、1ヶ月ぐらいの時、自宅に戻ることになり、この学校の友達と別れるときは、本当に悲しかった。最初は、学校に行っても面白くない、しんどいと思っていた自分が、いまでは、学校に行くのが楽しみになっていた。だから、余計に悲しかったのをいまでも覚えている。

■ 震災後

地震から1ヶ月後、やっと自分の家にもどり、1ヶ月前の生活に戻っていった。久しぶりの小学校では、人数が足りないせいかクラスがかわっていた。まだまだ震災の爪あとが残っていて、学校をよくみると校舎は少しひびが入り、プールが隆起し、水が全部抜けていた。

友達と1ヶ月以上も会っていなかったのも、本当に久しぶりという感じがした。友達みんな元気であったが、何人かの友達は地震のせいか、引越しをしていたのでいなかった。

■ 家族の意見

・父親の場合

父は、震災の年の新年会（建築家たちの）に参加していた。平成7年度新年会においての冒頭の挨拶にて、関東に巨大地震が来る前に関西にも地震が発生する可能性を指摘している文章が沢山出回っていたのでそのことを説明した。しかし、全員の反応は「神戸には地震は来ないだろう、何を言っているのか？」という、やや危機感に欠ける反応であった。かく言う父自身も、せいぜい震度は4程度の中規模の地震ではないかと推測していたそうだ。だが、父の隣に座っていた人が父の話真剣に聞いてくれて、とてもうれしかったといっていた。

震災前夜、あれほど震災を注意せよといった父が、夕方から2度あった余震を予兆としては感じず、家に帰宅しても、地震が来ることを予想しなかった。

阪神・淡路大震災が起こったとき、父は地鳴りの音が、飛行機が墜落したような錯覚を呼び起こしたが、地震と認知、その際天井コンクリートスラブが落下して、潰されるのではないかと・・・すなわち死を覚悟していたのである。揺れが地震だと気付いた瞬間、「しまった！」と思った。あれほど地震が来るといっていたのに・・・しかし運良く建物は健在、家財道具は散乱し少なからず被害を被ったが家族は無事だった。よく震災の1週間前に、家具の固定および、ガラス引き戸の撤去を行っていたものと思う。

本震中は身動きが取れなかったが地震後、すぐ母に子供の安否の確認をさせた。父は眼鏡を探していたため身動きが取れなかった。（その後、靴をはいて、眼鏡をかけたままで眠る習慣がついた。）家族全員の安否が確認できた後、まず外部に出て近所のお年寄りの安否確認を行った。丁度マンションの階段を降りて駐車場に出ると、既に数名の方が出てきていた。通信網の切断により、情報が乏しかったが、丁度車のラジオをつけた方がおり、そのときに震源が淡路島であったことを知り、我々が一番被害を被ったと思い込み、自分たちの身の保全を最優先としたのである。ライフラインの遮断を確認したので、お風呂に水をはることを進言した。幸いにも高架水槽タンクの水はまだ残っていたので、水の確保に成功し、後々役に立つこととなった。

午前8時ごろに大阪の叔父より電話があり、第一声が「よう生きとった！！」というものであった。多数の建物や阪神高速が倒壊したことをここで知った。すぐに電気が復旧し、テレビを見ることとなるが、そのときには道路が寸断され渋滞し、身動きが取れる状況では無かった。救急車・消防車のサイレンを聞き余震に脅える1日を過ごした。その日、朝屋外に飛び出した時に見えた満月は今でも忘れられない。

建築関係に従事する者として地獄のような日々・・・相談等に追われる日々がこれからしばらく続いた。そして、あの新年会で、父の話真剣に聞いてくれていた人が亡くなっていたのを知った・・・。

・母親の場合

震災が起きる数週間前にいつも家から見ている明石海峡の一部の海の色がエメラルドグリーンになっていることに気付いた。こんなことは人生の中で初めて見る光景だった。昔に見た火山湖の色に似ていたが、何か気持ち悪いし、どうして一部分だけ変色しているのだろうか？と家族にもそのことを伝えなければ特に何の反応も無くそのままになってしまった。今になって思えばその海の色も地震が起きる前兆だったのかも知れない。

当時、主人が神戸に地震がくるかもしれないから地震保険に入ろうとか、一応子供部屋で寝る子供達のために、家具類の固定やガラス戸棚のガラスを外すという行動をとったりしていたけど半信半疑だったように思う。そして1月17日午前5時46分に淡路島の北淡町を震源とする大地震が発生した。その瞬間あまりの激しい揺れに何が起きたのかすぐに理解できなかった。凄まじい揺れに身動きできず、子供達が気になるけれど揺れがおさまるのを待って様子を見に行った。家具の固定をしていたお陰で本が数冊落ちた位で、布団に潜っていた子供達に怪我はなくほっと胸をなでおろした。主人は電気が付かない暗い部屋で自分の眼鏡を必死で探してやっと見つけた。

電灯も台所の何処かに置いていたけれど、食器棚から落ちてこなごなに散乱した食器が床を埋め尽くし足の踏み場も無い。主人はまず玄関で靴を履き、運よく前夜に買って台所に置いたビールの箱が横向きに倒れた所に足を置いて懐中電灯を取り出した。

自分たちの安全確保がすんだら次は同じマンションに住む老夫婦の方たちの安全確認をした。幸いに

もけが人も出ずほっとした。次に考えたことは食料の調達である。コンビニに行くとすでにたくさんの人が買いに来ていて、最低限要るもの又買えるものを手に入れた。電気の回復はかなり早くテレビの映像を見て初めてことの重大さを知ることとなる。

余震も頻繁に起き、壊れた食器の片付けが怖くてなかなかはかどらない。その日の夜は又大きな揺れが起きるのでは？という不安から一睡もすることができなかった。地の惨状とは裏腹に空にはとてもきれいな満月が海を月明かりで照らしていたのが印象的だった。

ライフラインが止まる不便な生活から知り合いの好意でその家に避難させて頂くことになりお風呂に入らせてもらったり食事も普通に摂ることができた。大変感謝した。1週間お世話になったあと被害が無かった神戸市西区の主人の実家で生活する。子供たちも小学校を一時的に転校する。この震災の経験を通して地震を防ぐことは不可能だけれど、地震が起きたときにどのような行動をとれば良いか、食料品、飲料水、卓上ガスコンロ等日ごろから備えて置くこと、家具等の固定、今後家族がそれぞれ外出先で災害にあった時にどのように連絡を取り合うのかという取り決めをする等、備えの大切さを学べたように思う。

震災以降枕元に小さな整理棚を作り眼鏡入れ、懐中電灯、携帯ラジオ、リモコン類等を置き暗闇の中でもその存在が見えるように、蛍光テープを貼り光って見える工夫をした。

■ 阪神・淡路大震災の教訓

・ 地震に強い家づくり

家を新しく建てる際は必ず地盤、地質調査を行い、軟弱であった場合はコンクリート等で強度を確保する。専門家のアドバイスを受け、建築基準法に適合するよう、基礎や耐力壁、骨組みを構造計算に基づいた配置・接合を行う。

阪神・淡路大震災では、老朽化した木造建築の倒壊が目立ち、それが要因となる犠牲者が大多数を占めた。築年数を経た家屋に住む人は、自治体のサービスなどに耐震診断を依頼し、適切な補修・改修工事を行う。近年は耐震工事に対する補助が得られる自治体も増えてきている。

・ 家具の固定

阪神・淡路大震災でもっとも多かったのが家具の転倒などによる圧死であった。（8割が圧死）

地震の際は家の中のあらゆるものが凶器と化す。家具の倒壊による死亡、負傷、脱出口の閉鎖を防ぐために、家財道具それぞれに対策をする。

タンス類は、L字金具や支え棒・つっぱり棒で固定を行う。2段重ねのものは上下を金具で連結させる。本棚は、本が散乱しないようゴムバンド等を掛けておく。上面には人形ケース等、重いもの・壊れやすいものは置かないようにする。

テレビ・パソコン類はできるだけ低い位置に置き、滑り止めやバンド等で固定をし、上には何も置かないようにする。

窓ガラスだけでなく、戸棚、額縁等のガラス面すべてに飛散防止フィルムを貼っておく。

照明器具はできるだけ天井面に直接取り付けものを選ぶ。吊り下げ型は揺れ・落下防止のためにチェーンや金具で数箇所留めておく。冷蔵庫は専用のバンドや針金で、壁面に直に通して固定をする。

・ 近所づきあい

阪神・淡路大震災の教訓で一番といっても過言ではない、近所付き合い。隣近所との付き合いが希薄になった現在、すぐ近くに住む人でさえ顔も名前も分からない、ということが当たり前になってきている。

しかし、災害時を想定すると、これは命にかかわる大変に危険な問題である。建物の下敷きになって身動きが取れなくなった場合、自分の存在を知る人がいないと、安否確認の方法が分からないため救助さえ行われない可能性がある。

日頃から地域のコミュニティーに参加し、防災に取り組む。そのメリットは大災害に遭遇した際の相互の救出活動、初期消火、避難所での精神的な支え合い、など、数え切れない。人間は助け合いながら生きていける、という原点に戻る意味でも、もう一度ご近所とのふれあいを大切にする。

地震の揺れがおさまった時を想定して、避難所に行く際に持ち出すものをあらかじめ用意しておくことも大事である。たとえば、食料、飲料水3日分・現金、通帳、印鑑・ナイフ、缶きり・ヘルメット（防災

頭巾)・救急薬、処方薬・携帯ラジオ、懐中電灯、予備電池・軍手、ロープ・下着、タオルはいつも用意する

- ・ 避難場所、避難経路の確認

日中に地震が起きた場合、家族が同じ場所にいない可能性が高いと思われる。電話が通じなくなることを想定して、日頃から、地震に遭遇した際どこで待ち合わせ、どのように連絡を取り合うかを話し合う。

『震災体験』

神戸市須磨区
谷口 晋平

・1月17日（火）

今日はいつもより早く起きた。時計を見てまだもう少し眠れると思ったから目を瞑ったそのときグラッと部屋が揺れ、「寝ぼけてるのかな？」と思ったと同時に激しい横揺れと、下から突き上げるような縦揺れがきた。何が起こったのか分からず、ただぼーっと部屋の電気が消え、頭上からおもちゃが落ちてくるのを見ていた。すると隣の部屋で仕事に行く準備をしていた父が「地震や！布団に入れ！」と、こっちに向かって叫んだ。言われたまま布団にもぐり揺れが治まるのを待った。ものすごく大きな音が 鳴り響き、僕の上や横に何かが落ちてきているのが分かった。ほんの数秒の出来事だったがすごく長く感じた。そう思っていると懐中電灯を持った母が僕と弟が寝ている場所にやってきて、僕たちの顔に光を当てて無事を確認した母は安心した顔をしていた。家族4人の無事を確認した父と母と一緒にベランダに出た。隣に住むAさんも同じようにベランダに出ていた。Aさんと大声で「みんな～だいじょうぶか～」と叫ぶと、いろいろなところから「だいじょうぶや！」と返事が返ってきた。そして誰かが「避難したほうがええぞ」と叫んだので、僕たちは避難することにした。

服を探し出して着替えようやく外に出て、近所の中島公園に向かうことにした。外は臭いガスのにおいで充満していた。公園はパジャマ姿の人や怪我をしている人でいっぱいだった。夜が明けるとともに長田の空が赤く燃えているのが見えた。僕たちには何が起こったのか全然わからず、そして何の指示もなくただ寒さに震えているだけなので午前9時、自宅に戻ることにした。自宅を出たときは暗くて何も分からなかったが、よく見ると周りの家が無残に壊れ、狂ったように叫んだり号泣したりしている人がいた。

自宅に到着して、中に入ってみると改めてびっくりした。怪獣にかき回されたような家の中、割れて飛び散った食器、倒れた冷蔵庫や食器棚、寝室は家具が倒れまくり、僕が寝ている位置のちょうど隣にはおもちゃを入れている大きな棚が倒れていた。こんなにむごいことが起こっていたのかすり傷ひとつなくここにいることが不思議だった。家に入ったものの繰り返す余震にたまらず外に出た。外はどす黒く、遠方で真っ赤な炎が見える。燃えカスや灰がどこからか飛んでくる。どこが火事なのか…少しずつ不安になってくる。周りの様子を見に行くと言っていた父が戻ってきて、「えらいことになるとる。ケガをした人はもちろん、たくさんの人が死んだらしい」と真っ青な顔で教えてくれた。

時計を見ると昼の時間はとくに過ぎていた。もう一度家に入り、すぐに食べられるものを探したが何もなかった。飲料水もない。常日頃から災害に対して無関心であったことに腹が立った。近くのコンビニで残っている品物を販売していると聞いた母が急いで買いに行った。母は約4時間並び、何とかペットボトルのジュース2本とクラッカー1箱を買うことができた。午後6時、救急車・消防車のサイレン音や余震、遠方に見える炎、ますます暗くなる空に不安になる。情報がほしい。神戸全体のことでなく、僕たちが今いるこの町の情報がほしい。月が異様に赤く気持ちが悪い。近所のほとんどの人たちは、ここを離れ避難すると社宅をあとにした。僕たちは今夜、どこで過ごそうかと考えているとき、Sさんが「少し家をかたづけただけからおいでよ」と声を掛けてくれた。結局、Sさん宅では3家族が6畳の部屋で過ごすことになった。朝からたいして何も食べていないのに、何も欲しいとは思わなかった。ロウソクを灯し強い余震におびえながら不安な一夜を過ごした。

・1月18日（水）

昨夜、大人の人たちはあまり眠れなかったようだ。朝ごはんはパンを一口だけ食べることができた。午前9時頃、電気がついた。みんなの歓声が上がった。しかしTVに映し出されている神戸の映像を見て愕然とした。神戸がつぶれている。見覚えのある景色が破壊されている。ショックだった。しばらく声が出なかった。けれど今日からの生活をすぐに考えた。僕たちは避難することも考えたのだが、共に過ごした2家族がいまだに実家と連絡が取れないのを知りながら、自分たちだけが避難するのが申し訳なく自宅に残ることにした。午後7時、社宅前のスーパーが品物の販売をしてくれるという情報を聞き出かけたがデマだった。須磨区民センターで水を配給してくれると聞いたので行ってみた。けれど「配給はココで避難している人だけです」と言われ、「避難所がいっぱいで、しかたなく自宅にいる人はどうなるのか？」と母とオジサンが少し口論していたが、らちがあかないのであきらめて帰った。自宅には食料も飲料水もない。これからどうすればいいのか。弟が大泣きした。親の不安を感じ取ったのかもしれない。夜になって

も飛び回るヘリコプターの大きな音に腹を立てながら、電気もつけっぱなしで寝ることにした。大きな余震はいまだに続いている。

・1月19日(木)

朝、近所の人が須磨区役所前で配給があると教えてくれた。父が行っておにぎりとうーロン茶をもらってきた。1人に1つずつということなので、僕と弟は母に連れられて行き、コッペパンとうーロン茶をもらった。社宅前のスーパーでカップ麺とミネラルウォーターの販売をしていたので4つずつ買った。買い占めをする人がいたのにはびっくりした。昼から母と弟と3人で、幼稚園と小学校の様子を見るために出かけた。小学校は避難している人であふれかえり中に入ることができなかったで、先生に会うことができなかった。幼稚園は外壁・ウサギ小屋が壊れ窓ガラスも割れていた。弟が小さく悲鳴をあげていた。無言で帰る途中、パン屋のオバサンが僕たちにクッキーをくれた。夕方、須磨区役所前でまた配給があると聞いたので家族4人で出かけた。幕の内弁当とうーロン茶をもらった。明日からも食料や飲料水を配給してくれるらしいから助かる。少しだけホッとした。

・1月20日(金)

西宮にいる知り合いの人が自転車で水を持ってきてくれた。自分も被災しているはずなのに「子どもがいるから大変だろう」とわざわざ来てくれたのだ。他に避難しているもう1人の知り合いの人がパンを持ってきてくれた。ふんわりとしたパンは大変なごちそうに感じた。社宅には10世帯の家族が残っている。なんとなく自然に生活のルールができていた。昼からみんなでゴミを焼く穴を掘った。久しぶりに外で走り回って遊ぶことができて楽しかった。まったくお風呂に入っていないが、今日は湯を沸かして体を拭こうと思う。そんな中、僕のクラスメート2人が亡くなったことを聞かされた。しかも亡くなった友達の1人は、地震の前々日うちに遊びに来ていた。そんなことを言われたのだが、いまいち“死”というものの意味がわからなかった。僕が「もう遊ばれへんの？」と聞くと母は泣きだした。

・1月21日

今朝もう一度、母と弟と3人で小学校に行ってみた。担任の先生が僕を見るなり「よかった」と言って泣いた。母が亡くなった2人のことを聞くと号泣してしまった。道路は家が完全に倒れたり、がれきをつんでいたりするので、日に日に通行できる場所が変わっている。昼から明石の知り合いの人がわざわざ、おにぎりとお水を届けに来てくれた。組合(姫路支部)から下着や靴下、ティッシュ、カセットボンベ、カップ麺などの物資が届いた。口数が少なく、震えている弟が大変気になる。

・1月22日(日)

地震よりはじめての雨が降る。避難先から社宅に帰ってくる人がいた。その人たちはお菓子を子どもたちのためにたくさん買ってきてくれた。地震後はじめて僕はわけのわからないことを言いぐずった。なぜだか分からないのだがストレスがたまっていたのだと思う。今は大人も子どももストレスがたまっているのだ。近所の人が僕たちのためにとジュースを届けてくれた。吹田の父の後輩たちも自転車で、スキヤキセットや刺身の盛り合わせを届けてくれた。「栄養つけて乗り越えて」と励まされた。僕が「地震のおかげで毎日ごちそうやなあ」と言ったら、みんな大笑いになった。B棟・D棟のトイレの排水管がダメになったようで使用できなくなった。ひょっとしたらA棟も使えなくなるかもしれない。新たな不安が生まれた。

・1月23日(月)

明け方の大きな余震で目が開いた。時計を見ると7時30分だった。須磨区役所付近は基地になっているのか、自衛隊の人やボランティアの人たちでいっぱいだ。各都道府県の消防車も止まっている。てきぱき動く消防士がかっこよく見えた。A棟のトイレもやはり使用できなくなった。これからは須磨区役所前の簡易トイレを使わないといけな。簡易トイレは数が少なく人がすごく並んでいる。それでは僕たち子どもは間に合わない。だから大便秘は新聞を敷いてさせられた。昼前に名谷に住む叔父から「水がやっと出た。風呂に入れるからおいで」と電話があった。なんだか旅行にでも行くようなワクワクした気持ちになった。昼から叔父の家に向かったが、名谷は僕たちの所とは別世界だった。まったく被災にあっていない。南と北ではこんなに違うのだ。叔父の家に着きすぐに風呂に入った。1週間ぶりの風呂は本当に気持ちが

よかった。そして久しぶりに、温かいご飯とカラ揚げを食べた。それは、毎日の水汲みと配給を取りに行くつらさを忘れさせてくれた。夜は自宅に戻った。社宅に戻るとみんながテントを張り、風呂を造っていた。が、近所の看護婦の人に「アレは絶対に風邪を引く。病院は薬も不足しているから入ったらダメやで」と言われた。今日こそは、ちゃんとパジャマに着替えて寝ようと思ったとき、突き上げるような大きな余震があったので動揺した。

・1月24日(火)

1週間がたった。今日も明け方に大きな余震がありびっくりした。今日はとてもいい天気だ。部屋のかたづけや掃除もほとんどすんだ。ベランダごしに、たわいもない話をしている母を見ると何もなかったような錯覚をしてしまう。社宅の簡易トイレの工事が始まった。が、水がくるまで使用できないとのこと。がっかりしてしまった。父の後輩が吹田からまた物資を持ってきてくれた。みんなの気持ちがうれしい。心にも少し余裕ができてきたように思う。

・1月25日(水)

朝食を食べてから家族4人で散歩をすることにした。とりあえず鷹取工場を一周することにした。周辺にある大池住宅は斜めになり倒れかけている。2階が1階になりつぶれているところもあった。焼けているところもある。鷹取商店街付近は焼け野原になっていた。あまりにもひどすぎる光景だった。新長田まで行ってみようとしたが怖くなり行くのをやめた。昼から幼稚園の先生たちがきてくれた。弟はもちろん社宅に住む園児たちは、大変喜び先生方から離れなかった。組合（姫路支部）が、牛乳や野菜を届けてくれた。

・1月26日(木)

早朝から水を汲み洗濯をし、配給をもらいに出かけ、また水を汲みに行く…。こんな暮らしがいつまで続くのか、今日は少しいらだった。組合（吹田支部）から衣料品の物資が届いた。しかし、どうしても古着類ばかりで、気持ちはうれしいがちょっと困った。社宅には避難していった人たちがほとんど戻ってきた。話を聞くと親戚の家などで世話になることがだんだん申し訳なくなってきたという。居づらくなってきたらしい。昼からまた家族4人で東須磨まで散歩した。今日は線路の上を歩いたが、所々ゆがんでいたのびびっくりした。夜、大きな余震がきた。弟が震えながら大泣きした。

・1月27日(金)

組合（博多支部）からたくさんの物資が届いた。外に取り付けた水道の蛇口をひねると赤水が出た。水が出るのはもうすぐかもしれない。昼から叔父の家に風呂に入りに行った。夕方、家に帰ると小学校より『2月12日まで休校します』という手紙が入っていた。市外の小学校に編入させている友達が多い中、僕は現状でいくつもりだったが、正直それでいいのか不安だった。

・1月28日(土)

コープ協同購入のお兄さんが訪ねてくれた。「がんばりましょうね」と非常用のお粥をくれた。今日は板宿まで散歩することにした。須磨区民センターの前で僕はバナナをもらった。妙法寺公園は青いシートで作られたテントでいっぱいだ。大田中学校でも配給を待つ人の長い列ができていた。この付近も焼け野原になっていた。昼に僕の担任の先生が訪ねてくれた。通学路が大変危険な状態なので見回っているそうだ。2月12日に学校を再開させることができるか、まだはっきりとわからないと言っていた。小学校を編入させた家庭が多いらしい。夜、父が勤める吹田工場の有志が、下着やタオルなどの物資を届けてくれた。ぬいぐるみやお菓子もあり、僕は大喜びだった。

・1月29日(日)

外に取り付けた水道の蛇口から水が出た。サビがあり飲料水には無理だが、何回も往復して家の風呂釜がいっぱいになるまで水を汲んだ。組合（鷹取支部）がたくさんのミネラルウォーターを届けてくれた。組合（姫路支部）がおでんや焼肉をしてくれて「元気だそう」と励ましてくれた。僕は母に連れられて、

鷹取商店街を通り新長田まで行ってみた。なんとなく今のこの現状を見せておきたかったらしい。飴のようにフニャリと曲がった信号機、黒く焼けただれ原形を残していないもの、まだ焼けた臭いが残る町、そして土を掘り何かを探している人々。悲惨なこの光景を忘れずに覚えていていたい。夜、体操教室の先生から電話があった。体育の指導者でありながら、毎日の水汲みで筋肉痛になったと笑っていた。

・ 1月30日(月)

月見山自治会から1軒に1台ずつカセットコンロを支給してくれた。今日と明日で播磨新宮の家に戻ることにした。須磨から高速に乗ったが、大阪方面は通行止めだし、西からの車は規制があるのでガラガラだった。親戚の人たちと食事をしたが、普通に生活していることが不思議であり、ありがたく思えた。今夜は安心してグッスリ眠れそうだ。

・ 1月31日(火)

朝から雪がものすごく降っている。神戸も雪らしい。高速道路は規制されているので2号線を使い帰ることにした。なんでもない普通の景色が明石ぐらいから変わってくる。青いシートが目立つ。そして須磨に着くとつぶれた家が増えてくる。また水汲みの生活が始まるかと思うとゾッとした。

・ 2月1日(水)

とても寒い朝だ。僕の担任の先生が訪ねてきてくれた。「お手伝いしている？わがまま言っていない？」と聞かれ少し気まずかった。若宮商店街の理髪店が営業を再開したと聞き「気分転換だ」と父が僕と弟を連れて行った。カセットコンロで湯を沸かし、じょうろで洗髪してくれた。珍しい経験ができた。

・ 2月2日(木)

町中がほこりっぽい。空気が悪い。衛生面がとても悪いように思う。水汲みで半日が過ぎていく。忙しいようで退屈な毎日になってきた。友達が遊びにきて弟も一緒に3人でTVゲームに夢中になった。いつのまにか亡くなった友達の話になっていた。僕たちなりに“死”を受け止めたと思う。4時過ぎに大きな余震が2回続けておき、大声を上げてあわてた。弟が母にしがみつき、いつまでも離れなかった。

・ 2月3日(金)

父が来週より会社に出勤することになった。通勤が不可能なので単身で寮に入る。女・子どもが残り、どうやって乗り越えればいいのか不安だが会社の命令だからしかたない。夜、大変寒かったが外でみんなと焼肉をした。

・ 2月4日(土)

僕は明け方まで体がかゆいと泣き続けた。風呂に思うように入ることができないが、それでもできる範囲で衛生面に気をつけなくてはいけない。小さな余震が何回もあった。17日のような地震が近々あると噂になっている。父がいなくなり3人になったとき、どうなるか不安になった。昼から父が出勤するための準備を買い物に付き添った。須磨体育館のドアに安置している遺体名が書いてあった。2人の名前があった。赤い線が引いてあったので引き取られ、ここにはもういないということらしい。葬式は終わったのだろうか。こんなに近くにいたのなら最期にもう一度会いたかった。でも僕は「あいつは天使になった。きっといつか会いにくる。」と信じていた。幼稚園から「15日に再園する」と連絡があった。みんなの顔を見たら弟も少しは元気になるかもしれない。

・ 2月5日(日)

父が会社に向かって出発した。ライフラインの復旧のめどが立っていない中、僕たちを抱え、社宅に残る母に批判めいたことを言う人もいた。けれど「みんなで協力しあったら何てことないで！これもええ経験やで！元気だそう」と仲のいい近所の人に励まされていた。僕はそれを見て頼もしく思った。夜になると弟が不安そうなことを言い泣き続けた。僕も服を着替えず、寝たくないと言わねえとダダをこねてぐずった。母は

困りながらも「大丈夫、大丈夫」と言い僕たちを抱えて眠った。みんな精神的に限界がきているのかもしれない。

・2月6日(月)

夜中に怖い夢を見て泣いた。明日は白川台の母に実家に帰ることになった。

・2月7日(火)

・2月8日(水)

・2月9日(木)

・2月10日(金)

中島公園は避難している人であふれかえり、なぜか怖さを感じる。傾いていた大池住宅は、もうすでにつぶしてあった。ポストに学校からの手紙が入っていて『13日から再開することについての注意事項』が書いてあった。午後9時過ぎ、父が帰ってきた。電車はまだ不通になっているところがあるので、バスに乗ったり、歩いたりして時間がかかったとのこと。

・2月11日(土)

父と早朝から水汲みをした。やはり大人の男の人の手があると助かる。そろそろ普通の生活がしたい。

・2月12日(日)

父と早朝から水汲みをした。今日、また父は会社の寮に戻る。

・2月13日(月)

今日から小学校が再開した。通学路はまだまだ危険でいっぱいだ。歩道にまで、がれきが山のように積まれている。これでは大人がついていても少し心配だ。学校は午前中だけだ。僕のクラスは21人登校していた。遠くに避難した友達もいる。2人の犠牲者もいる。家族に犠牲者が出たものもいる。とてもつらい話だ。担任の先生が泣きながら、亡くなってしまった2つの命の話をした。

・2月14日(火)

通学路が変わり遠回りをしなくてはいけなくなった。安全面を考えるとそれは仕方ないことだ。小学校の近くで水汲みをする幼稚園の先生方に会った。何日も洗っていないのか髪がべっとりとしていた。

・2月15日(水)

幼稚園も再開した。友達と会えて弟もうれしそうにしていた。夜、流し台で髪を洗った。久しぶりだったので気持ちがよかった。

・2月16日(木)

昼から雨が降り少し寒く感じた。夜、台所をストーブで暖め、カセットコンロと電気ストーブで湯を沸かし、流し台に湯を張り行水をした。寒かったけど珍しさもあり喜んだ。

地震があってから1ヶ月が経つ。ライフラインはいつ復旧するのか、神戸は元通りになるのか。この地震で『人は1人では生きていけない』ということを痛切に感じた。悲惨な光景や人の優しさを忘れたくない。

「地震の記憶箱」

神戸市垂水区
中野 元太

忘れたはずの大震災

あれからほぼ10年が経とうとしていた。2004年10月23日、新潟県中越地震が発生した。すぐに動き出した舞子高校。義援金や寄せ書き、他団体から預かった千羽鶴などを新潟へ届けようと、僕を含め舞子高校生2名と教頭先生で新潟県を訪問した。ヒビだらけの道路、瓦礫の山となった家、薄暗いまち、表情のない住民、重苦しい空気。心の奥底に強く鍵をかけてしまっていたはずの阪神・淡路大震災の記憶箱が、新潟と共鳴しあい破裂してしまった。急に胸が苦しくなる。なぜだかわからないのに何かに怯えてしまう。体内に流れ出た恐怖が内臓の間を満たし、内臓を圧迫し僕を苦しめ続けていた。その記憶を吐き出し、すべてを忘れたかった。10年前のあの阪神・淡路大震災を僕は忘れたと思っていたのに。

あの日の記憶

激しい揺れで目が覚めた。地震という言葉さえ知らなかった僕にとって、それは恐怖というよりは驚きに近いものだった。「ゴー」という轟音が僕の下を幾度となく通り過ぎていく。それに伴って、激しい揺れが襲ってくるのだ。そして轟音がどんどん遠ざかっていくにつれて、揺れも収まってきた。多くの人が2分くらいは揺れが続いたという印象を持っている。しかし僕にとって、それはほぼ一瞬の出来事にしか感じられなかった。1秒の間に10回くらい揺さぶられた、そういった印象を持っていた。驚きのあまり、ほとんど意識がなかったのかもしれない。しばらくぼーっとしていた。僕は2段ベッドの下の段に長座の格好でいた。いつ飛び起きたのかもわからない、それほどまでに混乱していた。真っ暗闇だったにもかかわらず、電気をつけようとさえしなかった。つけようとしてもつかないとわかっていたのかもしれないが、たぶんそんなことでさえ考えられなかったのだろう。その辺を浮遊していた僕の意識を呼び戻してくれたのは、父の呼ぶ声だった。（この頃、僕と姉は父と母と1歳の妹の寝ている部屋とは5メートル位の距離にある別の部屋で寝ていた。）とりあえず親のところへ行こうと、一緒に寝ていた大好きなシャチのぬいぐるみを脇に抱えてベッドを脱出した。何も見えない中、手探りで歩く。いろんなものが落ちていたはずだが、それどころではなかった。冷静な状態でいられるはずもなく、2段ベッドの上で寝ていた姉をおいてきていた。行く道の途中に、何か大きな障害物があるのがわかった。しかし、それどころではない。小さな体でそのガラクタの山を越える。やっとの思いで親が寝ている部屋の入り口に差し掛かったとき、暗闇から誰かの手が伸びてきた。顔も体も見えなかった。本当に手だけだったのでそれにも正直驚いていた。そのまま暗闇に吸い込まれるようにして、いつの間にか親の布団の中にいた。何分くらいたったのだろうか。姉が何か叫んでいる。「何かが落ちて通れへん。」どうも立ち往生してしまっているらしい。たぶんさっきのガラクタの山だろう。あとからわかったのだが、このガラクタの山は、新聞やトイレトーパー、掃除機などだった。姉も無事にその山を乗り越え、なんとか家族全員無事に同じ部屋に集まることができた。このとき寝室に懐中電灯は1つもなかった。どこにあるかもよくわからない状態だった。母は1歳の妹を隣にいた姉に預けると、懐中電灯とラジオを探しに部屋を出て行った。妹は地震発生直後から泣きわめいている。当然といえば当然なのだが、その泣き声が僕の地震に対する恐怖心を増幅させていった。暗闇の中なんとか母は懐中電灯とラジオを探し出し、寝室まで戻ってきた。ラジオをつける。震度などの詳しい情報は入ってこなかったのだが、このときすでに震源が発表されていた。僕の家は震源地からおよそ15キロ。近いわりにあまり被害がないような雰囲気だったので、この地震は大したことはないのだろうというのが、親の率直な感想だったようだ。その日のラジオで当てになる情報といえばそれくらいで、大して役に立たなかった。夜が明けるまで、5人そろって布団の中にいた。

だいぶ外が明るくなってきた。部屋の中も、懐中電灯なしで見えるようになってくる。親が安全を確認しに行く。落ちていて危ないものは特になかったらしく、僕たちは寝室を脱出した。本棚の本が飛び出したり物が落ちたりしている。落ちていたというより飛んでいったの方が適切な表現かもしれない。いくつかの本は本棚から2～3メートルくらいの距離まで飛ばされていたからだ。あとから聞いた話だが、地震の力は重力と反対の方向に働いているらしく、大きな地震になると瞬間的にほぼ無重力の状態になるのだそうだ。こういった状況にもかかわらず、奇跡的なことに倒れた家具はひとつもなかった。もし倒れていたら、僕の親と妹もろとも大きなタンスの下敷きになっていただろう。そして、地震の直接的な揺れによっ

て割れたガラスや食器はなんと1枚もない。それはなぜか…食器棚の扉はやたらと固く、当時小学校1年生だった僕はいつも本気で引っ張ってこの扉を開けているほどだった。そのおかげで、地震の揺れでも扉が開かなかったのだ。でも食器棚の中身は扉のほうにもたれかかる様になっている。結局のところ、それを開けたときにキャッチに失敗して数枚が割れてしまっていた。このときの僕の家はいろんな意味で地震に強かった。まず建てられてから1年も経っていない新しいマンションだったため、老朽化も進んでいなかった。倒壊は免れたのだが、家の中はヒビだらけになり、洗面所の台は歪んでしまっていた。そして一番恐ろしかったことは、マンション3階部分に横向きに長い亀裂が走っていたことだった。もしかしたら神戸市役所のような、ある階だけが倒壊するといったことになっていたのかもしれない。そして水道管と各家庭につなぐ管の間には大きなタンクがあり、それがマンションのてっぺんについていた。その上入居者も少なかったのも、そのタンクに溜まった水をしばらくの間使うことができた。テレビもなぜか小さな木の棒で固定できるようになっていて、テレビの下ビデオデッキを収納する部分は動いたもののテレビは落ちていなかった。学習机もそう。背の高い本棚と学習机は合体できるようになっていて、合体していれば絶対に本棚は倒れない。なにかと安全設計だったようだ。いまあの日の家具の配置などを思い出すと、まさしく危険な家の代表ナンバーワンの称号を得られそうなほどなのに、この結果は奇跡に近いものだといえる。今では、タンスや本棚が倒れないようにちゃんと「突っ張り棒」をすべての家具につけている。テレビも台から落ちることがないように固定してある。「突っ張り棒」はそこまで高くはない。ホームセンターのコーナンでは、2,000円くらいで1セットが買える。それを高いと思うか安いと思うかはそれぞれの意見だが、それで命が守れるのであればとても安いと考えるのが普通だろう。

当時塩屋に住んでいた祖父母から電話があった。激しい揺れでテレビが飛んできたり、タンスが歩いたりといろいろ大変だったようだが、怪我ひとつなかったようだ。タンスが歩くという表現は、少しわかりにくいかもしれないが、固定していない冷蔵庫や家具は本当に歩いてくるのだ。下からの地震の力に左右の揺れが加わりそういったものが揺さぶられる。タンスが歩いてこっちにやってきたという話も過去に何度か聞いたことがあった。揺れが収まった後、隣に住んでいた若者が部屋まで駆けつけてくれたらしい。心配してくれたその若者に感謝することにしよう。

朝の5時46分という、普段の僕の家ではご飯は炊けている時間ではなかった。しかし、なぜかこの日だけ、前の日にスイッチを入れていたのでご飯は炊けていたのだった。偶然とは怖いものだとつくづく思う。ご飯は冷たくはなっていたのだが、おにぎりにして食べていた。地震直後はひどい揺れだったということ以外、何の情報も十分には入ってこない。外の様子を見ても特に大きな被害はなかった。築何年かもわからない、明らかに旧建築基準法の耐震基準で建てられた住宅も何事なかったかのように残っている。いつもの平凡な風景だった。僕の通っている小学校も何事なかったかのように建っていた。内心悔しがってはいたのだが、学校もあることだし行く準備をしようとしていた。近所の人とも「今日は学校があるのかなあ」と親が話していたほど、情報に乏しかった。大きな余震が続いていたので行くことはなかったのだが…。

大きな地震だったため、念のために車で生活できるようにとガソリンを入れに行った。もう他の車でいっぱいガソリンスタンドの外にまで行列が伸びている。ガソリンスタンドの地下にある大きなガソリンタンクには地震の影響がなかったのか、きちんと点検してから営業したのかは今でも気になるところである。ガソリンタンクはそう簡単に壊れる物ではないことは百も承知だが、それでも不安である。ちょうどこのとき、家のほうに電気が戻ったらしい。家にいた母が急いでテレビをつける。最初に目に飛び込んできたのは阪神高速道路の横倒しの映像。地震の被害の大きさをこのとき初めて知った。初めて映像という信頼できる情報を得たのである。このときのラジオ放送の言葉では、どんなにすごい大災害が起きたと言っても、その被害状況を想像できるはずもなかった。慌ててハローストアーに買い物に行ったのだが遅すぎた。すぐに食べられるようなものはほとんどなくガラーンとした様子だった。食べ物の数より人間の数のほうが多かったくらいだ。僕はパン売り場の前に立って数個しか残っていないパンをしばらく眺めていた。なんとなくすごいことが起こったということはわかっていたはずである。しかし、僕はどんどん数の減っていくパンを気にしながらも、どれを買おうかなあと必死に悩んでいた。結局買えたかどうかは覚えていない。もしかしたらいいのがなくて買わなかったのかもしれない。地震後初めての夜、いつでも逃げ出せるようにと、貴重品の入ったかばんを用意していた。親は携帯ラジオを聴きながらウトウトする日が続いたそう。この日から5人一緒に同じ部屋で寝るようになった。

消せない記憶

余震で目が覚める。こう何度も余震が発生すると、それにたいして鈍感にもなってしまいそうだが、まったくそのようなものではなかった。「ゴゴゴゴ」「ガシャン、ガシャン」「ギシギシ」。地震波が迫り僕たちの下を通り過ぎようとする。それとともに揺れが大きくなり、食器のぶつかり合う音や、家具のきしむ音がイヤでも耳に入ってくる。もしかしたら、家がきしむ音も聞こえていたかもしれない。この音は一生僕を苦しめるのだろうか。僕は今も震災当時と同じマンションに住んでいる。当時のグリーンスタジアム（現スカイマークスタジアム）の近くにある僕の家には、夏になると花火ナイトの巨大な爆発音が聞こえてくる。何の予告もなしにその花火が発射される。「ドーン」「ドンドンドンドン！」というこの音が、阪神・淡路大震災を生んだ兵庫県南部地震の発生を告げる、岩石が破碎される音に聞こえてならない。体に力が入り、身構える。地震ではないと確認できるのに数秒はかかってしまう。この音を聞くたびに恐怖心に駆られ、僕は生きた心地がしなかった。「揺れ」に関してもそうである。いまでも小さな地震が発生する。そのほんの小さなゆれに対しても、とても敏感になってしまい、緊張感が走る。またあの地震が起こるのではないかと…。地震でおびえるならまだしも、大きなトラックが通って発生する小さなゆれでさえも、一瞬驚いてしまうほどだ。今となっては過去の出来事である大震災の記憶はいまも僕の体を蝕んでいる。

それからの日々

地震が発生したのは真冬である。ガス暖房器は使えないのでエアコンのスイッチが入る。ふと窓の外に目をやると、黒い煙が山の向こうからモクモクと上がっていた。長田の火事である。数本の煙柱が空へと伸びている光景は、今でもはっきりと覚えている。ちょっとした不便を感じながらも、いつもと同じような生活が送れている僕たち。それに比べて山の向こうは火の海と化している。まさしく地獄だ。テレビのニュースで流れる長田の映像では今ひとつ想像できないでいたのだが、本物の黒煙を見ると急に現実味が沸いてくる。この辺りにも灰が降ってきていた。

地震発生から2日くらいたつと、かなり気分も落ち着いてくる。地震が発生した日などは、親が行くところ行くところついて回ったのだが、このときには別の部屋でファミコンをする余裕もでてきた。バイクのゲームなのだが、敵や障害物に当たると人間がバイクもろとも12分割されるような、あまり教育によろしくないものだった。時々余震が発生すると、そのゲームを丸投げして部屋を飛び出し、リビングの大きな机の下に隠れる。その後ろから置いていかれた妹が泣きながら走ってくる。余震が収まるとまたゲームに戻る、といったパターンがしばらくは続いていた。

1月19日は神戸市営地下鉄の西神中央～板宿間が復旧した日だ。父が地下鉄で西神中央まで行き、食料品と大きなパンを買ってきてくれた。しばらくは出ていた水も、この日、ついに止まってしまった。

相変わらず毎日ホットプレートで何かを焼いたり、おにぎりを食べたりする日々が続いていた。水が出ないのでサランラップなどで皿をカバーして使っていた。テレビで避難所の様子を見てみると、僕たちよりもよっぽどいいものを食べている。それが当時の僕たちにとっては羨ましかったらしい。「いいな～」とか「たべたいな～」とかいいながらテレビを見ていた。母からは「あの人たちは家がないから」とかいいう話を聞かされたようだが、今ひとつ理解できていなかったらしい。この頃からだろうか、僕が地震の絵を書くようになったり、ほかの絵を描いているのだけれども、失敗したら「地震やぁ」と言って絵をクチャクチャにするようになったりした。当時僕が好きだったプラレール（電車のおもちゃである）にも地震が発生するようになり、よく鉄橋を崩したりしていたそうだ。

この日の夜、地震発生から3日目だが、いとこの住んでいる姫路に行くことになった。一般道をひた走り3時間かけて到着した。姫路も大きなゆれに見舞われたようだが、特にこれといった被害は見られなかった。次の日の朝に、近くのジャスコに買い物に行った。品数は豊富だが非常食になりそうなものはやはり少ない。買ったものを見た店員が「神戸から来たの？」と尋ねてくる。「そうです。」と母が答える。するとその店員は段ボール箱を用意してくれたり、台に備え付けてあるビニール袋を1巻き分くれたりした。そのほか親戚もたくさん差し入れしてくれた。でっかい水用のタンクも借りることができた。10年間も借りっぱなしになっているが、さほど問題ではないようだ。次に姫路で地震が発生したら助けに来いという意味だろう。ニュースでは僕の通っている菅の台小学校は明後日に再開されると言っていたので、この日の夜に神戸に戻るようになった。

姫路で買ってきた食糧や水を、祖父母や神戸に住んでいるいとこの家に届けて回った。めちゃくちゃに

なった街並みが、国道2号線沿いに広がっている。テレビで見るのと同じ風景だった。道路が陥没している。「スゲェ」としか言いようがなかったのだが、車好きの僕にとって一番の「スゲェ」は、普段見られない自衛隊車両や消防車、パトカーなどのオンパレードだった。液状化か、ただ水が溜まっているだけなのかはわからないが、前の車がその大きな水溜りを踏んで、僕の家車にかかった。

小学校が再開されると言っていたのに、結局は誤報だった。小学校の先生によれば、水の確保もできていない状態でいつ再開できるのか、めども立っていないということだった。でも1月23日のこの日に多くの学校が再開されたことは事実だったようだ。学校も休みになってしまったので、祖父母が気にしていたお墓を見に行くことにした。ほとんどの墓石が倒れている。新しそうなものも倒れていたのだからこれはだめかもしれないと思っていたのだが、いたって普通だった。特に何もなくて、いつもと同じように整然と立っていた。やはり新しいものより古いもののほうがその土地に馴染むのだろうか。

地震発生から1週間くらいたつと、僕たちの住むマンションにも給水車がやってくるようになった。少し茶色いにごった水ではあったが、トイレ用の水としては十分に役立つ。僕も水のタンクを持って長い列に並んでいた。

環境防災科で

いまでも多くの人と地震について話す機会がある。少し相手の気持ちを察しながらも「あの時どうでしたか？」と尋ねてみる。「なぜか自分だけは死なないと思っていた」と言う。その方は不正確な記憶ではあるが長田に住んでいたように思う。あの激しい揺れの中、住んでいた建物もかなりボロボロになり、周りで多くの方がなくなっていたのに「自分だけは助かるんだ」という妙な自信に駆られていたのだそうだ。いまでもそれは変わっていないらしく、南海地震が起こると知っていながらもたいした地震対策は行っていないらしい。する気にならないのだそうだ。実際、あの時多くの人は「自分だけは助かる」と思っていたに違いない。そしていまでも、震災の記憶を失いつつある阪神・淡路地域の多くの人がそう思っているに違いない。その1人ひとりの意識を変えることで、本当に災害に強いコミュニティが形成されていくのだろう。少しでもお手伝いができればいいと、地域の防災訓練に参加したり、小学生や中学生たちと一緒に防災について学んだりもしている。

こちらは最近の話である。JICA兵庫のエレベーターで一緒になったある中年女性が、僕たちにいきなり尋ねてきた。「どういった活動をしているの?」「防災関係の活動を中心に行っていますが…」と答える。すると中年女性は「そんな無意味なことしないでいいやん。あの阪神・淡路大震災を私も体験したけど、あんな大きな揺れの中、パニック状態になって何もできひんもん。」と言う。苦笑いを浮かべながら「そうですか」と一応うなずいておいた。内心ではパニック状態になっても安全を確保できるように、耐震化や家具を固定するなどの、災害が発生する前の対策が必要なのになあ、と思っていた。本当に世の中にはいろんな人がいると実感してしまった。

阪神・淡路大震災の教訓を生かし、地域防災リーダーの育成を目的として、全国にただ1つ舞子高校に存在する環境防災科。そこに入学したのは、防災に興味があったからではなかった。元々は環境問題について学べると聞いていたので、それを目的にこの科を志望したのだった。将来の夢はやはり環境方面になるのだが、今では完全に防災人間になってしまっていた。阪神・淡路大震災の教訓を発信し、近隣の小学校や中学校に防災教育を行うことに精を出している。この被災地神戸でも、防災教育というのはあまり普及していない。以前、いまの教育に欠けている環境・防災教育の充実を図ってほしいと国にも訴えたことがあったのだが、脱ゆとり教育などで難しいという返答しかなかった。予想通りといえば予想通りなのだが、生きていくうえで必要不可欠なこの2つの教育が欠けるということには危機感を覚える。

震災の体験を後世まで伝え続けるということは非常に困難である。語り部がどんどん減っていき、震災の記憶も薄れていく。一方で地震の周期は100年から数千年と日本人の平均寿命よりも長い。そういった意味でも、この震災体験集「語り継ぐ2」の意味は非常に大きいと思うのだが、文章や写真、映像だけでは今ひとつ実感がわかない。必要なのは地震、洪水、いわゆる自然災害という存在をもっと現実味のある、実感できる現象の1つとして捉えられなくてはならない。地震が起こると言っても、地面が揺れるという非現実的で非日常なものでは、今ひとつ地震が起こるなんて信じられないし、信じられなければ対策を講じていこうとは思わない。「それではどうすれば、現実味のある現象にすることができるのか?」といえどもとても難しい問題ではあるが、そのうちの1つに自然を感じるということがあげられると思う。これは昨年末に発生したスマトラ島地震とそれによる津波の被害を受けたインドネシア、アチェの男の子が言ったことである。「スマトラ沖地震では津波のことを知らなかったために犠牲になった現地の人々がたくさんいる。しかし、普段から海や自然と向き合って生活している漁師などは、津波が来る前に波が引く

という自然からの警告を感じ取って身を守ることができたけれども、私たちはどうだろう。今では、街には家やビルが立ち並び、緑を見かけることはほとんどない。そうした中で、自然が私たちに何かを伝えようとしても、当然、私たちは気づかず身を守ることなどできないのではないだろうか。本当の自然と触れ合うように、私たちは常に自然に耳を傾けていなければならない。そうすれば自然が何かを伝えてくれることがあるかもしれない。まずは自然を感じるからだ。」このことはとても的を射ているように思う。たとえば豪雨時の2次災害ともなる土砂崩れ。土砂崩れが発生する前には、そのがけにいくつかの変化が見られる。たとえば、崖からにごった水が流れ出ているということや、崖の中から音が聞こえたりすること。火山噴火の前には火山性の地震が増える。地震の前にもなんらかの変化が見られるのだが、残念ながら僕たち人間にはその変化は感じるができない。自然と触れ合うことによって自然災害に現実味を持たせることは難しい。しかし、少なくとも何らかの危険は感じられるようになるはずである。阪神・淡路大震災を体験し、環境防災科で学び、多くの人の話を聞くことによって、自分の中で本当の環境防災ができてくつあるように思う。阪神・淡路大震災のような大災害を2度と生まないように、少しずつではあるが防災教育に貢献できていけばいいと思う。

記憶

神戸市垂水区
八田 佳澄

あの時、私たちは今まで誰も経験したことのないような災害の真っ只中にいた。もちろん「真っ只中」と言っても、それぞれに違いはあるだろう。幸いにも大切なものを失うというようなことはなかったという人もいれば、あまりにも多くのものを失ってしまった人もいるだろう。私たちのようにまだ小さくて、今となっては記憶がおぼろげだという人もいれば、最前線で地域のために働いてくださって、震災のことは忘れたくても忘れられないという人もいるだろう。1人1人当時思ったことや、していたことは違うけれど、同じときに同じ震災を経験したということは変わらない。と、私は思う。

私は被害の少ない地域に住んでいたし、小さかった。こんな私が「語り継ぐ」なんてテーマで何が書けるのか……とも思うが、私なりに今まで学んだことと当時の記憶を照らし合わせて書いてみようと思う。

—震災前夜—

震災のことで一番初めに思い出すとしたら、一般的にはあの大揺れではないかと思う。でも残念ながら（という表現は違うかもしれないけれど）、私にはそんな記憶が無い。あの揺れの中、熟睡していたから。そんな私が、震災に関して思い出すのは意外にも、前日である1995年1月16日の夜のことである。覚えている人はいるだろうか？その夜、小さな地震が2回ほどあったことを。

その時間、私は母と弟と3人で夕飯を食べていた。「グラッ」と小さく、ほんのわずかな時間だけ揺れた。「今の地震やな、珍しい。」と、母が言った。母いわく、「地震」という言葉を当時の私は知らなかったらしい。覚えていないけれど「地震って何？」と私は母に聞いたそうだ。母も地震のことなんてほとんど知らなかったから説明するのにずいぶん困ったとか。（滋賀出身の母は、『兵庫は災害の多いところだ』と思っていたらしい。震災以前は関西人の災害に対する意識って低かったのだろうか？）

しばらくするとまた小さな地震があった。最初の地震は地震速報にも出なかったらしいが、2回目の地震は、付いていたテレビ画面の上の方にちゃんと白い文字が現れた。「震度1」。自分のいる場所でたった今起こった地震が、しばらくするとテレビに映る。言うなれば全国ネット。すごい！当時小学校1年生の私は変にわくわくしていた。その頃は地震に対する認識なんてそんな程度。小さかったとはいえ、本当に何も分かってなかった。

私は、3歳で宝塚市から神戸市垂水区に引っ越してきた。海が近くてのどかな町。父の実家を、当時はまだ少なかった二世帯住宅に建て替えて、祖父母も含めた6人暮らしが始まった。その頃から祖母は「神戸は地震がこーへん所なんやで。佳澄ちゃんエエ所来たなあ。」なんてことあるごとに言っていた。祖父もたまに言っていたかもしれない。今思うに、当時祖母は「神戸に地震は来ない。」というのはある意味、神戸のセールスポイントだと思っていたのではなかろうか。2人共、本当に神戸が大好きな人たちだから。

—阪神・淡路大震災—

1月17日。その日は3連休明けで、学校があるはずだった。今から3年ほど前まで、父は火・水曜日が休みの会社に勤めていたので、その日も「明日が学校休みだったら家族で出かけられるのにね。」とか、そんな会話をした。

そういえば、初めに『熟睡していた』と書いたが、起きたきっかけは停電だった。自分の部屋をもらったばかりで、1人で寝るようにはなったが真っ暗にするのが怖くて、私は「ちっちゃい電気」（オレンジ色の電球）を付けて寝ていた。祖母が、もったいないのでそれを夜中にそっと消しに来ると、私はその気配に気付いて目を覚ましては怒っていた。だからその日も、また消しに来たのだらうと思って、「おばあちゃん！電気消さんといてよ！」と叫んで起きたのだった。（…今、考えてみても何でこんな大変な時の目覚め方がこれなのか分からない。）でも誰もいない。どういうこと？真っ暗な部屋で、布団にくるまったまま、じっとしていた。

ここから記憶は切れ切れになる。祖母と母が部屋まで来てくれて、子供ながらにやっと状況が飲み込めて、そうしたら急に怖くなって泣き出してしまった。不安が募って、ちょっとしたパニック状態だったの

かもしれない。真っ暗だから、お気に入りのぬいぐるみがどこにいったか分からなくて、それすらも怖くて泣いた記憶がある。

覚えていないのが本当に申し訳ないのだが、私の部屋に一番駆けつけてくれたのは祖父だったらしい。あんな激しい揺れの中、混乱もするだろうに、真っ先に来てくれた。私だったらできるだろうか？その話を、母に聞かされてからずっと思っていることだ。

次に思い出せるのは、1階のリビングの風景である。両親が好きで集めていた綺麗なコーヒークップや食器類が、見るも無惨な姿になっていった。とても裸足で歩けるような状態ではなかった。床には古臭くてドでかいラジオが置かれ、家族全員ソファに座って朝日が昇るのを待った。冬の夜明けというのは遅いものだが、この1月17日は私の短い17年の生涯の中で、一番遅い夜明けだったと思う。

10時くらいになると電気が回復した。掃除機も使えるようになったので、母はまず割れた食器類を片付け始めた。父がテレビをつけた。そこには、ぐちゃぐちゃになった神戸の姿が映し出されていた。黒い煙が濛々と立ち込めている、神戸の街。倒壊した阪神高速道路一。「こりゃあもう、神戸あかんわ・・・。」と、父が言った。母は、父のこの言葉が一番印象的だったと言っていた。朝食は、前の日の晩に父が買ってきてくれていたケーキだった。

その日1日は子供達にとってはのんきなものとなった。前日、私は祖父母に一輪車を買ってもらったばかりだった。学校が休校になったのをいいことに、練習を始めたのだ。祖父が1日中、練習に付き合ってくれた。1日でだいぶ乗れるようになっていた気がする。母は心配だったそうだ。こんな大変な時に子供を遊ばせておいて、周りの人は変に思わないか、と。でも祖父は「良いんや。子供らも不安なんやろう。」と言って、私と弟の面倒を見てくれていたらしい。

—水—

電気は17日の午前中には復旧したが、水道とガスは1日が終わり、2日、3日経っても、1週間が過ぎても復旧せず、いつまでたっても使えないままだった。水が出るようになったのは1ヶ月が過ぎるころ、ガスにいたってはもっと後だった。

水道が使えない間の飲料水は、父が会社でもらってきてくれた。父の会社は大阪の箕面にあり、被害もほとんど無かったからだ。たくさんのペットボトルが床をずっと占領していた。

これで、飲み水の心配はなくなった。しかし困ったのはトイレの水だ。とりあえずは家の前に流れている川から水を汲み上げ、最初はタンクにわざわざ入れていた。今まで使っていたように流せると思っていたのだが、水の勢いが少なくて、ほとんど流れなかったので、途中からバケツから直接便器に水を入れて流した。そうするようになってからは一応ちゃんと流れるようになったが、それでも嫌な臭いがたちこめて、しばらくの間トイレに行くのがとても億劫だった。

『川から水を汲み上げ』と書いたが、このとき西舞子の住人は一丸となった。大人が何人も川に降りて、水を次々と汲み上げる。中にはほとんど会ったことが無いような人もいた。まさに、地域で協力して震災を乗り切った1つの例だと思う。

そしてお風呂。水もガスも使えない・・・当然入れなくなった。祖父の会社の社員寮、近所の銭湯一。いろんな所にお風呂を借りに行った。

特に印象が強いのは、北区にある祖母の妹さんの家である。そこにもお風呂を借りるために行ったのだが・・・同じ神戸でも被害が全然違うということに衝撃を覚えた。垂水区だってそんなに大きな被害が出たわけではないので、被害の大きかった地域の方から見ると垂水区だって同じ感覚だったのかもしれないけれど、それでも、別世界に迷い込んでしまったような違和感を覚えた。被害も少なく済んだのに、何を言うかと思われるかもしれないが「早く元の生活に戻りたい。」そう思った。

水が出ること、電気が点くこと、ガスが使えること・・・その全てがこんなにも贅沢なことで、決して当たり前なんかではないということを、小さかった私は初めて知った。

—学校—

学校は・・・いつの間にか再開していた。これも厳密な時期はさっぱりだ。早かったのか遅かったのか？久しぶりに学校に足を踏み入れたときのこともあまり覚えていない。一体どんな気持ちだったのだろう。

友達に会えるのが嬉しくて、わくわくしていたのだろうか？幸い、私の通っていた小学校では誰も犠牲は出なかった。みんなで喜んだのは、クラスで飼っていた大きな金魚が3匹とも変わらず元気に泳いでいたこと。

まだ体育館には避難生活を続けている方がたくさんいらっしゃって、学校が終わるとクラスの友達も2人か3人ほどは体育館へと帰っていった。その子達は、しばらく経って年度が変わる頃にはもう、違う学校に転校してしまった。

学校が始まってしばらくすると、ちらほらとかばんをもらったり、鉛筆をもらったりした覚えがある。今思うと、あれは救援物資だったのだ。日本だけでなく、世界中から色んな人の助けをもらって、神戸は立ち直ったのだ。そういえば、関東に住むいとこ達から「大変だけどがんばって！」という手紙をもらったのもこのころだったと思う。

震災後、学校で特に大きく変わったことは給食だと思う。しばらくは給食センターから食器が来なかった。ビニル袋に入ったコッペパンに、マーガリンが付いてくるだけの「粗食」だった。（その頃の私はすごく小食だったので実を言えば量としてはちょうど良かったのだが・・・。）そして、当時の牛乳は容器がビンだったのだが、震災後は紙パックに変わっていた。

そういえば給食当番のとき、しょっちゅう牛乳の入った箱を落としては辺り一面を白い海にしたな。と思い出す。小学1年生にはビンが30何本も入った箱はやはり重かったのだろう。

自分を含めて、皆も、給食が普通の状態に戻ればまたビンの牛乳を飲むものだと思っていた。しかし、1年生が終わる頃になって、普通の給食に戻ったにもかかわらず、牛乳は依然として紙パックのままだった。給食当番の子が牛乳の入った箱を落としても、もう大惨事になることはなかった。でも、ビンの牛乳に二度と会えないと分かったときはちょっと寂しかった。

つまり私たちは「震災を覚えている最後の世代」であり、「牛乳ビンを覚えている最後の世代」でもあるのだ。

—影響—

地震から数ヶ月ほど経った頃だろうか。祖父母・母・私・弟の5人で電車に乗って三宮まで行った。「こういうのは子供たちにも見せておいたほうがいい。」ということで、連れて行ってもらったのだ。しかし、これまた三宮に着いてからの風景というものは全く覚えていない。どうしてこんなに忘れてしまっているのだろうか・・・。

覚えているのは、電車の中からみた長田の町並み。地震で1階部分が潰れて、ぎゅっと小さくなってしまった家がずーっと連なっていた。

「家」のことで、父が教えてくれた話がある。

父は当時住宅メーカーに勤めていた。震災の翌月くらいからいつもの4～5倍の受注が殺到したそう。いつもなら契約数をなるべく増やすことに必死になっていたのに、あまりにも注文が多すぎて断らなければならないという状態が何ヶ月も続き、注文が増えるのと比例して現場で働く人手も不足し始めた。それを解消するために、北海道や東北、そしてカナダからわざわざ大工さんに来てもらったりしたそう。「1日でも早く着工してくれ。」という要望も毎日のようにあったらしい。父は、気持ちは痛い程分かるけれど、どうしても着工が半年先になるなど、どうにもできない状況に辛い思いをしたそう。そして、「ここで娘が亡くなったんだ」というような話をいくつも聞いたと言っていた。しかし父は、「家が完成したときに『ありがとうございました。』という言葉聞いたとき、『家の仕事をやって良かった。』と思ったんや。」とも言っていた。

死ぬほど忙しかったのに、遠方から大工さんをお呼びなどしたため経費がかかりすぎて、結局利益はプラスマイナス0だったらしいが、それでもこの仕事で役に立てたんだという実感があったそう。

この話を聞いて、自分の将来を考えてみた。どんな仕事をしているだろう。まだ全然分からないけれど、同じような災害や事故が起こったときに、役立てるような、助けになるような仕事がしたいなと思った。

—数年経って—

『小学〇年生』という学習雑誌を買った記憶のある人は多いだろう。私も小さいときは買っていたのだ

が、そのときの『小学2年生』に、防災の特集が組まれていたことをよく覚えている。

ドラえもんが水の集め方や、消火器具の紹介、家庭の危険箇所チェック、非常持ち出し袋にはどんな物を入れると良いか、などを教えてくれるものだった。（これほど色々書いてあったにもかかわらず、当時の私が作った非常持ち出し袋の中身はおもちゃばかりだった。）私はそのページを切ってリビングの壁に貼った。「水ってこうやって集めるねんて！」と母や弟に得意げに教えていた記憶がある。

小さい子の読む本にまで防災の特集（もちろん小さい子向けのものだが）を組む事なんて、震災以前はあまり無かったのではないだろうか。防災なんて、コムズカシイ。メンドクサイ。そんな気持ちじゃいけないんだということに日本全体が気づいたのかなと思う。やはり阪神・淡路大震災は日本の防災意識を変えた1つの転機だったんだなと、改めてそう思う。

震災後に、ある小学校の音楽の先生によって作られた『しあわせ運べるように』という歌がある。震災から1年経つ頃、よく「終わりの会」で歌った記憶がある。クラスでは震災について勉強し、学校行事としても積極的にやっていたからというのもあると思う。しかし、年月が経つにつれて震災を話題にすることも随分と減った。毎年1月17日が来ればちょこちょこニュースでやっているから、そこで「そういえばもう〇年か。」と思い出して「あの頃は大変だったね。」という会話をする。ルミナリエの時期になれば、家族で出かけたりもした。でも、当時の私の中では結局そのときだけであった。空白の時間が何年もあったと思う。

「震災の教訓を生かさなければならぬ」という意味において。

—環境防災科—

そんな私が、また阪神・淡路大震災を意識するようになるきっかけは、中学3年生のときである。舞子高校への受験を決めて、色々調べているうちに知った『環境防災科』の存在。初めて聞いたときは、「長いし、珍しい名前やな。」と思った。でもその前に、まず『環境防災』という四字熟語の意味が分からなかった。

入学した今となっては、「環境防災科？なにそれ？なんの勉強するん？消防士になるん？」とか、人に聞かれても、ちゃんと説明できるのだが、『消防士になるための学科なん？』という考えすら思いつかないほど、それは私にとって未知の領域だった。とにかく第一印象は謎だらけ。後に説明を聞きにいったりして、どういう学科か理解できたが、それでも私の頭の中に「震災について学ぼう！」という気は、正直全くなかった。「こころのケア」の勉強もするというのを聞き、そこに興味を持ったので、当時は震災なんて二の次だった。

それから2年間とちょっと。今まで様々な経験をさせてもらったと思う。普通、個人で行こうと思ってもなかなか難しいようなものにも参加できたり、いろんな人の話を聞けたり。人の話をしっかり聞く、自分の考えをちゃんと伝えるということは、今までも頑張ってきてきたつもりだったが、入学したときに苦労したので、きっとできていなかったのだろう。今だってちゃんとできているかどうかは分からないが、もしできていないのならこれからもそういう努力を続けていくつもりだ。

—語り継ぐ—

震災から10年が経ち、思うことがある。私は震災で大きな被害は受けていない。ひどい光景を目の当たりにしたわけでもないし、大切な人を失ったわけでもない。私にとって、地震は近いようで遠いのだ。でも、心に深い傷を負って、本当に辛い思いをした人がいるということは、この2年ちょっとを通じて、強く感じたことだ。そして、それを知らない人がどんどん増えている。そういう人たちに、私たちの世代がちゃんと伝えなければならないということも強く感じた。きっとそれが私たちに望まれていることなのだろうと。

そう思うものの、なかなか自分が行動を起こせていない。相変わらず甘いまだな、と思う。たとえば自分の家の備えは完璧か？学校は？地域は？よく行くお店は？とか……。まだまだできることはあるはずだ。

最近、東京での地震や、東海地震など、大きな災害が起こるのではないかというムードが少しずつだが、日本中に広がっているように思う。実際、去年は地震に限らず、水害などもあり、全体がこういう心構えになることは良い傾向だと思う。確かに、災害なんて起こらないのが一番で、それによって悲しむ人がた

くさんいるのだということを考えると、何とかならないかという思いでいっぱいになる。だからこそ、備えたり、伝えたり、が大事になってくるのだろう。そして、一番大事なことは「忘れない」ということだと思う。『人が本当に死ぬのは、忘れられた瞬間』みたいな言葉をどこかで聞いたことがあるが、きっと災害にだって同じことが言える。忘れないために、忘れさせないために、これから私ができることを見つけていきたいと思う。

地震を体験しての教訓

神戸市北区
樋口 貴昭

● 震災当時

○ 当日～1週間後まで

ゴォーという音とガタガタガタガタという揺れでボクは目覚めた。

すごい揺れがボク達を襲った。天井についている電気の笠が大きく左右にゆれ、台所ではガシャーンという明らかに皿の割れる音がした。ボクの隣には弟が寝ていてその隣に母が寝ているという状態だった。父は別の部屋で寝ていた。

目を覚ましてすぐ、母が大声で「地震やから体小さくしなさい！！」という声でボクは必死に体を小さくして弟と一緒に母のほうへ近づいていった。揺れが納まるとすぐに父が来て「大丈夫か！！」と言。

地震がある程度治まって、改めてあたりを見渡すとテレビは畳の上に落ちており、案の定割れた皿が散乱していた。そしてボクの上にはクリスマスツリーの入った箱がちょこんと乗っていた。家族4人はケガもなく無事であったが、家の中はひどい状態であった。

ボクと弟は地震というものが何なのかわからなかったからア然とした顔で父と母の行動を見ていた。その後であるが当日が休み明けだったこともあり、前日は少し夜更かしをしていた。だからボクも弟もそのまま目を閉じてすぐ眠ってしまっていた。

再び目が覚めたころは電気が復旧していてTVがついていた。眠気まなこでTVを見たボクはその映像を見て驚いた。それは灘区、長田区の家が潰れていたり、火災が発生していて大変な状態であったりするものだった。さらに亡くなった人の数が出ていてその数がテレビのチャンネルを変えるごとに増えていく様子を見て驚いた。

同時に震度3ぐらいの余震が何度も起こってあまりの恐怖に体が震えていたことを覚えている。ボクはこの時始めて地震というものがどういうものかを知り、その恐怖を感じたのだった。

トイレに行きたくなったボクはトイレに行きおしっこをした後、水を流そうとした。が、何回流すところをひねっても水は出てこない。母に言うも母はお風呂の浴槽に張ってあった水を持ってきて「こおやって流すんだよ。」と言。小学1年生のボクにとってはその行為に驚きと感動を覚え何回もトイレに行っては自分で流そうとしていた。今となって思えばその当時の貴重な水をあんなふうに使っていたボクはバカだと思ってしまう。

母が親戚の安否確認のためにいろいろなところへ連絡をとろうとしたが電話が繋がらなかった。やっと連絡が取れた親戚がいたが、その親戚の家は高層マンションであったため、揺れがすごくて食器などがほとんど割れてしまい、物が散乱したそう。

僕の住んでいる地域は、1日経ってガスを使うことができるようになったが、水道がなかなか出なくて給水車が小学校の前まできていた。そこへポリタンク、ポリバケツを抱えて父と一緒に水をもらいに行った。そして僕が住んでいたのは2階だったが、その1コ上の3階に住んでいた幼なじみの子に水を分けに行ったことを覚えている。なぜかというとその子の家は男が父しかいないのだが、その子の父は警察署に勤務していたため地震が起きてから数日間は家にいなかったのだ。だから助け合って過ごした。

母は近所の人たちと買い物に行ったのだが商品はほとんど残っていなかったらしい。少し買うことができたが菓子パンや野菜等はあまりなく、すぐに食べられる果物系を重視して買ってきた。しかし、そのときの果物の値段はかなり高くして驚いたと母は教えてくれた。

さらに母は、洗濯のボランティアをしていた。洗濯機で洗えないものまで持ってこられて困ったそうだが、着るものがこれしかないと言われてやむを得なく洗ったそう。

やはり当時は小学校1年生だったこともあり、朝のアニメ番組は当時なくてはならないものだった。が、地震が起きてから数日間はずっと地震情報（マグニチュードや各地の被害）ばかりやっていたのでつま

らなさを感じたこともあった。地震の怖さを知ったが同時に小学1年生としての幼さが出てしまった一面である。

○ 1週間後～1ヶ月

高層マンションに住んでいた親戚の家へしばらくしてから（交通の行き来が良くなってから）行った。そして、ボクの家は被害が少なく、食器等があまり割れなかったので食器を持って行ってあげた。親戚の家へ行くとまだ物が少し散乱した状態で割れた皿などがベランダに集められていた。子供部屋にいて親戚の子といっしょに遊んでいたが部屋から見た公園には人がたくさん集まっていたのをずっと眺めていた。

それから少し経って、芦屋のおばちゃんが避難していた学校へ行った。おばちゃんを見つけるまでかなり探し回った。そしてようやく見つけて話をしていると、おばちゃんが、三ツ矢サイダーが飲みたいと言い出して父がコンビニや商店を探しに探し回ってようやく見つけてきた。おばちゃんはそれだけの行為だったがものすごく喜んでくれた。

芦屋の祖母は西宮に入院していた。すぐには行くことができず、心配だった。そしてやっと会いに行くことができ、祖母は元気そうだったので安心した。芦屋の祖母は自分の家のことをすごく心配していた。が、父が「大丈夫やから」と言うとはっとした顔を見せた。病院も当時はすごいことになっていた。お見舞いに来ている人が大勢いてエレベーターがいっぱいで順番を待っていたこともあった。

芦屋の祖父の妹は、お風呂好きだったがライフラインが寸断されていたため好きなお風呂に入ることができなかった。しかし、自衛隊が簡易風呂を設置してくれたので並んでそのお風呂に入ることを楽しみにしていた。

だいぶ経ってからであったが、千葉に住んでいるおばちゃんとも連絡を取ることができた。千葉の方でも報道がすごらしく心配して連絡をしてきてくれたのだ。その電話の中でこっちの状況と親戚の人の安否などを報告した。まあなによりボク達家族4人が無事であったということに安心してくれたようで、それは声でも伝わってくるものだった。

2週間ぐらいしてやっと学校が始まった。家から学校までは10分ぐらいであったがずっと上り坂で平坦なところはほとんどないような場所だった。登校中、道がデコボコになっていて歩きづらかったことを覚えている。周りは壁や瓦がはがれていたぐらいで、家が全壊していたということはまったくなかった。そして学校に着くとグラウンドを走り回っている子達が見えた。校舎へ入っていくと壁が剥がれていたり、ヒビが入っていたり少し危険な状態だった。直した箇所もあったからすごく違和感があった。そして教室へ入ると久しぶりにみんなと会うことができた。それまではほとんど家にこもったままであったから久しぶりに体を動かすことは楽しかったし、友達と一緒に話したりすることはすごく当たり前に感じる事ができた。授業を受けたり、それからだいぶ経ってから給食が始まったりしてからは、いたって普通な感じで全く変な感じはしなくなった。

○ その時父は

明るくなってから家を出たときはまさか震度7の地震が起こったとは思わず車で会社の状況を見に行くといった軽い気持ちで会社に行ったそう。しかし、車で会社に向かうにつれて周りの家が数多く崩れていたため祖父の家が心配になって寄ることにした。いざ着いてみると家は傾いており中に入るとタンスが倒れていたり、数多くの皿が割れていたり、物が散乱している状態であった。

ある程度状況を把握してから車で会社へ向かおうとしたが、道路が陥没し、段差ができて車で通うのはかなり難しいと判断したそう。事務所についていざ電気をつけようとしても電気は通っていなかった。それではと水を使おうとしたら断水状態で水は全く使えなかった。その事務所で唯一使えたのは、ファックス用の電話だけであった。それを使って他の社員へ無事かどうかの確認をとる連絡をかけ続けた。

しかし、1人だけ連絡がとれなかった。それで、父はFM神戸へわざわざ連絡をとり無事かどうか連絡を入れるようにとラジオで放送をしてもらったそう。それから倉庫へ行って中を確認しに行ったが、倉庫内の荷物はギュウギュウであったため上のものが下に落ちてしまっていたということは一切なかった。

そうだ。

父の義姉の父親が、家の下敷きになって亡くなったと聞き、すぐに義姉に会うために灘の小学校を探し回った。小学校はたいい避難所になっていたため体育館は避難者でいっぱいであった。その中から探し出すのはすごく大変だったらしいが、無事会うことができ、話をする事ができた。

当時は交通も途絶え、親戚の人もくることができなかったのでお葬式をするような状態ではなかった。それから何日もたってから僕たち家族4人でお参りをしに行った。

父の兄の家は芦屋だった。安否を確認するために会いに行くと家は傾いてしまい避難所生活を余儀なくされていた。しかしその家が傾いた直接的な理由は地震ではなく地震によって隣の家が傾き、それが原因で一緒に傾いてしまったのだ。さらに屋根が崩れて雨が降れば家の中が水浸しになるからと父はビニル袋を買いに行ったがなかなか見つからず、やっと見つけたビニル袋はかなり高くあまり多くは買えなかったそうだ。それから少ししてまたビニル袋と水を持って父の兄の家へもう一度行った。今にも潰れそうな家を見てボクは口が開いたまま閉じることができなかった。

ボクと弟はそこの家の、当時大学生のお兄ちゃんと一緒に公園へ行って遊んでもらった。実を言うと、ボクと弟がなぜわざわざ芦屋まで付いて行ったかはお兄ちゃんに遊んでもらえるから行ったのである。お兄ちゃんは遊んだ帰りにいつも駄菓子屋に寄ってくれてお菓子を買ってくれた。小学1年のボクとまだ幼稚園にも入っていない弟にとってそれはかなり甘い誘惑であった。だから芦屋のお兄ちゃんのところに行くと聞いたときはかなり敏感に反応し、何の迷いもなく付いて行ったものだった。

神戸―芦屋間は車で通っただけでもかなりの家が倒壊していることに目が行った。

主に全壊が目立ったが、1階部分がグシャグシャになっていることや、1階部分が無くなって2階部分が1階になっているマンションもあった。そういった風景を見つ、父はコンビニに入った。コンビニの中の商品はやはり少なくパンと飲み物を買うのがやっとだったらしい。レジの前には長い列ができていたが誰も順番を抜かそうとかそういうことは一切なかったらしい。

2、3日経ってから神戸の港に自衛隊が給水車を設置してくれた。それからは何回も水をもらいに行く生活となった。会社ではトイレに行ったら水を流さなくてはいけなかったので水の減りが早く、その都度水をもらいに行っていたそうだ。

また、1級建築士にこのまま住んでも大丈夫であるかということを相談しに行ったそうだ。

● 1ヵ月後～

○ 別れ

久振りに学校へ行くと変わらないみんなの姿があった。誰が亡くなったとかは無かったと思うし、いきなり引越したりする子もいなかった。このまま何も起こることなくこれからの小学校生活が続くと考えていた。しかし、現実はその甘くはなかった。小学2年生に上がり、さらに学年が上がると同時に学年の人数は一気に下がっていった。仲の良かった子がいつの間にかいなくなってしまう。ボクはサッカーをその頃からしていたから、一緒にサッカーをやっていた子達とはかなり仲が良かった。特にKという子とは仲が良かった。いつも学校でサッカーをして遊んだり他にもいろいろなことをしたりして遊んだ。同じポジションを争ったりもしたから本当に良き友達でもあり、ライバルだった。しかし、その子も2年生最後の大会が終わったら引越すことになってしまった。Kが引越すことに対して小学2年生のボクはあまり深く考えなかった。ただ、どっかに行ってしまうだけだと思っていたし、このままサッカーを続けていればまたすぐにあえるような感じがしていた。現に今サッカーを続けていたことによって再会を果たすこともできた。他にも一緒にサッカーをやっていた子がいきなり引越してしまうなどが続いてチームの人数はかなり減った。友達がいなくなるということをあまり深く考えたことは無いが、小学生ながらいい気持ちはしなかった。

○ 出会い

震災から1年もしないうちから近所の公園には仮設住宅が建ち始めた。

小学校の低学年のときはあまり男女間での意識はないため、学校から帰るときも男女一緒に帰ったりすることが多かった。そんな中1人の女の子がグループの中に入ってきた。その子は地震で家が潰れて仮設

住宅に入ってきたのだという。とても明るい子でハキハキした子だったような気がする。

学校が終わってからよくその子の家までみんなで送っていったりあげたりもしたし、その後で一緒に遊んだりもした。でも最初その子は、自分が仮設住宅に住んでいることをあまり言われなくなかったらしい。

家の話になるとあまり多くの事を語ろうとはしなかった。でも小学生の僕らにとってはその子の気持ちもそんなに気づくことなく自分達の興味だけでしつこく聞いていたような気がする。

やはり、出会いがあれば別れはあるものである。その子もついに新しい家が決まって仮設住宅からはいなくなるようになった。せっかく仲良くなった矢先のことだったから驚いた。でもその時は本当にちゃんとした家が見つかってよかったなと思った。

○ その後

しあわせの村という家の近くにある施設でもいろいろな被害があったらしいが、実際に行ったのは地震が起こってからかなり経った後のことだった。それでも病院などの各種施設は壁が剥がれていたり結構な被害を受けていた。また、芝生のあるグラウンドへ行くと少し地面がボコボコしていたりしてその時はボールを蹴って遊んだのだが、よくつまずいて転んだりしたことを覚えている。

公園の仮設住宅がなくなって、サッカーをするグラウンドが増えた。

仮設住宅があったグラウンドを使って正月に餅つき大会をしたり、夏には夏祭りを開催したりいろいろな行事で使われるようになった。

家が傾いた父の兄の家は、完全に元どおりというよりも前よりも中はきれいになったし、外観もきれいになって安心して住める家へとなっていた。

中学生になると、それまであまり興味を持たなかった「防災」というものが授業に取り込まれ始め、地域では「防災福祉コミュニティ」や「防災福祉ジュニアチーム」などが発足された。防災に視点をおいた地区としてボクの地域は生まれ変わりつつある。また小・中学生が活動に参加しやすいようにさまざまなイベントを設け、景品などをつけることによって若年層にも防災に興味を持ってもらえるように努力している。

○ まとめ

この地震によってさまざまなことを学べた。地域では地震に対する考え方や対応が大きく変わることにもなったし、それによってうちの地域では「防災福祉コミュニティ」が発足したんだと思う。この地震でわかったことはやはり発災前からの準備が大切であったということだ。起こってからでないと行動をしないという人間の考え方を大きく変えた出来事となっただろう。そしてもうひとつ言えることは人と人とのつながりということだ。

こういった教訓を絶対に忘れてはいけないと思うし、この経験を伝えていかなくては自分達がこの地震を体験した意味がなくなってくと思う。

震災から10年が経って日本ではいろいろなところで「防災」ということが考えられてきた。が、市民のほとんどの人があの震災のことを忘れていているように思う。世界の防災力の向上は絶対必要だと考える。

将来、もう一度このような大地震を経験することになったらボクはそういった準備や対応はできているのだろうか。自分の子供とかにどういう風に指示を出せばいいのか、パニックを起こしかねない。しかし、今勉強していることを最大限に生かし、冷静な対応をとっていけば大丈夫だと思う。

当然のことだが自分の防災に対する意識、そしてみんなの防災に対する意識を変えていくことによって、新しい防災の意欲につながっていくと思う。

地震の被害のすごさを若年層から伝えていき、未来につなげていくことが大切なのだ。

前へ進むために後ろを振り返ってみる

神戸市垂水区
藤澤 正太

毎年1月17日になると当時のことを思い出す。あまり多くのことは覚えてはいないが、残ったほんのわずかの思い出は強く心に残っている。しかし、大人になるにつれて阪神・淡路大震災のことを考えることは無くなっていき、記憶は薄れていくのだらうと思う。この「語り継ぐ」は自分の過去を忘れないための大切な記録になり、環境防災科や多くの人々にとっての系譜になっていくはずだ。今までの思い出、考え、決意を自分なりにまとめていく。

1. 阪神・淡路大震災発生

1995年1月17日午前5時46分、兵庫県南部地震は起きた。経験したことも無い突然のとてつもなく激しい揺れに当時小学1年生だった僕を筆頭に家族は皆混乱した。パニックになった家の中で父と母が僕と弟を物置（いつもここに布団を片付けていた）に身を隠れさせ、揺れをしのがせた。初めは混乱していた僕だったが時間が経つと地震発生直後の恐怖に慣れてしまって何かのゲームや遊びのように楽しんでしまっていた。揺れが収まり家の中は奇妙なぐらいの静寂に包まれた。何も聞こえなくて視野もはっきりしない家の中を見渡すと、見たことも無い景色が目の前にあった。不思議な方向に傾いてしまって洋服が散乱したクローゼット。食器棚が傾いて食器が何枚も割れてしまった。いつも使っていたお気に入りの食器も粉々になってしまった。テレビゲームをしまっていた棚も綺麗に倒れてしまっていた。揺れが一旦収まり、急いで家の外へ避難しようとしたが傾いた食器棚のせいで家を出るのが困難になってしまった。食器棚があるリビングを通らないと玄関には出られなかったからだ。母がスリッパを履いて玄関まで行き、みんなの靴を用意してくれた。何とか家を出た僕たちはまず車に逃げ込み、ラジオを聴きながら少し時間を過ごした。ラジオは何事もなかったかのように1月17日の天気予報をしていた。「こんなに大変なことが起こったのにニュースしてへんのかよ」と思いながら僕は車のクッションに怒りをぶつけていた。父が何回かチャンネルを切り替えてみると今さっき我が家に訪れた恐ろしい客人についてのニュースを発見し家族でしばらく聞き入った。父と母がこそこそと話している様子を見るとやはりこれはただ事じゃないらしい。こんな時でも僕は地震発生時のような好奇心が先に出て来てしまっていた。父と母の話し合いが終わったらしくとりあえず近くに住んでいる父方の祖父母の家に向かうことになった。

祖父母の家も僕が住んでいた家と同じような団地だった。テレビやたんすが倒れ、僕の家とほぼ同じような感じだった。地震が発生してから時間が経ち、外も明るくなって来ていたので家の中がはっきりと見えてきていた。隅々まで見渡せた祖父母の家。被害は自分の家とそんなに変わらないのにととても恐ろしく見えた。父たちが片付けをしていると電気が通り始め、テレビがつくようになった。午前7時半頃だった。テレビを付けて皆一息入れようとしたがテレビが映した映像は心を休ませることなんて到底出来ることのないものだった。テレビは真っ赤に燃えている長田のまちや倒れてしまった高速道路を鮮明に映していた。母方の祖父母が住んでいる辺りだったのでテレビの中には見たことがある建物も多く映っていた。「神戸はもうダメなんじゃないか？」テレビのニュースキャスターがボソッと一言を今でもはっきりと覚えている。

それからとりあえず一旦家に戻った。団地の入り口でふと横を見てみると1階に住んでいたおばさんが育てていた花壇がめちゃくちゃになっていた。とても立派な花壇で夏休みの宿題や幼馴染みのみんなで遊ぶ時によくお世話になった。大好きな花壇だった。色鮮やかではなくなってしまった花壇は僕の心をそのまま表してくれていた。

2. 地震後の生活

地震後は水・ガスにはしばらく困ったがほぼ不自由なく生活できた。僕は近くの学校まで母と水をもらいに行くことが何度かあった。水が蛇口から出るのが当たり前と思っていた僕はわざわざもらいに行くという経験の無い行動に興味を覚え、何度も行っただと思う。水を入れるポリタンクがテレビのヒーローの武器みたいに見え、水を含んで重くなってもなかなか手放すことがなかった。当時父は加古川で働いていて車で出勤しよく水をもらって帰って来ていた。震災後しばらくは家で節水が続いていて、親は「極力トイレの水は使わない」というルールを立てていた。とにかく水は大切だった。水が多くの場合で使われていることもこの震災によって学んだ。飲んだりお風呂やトイレに使ったりするだけでなく、歯を磨くと

きに口をすすいだりするような当たり前の行動でも多くの水を消費していたことがわかった。数日後には近くにある銭湯が使えるようになった。お風呂が嫌いだった僕だが初めて入る大きな湯船と久しぶりにまともなお風呂に入れるという喜びもあり、勇み足で銭湯に向かった。その銭湯の印象がとても強く、ライフラインが完全復旧してからでも銭湯に連れて行ってほしいと親に頼むことがあった。それからしばらくは家族で銭湯に行くことが何回もあった。水を身近な存在で大切なものと思うようになったのはこれらの出来事からだった。

小学校は震災から2週間ほどしてから再開された。この舞子の辺りは長田などと比べると被害が大きいエリアではなかったのでクラスの友達みんな無事だった。しかし何人かの友達は違う県に避難していて会えなくなってしまった。2年生になるまでの3ヶ月の間クラスにいくつかある空席は何とも言えない淋しさを感じさせた。全校朝集では校長先生が「亡くなった生徒がいる」と話していた。本当ならとてもショックを受ける出来事なのだろうがまだ小学1年だったことと学年が違い、接する機会もなかった人だったということがあって人の死の実感があまり無かった。

1年の思い出を振り返って文章にまとめる文集もこの年は作成する時間も無ければ作成するような状況ではなかったのではなかった。2年生に進級し、阪神・淡路大震災から1年が経つ頃に僕は文集の存在を初めて知った。今、僕の本棚には2年生からの文集が規則正しく並んでいる。僕はそれを眺める度に何か強い喪失感を感じてしまう。

3. 家の周りやいつも行っていた場所の変化

家の周りの環境は大きく変わってしまった。幼馴染や学校の友達との遊び場で毎日のように行っていた近所の大きなグラウンドには沢山の仮設住宅が出来た。何軒も同じ建物が並び続けていて凸凹な土も新しい砂利に変わってしまったその風景はいつも使っていたグラウンドとは全く違っていたので、出来てからしばらくは違和感を覚えていた。阪神・淡路大震災から数年後、グラウンド一面を覆いつくしていた仮設住宅は撤去され、まばらになってしまった砂利も再び以前の土に戻り震災前と全く同じ形に戻った。元に戻ったはずなのだが今度は仮設住宅が無いグラウンドに違和感をしばらく覚えてしまった。今、このグラウンドに違和感を覚えることは全くなく、震災前のあの頃のように友達と野球をしたりしている。

家の前にあったすべり台しかないが広がった公園は取り壊されてしまい、違う場所に新しく作り直された。以前よりもこじんまりとした新しい公園はきれいになって遊具が増えたものの、何か物足りないという感じだった。テレビや新聞では阪神・淡路大震災という出来事にあまり実感がわかなかったが、こうした身近な物の変化によってやっと実感できたと思う。

震災後の体験で面白かったことが1つある。須磨に住んでいた叔母の家に1人で遊びに行った時の話だ。僕は小学1年の夏休みからその叔母の家に1人で遊びに行くことが何回もあった。須磨駅で降りて国道2号線沿いに歩く。お気に入りの模型店に寄り道する。お寺の印が立てかけてある坂道を見つけたらそこを真っ直ぐ登った先に叔母の住むマンションがある。ただそれだけの道のりだった。震災から数ヶ月が過ぎたある日、いつもと同じように叔母の家に向かっていた。いつもと同じ道を歩き、模型店で寄り道し、モスバーガーの移動販売でお昼ご飯を買っていつもの坂道を歩いた。しかし、ここからが違っていった。坂道の途中で道が陥没していて先に進めなくなっていたのだ。地震の影響で陥没していたらしく、周りにはこの道しかなかった。叔母の家に向かう道がわからなくなってしまった僕は来た道を戻り、半泣きになりながらさっき寄り道した模型店の辺りを当ても無く歩いていると、来るのが遅いので心配して探しに来た叔母に無事保護されて何とかたどり着いたという話だ。まさか震災の影響をこんな所で受けるとは思ってなかった。今は笑い話で話せるが当時の自分にとっては大事件だったんだと思う。

僕は鷹取や新長田にも昔からよく行っていた。母方の祖父母が住んでいたからだ。震災後何度か祖父母の家を訪れて祖父母と一緒に新長田に行ったり須磨水族園に行ったりしていた。鷹取から新長田まで続くバス道を歩いていると、震災前にはあった建物が多く無くなっていて見たことのない景色が広がっていた。昔祖父が入院していた病院の近くにあった活気のある商店街は静かで人の賑わいもなく、まだ撤去されていないままの家の残骸などもちらほら残っているのも目に付き、新長田まで遊びに行くことが何だか申し訳ないのではと子供ながらに考えてみることも何度かあった。須磨水族園は相変わらず人の多さだったと思う。しかし、いくつか立ち入り禁止になっている所もあってすこし悲しかった。中学生になって一度だけ祖父母と水族園に行き、綺麗に復興してきてはいるがちらほらと震災の傷跡が残っている水族園を見て「もう震災から何年も経つんだなあ」と考えることもあった。

新長田の商店街は僕が見てきた震災から復興していくまちの中で一番変化が印象的だった所だ。一度だけ母や祖母と一緒に新長田の仮設商店街の「バラール」に行ったことがある。震災によって焼け跡しか残っていなかった場所に存在していた不思議で大きなテントの商店街だった。その中の店舗の一つにダイエー

があったのは何となく覚えている。迷路みたいなバラールの中には子供の僕に興味のある物はあまり売っていなかったが、とにかく各店のおじさんやおばさんの元気さや優しさなどがとても印象的だった。復興を願う絵もいくつか展示されていた。この頃からまちづくりの様なものがあったのかと思うと今この学科で学んでいることが防災に繋がっているということがよくわかる。

4. 震災の記憶が薄れ始めてきた頃

阪神・淡路大震災から月日が過ぎ、小学校でも震災の話をはとんどしなくなっていた。1月17日が近づいた時だけニュースや学校で話題になり、毎年その時だけ「もう震災からこんなに日が経っていたのか」と毎年同じことを考えているだけだった。また、阪神・淡路大震災を忘れないという決意の歌の定番である「しあわせ運べるように」も当時の僕は正直あまり好きではなかった。毎年小学校ではこの歌を歌わされ、何かと言えばこの歌が出てきて飽き飽きしていた。

震災後から始まった神戸の行事といえば「神戸ルミナリエ」だ。僕はこれがとても好きだった。毎年人ごみが多く、最後まで見るのはしんどかったが、見に行く度にその美しさに感動していた。けど、阪神・淡路大震災の復興を願う行事としては見ていなかったと思う。「毎年神戸ルミナリエという綺麗なモニュメントがある」ということとしか捉えていなかった。

中学校になると小学校の時よりも震災を振り返る機会が減り、考える時間は365日の内の3日くらいになっていたと思う。とにかく阪神・淡路大震災は順調に僕の頭の中から薄れていっていた。しかし中学3年になり受験のシーズンを向かえ、担任の先生に環境防災科が出来たことを教えてもらってから僕は震災の記憶を今度は拾い集めていくことになる。

5. そして現在

正直言って環境防災科に入る動機はちゃんとしたものではなかった。普通科と違う特殊な授業が多く、何となく後悔したんじゃないかと考えることも何度かあった。しかし、こうやってこの文章を考えていると環境防災科に入学して本当によかったと思う。阪神・淡路大震災のイメージも大きく変わった。今までは震災によって何人もの死者を出したり多くの建物を失ったりと震災は悪いことばかりしか起こらないと思っていた。しかし震災はそれだけではなく人々の繋がりの大切さやこの教訓を未来に伝えて行くことの必要性を教えてくれたというプラスの出来事もあったことを知ることが出来た。

「しあわせ はこぼう」という小学4・5・6年生用の教材が家にあった。阪神・淡路大震災を忘れないため、またその教訓を1冊にまとめた本だった。そこには気になる文章がいくつかあった。

「自分がこんなに人のためになることをやったというのが、とてもうれしいです。私にもできることがあったのが、とてもうれしいです。」

「私たちの考えたことがまちづくりに役立つと思ったらとてもうれしくなりました。」

「私たち神戸のまちは、地震なんかで終わってほしくない。私たちの手で作り上げたい。」

「まわりのくずれている家や建物に花が供えてあるのを見ると、生きている自分は本当に幸せだなと感じます。これからも亡くなった人たちのためにも神戸のまちを明るく安全なまちにしていきたいと思います。」

これらの文章は震災のプラスの出来事を良く表していると思う。自分に出来ることがあったことの喜び、自分達で未来を作っていくという強い思いなどがこの1冊に込められていた。何でこの本を小学校の時にしっかりと読まなかったのだろうと後悔した。きっとしっかりと読んでいたら「しあわせ運べるように」に込められた真のメッセージも神戸ルミナリエが伝えたいメッセージも小学生の時に理解できていただろうと思う。

また、環境防災科では阪神・淡路大震災についてだけではなく他の色々な災害や防災のことなど沢山のことが学べた。愛知の高校生との交流、豊岡でのボランティア活動や新潟中越地震の募金活動など普通に生活していたら絶対にしていなかったであろう経験も出来た。これらの活動では誰かのために頑張ることの素晴らしさを知り、また、その難しさも知った。三宮で新潟県中越地震の募金活動をしていた時のことだった。募金をしてくれた男性に「豊岡には募金をしてくれないのか？向こうもまだ困っているんだよ」と言われた。僕は曖昧な返事しか出来なかった。テレビやラジオで1つの災害が取り上げられているその裏側でまだ助けを求めている人が沢山いる。それが同時に出来ないという歯がゆさを経験した。

また、防災を広めていこう、災害が起こった時は中心になって頑張ろうという想いも覚えた。学校の代表でクラスの何人かで東京の阪神・淡路大震災復興フォーラムに参加した時のことだ。僕達はこれからの神戸を支える若者みたいな感じで紹介された。短い時間だったが大勢の人の前で紹介され、期待されてい

ることがわかった。

僕の将来の夢は看護師になることだ。看護師という夢は中学の時にドラマを見て何となく思い付いた夢だったがこの学科で人のために働く素晴らしさや難しさを少しだけだが知り、叶えるために努力することを決めた。環境防災科で学んだこともこの先活かしていこうと思う。看護と防災を繋げるのは難しいと思うがこの先精一杯考えてみるつもりだ。時々後ろを振り返り、震災時の思い出や環境防災科で学んだことを振り返り、それを未来への道にして前に全力で進んで行きたい。

いま、生きている

神戸市垂水区
船橋 藍

プロローグ ～地震の前日～

母の話だ。ちょうど晩ごはんを食べている時に、ストンと上から下に落ちるようなおかしい地震を母は感じたらしい。母は「さっきの地震は震度1くらいかな？」と思いながら地震の情報をテレビで見ようとしたが、母が感じた揺れは観測されなかったのかテレビには報道されなかった。とにかく、母が語るには今までに体験したことのない変な揺れ方の地震だったらしい。私の兄弟は2人いる。当時の妹は5才、弟は1才と8ヶ月だった。私たち兄弟はそろって台所の奥の子供部屋で3人「川」の字になってぐっすり寝ていた。

父は集合住宅や個人住宅の設計・施工の仕事をしていた、帰ってくるのはいつも夜中で泊まりになる日も多かった。地震が起こる当日も、朝の3時くらいの帰宅だった。父は「もう会社で寝てしまうおうかと思ったけど、とりあえず帰ってきたあ」と言ってその日は帰宅してきた。それから母達はすぐに寝たらしい。

～5時46分の地震とひとつの奇跡～

「地震って何なん？」

当時の私は地震という言葉を知らず、1月17日の朝、車の中のラジオで「地震」という言葉を聞いて母に質問したらしい。私が初めて体験した地震が、阪神・淡路大震災だったからだ（記憶上）。そのときの私は小学校1年生。母にそんなことを聞いた私はたぶん何が起こったかわからず、頭の中が混乱していたんじゃないかと思う。じゃないと今、何でこんな朝早くから車の中にいるのか、何で家に入れないのか、しっかりと理解できなかった。わかるのはあの大きな揺れを体験したことだけ。しかし、わけがわからない中にも「恐怖」というものを確かに私は感じていた。車の中から感じる外の雰囲気は静かで、ただいつもと違ってピリッとした空気だったように思う。

午前5時46分、私は変な感じがして目を開けた。私が寝ていた部屋は妹と弟と一緒に3人横に並んで寝ていた。周りが騒がしいというよりか、おかしい。「ごーーっ」と大きな音が聞こえてジェットコースターに乗ってるみたいに思った。その瞬間、本棚が私の目の前を通過した。真っ暗だから周りは全然見えなかったけどドシッと重い何かが私の布団の上に乗ってきた。息が苦しくてウッてなったけどすぐに息ができるようになった。父が急いで私達の部屋に来て私の上に乗っていた重いものを除けてくれたからだ。私は見つかったけど、隣で寝ていた妹が見つからない。すぐ隣で寝ていたはずなのに？父は必死に妹を探したそう。父はまだ小さい妹を怖がらせまいと、「悠！！かくれんぼしようかあ～！どこにおるんやろうなあ？」といきなりかくれんぼをし始めた。妹の声は「ここやでえ！」と聞こえるものの全く居所がわからなかった。父は妹が机の下にいると言うから探しに行ったのに、そこにも妹はいなくてなかなか見つからない。結局、妹が見つかったのはタンスが傾いて斜めになっているちょうど真下。妹は上にあるのが木でできたものだったので、机だと思ったらしい。あの時のことを父は、「始めは部屋に入ろうと思ってふすまが開かなかったんや。台所は冷蔵庫が斜めになってるし、食器はグチャグチャやし、まず行き着くのに大変やった。」母に聞いたことだがあの時の父は、突然の事態に混乱していたのか、「何やこれはあ！！？」と言いながら子供部屋に向かったらしい。母は昨日の地震があったせいか、妙に落ち着いていて父に「地震やん。」と突っ込んだそう。

これは後から父に聞いた話だが、「火事場の馬鹿力ってすごいなあ。必死にタンス持ち上げたらすぐにあの重いタンスが持ち上がった。あの時のタンスは藍らが寝た真上にあったやろ？あれなあ、ふすまにタンスがひっかかって止まってただけやってんで。ふすまがなかったら3人とも死んでいたかもしれないなあ。」と聞かされた。私は環境防災科に入って、いろんな体験談や語り部さんの話をたくさん聞く機会がある。その中で「阪神・淡路大震災で助かった人達の中には、奇跡としか言いようのないような話がたくさんあるんだよ」と聞かされたことを思い出した。そして死んでいたかもしれないと聞いて、その多くの奇跡が起こった中で私も偶然のような奇跡を体験した1人なのだと感じた。

明け方の大きな地震が起こっても、まだ比較的大きい余震が何回か起こった。その余震を私の家族は、

リビングで2枚の布団をかぶって過ごしたそうだ。私がほんの少し覚えているのは、母が両手で私と小さな弟をギュッと抱きしめて、父が妹に覆いかぶさって守ってくれたことだ。地震がとりあえず収まってから、家の外の駐車場の車に避難した。父たちは車の中でラジオをつけて、状況を把握しようとしたそうだ。ラジオでは、アナウンサーが「震源は淡路です。」と言っていたらしい。それを聞いた父たちは「淡路ってことは、近い垂水区が、一番被害が大きいんやろな」と思ったそうだ。でも、実際は垂水区より東の地域の方が被害を受けていたんだと後で気付くことになる。

私の家は団地ということもあり近所同士交流もあったし、仲が良かったと思う。それもあって、父が2階のおじいさんとおばあさんの2人住まいの家や階段中の人に大丈夫かどうか聞きに行っていた。幸いみんな大丈夫だということだったので、次は慌てて家から徒歩5分くらいの祖父母の家へ父は向かった。私とお母さんと妹とまだ小さな弟は車の中で待つことになった。母は車の中で私達を怖がらせないようにと思ったらしく、当時私たちが好きだった「忍たま乱太郎」というアニメの歌を歌ってくれた。「そうさ〜♪100%勇気!もうやりきるしかないさ!この〜♪」と車の中は忍たま乱太郎の大合唱だった。そうしているうちに辺りは明るくなってきて父が帰ってきた。祖父母達も何とか大丈夫だったらしい。

家の中にある食料を取りに行くために、とりあえず家の中に行くことにした。そして、父か母に「くつを履いたまま家に入っていから」と言われた。小さい頃から「家には靴のままであがたらあかん」と言われていた私には衝撃的な言葉だった。家の中に靴のままで入っていいというのは、もちろんガラスがいっぱい割れて危ないからなのだが、やってはいけないことをするのが子供の頃は楽しいと感じるものだと思う。だから1年生の私は「靴のままで家に入れるなんて、ワクワクするし!!」と思っただろう。しかし、家の中は荒れ放題で本は全部出ているし食器は全部割れているし、ほんとに自分の家なのかわからなかった。とにかくひどい状況だった。母はりんごをむいてくれてみんなで食べた。車の中で食べたりんごの味は本当に今でも覚えている。確か朝のもう8時くらいで、りんごはすごく甘くておいしかった。その時間のラジオは今朝あった巨大地震のことを必死の口調で報道していた。電気が来ない今、一般の人にはラジオしか情報源がなかった。とりあえず私の家族は垂水区だけではなく、神戸全体が巨大地震に襲われたことを知った。そして、そのころの長田区を始めとする近隣の区は大火災で今でも燃えていて一向に火はおさまらない、とラジオが言っているのを聞いた。ふっと車の外に出ると父が飛んでくる黒いものを見つけた。それは紙くずでも、カラスの羽でもなかった。何かが燃えたくずだった。見ると風に乗っていっぱい飛んでくる。見上げた東の空はまっくろだった。

神戸には今まで父が建ててきた家がたくさんある。やっぱりひとつひとつに強い思い入れがあって、父はそこに住んでいる家族の方が心配だと昼過ぎくらいから車を走らせた。家族みんなで車に乗って西区、垂水区近辺くらいまで行ったと思う。時間をかけて少しずつ各家々を回っていった。父が建てた家に住んでいる方は奇跡的なことに、多少瓦が落ちたりしていたりするものの全ての家が無事だった。もちろん家族の方も。人が全員無事だったこと、家もあんまり壊れていないし、父が建てた家はすごいんだ!と小さい私は思った。家族の方はとても父に感謝してくれていたし、実際に私の家ではまだ水が出なくて、洗濯やお風呂にも不自由していると聞き、家族で家に招いて下さった方もいた。今でも時々会ったり食事をしたりするような家族ぐるみの付き合いをさせてもらっている。

〜地震後〜

地震が起こってから、電気も水もガスもない。ライフラインというライフラインは何十秒もの間に崩壊してしまった。あの時、私はトイレをどうしたのかよく覚えていない。ただ毎日来る給水車に親や祖父母達と一緒に並んで、水をもらったりしたのはよく覚えている。それが、私がその時できる精一杯のお手伝いで、「重い、重い」と言いながらペットボトル2ℓ分を運んでいたのを覚えている。近所の友達は給水車が来ると親と一緒に出て来るので、給水車に並んでいる間が友達と話せる唯一の時間だった。母は地震以来、子供だけを家に置いて給水車に並ぶことがどうしてもできなくて、まだ歩けない弟をだっこして妹の手をひいて並んでいたらしい。そして母は来てくれる給水車が神戸市水道局のものではなく、小田原、であったり熊本だったり、名古屋、静岡だったりするのを見てありがたくて涙が出たそうだ。

テレビではひたすら阪神・淡路大震災のことについてやっていた。燃える家、泣き叫ぶ人々。神戸はあの華やかなイメージを思い出させるものはひとつもなく、出てくるのは全壊したビル。潰れた病院、横倒しになったビル、市役所。何もかもが本当に起こっていることなのか、全く理解できないようなことに神戸の町はなっていた。家族でテレビを食い入るように見つめて、ため息をついた。テレビで神戸の様子を伝えるリポーターは必死に中継しているけど、今にも泣きそうな声だったのを覚えている。NHKでは震

災で亡くなってしまった方の名前を読み上げていた。するとアナウンサーの人は突然、絶句して名前を読み上げられなくなってしまっていた。あまりにもたくさんの人の命が一瞬のうちに失われ、その命をアナウンサーはひとつずつ読み上げていく。この時アナウンサーの人はたぶん、「今、自分が読み上げているのは消えた人の命なんだ」と実感したのだと思う。

震災後、被害の少なかった私の周りでも震災の影響が生活の中に出てき始めた。父の仕事は震災後、今まで以上に忙しくなった。家の全壊・半壊・一部損壊といったような判定のために毎日走り回っていたらしい。判定がひと段落ついても、今度は建築の仕事が一気にどわっと舞い込んでくる。考えてみたら息のつく暇もないような忙しさだったんだろうと思う。家に帰れない日も多くなったと母は言っていた。今回の地震で父は「家は私たちを守るものだけど、時には殺してしまうこともある」ということを知り、今まで以上に災害に強い家を心がけるようになったらしい。こんな風に仕事を通してでも、「震災から学んだこと」というのを少しでも得て学んだのなら、それはとても大事なことだと思う。これは個人だけに留まらず、もちろん企業や行政にも必要だと思うし、これからの災害に強い日本を作っていってほしいと願う。地震は私の周りにたくさんの影響を及ぼした。それは別に人が死んだとかじゃない。私には昔からの親友が近所にいた。私の親友のお父さんの会社は日本でも大きな企業だったのだが、神戸にあった工場が全壊し、神戸での再建をあきらめたため新しい工場のある愛知県に家族で引っ越してしまうことになった。まだハイハイをしている頃から、よく一緒に遊び、喧嘩もしたけど、お互い大好きな親友同士だったし、これからずっと同じ小学校、中学校に行くんだ。そう当時の私は思っていた。でもこれからはもう一緒にいれなくなるんだと考えるだけで、1年生の私はずっと泣いていた。小さな私にはこの別れは一番衝撃的な出来事だった。家族を亡くした人、家をなくした人、たくさんの大切なものを地震に奪われた人達がたくさんいた中で、地震というものをいまひとつ理解しきれてなかった私だったが、地震は大切な友達を持って行ってしまった憎いものなんだという思いだけははっきりしていた。

～私にできたこと～

私の母は、震災で家をなくした人が一時的に入って住む仮設住宅のお年寄りの家を訪問するボランティアを震災後から始めていた。内容は昼食のお弁当を作って垂水区近辺に住んでいるお年寄りの希望者の方々に届けるものだった。当時の仮設住宅は対策が何も整っておらず、住んでいた近所の人とは離れてしまったりとかして、慣れない環境の中で孤独を感じる1人暮らしのお年寄りも多かった。そのせいで仮設住宅でのお年寄りの孤独死という問題も出てきていた。そのため安否確認を兼ねてのお弁当だったらしい。やはり、1人暮らしのお年寄りには話し相手が特に必要で、話を聞いてあげるだけだけど一緒に喋って少しでもストレス発散してくれればと思って母はこのボランティアに参加したそう。そして私も何かお手伝いがしたくて、というか大人のしていることがしたくてと言った方が本当かもしれないけど、ずっと母の行くところ行くところ付いていった。そしたら玉ねぎの皮をむいたり、お弁当におかずを詰めたりするぐらいはさせてもらえるようになって、小さなボランティアを私は楽しんでた。3才の弟は卵焼きの卵を割ってお手伝い？をしていたらしい。あの時、1人のボランティアのおばちゃんの家集まってみんなで作ったお弁当の匂いはおふくろの味って感じで、すごくまごころがつまったお弁当になっていた。30個くらいだろうか、テーブルの上に積み上げられたお弁当を今度は車に乗って、一緒に作ったお弁当を分担して、各地域の仮設住宅に配りに行った。仮設住宅はみんなも知っている通り、全部同じ造り、同じ形、名前の表札もないお宅もあってすぐ迷ってしまいそうになったそう。そしてやっとの思いで、お弁当を待っているおばあちゃんやおじいちゃんの元へ届けに行くといつも満面の笑顔で迎えてくれたそう。そんな笑顔は疲れた気持ちも吹っ飛んでしまうと母は言っていた。そして小さな私を見つけるととても優しい笑顔で「何才??」と笑って声をかけてくれたのをうっすらと覚えている。時にはあめ玉やアイスやジュースをごちそうにもなった時もあるらしい。ただ1年生のくせにちゃっかりしている私は少しそのアイスやあめ玉がすごく楽しみだったし、ちょうど1年前くらいに祖母を亡くしていた私はおばあちゃんやおじいちゃんと話すのが大好きだった。だから重いお弁当を持って配り歩くのはすごく楽しかったのを覚えている。たぶんこれが私のボランティア初体験だっただろう。

仮設住宅の中ではみんなで集まって食事をするということもあった。その食事の後、母の弾くギターに合わせて私と妹とで「しあわせ運べるように」を歌ったこともある。確かこの歌は私が2年生の頃に音楽の授業で習ったこともあって歌いやすかったし、私自身、歌が大好きな子だったからすごく楽しかった。前に座っているおじいちゃん、おばあちゃんが涙を流しながら聞いてくれたのを私は覚えている。その歌を今年の舞子高校のメモリアル行事で歌うことになるとは夢にも思わなかったが・・・。

～ボランティア～

特に最近では自然災害も多く、去年は新潟中越地震や台風23号で甚大な被害を受けたが、阪神・淡路大震災で得た教訓から対応がスムーズにいったことも多かったと聞いている。

私が環境防災科に入学したことは私の家族にも影響を与えたようだ。去年の台風23号で兵庫県の北の当時の豊岡市と出石町が大きな被害を受けた時、家族が突然にボランティアに行くと言い出した。私は驚いた。なぜなら、ちょうどその時期、私の家は祖母や祖父共に入院中で、特に祖父はたびたび病院から呼び出しがかかることもあった。なのに、「なんで今のこんな時期にボランティアやねん!!?私らがボランティアしたいくらいやのに」と私は思った。しかし、母はボランティアのバスを予約していて準備万端という態勢だった。そして、私の家族はみんなそろっていつの間にか長靴を持って始発の電車に乗って行くことになった。現地につくとテレビで見るのとは違う想像を絶する洪水の被害を出石町は受けていた。被害のあまりの大きさに現地を訪れたボランティアの人は目を丸くしているばかりだったが、私はもうひとつ注目したことがあった。それはボランティアに訪れた、たくさんの人たちにテキパキと指示を出して現場をスムーズに動かしてくれた災害ボランティアの人の存在だ。今回、災害ボランティアというものを身近で初めて見たが、環境防災科としてはとても興味を持った。町役場がちゃんと機能しない災害ボランティアを管理し、動かしていくということが大切なのではないかと思った。

私たちに任された仕事は溝の泥を掘る仕事と水に流されたお墓を見つけることだった。溝はどこにあるのかもわからないくらい土砂に埋もれており、それを探すだけでも一苦勞だった。手に豆はできるし、腰は痛いし大変だったが、5年生の弟は大人に交じって頑張っていた。参加したボランティアの中でも最年少だったからか、テレビの取材をよく受けており、それが弟を張り切らせる原因にもなっていた。現在、環境防災科の1年生である妹は、このボランティア体験をしたことが環境防災科を受けるキッカケのひとつになったらしい。父と母は、前日も仕事だったし祖父の病院にも行ったりしていたので私としては疲れて倒れてしまうんじゃないかと気になっていたが、帰りには行きよりも元気になっていたような気がする。帰って、母に「なんで今めっちゃ大変な時期やのに、ボランティアに行こうと思ったん?」と聞くと「行くときは阪神・淡路大震災の時にたくさんの人にお世話になったからその恩返しがしたくって出石まで行ったけど、今はボランティアさせてもらって『ありがとう』で言いたいのはこちらの方かと思う。人はホンマ、支えあって生きてるんやなあ。今うちは身内のことだけでいっぱいいやけど、だからこそ自分らのことだけしてたらいいんじゃないと思ったわ。どんな時も広い視野を持ってなあかん。」と言った。なんというか、母がこんな真面目なことを言ったのにはビックリした。今年の3月に私は兵庫県立大学のフォーラムで、同じように台風23号の時のボランティアに行った方の話を聞いたが、やはり同じ様なことを言われていたと思う。

～今、震災から10年。これからの私～

震災から8年経った春、私は舞子高校環境防災科に入学した。環境防災科では、ほんとうに沢山のことを学んだ。多方面にわたる外部からの講師を招いての講義は、特に印象に残るものが多かった。環境防災科は、外から見ると、環境や防災に関するごく限られた分野だけを学ぶように思われがちだが、実は、その根底には「命を慈しみ、守る」という、人間として一番大切にしなければならないことを、より深く学べる場所であると思う。すべての授業において、命を守るために必要なことを学んだのではないかと思うくらいだ。

これからまだまだ、知りたいことはいっぱいある。まだまだ自分はいろんなことをわかってないし、未熟だ。まだ残りの高校生活を過ごして行く上で、今まで一緒にがんばってきたクラスの39人の仲間と共に学び自分自身をこの環境防災科という場所でさらに飛躍させたいと思う。

あの地震から10年

神戸市西区
増本 智美

あの阪神・淡路大震災からもう10年が経った。今の私が10年前のあの地震のことで覚えていることはごくわずかだけど、地震が起こったときに聞こえてきた、あの地鳴りの音だけは、今でもしっかり覚えている。

地震が起こる少し前、私はなぜか目を覚ました。なんで起きたのか全然わからないけど目が覚めて、隣で寝ているお姉ちゃんのすやすや寝ている顔を見て、時計を見て、その起きたときの時間が何時だったのかは覚えていないけど、すごい早く起きすぎたからもう1回寝ようと思って寝ようとした。やっと眠れそうになったとき、外から「ドーン」という音が聞こえてきた。何かと思って起き上がって窓の外を覗いたらいきなり揺れが始まった。「ゴゴゴゴゴゴ・」という外から聞こえてきた恐ろしい音は今でも忘れない。なにが起こっているのかわかっていない私は、布団の上に座りながらずっと隣の部屋にいるお母さんのことを呼び続けていた。すると、隣にいたお姉ちゃんに「危ないから布団の中に入ってじっとしとき！」と腕を引っ張られたので、私は言われたとおりに布団の中に入って揺れが収まるのを待った。私はタンスの前に寝ていたのだけれど、タンスの上のものが私の足の上に落ちてきたり、周りの家具がずっとカタカタ言いながら揺れていて、私は怖くてしかなくて、ずっとお姉ちゃんの手を握り締めていた。揺れが収まってしばらくから、お母さんが私たちの部屋に来て「大丈夫やった？怪我はないね？」とずっと私たちの心配をしていた。後で聞いた話だけど、お母さんたちの部屋にはタンスがあって、そのタンスが倒れてきて人の字になって止まって、お母さんたちはその隙間で助かったらしい。お母さんが私たちの部屋に来てしばらくしてからお父さんも来て、4人で1人別の部屋で寝ていたお兄ちゃんのところに行った。お母さんが兄の部屋を何回かノックした後、お兄ちゃんは寝ぼけた声と顔で自分の部屋から出てきた。なんでそんなに寝ぼけた格好で出てくるのかと思っていたら、私のお兄ちゃんは地震があったことに気付かずずっと寝ていて、夢の中でジェットコースターに乗っていたらしい。なんてのん気な人なんだろう…私は今思い出してもしみじみそう思う。お兄ちゃんも怪我が無くて無事だったことを確認してから、私たちは外に出て、しばらくの間、車に避難をしていた。車に乗っている間はずっとラジオをつけていたけど、私はずっと暇でしかなかった。ラジオは地震のことを繰り返し言い続けていた。

車の中で数時間過ごしたあと、私たちはまた家に戻った。地震が起こったすぐ後は家の中を見る余裕がなかったけど、地震の後の家の中はぐちゃぐちゃだった。食器棚は倒れていないものもあったけど、中にあった食器はほとんど出ていて食器棚の周りは割れた食器だらけになっていた。テレビは倒れていたけど壊れてはなかった。冷蔵庫やテーブルは倒れていなかったけど、その上に乗っていたものはすべて床に落ちていた。私たちの部屋にあったタンスとかは倒れていなかったけど、タンスの上に置いていたものはすべて落ちていた。そのとき、地震が起こったときに私の足の上に落ちてきたものが、自分のおまごとのセットだったということに気付いた。私の真横に置いてあったピアノも倒れてこなかった。もしこのピアノが倒れていたら私は確実に下敷きになっていた。今考えるとすごい怖い場所で私は寝ていたなと思う。私たちの部屋やリビングの中は食器の破片やガラスで危ないので、家族全員靴を履きながら家の中を歩いた。私とお兄ちゃんとお姉ちゃんは、家の中をうろちょろしていると危ないので、一番被害が少なかったお兄ちゃんの部屋のベッドの上になった。お父さんとお母さんは倒れた家具を立て直したり、飛び散ったガラスの破片とかの掃除をしたり、外で近所の人としゃべったりしていた。私たちは、始めは3人で遊んでいたけど、地震のせいで朝早くに起きたのでいつの間にか眠っていた。

お昼過ぎに私たちは起きて、いつまた地震が起こるかわからないのでずっと家族で固まって行動することになった。水道やガスや電気がすべて止まってしまっていたので、火を使わずにできる食料や水などを買いに近くのスーパーへ行った。そのスーパーではもうほとんどのものが売り切れていて、全然ものが手に入らなかったのでも2、3件スーパーやコンビニを回った。でもどの店もほとんどが売り切れていて、あまり満足に買い物はできなかった。

買い物し終えてから家に帰って、家の近所にお父さんと同じ会社に勤めている人がいたので、その人とお父さんは一緒にポートアイランドにある会社に出かけた。その間、残った家族とお父さんと一緒に会社に行った人の家で、みんなで晩御飯を作ってお父さんたちの帰りを待っていた。ガスと水は復旧してなかったけど電気のほうはもう復旧していたので、私たちはホットプレートを使って鉄板焼きのようなものを作った。そしてお父さんたちが帰ってくるのを遊びながら待っていた。

その日お父さんたちが帰ってきたのは9時ごろで、液状化していたポートアイランドを歩いてきたお父

さんたちの靴は泥でぐちゃぐちゃになっていた。お父さんがポートアイランドに行くとき高速道路を通って行ったのだけど、お父さんたちがその高速道路を走っているときは高速道路が安全かどうかテストしているようなものだったらしく、もしその時高速道路が倒れたり、壊れたりしていたらお父さんたちは今いなくなっていたかもしれない。あとでその話を聞いたときは、私はその話が信じられないという気持ちでいっぱいだった。

お父さんたちがご飯を食べ終わってから1時間ぐらい経ってから、私たちは家に帰った。

その日の晩、私とお姉ちゃん、お兄ちゃん、お父さんはいつも通り自分たちの部屋で寝たけど、お母さんだけは、次にもし地震が起こっても私たちのことを守れるようにといて、私とお姉ちゃんの部屋で一緒に寝た。こうして、私の長い長い1日は終わった。

電気は地震が起こった日に復旧したけど、ガスや水は全然復旧しなくて、家族で明石の天文科学館の近くの人丸神社の『かめの水』と呼ばれる水を汲みに行った。私にとっては水を汲みにいくということは初めてだったので、私はウキウキしながら車に乗っていた。車を止めてから少し歩いて、かめの水が汲めるところまで行った。そこにはもう人がいて、少し並んでいた。私は1.5リットルのペットボトルを持って、順番を待っていた。順番が来て、水をペットボトルに入れていった。水はすごく冷たくて、だんだん溜まっていく水がうれしくて、私は何回もペットボトルを交換して水を汲んでいた。お父さんが大きなタンクに水を入れ終わってからそれを車に積んで、家に帰った。

水に関しては、かめの水だけじゃなく、近所の友達の家の井戸の水を汲ましてもらったり、親戚が大きなタンクに大量に持ってきてくれたりして、飲んだり料理に使ったりする水は十分と言えるほどじゃないけど困らない程度にあった。そして、トイレの水はたまたまお風呂に水が溜まっていたので、その水を使って流していた。だから、私の家ではあまり水に困ることはなかったらしい。

そして、親戚の人は水の他にも、たくさんの食器も送ってきてくれた。その親戚は東京に住んでいたのだけど、私の家が阪神・淡路大震災の被害にあったというのを知って、本当によく心配してくれた。私の家の食器類はほとんど食器棚から落ちるなどして割れてしまっていたので、すごく助かったらしい。そして、そのとき貰った食器は、ほとんどが今でも使い続けている。私は、水を送ってもらったり、食器を送ってもらったりと、親戚の人にこんなにいろいろなことをしてもらっていたって知らなかったの、人となとのつながりって本当にすごいなと思った。このときは、私たちを助けてくれたのは親戚の人とか身内の人だったけど、別にお互いのことを知らなくても、人と人が助け合うっていうのはすごいことだと思う。『ボランティア元年』と呼ばれるぐらいいろんなところからたくさんの人がボランティアにきてくれた阪神・淡路大震災は、人と人とのつながりというのが本当に実感できたときだと思う。

ガスが復旧しなくて全然お風呂に入れないので、家族で明石のほうにある銭湯に行っていたらしい。銭湯に行ったのがまだお昼だったので、銭湯についてからすぐにお風呂に入れると思っていたのに、たくさんの人が並んでいて、私たちは1～2時間近く待つことになって、その待っている時間私はずっと遊んでいた、とお母さんが言っていた。私は銭湯のお風呂に入ったときのことはまったく覚えていない。けど、銭湯に行ったことと、銭湯の前に長い行列があって、何時間も待ったことは覚えている。でも、その頃の私は1人でお風呂に入るのが怖くて、いやでしょうがなかったの、銭湯に行ってお母さんと一緒にお風呂に入れることに喜んでいたと思う。

地震が起こってから1週間ほど経った休日に、私たちは長田に住んでいるお父さんの友達のところへ家族で行くことになった。いつものように車で長田までの道を走って行ったけど、そこはいつも見ている景色じゃないものばかりだった。たくさんの家が立ち並び、にぎやかな商店街だったはずの長田が、家がほとんど壊れていて、人の気配がまったくない灰色の町に変わっていた。そんな景色を見ながらずっと走っていったけど、私は今、自分が乗っている車が長田のどの場所を走っているのかまったくわからなかった。周りはほとんど同じ景色で、家が壊れてしまっているだけの世界が広がっていた。お母さんとお父さんは、「ここにはこんな店があったのに…」と、寂しそうに長田の町を見つめていた。

結局お父さんの友達の家は全壊してしまっていて、その人たちがどこにいるのかわからなくて、その日には会えなかった。1ヶ月ぐらいしてからそのおじちゃんたちに会うことが出来た。おじちゃんたちは近くの幼稚園に避難していた。

私の家では何匹か熱帯魚を飼っていたけど、地震が起こる前にほとんど死んでしまって、最後まで生き残っていたエンゼルフィッシュをそのおじちゃんに貰ってもらっていた。けれど、おじちゃんの家は全壊してしまっていたのでもちろんそのエンゼルフィッシュが入った水槽もひっくり返り、中に住んでいたエンゼルフィッシュは死んでしまっていた。私は、おじちゃんたちが無事だったという良いニュースより、

自分の飼っていたエンゼルフィッシュが死んでしまったということのほうが大きかった。エンゼルフィッシュが病気とか寿命で死んでしまったのじゃなく、地震のせいで死んでしまったということがショックでしかなかった。もしかして自分の家であのまま飼っていたらもうちょっと長生きしていたのではないかと考えると、悔しくて、悲しかったことを今でも覚えている。

地震が起こってから何日間かの間は、自分たちが出かける時は必ず近所の人どこに行くかを伝えて、帰ってきたらちゃんと帰ってきたことを伝えて、というふうにお互いが今どこにいるのかをわかるようにしていたらしい。他にも、今どこに行ったら水が手に入るかとか、今どこのスーパーやコンビニに行けば食べ物を買えるとか、そういう少しの情報や自分たちの状況とかを、わかったら近所の人たちと教え合っことをして、お互い情報を分け合っていた。こういった近所の人との細かいつながりは、お母さんから話を聞くまで私やお兄ちゃんたちはまったく知らなかったの、それを聞いたときはすごく驚いた。今まで授業で、災害が起こる前に近所の人とのコミュニケーションをとっておいて、もし災害が起こったとき、その近所の人たちとの助け合いが大切ということを習っていたので、阪神・淡路大震災のときに自分の親がそれを実際にやっていたということが、驚いたけど、でもそれとは別に私は少しうれしかった。

地震から何年か経ってから、毎年恒例のようにいろんなチャンネルでやっている『阪神・淡路大震災から〇年』ということを取り上げたテレビ番組の中で『しあわせ運べるように』を聞いた。この曲は、小学校で配られていた『しあわせはこぼろ』という地震のことを伝えるための本に書いてあったので、曲自体は知っていたけど、その曲を誰が作ったのかなどの話はまだ全然知らなかった。『しあわせ運べるように』は、神戸市内の小学校で音楽を教えている先生が作った歌で、その先生は地震によって何人かの生徒を失ったということを、そのときに知った。そして、その先生が生まれ育った神戸が、もう一度元気によみがえるように、という思いを込めて作った曲が、あの『しあわせ運べるように』だということを、そのとき初めて知った。この番組を見終わったとき、私が一番衝撃を受けたことは、この曲を作ったのが小学校の音楽の先生だということだった。私はこの曲を小学校で習ったときに、歌詞と曲、この曲全部が好きになっていた。歌詞は、辛かった阪神・淡路大震災のことだけど前向きな内容だし、曲はすごく覚えやすいシンプルな曲だったので、とても好きだった。そして、学校で歌ったりする曲だから、どこかのずっと作曲ばかりしている人が作った曲なんだと思い込んでいた。だから、普通の小学校の音楽の先生が作ったということに対して、小学校の先生でも曲が作れるんだということが、一番驚いたことだった。

1. 17震災メモリアルで『しあわせ運べるように』を環境防災科の3学年全員で歌うと聞いたとき、私はすごくいいと思った。私がこの曲を好きだということもあったけど、『しあわせ運べるように』という曲が、あの阪神・淡路大震災のことを一番考えて作られている曲だと思っていたので、この曲を1. 17震災メモリアルで歌うことは大賛成だった。

歌の練習が始まってから、私はまたこの曲の歌詞をちゃんと知ろうと思って読み返してみた。歌詞を読んでいくと、小学校で歌ったときに感じたこととまた違うことを感じた。小学生のときは、『亡くなった方々の分も毎日を大切に生きていこう』とか『傷ついた神戸を元の姿に戻そう』の部分とかを見て、地震はたくさん辛いことがあったけどこれから先がんばっていこう！という感じの意味にしか捉えなかった。でも、今回また読み返してみて、『支えあう心』とか『響き渡れ僕たちの歌・生まれ変わる神戸のまちに』とか『強い絆』そのほかの部分も、歌詞の1つ1つの言葉にすごくみんなに伝えたいことがたくさん詰まっている歌詞だなと思った。なにが大切なのか、地震からなにを教わったのか、その教わったことをこれからどうしていくのか、とかたくさんメッセージがあると思った。だから、1. 17震災メモリアルで歌うときは、聞いている人たちにこの歌詞が伝えたいことが伝わるように、1つ1つの言葉を大切に歌おうと思った。

1. 17震災メモリアルで、みんなで歌い終わったあと、歌を聞いていた人たちに、「しあわせ運べるように聞いて泣きそうになった」とか、「思わず一緒に口ずさんでもた」とかっていうことを聞いたりして、私は、感じたことは人それぞれ違いがあったと思うけど、歌を聴いてなにか感じ取ってくれた人はいたんだなと思うと、1つ1つの言葉を大切に歌おうという目標は達成できたんじゃないかなと思った。

これから先、もしかしたら私が『しあわせ運べるように』を歌う機会はもうないかもしれない。でも、これからもずっとこの曲はたくさんの人に知られていって、たくさんの人が歌っていくと思う。そのたくさんの人たちが、この曲にこめられた思いや、聴いている人たちになにを伝えたいのか、ということをもみんなが理解して歌っていくようになれば、これからもずっと阪神・淡路大震災を知らない人たちにも、みんなになにを知ってもらいたかったのか、これからもなにを大切にしていってほしいのかということがたくさん感じることが出来ると思う。もし言葉が変わって外国で歌うようになっても、伝えたいことというのは全然変わらずに歌われていくと思う。だから私は、これから先この歌を歌う人、聴く人全員が、

この歌詞に込められた思い1つ1つを大切に、たくさんの人に伝えていって欲しいと思う。

今回この文章を書くためにお母さんに当時のことをたくさん聞いた。今までにもあの地震のときのことを聞くことは何回かあったけど、今回のように、すごく詳しく私たちがあの地震のときどう過ごしていたのかなどを聞いたのは初めてのことで、驚くことがたくさんあった。私は当時小学1年生だったから、覚えていることも断片的なことが多くて、ほとんどあやふやなまま覚えている感じだった。けど、お母さんに聞くと、やっぱりほとんどのことをすごくしっかり覚えていて、自分が10年前に経験したことを聞いているのに、すべてが初めて聞くことばかりのような驚きや発見がたくさんあった。だから、自分がなんでこんなにも覚えていないのか、という気持ちに少しなった。地震が起こったときのことはしっかり覚えているけど、それ以外のことは今思い出そうとしてもほとんどあやふやになってしまっていて思い出せない。だから今回、お母さんに話を聞いて、あのときのことをしっかり覚えている人に話を聞くということは本当に大切なことだなと思った。

今、私は環境防災科に入ったから、阪神・淡路大震災のことについて話を聞いたり、写真を見たりするという機会は普通の人よりだいぶ多いと思う。だからこそ、普通の人たちよりあのときのことを伝えていける力はあると思う。この先みんなが進む進路はすごくばらばらになっていく。だから、それぞれが進む進路で、みんなが自分たちが環境防災科で習ってきた阪神・淡路大震災のことについて、自分の聞いてきた阪神・淡路大震災のことについてを伝えていって欲しいと思った。あの阪神・淡路大震災を経験した私でも、もうほとんど覚えていない状態で、話を聞いただけでいろんなことに驚いたり悲しくなったりしたのだから、あの地震を経験していない人たちに阪神・淡路大震災のことについて話を聞いてもらったら、私たち以上に驚くことや発見することがすごくあると思う。だから、それを感じてもらって、次に起こるといわれている地震に対して、心がけをしていってほしい。そして、あの阪神・淡路大震災のことを忘れないようにしていってほしい。

阪神・淡路大震災から10年・・・

今年の1月17日で阪神・淡路大震災から10年が経った。あの地震からもう10年も経ったのかと思うと、私はとても早く感じる。人によっては、私とは違って「まだ10年しか経っていないか・・・」って思う人もいると思う。でも、あの時小学1年生だった私はもう高校3年生になって、大学受験のことで悩んでいる歳になった。きっと、10年前の私は、今の私が環境防災科に入っているなんて絶対思わなかっただろう。でも、環境防災科に入って、すごくよかったと思っている。環境防災科にはいっていなかったら絶対、阪神・淡路大震災のことをこんなに考えることはなかったと思う。環境防災科に入らずに普通科に入っていたら、多分、阪神・淡路大震災のマグニチュードや亡くなった人の数、あの地震の背景にはどんな出来事があったのかなど、その他のたくさんを知ることがなかっただろうし、今みたいに興味を持たなかったと思う。今は環境防災科に入ったから、野島断層や人と防災未来センターなど、いろんなところに校外学習に行って、阪神・淡路大震災のことについて直接見たり、触れたりしながら学ぶことができたり、ライフラインの会社の方、消防・警察・自衛隊の方々などに直接阪神・淡路大震災のときのことを聞いて、当時の救助活動や復旧活動などについて、たくさんのお話をたくさんの人からすごく詳しく話を聞いて学ぶことができる。そして、自分たちが不思議に感じたこととか興味を持ったことについて調べて学習できる。そんなふうに、授業の中で実際に見たり、触れたり、聞いたり調べたりしてきたことは、普通科にいては絶対にできない経験だった。そんな経験をしてこられたから、地震のことについて、他の今までに起こってきた災害についても知ることができて、その災害が残していった教訓やその災害の怖さを知っていくことができた。そんな普通ではできない経験をしてきた私たちが、これからもたくさんの人たちに自分たちが勉強してきたことを伝えていかなきゃいけないと思う。

10年という区切りの年なので、今年の1月は阪神・淡路大震災についてのニュースやドキュメンタリー番組をテレビのいろんなチャンネルでやっているのをよく目にした。テレビで毎回のよう流れるあのときの長田の町や避難所の風景。そんな場所も今ではほとんど地震の面影をなくしていつている。でも、そう感じるのはあの地震を体験して、あの地震を覚えている人たちだけで、あのときすごく小さくて地震のことを覚えていない人たちやこの10年間に生まれてきた人たちってというのは、あの映像をみても「大変だったんやろうな」とか「これはすごく大きな地震で、たくさんの人が亡くなったんや」というふうにすごく軽く見ることになると思う。阪神・淡路大震災からは10年しか経っていないけど、これから先、20年、30年・・・というふうに年月が流れていくと、あの地震の怖さを伝えていける人がいなくなっていつてしまう。だから、そんなことにならないように、「あの阪神・淡路大震災を覚えている最後の年齢」と言われている私たちが、これからの世代の人たちに地震のことを伝えていかなければいけない。私たち

が覚えていることもわずかかもしれない。でも、私たちには今まで聞いてきたたくさんの経験がある。だから、そのことを誰かに伝えずに終わらせるのではなく、出来るだけたくさんの人に伝えていけるようにしたい。それが、あの地震を覚えている最後の年齢の私たちにできることだと思う。

体験して感じたこと

神戸市垂水区
松井 佑香

経験したのが小学校1年生で良かった。
記憶は新しいほど鮮明だから今経験した方が絶対に残酷だと思うから。

あの日、私は食器棚の前で寝ていた。明け方になった頃、ものすごく低い音がした。地面が奇妙に動き始めた。私は目が覚めた。多分空を飛ぶよりも変な感覚が全身を覆った

一度、友達と遊んでいる時に本気で力いっぱい家を持ち上げようとしたことがあった。家は本当にびくともしなくて、ああ誰にも持ち上げる事なんか出来ないんだ、と、その時に思ったのを覚えている。その家が揺れている。怖いって気持ちより、助けてって気持ちより、何より『あれ?』って思った。それ以外に何も考えられないところで、地震はおさまった。周りを見た。

食器が私の顔をかたどる様に避けて落ちていた。その時お気に入りだったへんてこな動物のデザインが描かれてあるマグカップが割れていた。お父さんは落ちた食器を拾っては新聞につつみ、それを丁寧に捨てていく。『危ないから下がるとき』と私に言った。マグカップが新聞に入っていくのを見て泣きそうだった。当時、大阪に住んでいるおばあちゃんがこっちの家に来ていたのだけど、おばあちゃんは私達と違う部屋で寝ていた。すぐにおばあちゃんの寝ている部屋に、駆け込む。見ると、家にあるテレビの中で一番大きいものがおばあちゃんの真となり居た。テレビは、もう動かなくなって死んでしまった人のみたくて。テレビの1つ1つの角がいつもよりすどく見えた。

家族とおばあちゃんはみんな無事で、それからしばらく1つの部屋に集まっていた。それから1回、2回と小さな揺れが続いた。揺れはさっきよりずっと小さくなったはずなのに、怖いと思う気持ちは明け方よりずっと大きくなっていった。ただうずくまってお父さんを見つめた。

困ったのは水が使えない事だったけど、それもその頃の私にはひとつの遊びで、蛇口をひねってみても水が出ない状況がおもしろくて仕方なかった。それ以外のガスだとか、電気だとか言ったものはすぐに使えるようになったから、それで困った事は多分なかった。

私の家はわりと近所付き合いは良い方だったと思う。給水車が来ると、みんなで教えあってはそこへ向かった。『佑香は力が無いからこれ持ち』とお父さんに言われた。私は小さなやかんを渡された。人が集まっている所が好きだった私は、給水車が小学校に停まっていると聞き、すぐに走って行った。

給水車は2台ほど止まっていて、そこにはすごい行列。なんだか想像していたのと違うような光景が広がっていた。最後尾に並ぶ。本当に長い行列。私は、1人が水をもらうまでの時間を計る。そしてそれを、並んでいる人数分だけ繰り返されるわけだから・・・途方にくれていた。少なくとも1時間くらいは待たなくちゃいけないみたいだ。すると私の後ろにお隣さんのところのおばあちゃんが並んでいた。

『佑香ちゃんも水汲むの手伝ってるの?偉いねえ』

私は気にせず周りを見ていた。石油を入れるタンクと同じ形をしたものを持って並んでいる人がほとんどで、小さなやかんだけを持った私は、自分自身もかき消されそうなくらい小さく思えた。お隣さんのおばあちゃんは、私よりひとまわり大きなやかんを2つ、両手にぶらさげていた。おばあちゃんは口を開いては独り言の様につぶやいている。

『早く順番が来たらいいのにねえ』

また1人、水汲みが終わったので私は1歩前に進んだ。

今日という日、ここ垂水という町が晴れていたなら日本中晴れだと思っていたあの頃。被害が場所によって愕然と変わることなんか知っているはず無かった。お父さんが何冊か新聞を持って帰ってきた。震災から何日か経った頃だった。

『これ、その日亡くなった方の名前全部書いてるねんて』

そこには、私の手をいっぱい広げても広げきれない新聞にぎっしり、亡くなった人の名前とその人の住んでいた区が書かれていた。書かれている量は数え切れないほど。書かれている名前は日に日に全部違う。その殺風景な記事を私はしばらく見つめた。

1人1人の人が自分と同じように感情を持って生きている。いろんなドラマもあったはず。この人達はみんな、どういう中で死んでいったのかも伝えられずに、こんな何ミリかのスペースに名前と住所だけ押

し込まれて、それ以上その人の存在を新聞で伝えられることはもうない。何でこんなことになるの と、そんな事をボーっと考えていた。地球は不思議で、人間は嫌でも地面にくっついて生活しなくちゃいけない。けどそれが理由でここに書かれている人たちが死んだというなら、鳥になれたらいいのにと考えた。

その中で垂水区に住んでいた人を探したけれど、その数は他より少なく、垂水より1つ2つ離れた長田区や東灘区に被害は集中していた。その中にお母さん側の叔父さんの名前があった。私は叔父さんのことはほとんど知らないから悲しいとかいう気持ちは無かったけれど。この人は死ぬ前にどんなことを思ったんだろう、何も考える暇もなく亡くなっていったのかな、痛かったのかな。いろいろ考えた。答えはみつからない。

兵庫区へ行った。お父さんとお兄ちゃんと3人で。私は車の中から外をぼんやり眺めていた。空の色が垂水と全然違っていた。外は、家がぐちゃぐちゃになったり、渋滞になっていたり、人が多かったり、火事があったり。外はあり得ないほど騒がしいらしくて、その騒音がすこしもれて聞こえる車の中で、お父さんは『ほんまにひどいな。』という言葉だけを何回か繰り返していた。私は今までテレビでしか見たことの無い状況に気をとられていた。返事をしなかった。

兵庫に住んでいたというお父さんの同僚の人も無事だったらしくて、ひとまずそこを後にした。窓を少しだけ開けると、騒音が一気に耳の中を駆け巡った。1m先では誰かが必死に叫びながら交通を整える人たちがかがいるのに、こんなところで眺めることしか出来ないこと、そして何もしないでも時間は過ぎていくことに、空しさだけが残った。まちの中で誰かが『神戸は死んだ』とつぶやいた。

次の日か、その次の日か覚えていないけど、同じ学年に新しい転校生が来た。私たちより断然しっかりしている子。私のクラスに入るようになった。初めその子が挨拶する時に『私は実家から疎開してきました。少しの間ではありますが、どうぞよろしくお願いします。』と、ハキハキと元気よく言った。私は、同じ年には見えないなあ、って思いながら、“疎開”という、意味もわからない言葉を聞いて、どこか虚しさを感じていた。その子もまた、あの日の同じ時間帯に悲惨な経験をしていた。『家は全壊した』と言っていた。

次の日、クラスの担任の先生が何か袋に入った食べ物を持ってきた。中身はビスケットのような、クッキーのようなものがたくさん入っている。不思議そうにそれを見つめる私たちを見て、先生は自慢げにその袋を持って手を上げ、左右に揺らしながらこう言った。『先生は地震に備えてカンパンというものを家に置いています。』

カンパンと聞いても、“パン”とつくのだからパンに関係するなにかだろうと考えるけれど、どうやらそうではないみたいで、先生は、カンパンについて色々難しい話をしてくれた。その話の中で印象に残っているのは、『なにかが乾燥したもの』ということと、『長い期間保存しておける』ということ、そして『意外においしい』と言っていたことだ。

好奇心旺盛な私たちはいっせいに、『食べたい!』と叫んだ。先生は予想通り、という顔をして、『そう言うかと思って今日は全員の個数分持ってきました!』と言った。そして、私たちは生まれて初めての食べ物に興奮した。私は配られるとすぐに口に掘り込んだ。一体どんな味がするんだろう?と。けれど、味は以外に普通で、初めて食べるもののような気がしなかった。ビスケットと同じような味がしたからだ。私は期待はずれで少しがっかりした。他の生徒にも、カンパンは不評だった。

3年生になると、転校してきた女の子はまたどこかへ転校していき、私たちの学校はまた震災前の様子に戻った。

あの日の記憶はこんなにも新しいのに、もうあれから10年が過ぎたと考えたら、本当に大きすぎる印象が私の中にあったのだと痛感する。

高校でこの学科へ入学してから、あの日のことを、今度は自分以外の記憶を知って、私は今まで以上にこの出来事を知った。そこで考えさせられることは本当にたくさん。災害が起こって初めて気づく、災害対策の欠点。阪神・淡路大震災では、その欠点を教訓に活かす最大の出来事だったんだと、そう思う。

舞子高校に外部講師の方が講義をしてくれる度に、どの講師の方もおっしゃっていた『地震はいつ起こるかわからない』という言葉。もしかしたらこれを書き終わった瞬間に起こるかもしれない。自転車で帰るときに、家でお風呂に入っている時に、起こるかもしれない。

どんな状況であっても、自分の守るべきものをちゃんと守れる。それって本当はとても難しいことだと思う。多分、受験生の人たちにとっては『備えに力をいれるより、今は勉強に力をいれたい』と思うだろう。

うし、仕事をしている大人は『今はしなくちゃいけない仕事がたくさんあるから』と思うだろう。

じゃあ地震は『今』でないなら、いつなんだろう。それを予想できないところに、一番の危険が潜んでいるんだと思う。どの外部講師の方もおっしゃっていた、もうひとつの言葉。『地震は忘れた頃にやってくる』ということ。備えにまる1日もかからないし、ほんの少しの時間を使ったら出来ることはいっぱいあると思う。それから、私たちの世代にしか出来ないこともいっぱいあると思う。

防災を考えることが、何より『今』するべきことだと思う。

この学科に入って様々な体験をすることによって、私の考えは良いように大きく変わった。

そういえばこの間、ニュースを見た。『他の国では、地震を恐いものだと思っているのだろうか?』というテーマだった。結果は、びっくりするほど白黒がはっきりしていた。地震が起こった国は100%怖いと感じていて、地震の起こっていない国では100%怖くないと答えていた。

地震は怖くないと答えた国の中に、アメリカがあった。テレビはアメリカに『何で怖くないと思うのですか?』と問うていた。するとアメリカ人のほとんどがこう答えていた。

『地震よりもテロのほうが怖いから。』

その国その国によって、起こる災害の種類は1から100まで違ってくるのだと知った。日本でかつてテロが無いかわりに地震が起こったように、アメリカでは地震がない代わりにテロが起こっている。本当に大事なものは、ただ地震に備えることだけでなく、自分たちの国で起こるかもしれない災害、それを考えるということなんだと感じた。

日本は地震大国だと言われているけれど、なにか備えようと思えば備えることが出来る。先進国だから。発展途上国にとっては、ちゃんとした備えをしたくても、出来ない場合がたくさんあるかもしれない。日本は、自分の国を強くするだけでなく、そのような国も強くしていく義務もあるはずだと思う。

その為に配慮していかなくちゃいけない事はきっと少なくない。国がひとつ違えば文化も宗教も違うだろうし、能力や政策、もちろん言語も違うだろう。それら全てを踏まえて支えあっていくことによって、途上国も今以上に、確実に強くなっていくと思う。日本は、その大きな使命を担っていかなくてはならない。

阪神・淡路大震災という、残酷で貴重な体験をした、先進国として。

僕の被災体験

神戸市垂水区
松田 啓希

追憶

危うくきれいさっぱり忘れてしまうところだった。いつのまにか今の生活に慣れ、ただなんとなく毎日を過ごすようになってから一体何年たったのだろうか。確かにその出来事があったことはみんな覚えていると思うけど、1周年、2周年・・・と数えていくうちにすっかり過去のものになってしまったように思う。毎年恒例となった行事の中での地震に対する客観的な取り組みが「覚えている」が「知っている」に変わってきたような印象を受けた。

実際、環境防災科に入って早2年。災害や防災などの知識は確実に増えているのだが、「それでは地震が起きたときのことを話してください」と言われても、覚えている事実だけではおそらく5分もしゃべることができないと思う。「時間というものがこれほど心に大きく影響するものか」と改めて思った。その間にも町はめまぐるしく変化し、僕の体も大きくなった。声も低くなり力も強くなった。今なら両手に水のいっぱい入ったバケツを持てるだろう。そう、忘れかけていたあの日からもう10年も経つのだ。

平穏な16日

1995年1月16日月曜日。この日も、いつもと変わらない休日を過ごしていたと思う。小学校低学年の休日と言われるとちょっと思い出しにくいけれど、その日はたまたま親子3人で須磨海浜水族園に遊びにいったからなんとなく思い出すことができた。土曜日から始まった3連休中、どこにも連れて行ってあげられなかったからということで、両親が連れて行ってくれたのだ。

当時は、休みの日になるとかなり頻繁に家族3人で出かけていた。この日に水族園に行ったのは、本当にたまたまだ。その頃の写真なんかが残っていればいいのだけれど、あいにく僕の頭がうっすらと記憶しているだけなのでとても残念だ。

でも大好きな水族園で魚をたくさん見て、ヒトデをつかんで・・・絶対に楽しかったに違いない。水族館が好きなのである。今行ったとしても、昔と変わらない気持ちで楽しめるだろうと思う。ガラス1枚隔てて異空間を覗き込むような感覚がすごく楽しかった。水の中の魚やほかの生き物は形も色もさまざまで、それが泳いでいるのを見るだけでもまったく飽きないのである。次の日の朝に、地震が起きてほとんどの魚が死んでしまうとは夢にも思わないくらい。

後に聞いた話だが、水族園の中に入ってすぐのところにある一番大きな水槽(波の大水槽だったと思う)には震災当時約2400匹もの魚がいたらしい。そして、その中の約2300匹が阪神・淡路大震災の影響で死んでしまったらしい。ほかの水槽でもその被害はすさまじかったそうだ。

つい一昨日は震災を予期するような暗い印象は全くなかったのに。

でもそういえば、その日は幼稚園の頃から何回も見たことのあるおなじみ「イルカショー」で、イルカが全く芸をしなかった。この話は、僕の家族の中では今でも語り草になる震災エピソードの1つだ。

いつもなら派手にジャンプしてビーチボールをトスしたり、ヒレをパタパタさせたりと観客を楽しませてくれていたはずのイルカも、この日はなぜか水槽をめちゃめちゃに泳ぎ回ってすき放題ジャンプしたりしてどうしようもないありさまだったと思う。子供心には、それはそれで面白かったのかもしれないが。

とにかく、僕は震災前日にイルカショーを見てイルカの不可解な行動を知っている数少ないうちの1人なのだと改めて思った。インターネットでも「前日」のイルカの様子について書かれてあるページはなかなかなかった。

その日のことはこのくらいしか覚えていない。当時、僕は小学1年生で9時には寝ていたように思う。だからこの日は帰宅後お風呂に入って、ご飯を食べて、家に帰って(我が家では両親共働きなので毎日祖父の家で夕食となる)寝たという具合だったはずだ。

記憶に残っているそれまでどおりの日常はここまでだ。次に目を覚ました時は、いつもと違う朝だった。

いつもより早い目覚まし

「ゴゴゴゴゴゴ・・・」

はっと目を覚ました。僕は何がどうなっているのかさっぱりわからなかった。恐怖ともなんとも言いがたい気持ちに支配されていて布団の中から動くことができなかった。ただ地面の底からおなかに響く揺れ

というより芯のある声のように思った。それはだんだん近づいてくるような、地割れがこっちに向かって伸びてくるような音と小刻みな振動だった。と思っていた矢先、これからの神戸の全てを決める大きな横揺れに変わった。僕はそれが一瞬の出来事に感じられた。今でもそう思う。

初めての朝

言葉もなかった。今までに経験したことのない出来事と、何が起きているか考える間もないまま気がつけば揺れていたということから、状況を飲み込めずに混乱していた。そのすぐ横で（当時は寝室に家族3人で3つのベッドが並んでいた。僕は真ん中）父は冷静だった。母は無言でじっとしていた。揺れが始まった時も「地震や！」もしくは「地震か？」などと言っていたのを覚えている。両者とも思っていることこそ違っただろうが、「子供に覆いかぶさる」とか「子供に声をかける」などといったことには気が向かなかったようだ。それとも、何か言われたりしたかもしれないが、僕自身それどころではなかったために覚えていないのかもしれない。

ともあれ僕達はその場から起き上がりもしなかったし、揺れこそ強かったが特に逃げなければならないような状況でもなかったのも確かだ。

その時父は

「これで東海地方は壊滅やなあ。まだ早いから起きる時間までもう少し寝よう。」

と、言っただけ。父が「もう少し寝よう」と言ったので、実際に寝た記憶はあるのだが……。『東海地方』とは。後々は母から聞いた話だが、どうやら父はこのとき震源が家の目の前だとは思ってもよらず、東海大地震が起きたと思ったらしい。今でも直ぐ近くだが、当時の住まいは舞子台2丁目、つまりJR舞子駅から50メートルほどのところに建っているマンションの1階だった。本当に震源の目の前に住んでいたと思うと自分が今こうして無事なのが不思議なくらいだ。

僕らの地域は、震源の近くとは言っても震度は6レベルだったそう。さらに周囲を荅谷公園という森（今では半分近く切り開かれている）に囲まれ、地盤がしっかりしていたらしい。そのおかげでそのマンションは10年経った今でも堂々としたたたずまいで残っている。

ところで、父が自分の勘違いに気づくのは兵庫県南部地震発生から1時間以上経った7時過ぎになってからのことだった。

床に落ちたテレビとオーブントースターを元に戻しながら朝食を作る母。それをいつも通りに食べる。そう、我が家が受けた被害はたったこれだけだったのだ。皿も割れていなければプラモデルすら倒れていなかったのだ（でもなぜかテレビは落ちた）。これでは「神戸は今どうなっているのか」という大きな考えが出てこなくても仕方がなかったといえば仕方がなかったと思う。停電もしていたはずなのでテレビも見られなかった。ただ、水道は全く問題なく機能していた。マンションのため、貯水タンクに溜まっているだけの予備があったのだ（この日は、昼過ぎまで水が使用できた）。

そうこうしているうちに父は支度を整え会社に行った。が、数十秒で帰ってくることになるのは言うまでもなく、慌てて帰ってきた父は、

「えらいこっちゃ！地震ここやで！」

と言って説明を始めた。それもそのはず、無事だったのはほんとに僕のマンションだけで他の家は傾いたり、道路に亀裂が入ったりと散々だった。隣のマンションは見えてわかるほど傾いていた。近くにあった古い一戸建ても半壊していた。それなのに、僕の住んでいたマンションはヒビ1つ入ってなかったのだ。

この後数日間、冬休みは毎日水汲みの生活が続き、気がつけばまた学校が始まっていた。

現代

今思えばあれは偶然なんかじゃなくて、「大災害を察知して野生動物がなんらかの行動を起こす」というあれじゃないかと思う。きっとイルカは地震が来ることを人間に気づいて欲しかったのだと思う。実際にイルカの飼育にも大きな影響がでて大変だったそう。『人が気づいていないところでも、大災害の影が見え隠れしていた』というなんだか少し悔しい気分だ。

そういえば、あれから水族館には一度もいっていないような気がする。あの震災を乗り越えた魚はまだそこにいるのだろうか？ 気になったので調べてみたところ、そんな大災害を乗り越えたうちの2頭のイルカが、今日も須磨海浜水族園でイルカショーを披露しているそう。それを知ってとても嬉しく感じた。

震災を体験して語り継ぐのは人間だけじゃないのだと思った。確かにイルカは語り継ぐことはできないけれど、そんなイルカが人々に何か伝えることができるのならそれはとても素晴らしいことだと思う。

今度、1人でも良いから絶対須磨水族園に行ってみようと思う。もちろん、水族園のイルカ以外のほかの生き物も全部見るぞ。

蚊帳の外に居る自分

神戸市西区
松田 由貴

1 : prologue 被災前日までの自分

明石海峡大橋から北へ約15km、六甲山から西へ約20kmの地点に、僕は住んでいた。当時は、田畑ばかりの押部谷を中心に様々な8つほどの住宅地や小さなまちがあり、3つくらい小学校があったと思う。パソコンで検索出来ないような小さな雄岡山や、明石まで延々と続く明石川の上流を眺めながら、農業公園から香る牧場の香りに包まれて育った。そういう田舎で育ったことは、今でも少し誇りに思う。

僕の通う押部谷小学校は、1学年ごとに5クラスあるくらい大きな学校だった。あまりにも人数が多くなったため、隣のまちでは月が丘小学校が建設されている。予定通り行けば、今度の4月には開校するようだ。押部谷小学校の生徒の半数が、月が丘から登校している。月が丘小学校の開校で生徒数は半分になるのは寂しいが、中学になればまた一緒だ。僕達は、あと少しで遊べなくなる友達と…特に特別な思いもなく…普通に学校生活を過ごしていた。創立119年の、歴史を感じる校舎だ。

学校から30分歩いた所に、僕達5人家族の住む団地がある。5階建の建物の2階に住んでいた。家族は、たまに喧嘩もするがいつもは仲のいい両親と、この春に幼稚園に入る弟、そして去年の4月に生まれたばかりの妹だ。金魚も5匹いた。車で10分位走れば、1人暮らしの祖母の家に着く。

その頃、次の秋には月が丘へ引っ越す計画が立っていた。春に月が丘小学校が分校されれば、僕は少し遅れてそれについていく形で転校することになる。当時は「誰にも言うてはいけない」と、何故か親に口止めされていた。口止めされると逆に言いたくなるもので、しばらくするとクラスに噂が広まっていた。

1995年1月16日、夕暮れ時。夕飯の用意を手伝っていた時。「嫌な色の空だね」と、夕焼けを見て母が言った。僕も気付いていたが、数日前から夕焼けが青紫色だった。気味の悪さが少し怖かったが、夕食とテレビに目を奪われている内に日は暮れてしまった。すでに見えなくなった夕焼けは、もう気にも留められなかった。いつもの夜が来た。

2 : January 17th 被災当日の状況

朝。起きた時間は7時くらいだったろうか。僕はいつも通り起きて、居間へ行こうとした。家の廊下は、寝室から居間まで続いていて、その途中に玄関や洗面所がある。洗面所のある場所は少し窪んだ場所、その右のドアはトイレ、左は風呂になっていた。廊下の突き当たりには台所があり、ベランダへ行くドアがあった。寝室の隣は物置になっていて、いつもは使わない部屋だ。文章で説明するのはかなり難しい、少し入り組んだ造りだ。そんな入り組んだ狭い廊下に、物が溢れかえっていた。洗面所の近くの床はひんやりと冷たく、電話置き棚の上の水槽は水が半分になっていた。電話も下に落ちていて、台所付近は割れた食器が散乱していた。

居間へ辿り着くと、母がラジオを聴きながら家の物を整理していた。昨夜まで家族で眺めていたテレビも、毎朝父の作業着が出て来るタンスも、2年生になったら触らせてもらえるテレビゲームの機械も、全てが居間の上でひっくり返っていた。その真ん中で、母は引き出しの物を整理していた。「どうしたん、お父さんと喧嘩したん？」僕の最初の言葉だった。すると母が、地震が起きたということを教えてくれた。母はいつも通り、父の弁当を作っていた。その時、あの兵庫県南部地震が起きたそうだ。蛇口は破裂して水が噴き出し、水槽は揺れて水がみるみる外へと出てしまった。地震がおさまリ、父が寝室から出て来て、しばらくすると仕事の準備をして出勤したという。この間のことはあまり詳しく聞いていないが、多分部屋の片付けをしてくれていたのだろう。被災時の父はというと、とっさの判断で僕達に覆いかぶさり、守ってくれていたらしい。寝ている間で全く気付かなかったが、父が少しヒーローに思えた。寝室に倒れる物がなかったのも幸いだった。震災当時のこのような話を聞いても、実感がわかなかった。しかしよく考えてみると、両親の喧嘩で家がひっくり返されたような惨事にはならないだろう。ラジオでも震災のニュースをしているらしい。僕は、信じられない現状を飲み込むことにした。と同時に、それ程の大きな地震があっても寝ていたという自分が、少し恥ずかしかった。

とにかく、自分のおもちゃを整理することになった。つい先日完成したパズルが、壁から外れておもちゃの海の中へ消えていた。多分いくつかのピースは無くなってしまっているだろうと、少し残念に思った。ラジオからは都会の方の災害の情報がずっと流れていた。緊迫した声と信じられないような現実、

逆に阪神・淡路大震災を遠くの国の災害のように思わせた。確かに、壁や天井にはヒビがいくつも入っているし、外から団地を見ても大きな傷が斜めに走っている。トイレも水道も水が出ない。でも何故か、それによって「震災の被害を受けた」とは思えなかった。心のどこかで信じられなかったのかもしれないし、単に考えが子供だったからかもしれない。理由はどうあれ、都会まで電車で1時間かかる山奥は、暮らしにおいても震災においても、まるで蚊帳の外と中のような感じだった。

電気も数日間止まっていた…と思う。テレビを見る間もないくらい忙しかったからかもしれないが、電気が流れて喜んだということはなかった。ただ、被災して数日経ってからテレビを付けてみると、「ボン」という音と共に煙を噴き出して、それは使えなくなった。さらに数日して、父が新しいテレビをもらって来た。「新しい」といっても、かなり昔の中古の物だ。何せ、テレビの右側にはチャンネルごとにボタンがあるのだ。音量は10段階のダイヤル式で、すぐに調子が悪くなるし、何より叩けば直るという代物だ。当時の自分には、それがとても面白かった。

3 : the cage 都会と田舎、海の近くと山の中

震災という出来事は、日を迫る毎に実感となり、現実になった。水はもう何週間も止まっていて、中学校に作られた給水場まで水を汲みに行った。その時に活躍した小さなポリタンクは、父が会社からもらった物だった。他にもブルーシートや軍手等、様々な物を借りられたそうだが、被害の大きい場所が優先だった。また、近くのスーパーはどれも品物がなくなったため、遠くまで車で買いに行ったりしていた。祖母の家では水が出ていたので、風呂や洗濯の時はそこを使わせてもらった。そんな時、母は「さ、コインランドリーへ行くよ」と、冗談半分で言っていた。そんな僕も、当時はコインランドリーの意味が分からなかったため、コインという言葉の響きから「ゲームセンターへ行く」と勝手に勘違いして、祖母の家に着いた時は少しがっかりしていた。都会の方でどんなに大変なことが起こっていても、やはり蚊帳の外と中だった。まだ子供だったこともあるかもしれないが、危機感はそんなに感じてはいなかった。

トイレは、小さい頃に使っていたおまるを使うことになった。妹が使っている物を一緒に使うのだが、特に恥ずかしいとかいう感覚はなかった。そういう私情のような感情は、震災のせいか麻痺していたのだろう。1日に3回、汲んできた水でトイレに流すようになっていた。

小学校の3学期が始まり、都会は都会、田舎は田舎と別々だった災害が、一部で1つの災害へと繋がりはじめた。しかし子供だった自分には、その感覚が強くあったわけではない。上級生が1年生を学校まで送るのが日常だったため、集団登校も、メンバーが増えた程度の認識しかなく、あまり実感は沸かなかった。

しばらくの間は1時間目だけの授業が続いて、毎日の遊ぶ時間は自然と増えた。遊びの時間が増えることは、確かに自分達の悲しみの感覚を薄れさせていた。でも同時に、「今は普通に学校へ行けない状況」という非常事態のような感覚も感じていた。その心の微妙な変化は、生活の変化へと繋がった。遊ぶ時に同学年としか遊ばなかったのが、幼稚園の子から小学校高学年の先輩まで、様々な年齢層が集まって皆で遊んでいた。遊ぶ場所も、団地の回りへと狭まった気がする。学校の帰りには、寄り道をせず真っ直ぐ家に帰った。いつもと同じことをしているようで、何かが少しずつ変化していた。そしてやはり、水は出ないままだった。家に帰ると時たま、「今日は水を汲みに行くからね」と小さなポリタンクを持たされ、中学校へ行った。この頃は、小学校も給水場になっていたらしい。そのための1時間授業だったのだ。

集団登校は実感が無かったと書いたが、集団下校は初めてだった。その初日、ちょっといつもとは違う感覚で、何故か緊張していた。廊下で全員が並んで、先生が先頭に立って一緒に出て行く。校門を出て、道路を歩いて…まだ先生はいる。曲がり角を曲がって、信号まで差し掛かって…「はい、皆さんさようならー」…どうやら、集団下校とはここまでのことだったようだ。児童達は皆、クラスを離れてバラバラになっていく。しかしそこからがまた違った。家の近いもの同士の集団が出来、さらに同じ道を通る集団となって…下校時間を合わせることで、自然と大きな集団が出来たのだ。今思えば、先生の考えることはなかなか凄いものだ。子供たちの考えを先読みして、自然と「安全な状態」にしてしまうのだから。

5時間目までの授業が再開されると、そこにも変化があった。しばらくはパンだけの給食が続き、自分の家から1枚ずつトレイを持って来るように言われた。いつもの鉄製の食器は使わなかった。給食は食器ごと全部、被災地へと送られていたのだ。2月になって、転校生が沢山やって来た。押部谷小学校のホームページを参照すると、46人も入って来ていたらしい。当時の僕達は、朝礼台の横にズラッと並んだ沢山の友達を見て、その多さに驚いていた。転校生を温かく迎えて、日常生活は再開された。

転校生達は月が丘に作られた仮設住宅に住んでいたのだが、それを知ったのは小学2年になってからだった。それに、転校して来た友達がそれぞれどんな体験をしたのかも聞いていない。面白がって聞くようなやつもいたが、僕はそういうことを好まなかった。子供心ながら、それは触れてはいけない傷跡なのだろうと、自分のクラスに入った転校生の表情を見て思った。彼は自分から被災体験を語ることはなく、

友達に聞かれると嫌々ながら話していたように思う。僕は同じ考えを持っていた友達を集めて、その子になるべく傷つけないように普通に友達として接しようと努力した。震災の体験について触れないようにその友達と話したり、遊具で遊んだり、一緒に帰ったりもした。話すことは特に無くても、とにかく皆で一緒にいた。その子が本当に震災体験を語るのが嫌だったのかどうかはわからないままだったが、しつこく聞いてくるやつから彼を遠ざけるべきだと子供心に思ったのだろう。

その考えは次第に広がって、面白がって聞く人もいなくなった。クラスの皆と馴染めるようになって、彼の笑顔が増えた。震災の体験も、嫌々ではなく「聞いてほしいから」と言って、少しずつ話してくれるようになった。僕達がそれまでやっていたことは、もしかしたらおせっかいだったのかもしれない。転校生の問題は、使えるようになった水道水と一緒に、綺麗に流れていったのだ。給食も、いつのまにか前まで通りの献立になっていた。

給水の時に使われたタンクは、今でもたまにアウトドアの時に活躍している。その透明のタンクを見るたびに、不思議と「あの時は大変だったなあ」と思い出す。小学1年に出来ることは限られていた。そのため、回数はわからないが、週に何度かは水を汲みに行っていた。中学の敷地までは小さな坂があったのだが、当時1年生の自分には、険しい崖のように思えた。やっと校庭へ到着すると、いつもは先輩達が走り回っているような茶色い校庭に、給水所がいくつか出来ていた。その1つ1つに長蛇の列が出来ていて、順番を待つ…とは言っても、皆が優しくしてくれて、大体の場合は順番抜かしをさせてくれた。

水が出るようになった時は、もう水を汲みにいかなくていいという喜びと、もうおまるを使わなくてすむようになったという喜びを感じた。でもしばらくは、「トイレは1日3回しか流さない」という制約は続いた。水の大切さを、家族全員が身を持って体験したからだろう。その制約は、トイレが詰まってその「まとめ流し」が原因とわかるまで続けられた。

4: elapse 時は流れて

1995年4月。分校される予定だった月が丘小学校の開校が、9月まで延期された。また引っ越しも延期された。分校されるまでの間、1年の時と同じクラス編成で過ごすことになった。募金活動も行われ、しばらくすると運動会の準備が始まった。

9月になり、押部谷小学校の生徒数は半分になった。クラス替えが行われ、誰がいなくなって誰がいるのかあやふやになった。被災地からの転校生は全員が月が丘小学校へ編入したようだ、ということだけは明確だったが。運動会も音楽会も普通に行われて、2学期もあつという間に終わってしまう。2学期の最後には、僕のお別れ会が行われた。

12月のクリスマス・イブに引越しを終え、新たな家での生活が始まった。ふと気づいたことだが、ひび割れない家での生活は久しぶりだ。いつのまにか震災から1年も過ぎていた。そして当時の僕の頭からも、震災の経験は遠のいていた。月が丘の公園で遊んでいると、早速友達が出来た。その友達は、僕の知らない友達だった。

3学期…月が丘小学校へ転校すると、久々に見る顔がいくつもあった。今まで知らなかった多くの友達も出来た。その中に被災地から来た人がいたのかもわからなかった。「子供は皆、平等だから」と言えば綺麗に聞こえるが、誰がどういう人なのか、単に忘れきっていただけだった。

いつのまにか友達のグループに入ることが出来て、町内の色々な場所を案内してもらうことになった。その日、友達が仮設住宅のある場所を教えてくれた。被災規模が小さいということは、何とものんきなものだ。ここで始めて、去年の46人の転校生が住んでいる場所がわかったのだから。しかも仮設住宅地は、あまりうるさくしてはいけないと言われ、住民同士も何か気遣い合っているような暗い雰囲気です。子供だった僕達には、思い過ぎだったのかもしれないが、それがどうしても触れてはいけない部分のような気がして、敷地内に入ることはなかった。そこに誰が住んでいて、どういう家族構成なのかは知る由もなかった。まさに、蚊帳の外に作られた「蚊帳の中の空間」だった。彼らは確かにあの震災を体験し、家を失っていたのだ。今思えば、あまり触れ合わなくて当然だったのかもしれない。しかし、触れ合わなければならなかったような気もする。小学2年といえば、まだ無邪気な年齢だ。もしかしたら、被災者の心に明るい変化を与えることも出来たかもしれないのに。でも、大人が避けさせた…いや、自分達も、もしかしたら自然と避けていたのかもしれない。今思っても、触れ合いが無かったことが良かったのか悪かったのかはわからない。相手がどういう人だったのか、覚えていないのだから。

あの日に仮設住宅が立ち並んでいた場所は、1つは小さな運動場になっている。もう1つは、今でも荒れた空き地のままだ。

5 : reminiscence 記憶を追う事

被災して、今年でもう10年を迎えた。しかし、まだ10年しか経っていないという感覚も、勿論ある。

「もう」と思わせる物は、やはり時の速さだ。さらに、1つ1つと見ていてもあまり大きな物事も起こっていない。震災当時のことを追憶する度に「あぁ、そういえば」と思い出していったが、その1つ1つも、やはり小さな思い出でしかなかった。水が止まって中学まで汲みに行ったこと。テレビが煙を吐いて、新しいレトロなテレビが来たこと。集団登校と集団下校があって、遊ぶ時間が増えたこと。仮設住宅を見に行ったこと。1つ1つ、本当に小さなことだ。本当はもっと大きな震災体験なのだろうが、あろうことか地震があった時、自分は眠っていたのだ。そのことが、本当に大きな差だったように思う。

自分は、地震を体験したわけではない。震災と復興を体験しただけだ。しかも、小学校の低学年という年齢で、山奥の蚊帳の外で。その体験は、他の体験からしたら本当に関係のないことなのかもしれない。だもただ1つ、思うことがある。自分達「蚊帳の外の人間」しか知らないことが、あるのではないかと。

他の地域で被災者を外から見た人にも聞きたいことがある。それは、「被災者の方が仮設へ避難して来た時、温かく迎えることが出来ただろうか」ということ。温かく迎えるというのは、単にもてなすという意味ではない。日常生活の中で、何か壁を作ってはいなかっただろうか。また逆に被災者側も、何か壁を作ってはいなかっただろうか。お互いの壁の作り合いが、確かに自分のまちでは起こっていた。自分は今でも、それを後悔している。もっと親身に接することが出来たと思うし、震災体験を話すかどうかは本人の意思だ。ただ何故か、被災者の感情を、蚊帳の外にいた人間が勝手に決め付けていたような気がする。そして当の自分も、震災体験には触れないようにと思っていた。これは、果たして間違っていたのか、合っていたのか…。

震災10年と、その後の未来…それは、双方がお互いの「当時」を語り合う時間だと思う。被災した時のいくつかの物語と、被災者を受け入れた時のいくつかの物語。その1つ1つに隠された、「思いやり」「助け合い」「差別」「友情」というキーワード…。それらを拾い集める余裕も、やっと出来てきた10年目だ。まだ10年しか経っていないのに、まちは大きく変化し、まるで傷を隠しているようだ。そのまちの風景を見ると、神戸の持つ力強さを感じると共に、新たな問題を隠蔽しているようにも感じる。そのまちを眺めて暮らす今の子供達は、阪神・淡路大震災を知らずに、大人になることだろう。小さな1つ1つの記憶が、未来の災害や防災、さらには地域や社会まで、重要なキーワードになると思う。

今一度、当時の記憶を追ってみてはどうだろうか。その中から、また今の状況から、学んでみてはどうだろうか。無理に行うことなく、気が向いた人から順に、未来への準備をすべきだと思う。それが、蚊帳の外に「居た」人間として、一番言いたいことだ。

語り継ぐ

明石市魚住町
松村 清久

ゆっくりと目を開いた先には、小さくぼやけたオレンジ色があった。まるで子供をあやすかのようにゆらゆらと揺れていた。それが、僕の7歳の1月17日の始まりだった――。少しして、ぼやけたオレンジ色は一ハッキリと形づくっていった。薄暗い中、光る豆電球。まだ、少し揺れていた。僕は、地震がちょうどおさまりにかけている時に起きたようだ。そのせいか、それともただ単に子供だったからか。この時はまだ、こんなにも大きな地震が起きていたなんて思ってもなかった。僕は揺れる豆球に「あ、地震や」と軽く心の中でつぶやいた。それは、恐怖のすえにやっとでた言葉なんかではない。ある意味喜びの言葉だったのかもしれない。一番大きな揺れの時に寝ていた僕にとって、地震とは“珍しいもの”でしかなかったからだ。

震災の日、僕は東二見に住んでいる従兄弟の家に姉と泊まりに来ていた。僕が寝ていた部屋は1つの窓以外は雨戸が閉められており、薄暗かった。ゆるりとした風が優しくノックしたかのように、閉めていなかった雨戸が小さくガタガタと言う音を出した。僕は、つられるようにして窓を見た。当時は真っ暗だったといろんな人から聞くが、僕が見たその窓は、淡く光っていた。小さかったから記憶が曖昧なのかもしれない。だけど、僕の記憶の中では光っていた。何か不思議な光だった。その窓の先の光景は光が邪魔して思い出せない。

「ガシャン、ガシャン」という音がハッキリ聞こえた。食器が数枚割れたのだと思い、僕は布団から起きあがった。リビングに行き、キッチンを覗き込んだ。床には、ガラス破片等が散らばっていた。すぐに従兄弟とあやこおちゃんが駆け寄り、割れた食器を拾っていった。ガラス破片はみるみる内にゴミ箱に放り込まれていった。また鳴り響く「ガシャン、ガシャン」と言う音。僕は、どこに向かおうとしたのかは思い出せないが、リビングにあるピアノのそばに歩み寄った。ふと上を見上げると、ピアノから今にも落ちそうな人形があった。角ばったガラスの箱に入っていた人形だった。従兄弟が『清！危ない！』と怒鳴った。僕はその怒鳴り声に、無意識に後ずさりをした。ガラス箱の人形はすぐに従兄弟が駆け寄り、元の位置に戻した。もちろん僕に怪我はなかった。当時の僕にとっては、ガラス箱が落ちてきそうだったことよりも従兄弟の怒鳴り声のほうが衝撃的だった。

その後僕は家に帰った。家に帰ってから何をしたのかは思い出せないが、僕は自分の部屋に戻った。その時すごく驚いた。まるで泥棒が入ったかのように部屋は荒れていた。全ての引き出しや本棚やおしりれが開きっぱなしで、中は空になって全て外にほうり出されてしまっていた。僕は地震が起きたことにショックはなかった。ただ単に部屋が手をつけられないほど散らかっていたのがショックだったのだ。

僕の父は当時、建設会社の社長だった。僕の家は1階が事務所になっていた。僕が自分の部屋から1階に降りた頃には、もう事務所は少し片付いているようだったが、まだ散らかっている所もあった。そんな中、従業員のほとんどは事務所にかけて来ていて、みんな事務所にある小さなテレビをじっと見ていた。僕にとってそれは衝撃的な映像ではない。ただ単なる映像にしかすぎなかった。そのせいもあり、僕は少しがっかりしていた。なぜかと言うと、全てのチャンネルが、原形がわからない程ぐちゃぐちゃになり、燃え盛っている神戸の様子が移っていたからだ。ぼくは、心の中で「いつものアニメがやってへんわ。なんで全部これなん？アニメが見たかった。」と呟いた。遠くもない土地で、誰かが苦しみ、悲しみ、泣いて、死んでいる状況で僕はそう呟いた。その呟きが僕の心の中で響き渡っただけで、神戸の方達にまで届かなかったのが本当によかったと思う。

これが当時の僕の記憶だ。僕は、他の人と比べて著しく記憶がない。全くないわけではないが、すごく少ない。だから、僕が覚えているのはこれだけだ。さらに僕には、これ以上の自分の記憶以外は手に入れることができない。当時僕と一緒に住んでいた人は、みんなどこにいるかわからないからだ。ただ、関係のある人ならばどこにいるのかわかるが、昔のことは聞きたくないし、むしろ聞けない。聞いてはいけない過去もあるのだ。僕の過去はそんな大人たちや居場所のわからない大人たちの都合で黒く塗りつぶされている。だから、これが僕の7歳の阪神・淡路大震災の全てである。

母と一緒に慣れない電車とバスに乗りやっとのことで校門の前までたどり着いた。ふと見上げれば「入学式」と書かれた大きな看板がある。僕は、改めて気を引き締めながら校門前の階段を上っていった。それが僕の15歳、人生2度目の阪神・淡路大震災の始まりだった――。高校生活が始まってすぐ、意外にも僕は苦勞せずに友達ができた。毎日が楽しくってしかたがなかった。ついに始まった環境防災科の授業。専門科目である「災害と人間Ⅰ」は大好きだった。その理由は、パソコンに触れるし、何より大嫌いな勉

強から逃れられる。そんな単純な理由だ。僕にとって阪神・淡路大震災は日常が少し変わっただけの記憶だったから、その頃の僕には防災になんてとても興味が持てなかった。だから、授業が好きな理由がそういう風になったのだ。だが、災害と人間 I の授業を受けて行く度に僕は防災を学ぶことが好きになっていった。何もかもが知らないものだらけで、やればやるほど自分の知識も高まっていき、それが発表などにより自分がどれだけ成長したかを実感できるからだ。その充実感が初めの頃は好きだった。環境防災科は阪神・淡路大震災の教訓を経てできたので、1年生の時は、主に阪神・淡路大震災について学んだ。ライフライン関係者や、警察、消防、自衛隊、大学の教授などに講義をしていただき、色んな角度から阪神・淡路大震災を勉強した。僕が学んだ阪神・淡路大震災は、日常が少し変わっただけの僕の阪神・淡路大震災とは全くと言っていいほど違っていった。僕はそのギャップに驚いた。僕が当時の神戸の様子を見たのは、記憶にある中では家の事務所のテレビでみんなと見た時の映像だけだ。だから、どれだけ悲惨な状態になっていたのかは知っていたはずだった。

しかし、僕は環境防災科で学んでいく中で、気になったことがあった。僕の中の地震に対する考えが僕だけみんなと全く違っていったことだ。それを感じた時が2回ある。1回目が、授業中に阪神・淡路大震災のビデオを見るときだった。諏訪先生は、ビデオを見る前に「阪神・淡路大震災の時の映像を見たくない人は目を閉じて耳を塞いでたらいいいからね。」と言った。僕は興味津々で、むしろビデオを楽しみにしていたくらいだ。だが、神戸に住んでいる友達にとっては、阪神・淡路大震災はそれ程恐ろしいものだったようだ。ビデオを見ることすら避けたくなるぐらいに。その時に、地震に対する恐怖感がないのが僕だけなのだと言うことがわかった。僕はそのことにショックを受け、少し不安になった。この時は、まだ少しだけしか感じていなかった。

2回目の時、僕が2年生の時のことだ。僕は1年生の2学期からバンドをやっていて、2年生になってからは生活の中心が音楽になっていたぐらいに、音楽にのめり込んでいった。僕らのバンドは、夏休みに島村楽器が主催するライブ「HOT LINE 2004」に出演した。場所は、島村楽器三ノ宮店。これには、舞子高校の軽音楽部から3バンドが出ていたので、舞子高校から同じクラスの友達も何人か観客として来てくれていた。なので、その日は舞子高校の友達15人ぐらいと一緒にいた。舞子高校から、出演するバンドのライブが全て終わって、僕らはライブ会場の2階下にある楽器屋で話していた。その時、何か違和感があった。急にフラフラしたような感覚がした。周りは一気に静かになり、一瞬で空気が凍りついたようになった。どうやらこれは僕だけではないようだ。僕はその状況を見てやっと地震だとわかった。初めは静かに揺れていたが、だんだんと揺れが大きくなっていった。周りに掛けてあるギターやベースが揺れ、ガタガタと音を出し始めた。僕は、自分が倒れないようにバランスをとっていた。その時、僕は店内の壁に掛けてある楽器が落ちないか心配だった。少しして揺れはおさまった。周りの緊張は緩み、少しざわつき始めた。僕もそれに便乗して、みんなに『地震やったなあ!』と言った。その言葉を僕はどんな顔をして言ったのかは覚えていない。だが、きっと僕は笑っていたと思う。いや、そうに違いない。僕は、少しウキウキしていたからだ。そう、8年前と同じく、珍しいものを体感したことを僕は心のどこかで喜んでいたので。しかし、そんな気分もすぐに消えた。みんなは、まるで何かに追われているように真剣な顔をいていた。僕の隣にいた女の子は腰を抜かして1人では立てない状態になっていた。もう1人の女の子は目に涙を浮かべていた。その時、すごく孤独を感じた。別に僕は1人でいたわけではないのに、僕は孤独だった。そして、罪悪感でいっぱいだった。別に、地震を恐がらないことは罪ではないが、僕だけ地震に恐れなかったことがショックでたまらなかった。さらに、僕は地震が起きている時ただ楽器が心配だった。この、みんなとは外れた感覚がたまらなく嫌だった。

地震が怖いと思うのと思わないのとは、一見大した差はないように思える。しかし、防災を学び、実行していく上で、その差はかなりの差となる。近い将来、僕の住んでいる地域にとても大きな地震が来ると言われている。僕は1年の時からずっと災害や防災などを学んできて、災害の恐ろしさを知った。いや、正確に言うと知ったつもりでいたのだ。頭では、災害を怖いと思っていても、心では本当に怖いということを知っているのに、僕は地震に備えたりしようとしなかったし、しようと思えなかった。しかしそれは、どうしようもないのだ。だから、身近ですぐにできる防災も地震の恐さを知らない僕はしようとしなかった。心から地震が怖いと思っていなければ、なかなか災害にそなえたりすることなんてできないのだから。心で怖いと思えるようになるためには、やはり実際に災害を体験するのが一番てっとり早い。しかし、諏訪先生はおっしゃっていた。「災害を体験しているのとしていないのとでは、やはり体験している方がいい。次の災害に備えようという意識が芽生え、防災が広まるからだ。しかし、災害を受けるか受けなければなら、やっぱり災害なんて受けたくない方が一番いい。たくさんの人の命が奪われる災害なんて、本当は経験しない方がいいのだ。だから、これからは災害の疑似体験が必要ではないか。」確かにその通りだ。

あんな悲しく、苦しい思いを本当はしない方がいいのだ。それから僕は少しの間考えた。どうすれば、僕を含む災害の恐さを知らない人々が災害の恐さや悲しみや苦しみを知る事ができるのか。学校でもその

話題が出され、クラスのみんなも考えていた。最終的に、みんなが辿り着いた結論が「災害の疑似体験をする」と言う事だ。しかし僕には、まだどのようにすればよりリアルに災害を疑似体験できるのかがわかっていなかった。この時から、僕は疑似体験について考え出した。

秋と冬がバトンタッチされた。その頃はあまり、寒さも厳しくなかった。何気ない日常を僕は何となく過ごしていた。何も特別な事もなく、かといって特別な事もしようとは思わなかった。そんな日々を僕は無気力に生きていた。そんな中で、驚くべきニュースが飛び込んだ。僕のクラス内もその話題でもちきりだ。どうやら大きな地震が発生したらしい。僕はいつもテレビなど見る時間がなかった。だから、僕はクラスでの噂話でその現実を知った。新潟県中越地震。何も知らない僕は、友達との会話に入る事はできなかった。無気力に生きていた僕は、その話題について知ろうとしなかった。しかし、環境防災科としてはほっておけない事件だ。地震が起きてすぐに、授業でも新潟県中越地震の話題がだされた。授業では、新潟県中越地震の概要を調べ、今の自分達にできる事について話し合った。僕に興味はなかった。ただ、授業だから。そんな理由で僕は、新潟県中越地震についてやっと調べだした。そこから、僕の新潟県中越地震は始まった。僕は、こんな離れた場所で起きた地震で人生が大きく変えられるとはまだ思ってもみなかった――。

クラスで、今の僕達にできることを話し合った結果、「情報の提供」と「募金」という結論に辿りついた。行動はすぐに起こされた。情報の提供は環境防災科で日頃から学習していた阪神・淡路大震災の教訓や、ボランティアの心得、励ましや応援のメッセージを書いた「絆」という冊子を作った。募金は、学校全体で行うために生徒会が主催で行う事になった。なので、僕は全校生徒が集まる機会を利用し生徒会長として募金の協力を全校生徒に呼びかけた。募金活動は主に4箇所の駅で行った。僕はもちろん募金なんてしなかった。ボランティア自体に興味がなかった。

街頭に出て募金を呼びかけると、とてもたくさんの人々が募金をして下さった。僕の予想できる範囲をはるかにこえる数の人々だ。しかも、1人1人の募金する金額もすごかった。1000円札がたくさん募金箱の中へ入れられていった。僕は、募金でお札を入れる人なんて見た事も聞いた事もなく、ただ驚いていた。さらには、1万円札まで入れて下さった方もいた。それ程、神戸の人々は新潟の震災に関心を持ち、自分も力になろうと思っていたのだろう。これもきっと震災を体験したからだこそと思う。僕なら、募金せずに通りすぎるだろう。僕は改めて、震災の体験をするかしないかの違いを思い知らされた。そして、たくさんの人達に「頑張ってな!」「絶対に新潟に届けてな!」と声をかけてもらった。何か、全身が震え立つような感覚がした。自然に呼びかける声も大きくなっていった。2時間も立ち続けて足は疲れ、叫び続けたせいで声もかかっているのに僕は叫び続けた。疲れなど感じる暇もないぐらいに、募金して下さった方々から何か力のようなものをもらっていた。募金が終わった後、僕は信じられないぐらいの充実感を得ていた。募金を含むボランティアは正直言ってめんどろなものばかりだ。しかし、それ以上にボランティアで得られるものがあることを僕は知った。僕はこの募金でボランティアのすばらしさを学んだ。言葉では言えないが、何か人間として大切なものを得たと思う。何かはわからないが、とても大きなものを確実に得た。全ての募金を終えて集計すると、何と総額約105万円という莫大な募金が貯まっていた。僕は当初13万円ぐらい集まれば妥当かなと思っていたので、これには本当に驚いた。この義援金は、僕とクラスメートの中野君と教頭先生で直接新潟へ手渡しに行く事となった。

飛行機から降り、空港の出口に向かった。新潟は思ったより寒かった。報道関係の方が僕らを出迎えてくれていた。レンズを向けられて少し緊張しながら僕は新潟の地に足を踏み入れた。まず、1日目は特に予定はなかった。時間がかなりあったので、僕達はまず長岡の様子を見に行った。思っていたより、全然被害がなく、街の方もあまり生活に不便していないようだった。次の日、僕達はまず県庁に行き、教育委員会に義援金を渡しに行った。その後、長岡大手高校に向かった。長岡大手高校では、生徒会の方々と交流をした。意外と明るい話がたくさんできた。その後、避難所である体育館を見せてもらうことになった。しかし、僕はあまり集中して見られなかった。たくさん報道陣が僕達と一緒に避難所に入ってきたからだ。報道陣は、避難所に入ると一斉に避難所の様子を写したり撮ったりした。僕は、報道陣の1人に押され倒れそうになった。避難している方にとって避難所は家と言っていい。それをバシャバシャと撮っていた。仮にも自分の家、プライベートな場所なのにあれだけ横暴にカメラに収めようとする報道陣に少し腹が立った。なので、長岡大手高校では避難所の様子をあまり見る事ができなかった。次に、僕達は小千谷高校に行った。高速道路から小千谷に降りた時、僕は驚いた。長岡とは全然違う風景がそこにはあった。町中の電信柱は傾き、倒壊した家屋も少なくなかった。初めて僕は被災地にいるのだという実感がわいた。小千谷高校では、まず校長先生と教頭先生と生徒会長と副会長の方と話をした。長岡大手高校とはうってかわって、みんな少し疲れているようだった。次に、避難所に入らせてもらった。避難所に1歩足を入れた瞬間に空気が変わった。どんよりとした雰囲気が伝わってきた。上手く表現できないが、1秒でも早く

外に出たくなるような何とも言えない雰囲気だった。僕はその飲み込まれそうな雰囲気に、初めて災害の悲惨さを少し実感する事ができた。

別に何日も学校にいなかったわけではないのに、なぜか久しぶりに学校に来たような感覚になった。それ程新潟での体験は大きかったのだろう。学校に戻る事によりまた僕は人生で2度目の阪神・淡路大震災の続きが始まった。いや、また新たに始まったのかもしれない。これからの阪神・淡路大震災が。

僕は、被災地に実際に足を踏み入れる事により、災害の恐ろしさを完全にではないが、少しだけ心で理解する事ができた。僕は、まず身近ですぐにできる防災をしようと思った。実際に非常持ち出し袋を作った。これをきっかけに、もっと防災を実行していきたいと思う。そして、もっと災害の恐ろしさを色んな人に理解してもらえるようにしていきたいと思う。まだどうすればいいかはわからない。実際に被災地に行っても完全に理解できないのだから。だから、これからも「よりリアルな災害の疑似体験」について考えていきたいと思う。そして、これからも僕は阪神・淡路大震災を忘れる事なく、一生阪神・淡路大震災と向き合っていきたいと思う。それが、僕の“これからの阪神・淡路大震災”だ。

記憶に刻まれるもの

神戸市垂水区
水原 大樹

地震の概要 (気象庁発表)
発生年月日
1995 年 1 月 17 日 (火) 午前 5 時 46 分
地震名
1995 年兵庫県南部地震
震央地名
淡路島 (北緯 34 度 36 分、東経 135 度 02 分)
震源の深さ
16km
規模
マグニチュード 7.3
人的被害 () は兵庫県
死 者
6,433 人(6,401)
行方不明者
3 人(3)
- 負傷者 -
重 傷
10,683 人(10,494)
軽 傷
33,109 人(29,598)
計
43,792 人(40,092)

<http://www.kobe-np.co.jp/sinsai/kiroku/higai0012.html>

当時僕は、この学校から歩いて約 15 分のところにある住宅に住んでいた。僕の住んでいたところは、縦型の住宅ではなく坂の地形を利用して建てられていて、坂にそって斜めになっていた。当然、家の中は斜めではない。ただ周りから見れば傾いているように見えるだけである。

1月16日 (月曜日)

この日は、何もない平凡な 1 日だったような記憶がある。朝起きて学校へ行き、授業を受け、放課後に友達と遊ぶといったいつもの生活だった。6 時ぐらい (たぶん) に家へ帰りいつものお母さんに「遅いっ!!」と怒られたような気がする。その時はもう月が出ていて不気味なぐらいに赤かったのを鮮明に覚えている。8 時過ぎ (これもたぶん) に父親が友達を連れて帰ってきた。家の決まりは、「子供は 10 時になったら寝る」ということになっていたのだから口うるさく「早く寝る準備をしろ!!」と言われ続けた。

あまりにもうるさかったのでしぶしぶと風呂に入り、歯を磨いて寝た。たしか 9 時 30 分前だった。相変わらず大人たちは酒を飲んでわいわいと話していた。それがうるさくてなかなか寝付けなかった。

1月17日 (火曜日)

やっと静かになったと思ったときにはもう深夜 1 時を回っていた気がする。僕は、トイレに行きたくなって一度起きた。そのとき初めて月が赤いのを知ったとき、小学校 1 年生ながら背筋がゾクゾクとした。そして再び眠りについた。何時間もしないうちに余震?みたいな揺れを感じた。が、「下で寝ている妹が寝ぼけているのだろう」と思って気にしなかった。しかし、次の瞬間「ゴゴゴゴッ」という音とともに激しい揺れが僕の体を襲った。縦と横に揺さぶられて何がなんだかかわからないままだった。僕は、2 段ベッドの 2 階で寝ていた。だからかどうかわからないが人の 3 倍近く振り回された気がした。柵で何度も頭をぶつけしまいにはたんこぶまでできていた。

一旦揺れが収まって気が動転していたのか、僕は2段ベッドから飛び降りた。下には趣味で集めていたプラモデルが散乱していてその上へ飛び降りたので足の裏に破片が突き刺さって当たり一面血だらけになってしまった。歩けなくなってしまい、あまりの痛さに朦朧としていた。何分たったかわからないけど親父が助けに来てくれたらしくなんとか助かった。足の応急手当をしたのち、みんな居間に集まっていた。居間に行くと食器棚が倒れ、食器が散乱し、特にガラス製品は跡形もなく粉々になっていた。

その当時家では、大きめの水槽に熱帯魚を飼っていた。が、地震で水槽は落下し、下においてあったテレビにあたった。もちろん衝撃で水槽は粉々になり熱帯魚は感電死していた。そのときの生臭い匂いは一生忘れないと思う。

発生から何時間たったかわからない。「こんなことしとってもどうしようもない」と親父が言い放った。その一言で避難しようと一致団結した。が、あいにく先ほどの地震で玄関の鉄の扉は変形してしまいビクとしなかった。親父と親父の友達が力づくで開けようとするがやっぱり開かない。もう出られないと誰もが思っていたそのとき、「ベランダから出たらええんちゃうの?」と母親が言った。「それやっ!!」親父も賛成した。ベランダに出てやっどこさ逃げだし、車に乗って近くの小学校へ避難した。

小学校に着くとかなりの数の車と小学校の教員がいた。…僕が覚えているのはここまで。あの時、あまりの激痛に気を失うと同時に眠ってしまったらしく起きたときには1月18日の昼ぐらいだった。

1月18日(水曜日)

この日、足の痛みで昼ぐらいに目を覚ました。血は止まったものの全然痛みは引かず日に日にまして行くばかりだった。足の裏を怪我していたので歩くこともできず、車の中でぼーとしていた。そうこうしているうちに夜が来た。夜が来ると街灯がつかないのもあって真っ暗になってしまう。そこで小学校の先生たちは校庭の真ん中で一晩中火を起こしていた。僕は、小学校の先生が配りにきた菓子パンを食べ牛乳を飲んでまた眠りに着いた。

1月19日(木曜日)

朝、目を覚ますと車は走っていた。どこに行くのかもわからないままだった。ついたのは母親方の祖父の家だった。母は「様子を見に来ただけ」と言っていたような気がする。僕は親父に抱えられて祖父の家に入った。祖父と祖母は僕の怪我を見るなり「大丈夫か!?」「痛かったやろ!?」と声をかけてくれた。でも僕は、少し強がって「全然っ!!」と言ってしまった。内心ではかなり痛かったのをやせ我慢していたと思う。

祖父の家から我が家へ帰ってきた。もちろん土足のままで上がった。しかし今日も車上生活には変わりはない。「必要なものと大事なものをとりに来ただけ」と母親が言った。その瞬間「また車かぁ」と幼いながらに思った。

1月20日(金曜日)

朝9:00に起こされた。なんと小学校の先生が今でも開いている病院を紹介してくれたのだ。親父は慌てて車を飛ばして三木まで連れてってくれた。病院について診察してもらったときの消毒液の痛さと縫合する痛さは忘れないだろう。結局16針を縫う大怪我を両足に負っていた。医者は「良く壊死しなかったなぁ」と言っていた。

帰りに親父の会社の近くの工場で水を分けてもらって、スーパーでガスボンベと日持ちする食材を買って帰ったような気がする。

・
・
・

僕が覚えているのはここまで。まったく思い出せないわけでもないが何故か思い出せない。こうやって書いたこともうろ覚えで書いたものだから多少話が大げさになっていたり抜けていたりすると思う。でも僕の心の中にも消そうにも消えない記憶がある。それをできるだけ忠実に細かく書いたつもりではある。記憶に刻まれるもの…それは見たこともないほどの赤い月とあり得ないぐらいの揺れ、それと夥しい量の自分の血。これは決して忘れないと思う。この先10年たっても20年たっても。

まち

神戸市垂水区
宮本 舞子

幼いころあまり自分の名前が好きではなかった。この町に住んでいる限り「地名と一緒にの名前なん！」と初めて会った人には必ず言われる。ましてや小・中・高に私とおなじ名前が入っている。環境防災科の入試のときにも面接官に言われた。「舞子の舞子さん」正直聞き飽きた。幼いころは「そんなに珍しいのかなぁ」といつも思っていた。でも、17歳になった今ではこの名前でもよかったと思っている。それは今住んでいる町が好きだからだと思う。何にもない町だけれど、小学生が楽しそうに遊んでいる。主婦や犬を連れておじいちゃん、おばあちゃんがみんな道で止まって楽しそうに話している。みんなが楽しそうだ。だからこの町が好き。この町で生まれた私だからこそ、家族が大切につけてくれた私だけの名前だ。

舞子という町はある意味すごい。午後8時ぐらいになるとこの家庭も家の電気があまりついていない。帰り道が暗くて怖いぐらいだ。これは舞子に伝わる昔からのことかと思うぐらい、小さいころから変わっていない。しかし、数年間で町の外見は大きく変わった。川も冷たいコンクリートで固められ、目の前にあったギャーギャーうるさい野良猫屋敷も今は静かな駐車場。東京タワーや通天閣に対抗していたと小さいころ信じていた舞子のシンボル「舞子タワー」も姿を消えた。町は急に駆け足になった。大きく変わったのが舞子駅周辺だった。今は舞子の浜にアジュール舞子やポルトバザールといった大きなショッピングモールもでき、人でにぎわっている。今の私にとっては、景色がよくて買い物もできすばらしいところだけれども、整備された道路を見ると昔の風景が懐かしくてしょうがない。

10年たった今、私の家はひびが入っている部分があり、震災の記憶をもの語っている。家自体は変わってないような気がする。でも、震災前と変わって救急バケツを作るようになった。そして、私自身が震災について学ぶようになった。17歳の今、10年前のあの日を思い出してみたいと思う。

地震が起きる前、テレビでこんなニュースをよくやっていた。小さいながらうっすら覚えているのは、家族が食事中に地震がおきて、蛍光ライトが激しく動いていたニュースだ。そのころは「揺れてるなぁ～すごいなぁ」ぐらいにしか思っていなかったと思う。家族全員がその地震について深く考えなかったと思う。でも私の家族だけじゃなくて、隣の家もその隣の家もまさか考えていなかったと思う。今考えれば、あの私の目に入ったあの映像が兵庫県南部地震の始まりだった。

1995年、私は今住んでいる家に、当時も住んでいた。築30年。私のじいちゃんが建てた家で、当時の写真を幼いころよく見せてもらった。私の家は工務店をやっていて家に入るまでには、資材がたくさんある道を通らなければたどり着けない。なかなか変わった家である。

1月17日今でもこの瞬間は忘れない。この日が私たちにとって忘れられない日になった。私は母と一緒にの部屋で、布団で並んで寝ていた。すっかり熟睡していたが、「ゴォー」という音とともにあいつがやってきた。今で体験したことのない、洗濯機の中に放り込まれたようだった。揺れに気づいたとき、寝相が悪い私は隣で寝ていた母の布団の中にいた。その瞬間、本棚が勢いよく私の寝ていた布団に倒れてきた。布団の上で、粉々に本棚の扉が割れ、本はいたるところにと飛び散った。本当に恐ろしくて夢だと思っていた瞬間だった。もしあの時、私があのまま自分の布団で寝ていたなら、私は確実に下敷きになっていただろう。母もゆれに気づき、そんな私に必死に布団をかぶせ、守ってくれた。今でも母が必死に私に布団をかぶせてくれたことを忘れていない。蛍光灯は揺れ、揺れがやっと収まっても、またやってくるような気がして布団の中に必死に隠れていった。しかしこの後、びっくりしたのは母の行動だ。揺れが収まったら、母はもう一度寝ようとしていた。母はまだ夢の中にいたらしく、ゆれが収まってもテレビのビデオの扉がパタパタと揺れていたために、「寝られない」と怒っていた。揺れが収まったら隣の部屋で寝ていた父が慌ててやって来た。そのとき父と母が交わした会話を私は絶対忘れられない。「お～い！！大丈夫か？」と言った父に、母は状況がわかってなかったらしく、「も～う！寝られへんやんかぁ！」と父が部屋を荒らしたと思っていた。その声を聞いて、「おまえ何ゆうてんねん！地震や！」と父が怒って言った。母は「えっ！！地震なん！夢やと思っていた！」と言った。この状況で、こんな発言ができる母は、私の母ぐらいしかいないと思う。この素晴らしい神経を持っている母に育てられた私はそのとき放心状態だった。周りを見渡すと隣の部屋のタンスが倒れ、ガラスは飛び散っていた。しかし、地震は待ってくれなかった。

床にはたくさんガラスが飛び散っていたので、私は父におんぶされ1階まで下りた。おじいちゃんがタンスに挟まって怪我をしてしまったが、幸い擦り傷ですんだ。1階に下りても揺れはまだ収まらず、何度かやってきた。私は父に言われ、母と一緒にトイレの中に隠れていた。怖くてぬいぐるみを強く握っていた。後々知ったことだけれど、トイレに隠れるのが一番危ないとテレビで言われ、あの時無事でよかったと思った。そして、父は反省していた。

隠れてからどれくらい経ったのかわからない。トイレから出ると、隣のおばちゃんが布団をかぶっているの間にうちの家にいたのにびっくりした。そのときは、みんな笑って安心することができた。夜が明けて、光が差し込んできたのが安心と同時にうれしくてたまらなかった。でも、友達やおばあちゃんは無事なのかがとても気になった。

1階を見渡してみると、リビングには割れた食器が散らばっていた。洗面所の水道管のパイプは割れ、水が溢れ出していた。それからすぐ、当然のごとく断水となった。家の中は暗くて、少し気味が悪かった。2階の様子を見に行くと、おじいちゃんの部屋の仏壇、お父さんの部屋のタンス、お母さんの部屋の本棚やおもちゃ箱が倒れいろんなものが散乱していた。足元はガラスが粉々になっていて歩けなかった。

少し落ち着いたら、家から出てみることにした。悲しいことに、工務店の大事な看板が落下していた。道路はひび割れていて、交通標識も折れていた。私の家の物置はつぶれ、隣の家は倒れかけていた。隣の家が倒れたことにより隣のお婆さんは親戚の家にお世話になることになった。それからお婆さんは、そのまま舞子から引っ越していった。とても寂しかった…。たった一瞬に舞子にゴジラが通り過ぎたようだった。

しかし、幸いにもというのか私の地域はそれほど被害は大きくなかった。小さな私は当初、近所の友達の無事を確認した後に学校が休みということをしごく喜びあっていた。今考えれば、自分は幼かったと思うし、今じゃ到底喜べないことだった。この日、明石に住んでいるおばあちゃんから電話が入った。おばあちゃんの家に行ってみると、壁は崩れ落ち、ただただ悲惨という言葉しか出てこない状況だった。安心だったのは、全員が無事だったことだった。

私の家はプロパンガスだったために、母があわてて買ってきた食材で料理はすることができた。他の家はガスが止まってしまい、料理ができない状態の中、わたしの家は幸運だったと思う。

その夜は、コタツで家族並んで珍しく一緒に寝た。実は結構うれしかったのを覚えている。この日から数日間家族並んで寝た。私はこのおかげのせいか、なかなかコタツ離れができなかった。

しかし、おじいちゃんは地震の疲れのせいかインフルエンザにかかってしまい、2階で寝込んでしまうようになった。

2日目に私と父は水不足を何とかするために、明石にある井戸に水を汲みに行った。明石に車で到着するとすでにたくさんの人が並んでいて長蛇の列だった。どれくらい待ったのかはわからなかったけれど、こんなにたくさん人が水を必要としていることを目の当たりにした。

その日のうち、父は塩屋に行きお得意様の家を回った。塩谷のお得意様には高齢者がとても多かった。父はそこで、倒れかけの家に釘を打ち応急処置をしたり、家の片付けなどのボランティアを行った。

塩谷に行くと父はペシャンコに潰れた家をたくさん見て、足の震えが止まらなかったと言っていた。家造りに関わるものにとってはきっとショックな出来事だったと思う。今思えば、おばあちゃんの家も塩谷にあった家も築数十年という木材でできた古い家が被害にあっていた。建築の講義を聴いて初めて、父がショックを受けた理由がわかった気がした。

3日目から母がうちで働いている職人さんのためにご飯を用意するようになった。私が朝起きるとコタツとテーブルは職人さんに占領されていてびっくりした。しかもおいしそうにご飯を食べている…。

この生活はしばらく続いて母はとても急がしそうで、これを「猫の手も借りたい」というのかぁ～といまさらながら思った。父も仕事の途中だった家や、担当していた家にシートをかけに行ったり、様子を見に行ったりして忙しそうだった。家には心配の電話がかかってくる。

周りの家の状況は知っていたが、神戸の状況などしらず、その日テレビを見てはじめて知った。いまでも高速道路が倒れていて、そのぎりぎりのところにバスが止まっているシーンや長田のビルが燃えているシーンが何度も何度もうつされたことを覚えている。

この日から、私の家ではお風呂が使えるようになった。それを親戚や知り合いに連絡してお風呂を貸すよ

うになった。

私の家は3日ぐらいでほぼ片付けは終了した。おばあちゃんの家は片付けに1週間かかった。その後おばあちゃん達家族は、お母さんが生まれ育った家から離れ、しばらく別のアパートに暮らしていた。

学校は避難所になっていたために、なかなか登校することができなかった。体育館に避難していた方がいなくなったところに学校は再開された。はじめの頃は1、2時間程度の授業だったが、月日がたつと元通りに戻った。学校といえば、私は給食があまり好きではなかった。特に1年生の頃は、牛乳が大嫌いだった。ちなみに今は、牛乳は好きだ。その牛乳瓶がパックに変わったのもこの年だった。地震がおきたためのために、危険がないように変えられたのだと思う。ほかに変わったことはプレハブ校舎が建った。

それから数ヵ月後、家の壁の修理が始まり少しずつ普通の生活に戻りつつあった。もちろんおばあちゃんの家もうちの家が責任持って建て替え、現在の家となった。きつとうちの家が責任もって建てた家だから丈夫だと私は信じている。徐々にテレビのニュースでも震災は取り上げられなくなった。隣の家は、おばあちゃんの家がなくなり空き地のままで震災の名残が残っている。そして、私は小学校を卒業し、中学、高校入学。無事大きな事故もなくここまで成長した。

こんなに震災のことを思い出しても、なかなか出てこないもので……。記憶がかなり飛んでいるし、大変なことに自分が当時何をしていたのかはまったく思い出せない。私にとって震災の印象とはそんなに薄いものだったかといいつい考えてしまった。でも書いているうちに気づいたことがあった。思い出の中で、お母さんが職人さんにご飯を作ったり、お父さんが家にシートかけに行ったりなどボランティアのシーンがとても多く、この記憶を私は大事にしようと思った。それに私の両親はすばらしい。地震が起きても、あんなにテキパキと働いている姿はとても誇らしかった。でも、この両親の姿を思い出すと自分が何をしていたのか思い出せないのは、何もしていなかったからだと思う。幼かったからだという理由をあまりつけたくないが、何をすればいいのかわからなかったというのが大半の理由だと思う。でも今の私は、何をすればいいのかわからないという状況は作りたくない。ひとつでも自分にできることを探すのが大切。今の私はそう思う。

環境防災科に入るまでは、正直神戸に住んでおきながら震災のことに詳しくはなかった。というか知らうともしていなかった。受験をする前に、震災のことが学べると知り、ただただ震災のことをもっと知りたいと思って入った。でもいきなり授業が関西電力の講義をパソコンにまとめろという授業で最初は戸惑った。今、このレポートを読み返すと自分の幼さがよくわかる内容になっているが、あの頃に比べれば私はこの学科でたくさんのことを学ばせてもらった。震災の当時の状況や、その後の対策など入らなければ何も知らないまま10年間を過ごしていたかもしれない。

授業で一番ショックを受けたのは、長田のまち歩きだった。自分が知らない世界がそこにあった。私の班はあるお漬物屋さんの話を聞いた。話を聞こうとしたが、もう話したくないと最初に言われた。その後なんとかお願いして話を聞かせてもらったが、自分が考えている範囲を超えて、同じ神戸なのに違うところに住んでいるように思った。

「人なんかやさしくないよ。結局自分がかわいいねん。」と言われたときには、10年間の震災の重みを感じた。私は震災でその言葉が出てくるようなつらい体験をしていない。体験した人にしかわからない震災の別の形がここにはあった。このお漬物屋さんがある商店街は、まだまだ空き地があって、あの震災当時のままだと教えてもらった。『もう10年も経って町は復興に向かった。』と頭の中には何回も出てくる言葉がショックに思えてしょうがなかった。町の発展に人がついていっていないような気がした。

私はまちが発展することはうれしい半分悲しいと思っていた。でも、ライフラインや教授の講義を聴くうちに防災を町に進めていく上で、どれだけ努力しているかを学んだ。町の発展が町を守るために少しでも変わっているのなら、それは講義をしに来てくれた方々の努力であり、町の人たちの努力だと考えるようになった。

10年経った今、このレポートを書くために父と母に協力してもらった。今もあの頃と全然家族は変わっていない。相変わらず元気な家族だ。でも、弟が増えた！2年前に来たとてもやんちゃな犬だ。変わってほしくないものはたくさんできた。守りたいものもたくさんできた。外見は変わった舞子の町だけれど、中身は変わっていない。そしてこれからは変わらない伝統や風景も守れるように、町が変わっていったほしい。これからも10年、20年たっていくけれど、私が生まれた町だから、せっかく名前をつけてもらった町だから、変わらないように自分が変わっていけたらいいと思う。だから私は震災を忘れない。

震災を風化させてはいけない

神戸市須磨区
村上 恵里子

【地震の瞬間・直後】

1月17日、父は仕事で中国へ出張していたので、母と私が2階で、祖母は1階で寝ていた。5時46分、ゴゴゴゴッというか、ドンッというか、とにかくすごい音と揺れがした。母はその揺れで目が覚め、「家がつぶれる。死ぬかも知れない」と思った。また、揺れている時間が、とても長く感じた。

母の横で寝ていた私は目を覚まして、「今の地震？」と聞いた。母は「そうよ、怖かったやろ」と答えた。すると、「ねずみさんはみんな逃げてしまったかな」と言って、また寝てしまった。

それから母は外に出てみたが、不気味なほど、シーンとしていて、近所の人で外に出ている人はいなかった。「大きな地震だったのに、誰も出てこないなんてどうしたのかな」と思った。

祖母はぐっすり寝ていたようで、6時半ごろに起きてきた。リビングの食器棚から、ガラスのコップが落ちて、床に破片が散らばっているのを見つけた。それを見て、地震に気がつき、すぐに2階へ駆け上がってきた。ニット帽を持っていて、「何か落ちてくるかも知れんからこれをかぶりなさい」と言われたのを覚えている。それをかぶってから、私はまた寝てしまった。

【当日】

朝7時ごろ、妙法寺の駅前に住んでいるおじさんがやってきた。母に「大変ですよ。これは大きな地震です。仕事で須磨の方まで行ってきましたが、高速は壊れているし、須磨離宮辺りの家もたくさん、壊れてますよ。気をつけてください」と知らせにきてくれた。おじさんはバイクで通勤していたので、スムーズに動けたようだ。

1階に下りて食器棚を見ると、コップ3、4個だけしか割れていなかった。後で聞いた話だが、これは、食器棚の置き方と地震の揺れの方向との関係によるものだった。食器棚は2つあるが、台所の南北方向に置いているものは、まったく落ちていなかった。リビングの東西方向に置いた食器棚からだけ、コップが落ちて割れていた。本棚もすべて、南北に置いているので、本も少し落ちた程度だった。午前7時ごろから、九州の母の実家へ電話をかけたが、つながらなかった。祖母もずっとこちらに電話してくれていたが、なかなかつながらなかった。

9時ごろになって、やっとつながり、こちらは無事で、被害もないと報告した。

朝からずっと停電していたが、9時ごろ、電話がつながると同時に電気が回復した。テレビをつけて、驚いた。家の近くは何も被害が無く、こんなにひどい地震とは思われなかったが、ニュースの映像はひどいものだった。

お昼ごろ、父が中国から帰国して、大阪から電話をくれた。こちらが無事で被害も無いと報告したが、「大阪からの交通手段がなく、神戸にいつ帰りつけるかわからない。水をお風呂や、バケツ、おなべなどを使って、とにかくたくさんためておくように」と言った。しかし、その時は水が出ていたので、大丈夫だろうと思い、水をためなかった。翌日の朝から、水が出なくなり、父の言う通りにしなかったことを後悔した。

ベランダから外を見ると、ヘリコプターがずっと旋回していた。そして、南の方から、黒いすすがたくさん飛んできて、何か焦げたようなにおいがしていた。これは鷹取や長田の火事で燃えたものだったようだ。

【父の行動 1月17日】

父は中国へ出張していた。青島のニュースで地震のことを知った。14時に大阪に到着し、公衆電話から、家に「水を貯めておきなさい。今日は大阪のホテルに泊まって、明日家に帰る」と電話をかけてきた。小さなホテルでは支援体制がないので、大きなホテルを探した。しかし、梅田のホテルはどこも満室だったので、淀屋橋に行った。淀屋橋京阪ホテルで空室を見つけ、1週間予約をして、17日はそこに泊まった。

【1月18日】

17日のうちに電気は回復し、ガスも止まることはなかったが、困ったのは水だった。トイレは、前日のお風呂の残り湯を使った。飲み水は、ポットに残っている水を使ったりしたしかし、その水もだんだん少なくなってきた。

18日の朝、水が出なくなっていて「大変なことになった」と思った。

午後に、横尾小学校へ給水車が来ていることを知り、行こうとした。しかし、途中で近所の人から、「もう水はなくなっていて、行っても無駄だ」と聞いた。食料は、祖母が日ごろから買い置きをする習慣があったので、お米、麺類や小麦粉、野菜、果物など豊富に揃っていた。

【父の行動 1月18日】

大阪のホテルでは、どのテレビ局も地震について報道していた。父はサンテレビを見ていて、これによって、大阪にしながら、神戸の状況をつかめた。大阪で自転車とリュックサック、水、食料を買った。リュックに食料と水を詰め、タクシーに自転車を積んで、大阪にある知り合いの会社へ行き、現金を借りた。尼崎から明石までの区間は電車が不通だったが、タクシーは走っていた。このため、タクシーに乗り神戸に向かった。

三宮まで6時間かかり、料金は5万円ほどだった。自転車で元町のローソンまで行き、公衆電話から家に電話をかけた。偶然、県庁担当の新聞記者に出会い、県庁の様子を聞いた。その記者も、不眠不休で取材をしていると聞いた。携帯電話を買い、自転車で三宮そごう近くの会社へ向かった。元町から三宮に向かう途中、古いビルが倒壊していた。ガラスが全部割れてひどい有様だった。元町から家の方向までは道がボコボコだったので、安全のため、山麓トンネルを越えて家に向かった。家に着いたのは深夜1時ごろだった。

【1月19日】

午前1時ごろ、父が帰宅した。三宮にある父の会社が半壊したので、とりあえず、大阪に事務所兼住居の部屋を借りていて、明日からそこに住み、仕事をすることにした。

父はしばらく家には帰れないし、余震もずっと続いていて、これからどうなっていくかわからないので、九州の母の実家に、祖母、母、私の3人を行かせることにした。

水くみ、食料の確保が、母1人では無理なこと。祖母には持病があり、弱っていたこと。私もまだ小さかったこと。このため、私たちがこのままでは生活できないし、父が大阪に行けない、という理由があったそうだ。

当時母が勤めていた三宮の会社へ通勤するにも、地下鉄が運休していたため交通手段がなかった。そこで、会社に相談して休暇をとった。

給料日前だったので、手元に現金があまりなかったが、祖母が九州への交通費を出してくれた。祖母は神戸の水害や、戦争に遭った経験から、現金と食料は、いつも置いておくように心がけていたそうだ。

2時ごろ、家族全員で家を出た。妙法寺駅前のマンションに住む、おじさんとおばさんにあいさつに行った。そこにはおじさんの両親が避難してきていた。三宮の自宅が半壊で住めなくなったそうだ。おばさんが、食器を洗わなくてもいいように、サランラップをかけて使っていた。

妙法寺からは、タクシーで西明石駅へ向かった。渋滞していたため、2時間以上かかった。明石に近づくにつれ、普段どおりの町の様子になっていった。お店には食料など、物が溢れていた。

午後6時ごろ、西明石から新幹線に乗った。新幹線の中では、そんなにすごい被害と思ってなかったので、おばちゃん家に行けるのが楽しみではしゃいでいた。母と祖母は安心したような顔をしていた。

9時ごろに博多に着くと、おじさんとおばさんが車で博多駅まで迎えに来てくれていた。

その車に乗って、10時過ぎに母の実家に着いた。疲れたが、ほっとした気持ちのほうが大きかった。

【1月20日】

母の実家の近所に住んでいる塾の先生が、私を学校に行かせた方がいいと言いに来られた。その先生が甘木市(母の実家がある市)の教育委員会へ事情を説明に行ってくださり、翌日から学校に行くことになった。

その日に、テレビを見たが、あまりにもぐちゃぐちゃすぎて神戸だと思えなかった。自分の家の周りには火事もなかったし、倒壊してもいないから、どこか他人事のようなようだった。

【1月21日】

6年生の従姉妹と一緒に学校に行った。1年1組に入れてもらうことになった。自己紹介ではとても緊張して、何と言ったか覚えていない。しかし、その後「神戸から来たの?」「地震ってどんなのだった?」とみんなに聞かれたのは覚えている。

担任の先生が教科書、ノート、体操服、上靴など、全部揃えてくださった。すぐ近くに住んでいる、ともえちゃんが同じクラスになった。ともえちゃんはとても親切にしてくれて、放課後も、一緒に遊んだりした。

【1月22日以降】

31日から、JRが神戸駅まで、復旧することになった。母は、いつまでも仕事を休めないし、祖母は、神戸にあるかかりつけの病院へ行きたかったので、2人で神戸に戻ることにした。祖母は、いつまでもお世話になるのは迷惑だからと思ったのもあったようだ。

しかし、神戸に戻っても、通勤手段が回復していないので、母の帰りが遅くなるかもしれなかった。私は放課後、学童保育に通っていたが、それも再開されていなかったで、1人でもうしばらく、甘木に残ることになった。

【1月31日】

母の姉が、博多から10kgのお米を、「地震のお見舞いに」と車に積んで見送りに来てくれた。祖母や、もう1人の姉夫婦からもお見舞いをもらった。そして、母と祖母は2人で神戸に帰っていった。

【2月18日】

両親の仕事も落ち着き、父も時々は大阪の仮事務所から家に帰ってくるようになったので、19日に神戸に帰ることになった。

この日は小学校のみんなとお別れをした。クラスみんなで色紙を書いてくれていた。仲良くなった何人かの女の子には、ぬいぐるみや折り紙をもらった。たった1ヶ月だったけど、楽しかったことを思い出して、泣いてしまった。

【2月19日】

甘木に来てから1ヶ月になった。祖母や、母の姉には「大変だと思うけど、頑張って。お母さんたちを助けてあげてね」と言われ、見送られた。母の妹と一緒に新幹線に乗ってくれて、神戸まで来てくれた。

【2月29日】

母が通っていた鷹取の教会へついて行った。板宿で電車を降りて歩いて行っが、一面焼け野原で、何もなかった。大きなお寺が壊れているのを見た。この日、初めて地震の被害が大きかった事を実感した。

帰ってきて、母に鷹取の様子を絵に描いてみるよう言われた。満福寺の本殿が壊れているところ、地面がグラグラと揺れて、大きな木が倒れている絵を描いた。

【その後】

神戸に戻ってきてからのことは、ほとんど覚えていない。ライフラインが復旧し、学校も始まっていたので、「地震があった」と思うこともなく、普段の生活に戻っていった。

【今思うこと】

この震災体験を書いていて思うのは、地震を覚えていないということだ。地震が起きた瞬間、水に困ったこと、九州での生活。これ以外のことで、私の記憶はほとんどなかった。母に聞き取りをしていて、

初めて知ったことがほとんどだった。自分が体験しているのだから、初めて知ったというのはおかしい。そう思うが、どんなに頑張っても思い出せないのだ。私の記憶力に問題があるのかも知れないが、地震が起きたとき幼稚園、保育園に通っていた子たちは、これ以上に覚えていないのでは、と思った。

今年で震災から10年という節目を迎え「震災を風化させてはいけない」という言葉をよく聞くようになった。環境防災科に入ったことをきっかけに、震災やその教訓を伝えていこうとしているが、地震そのものを覚えていないと、人に伝えることはできない。私たちが「震災を覚えている最後の世代」と言われているが、実際に覚えているのだろうか、と疑問に思う。

震災が風化してしまうと、その教訓が伝わらず、これから同じような地震が起きたときに対応することができない。だから、震災を忘れず、伝えていくことが「震災を覚えている最後の世代」としてできることだと思う。

また、今環境防災科に入って、たくさんのことを学んでいる。その中で「人と人とのつながり」、「防災教育」が大切だと思うようになった。

震災時、淡路島では、家屋から救出された人のうち、80%が近所の人に助けられた。このことから、いざというときに近所の人と助け合えるように、「人と人とのつながり」を大切にしていきたい。神戸には、「防災福祉コミュニティ」という組織がある。この組織が率先して防災訓練や資機材倉庫の管理を行なっている。このようなコミュニティも、「人と人とのつながり」ができるきっかけになると思うので、全国に広がってほしい。

また、「防災教育」も大切だと感じている。昨年末のスマトラ沖地震の際、現地の人たちは「津波」を知らなかった。このため、最初の引き波を珍しく思って海に入り、次に来た波に襲われたそうだ。「津波」とは何なのかを知っていれば、こんなことにはならなかっただろう。

起きてしまった災害はなかったことにはできない。だから、次に来る災害に備えるために環境防災科で学んでいる「災害とは何か」、「防災とは何か」、そして震災の教訓を伝えていきたいと思う。

1月17日

大阪府高槻市
山口 幸治

1995年1月17日午前5時46分、その地震は起こった。

兵庫県南部地震（阪神・淡路大震災）

淡路島北淡町野島断層を震源とするマグニチュード7.3の直下型地震。

淡路島、神戸市、西宮市、芦屋市などは、震度7の烈しい揺れに見舞われ、死者6433名（死因は、建物の倒壊、家具や家電品の下敷きによる圧死、窒息死などで約83%、火災等で約15%だった。また、犠牲者の過半数が60歳以上であり、被災地には1人暮らしの高齢者が多く、逃げ出すことも困難だった。）行方不明3名、重軽傷者43,792名。全半壊家屋27万4181棟。焼失家屋約7,500棟、避難者約35万人。断水130万世帯。停電260万戸。ガス停止86万世帯。電話不通30万回線。同時多発火災約290件の大惨事に発展した。

被害総額は約9兆円～12兆円といわれ、ソ連のアルメニア地震、アメリカのロサンゼルス地震よりも被害は多く、都市を襲ったもので世界最大規模となってしまった。

<http://www.bousai.go.jp/wcdr/info> より

このようなとても恐ろしい地震を、ぼくは体験した。（体験したと言っても大阪府に住んでいたので震源からは少し離れているが、たしか震度4～5くらいだったような気がする。）あのときぼくはまだ小学1年生だった。

あの地震を体験したとき・・・1995年1月17日午前5時46分。

まだ学校が始まったばかりで、正月気分が完全に抜けきっていないので、変な時間に目が覚める時期だ。地震が起こったときは明け方だったのでぼくはまだ布団のなかにいた。

地震発生の5分ほど前。ぼくはトイレに行きたくなり目を覚まし、半分を寝た状態でトイレにいった。トイレを済まし、「まだ朝早いしもう1回寝られるかな」とうつらうつらしながら布団に戻り、気持ち良く寝かかったちょうどそのとき、突然グゴゴゴ・・・というまるで地中を巨大生物がもぐっているかのような不気味な音。その後、ドーン！とゴーン！の間のようすさまじい音がしたかと思うと、ものすごい揺れを感じた。揺れている最中はとにかくずっと「なにかよくわからないけれど早くおさまってほしい！！」と思いながら素早く駆けつけてくれ、かばってくれた父の下でなんとか耐えていた。（揺れの雰囲気は、普通のジェットコースターを10倍ほど激しくした感じだ）その長い揺れは（実際は20秒～30秒くらいしか揺れていなかったらしいが、5分か10分くらい揺れていた気がした。）なんとかおさまったが、部屋の中を見渡してみると、もう本当にめっちゃめっちゃになっていた。本棚の上においてあった大会の記念トロフィーは落下してポッキリ折れてしまい、本棚からはほとんどの本が飛び出し、食器棚からは食器類が飛び出て割れていて、とにかく部屋中が荒れていた。それはまるでドロボウが自分たちの寝ている間にしのびこみ、盗みを働こうとしたが、なにも盗るものがなにも見つからなかったために、腹いせに手当たりしだい家中を散らかして回ったかのようなだった。（いま考えてみると、よくトイレの中にいるときに地震が起きなかったものだと思う。トイレの中で被災したら絶対、ひとりでパニックになっておかしくなっていたに違いない。）

ぼくは、あのときまだ大きな地震を体験したことがなく、体験したことがあるといっても、大きくても震度3くらいの小さな地震だった。そのため、最初はなにが起こったのか全く理解できずにいた。なにが起こったのか両親に聞いてみると『ジシン』と言っていたので、「ジシンっていうのはこんなにすごいもんなんや！あんな揺れがあったんやからもうすぐ地球が爆発してまうんかな・・・地球がなくなったらどうしよう・・・」と、地震という言葉の意味もほとんどわかっていないのに真剣に考えていた。

とにかく地球が爆発してしまうのではないかと思うほど本当に怖かった。あんなに怖いと思ったのはあれが初めてかもしれない。

確かに、大阪にいた自分の恐怖は、神戸のひとたちの恐怖にくらべるとくらべものにならないもののなの

かもしれない。しかし、7歳の自分にはあの独特のゴウ音と、地球をだれかがゆさぶっているかのような烈しい揺れは、とても怖かった。

明るくなりいつも通り学校にいくと（地震が起きた日かもしれないし、次の日かもしれないがはっきりとはおぼえていない。）グラウンドで集会があるというのでグラウンドに集合した。これはあまり関係のない話だが、友達と“震度はどれくらいまであるのか”を話していたときに、もう1人の友達が自慢げに『震度100ってあるねんで〜!』と言っていた。当時ぼくは、体験したときの恐怖も忘れて『今回の地震って震度が100あるうちの7やねんから全然たいしたことないやんなあ〜!』と笑いあっていた。いま考えてみると“震度100”自慢げに語っていた友達もだが、朝の恐怖もすっかり忘れ、その自慢をなんの疑いもなく信じた自分のアホっぷりや、常識のなさに驚かされる。

話はそれだが、全員そろくと、クラスごとに整列し、いつも通りの校長先生のありがたい？お話を聞いた。優しいしゃべり方はいつもと同じだったが、なぜか空気が重たい。話の内容も「ケガしたひとはいませんか」など地震に関する話がほとんどだった。小さかった自分たちにとっては「もう良いから早く終わってくれよ」と思ってしまうような雰囲気だった。

集会が終わりいつも通りのふざけた雰囲気で教室にむかった。教室で担任の先生がいつも通りひとりずつ名前をよんでいった後、「みんな無事か？ほんまにケガしてないか？」と聞いていった。うちのクラスのケガ人は4〜5人ほどで、落ちてきた本で頭を打った、割れたコップを踏んで足を切った、割れたお皿で指を切った・・・などケガと呼べるものかわからないとても小さなものばかりであった。先生が「みんなほんまにケガしてないやね？！全員無事でほんまに良かった・・・」と泣いていた。いつもは笑顔の先生が（ただし、掃除をさぼったりすると、ものすごく怖い顔で怒る先生）泣いていたので、ぼくは「なんで泣くんやろ」と思い、友達に話しかけると、友達も同じように思っていたらしい。ぼくたちは、そんなのん気な雰囲気だった。被災してとても辛い思いをした神戸のひとたちからしてみると、ヘラヘラしていてとても腹が立つかもしれない。言い訳だが、人間だれでも（もちろん、そうでないひといるのだろう）「自分じゃなくて良かった」と思ってしまうと思うし、まだ、小さかったのでことの重大さを理解できていなかった。

もちろんぼくは、そのころ神戸ではガレキの下で何百・何千というたくさんの人たちが死に、死を悲しみ、押しつぶされて苦しみ、必死に助けを求めているとは全く思いもしなかった。

それから先生のお話を少し聞き、昼前に帰宅した。なにかおもしろいテレビはやってないかと思い、テレビをつけてみた。テレビを見るとニュース番組（特番）がやっていて、ぼくは自分の目を疑った。

ペチャンコになって2階が1階であるかのような家屋。

隣のビルにもたれかかるようにして、いまにも倒れそうなビル。

折れ曲がってしまい、なかの金属がむきだしになって、まるでひとの指か腕から骨がとびだしているかのようにひしゃげている電柱。

橋げたが途中で陥没している高速道路。

赤色とオレンジ色の混ざったような炎。そして空高くのぼり、まち全体をつつみこんでいるかのような不気味なすす黒い煙・・・。

その光景がすべてのチャンネルで放送されていて『まち全体が死んでいる』というような状態だった。

それはあの有名な某怪獣映画で怪獣が暴れまわった後のまちであるかのようなようだった。

もちろん本当にあのバカデカイ怪獣がいて、暴れまわったわけでもないし、全部のチャンネルで怪獣映画をやっているわけがなく、この怪獣が大暴れしたかのようなグチャグチャのまちは現実で、まぎれもなく今朝自分が体験したあの大きな揺れによるものだった。

小さいながらもぼくのなかで『神戸』というところは“都会でキレイなまち”というイメージがあった。そのキレイな町が、今朝のあのジシンのせいで、炎や煙につつまれて、自分の目の前のテレビで放映されている。

『ひどい・・・これがジシンっていうやつか・・・家も、ビルも、まちも、なにもかもが、めちゃめちゃやんか・・・』

朝、自分たちがのん気にしゃべっているときにたくさんのひとたちが死んでいたのかと思うととても

ショックだったし、自分がとてつもなく情けなく思えた。そのころ「死」というものは、魂から肉体から、全てがなくなってしまうとても恐ろしいものだということくらいしか知らなかった。自分の身近な親戚や友人で亡くなったひとがいなかったのでもうまいち大切さがわからずにいたのだ。だが、昨日の揺れのせいで近くのまちが壊滅し、たくさんのひとたちが亡くなったかと思うと「命」というものがどれだけ大切なものかわかったような気がするが、あの出来事は本当にとってもショックだった。

それから「ニュース番組で死者がまた増えた」というのを聞きたくなかったので、しばらくはニュースを見なかった。

ほとんど記憶があやふやだったが、いま自分が覚えている被災したときのことはこれくらいだ。

・・・それから10年後の1月17日。

ぼくは舞子高校に通い、全国で唯一の環境防災科に所属し、『震災メモリアル行事』に参加している。（震災メモリアルは17日にやってないやんけ！！と言われるかもしれない。確かに、震災メモリアル行事は1月17日ではなく1月14日に行われたのだが、14日に行われたと書いても、なんか締まらない感じがするし、つまらないと思ったから、あえて書いた。知っていて書いているので、つつままないで。）

震災メモリアルは講演や炊き出しなどさまざまなことを行い、ほぼ予定通りの時間で終わった。炊き出しを食べてから、感想を書くために教室に戻る。震災のことを思い出し、なんとも言えない気持ちになったので、教室に戻る途中に「自分は環境防災科に所属しているが、10年前に阪神・淡路大震災を体験した経験を生かし、本当に真剣に防災のことを考えられているのか？あのとき感じた命の大切さを、ちゃんとまだ覚えているのか？」と自分で自分に問いかけてみた。

正直、震災メモリアルに参加するまで、10年前に感じたあのなんとも言えない辛い気持ちは完全に忘れてしまっていたと言っても良いからだ。

考えた結果は「経験を生かせていないし、命を軽く考えている。はっきりとした理由もなく、舞子高校の環境防災科に入学し、なんとなく授業を受け、なんとなく毎日の時間を過ごしている。」というものだった。

それからというものの、3年生になり、環境防災科の専門科目の防災に関する授業は先生の言うことを聞きもらすことのないようにしているし、『本当の防災』とはなにかと考えている。

まだまだたくさんできることはある。

まだ、高校生というまだまだ子供の自分にできる防災についての大切なことは、いま防災知識・技術を身につけ、将来どんな仕事に就いても、環境防災科で学んだ防災を広めるためができるような知識や技術の、土台や基礎のようなものを身につけることだと思う。

そしてこれだけは言っておきたいのだが、「地震にあって恐かった」で終わってしまうのではなく、「確かに地震は怖い。怖いからこそどうやって防げば良いのだろうか」というような気持ちで常にいたいし、その気持ちを少しでも多くのひと達に伝えたい。

震災から今まで

神戸市垂水区
山口 翔吾

小学校1年生の時のことなんて、ただ毎日楽しく過ごしていただけだったからほとんど記憶にない。あの日以外は。

1月16日。いつものように1日中楽しく遊んで過ごし、遊びつかれたのか、9時にはもう寝ていたらしい。後で聞くと、この日地震があったらしいがまったく記憶にない。次の日の1月17日午前5時46分、一瞬体をゆすられるような感覚におそわれた。そのとき隣で寝ていた母が僕の体をゆすったのかと思い横を見ようとした瞬間から、想像をしたこともないような悪夢が待っていた。グラ！！グラ！！グラ！！ ガタ！！ガタ！！ガタ！！ ものすごい揺れが僕の家を襲った。しかし、揺れが大きすぎて何が起きているのか僕はわからず、ただ黙って仰向けのまま今にも割れそうな天井を見つめていた。それからすぐ、母が僕の上に覆いかぶさってきた。このときに初めて、何か恐ろしいことが起きているのだとわかった。ただ、その『恐ろしいこと』が地震だとはわからなかった。それまでの7年間、大きな地震なんて味わったことがなかったので、飛行機が近くで墜落したり、大きな爆発が近くで起きたりしたのじゃないかと思っていた。そういう、ただただ恐怖だけで何が起きているのかわからない時間がどれくらいあったのかは覚えていない。しかし後で、40秒くらいゆれ続けていたということ聞いて、自分はよく40秒もあの恐怖から耐え続けたなと思った。

揺れがおさまった後、僕たち一家四人（母、父、兄、僕）はとりあえず外にしようとした。しかし、その当時の我が家は「防災」とは程遠い家だったので、冷蔵庫やダンボールなど、いろんなものが床に転がっていた。さらに近くに懐中電灯がなかったのでライターで部屋を照らしながら玄関に向かった。そのときは、足元に何が転がっているかが暗くてよく見えてなかったので、「もし足に何か刺さったらどうしよう。」という不安を抱いていたが、幸い何事もなく無事に外に出られた。しかし、父は地震のときに机の上においてあった電動鉛筆削りがすねに当たったらしく血がにじんで痛そうだった。

それから家のすぐ近くにある広場に向かった。広場に向かう途中、僕たちは何も話さなかった。僕たち一家全員、外がどうなっているのかを確認するので精一杯だったからだ。そんなとき、なんとなく空を見上げてみた。そこには、僕たちの心と同じような不安げな空が広がっていて、そのせいでぼくはさらに不安になった。空を見ないようにして歩いて行った広場にはたくさんの人が集まっていて、ラジオを聞いた、家族の安否について話し合ったりしていた。そのとき、広場の真ん中に大きなひびがはいっていることや、いろんな人の話を聞いて初めて地震だとわかった。そんな中、一家族だけ集団から離れている人たちを見つけた。その家族の人たちのリュックサックは、事前に用意していたと思われる食料でいっぱいだった。しかし、その家族はもうその食料を自慢げに食べていた。だから、子供心に、「今食べて、あとで食料なくなったらどうすんねん！！ほかの人に見せびらかすな！！」と思ったのを覚えている。今思えば、僕は地震が起こってからは何十分も一言も話していなかった。その分、ほかの人の話し声がしっかり聞こえた。

広場には5分か10分くらいしかいなかった。なぜなら、広場から歩いて5分くらいの距離にある祖父の家が心配だったからだ。祖父の家は祖父、祖母、叔父の3人で住んでいた。割と新しいマンションに住んでいたし、叔父は185センチぐらいあって力も強いから多分安心だろうとおもいながら歩いていた。祖父の家に行く途中にあるコンビニにはたくさんの人だかりができていた。多分、コンビニにある食料などが目当てだったのだろう。そこまではよかったのだが、コンビニに群がっている人たちは、我さきにと、ほかの人を押しつけて中に入ろうとしていた。そのとき、僕は地震によって平和で、静かな世界が壊されたような気がして悲しくてしかたがなかった。そんな姿を見たせいか、僕は家族以外の人が怖くなって、できるだけ人を避けるように歩いた記憶がある。それから、しばらくして祖父の家に着くと、僕は一瞬声を失った。なぜなら、地震直後の僕の家は、暗くてどうなっているかわからなくて家の中の被害を知らなくて、そのとき初めて地震の被害を受けた家の中を見たからだ。

そこにはガラクタの世界が広がっていた。食器棚から落ちた皿やコップ、積み重ねていたもう使わないものばかり入った箱、叔父が大事にしていたゴルフバッグなどたくさんのものが散乱していた。しかし、

その当時はまだ小学校1年生だった僕にはどうすることもできず、ただただ余震の恐怖と闘うことしかできなかった。そんな恐怖の中で、少しでも怖がらないように、ずっとそばにいてくれた母や、倒れた重い荷物を元の位置に戻している父を見て、今まで思いもしなかった両親の偉大さを知った気がする。それから余震のことしか頭になく、何をしたのか、何を食べたか等はまったく覚えていない。結局、その日は祖父の家に一家全員が泊まった。そのときも余震は続いていたのかもしれないが、そんな小さな余震より、父のいびきが気になってなかなか眠れなかった。

次の日、祖父の家はだいぶ片付いていたので、父はメチャクチャになったままの家に、片づけをするためにいったん帰った。そのころ僕は暇だったので、当時僕の通っていた小学校に、叔父と水をもらいに行った。水は復旧が遅かったので不足していて、トイレは何回かに1回しか流さないくらいだった。小学校にはほかにも何人かの人があったが、そんなにたくさんはいなかったと思う。割と簡単に水をもらうことはできたのだが、小学校1年生の僕にはとても重たくて、結局叔父に持ってもらって、また無力な自分に気づかされて悔しかった。

地震から何日たったあとか覚えてないが、僕たち一家4人と祖父たち（祖父、祖母、叔父）で地震の被害をあまり受けていない親戚の家に行って、お風呂に入れてもらうことになった。大勢の人数が一度に詰め掛けたので、お風呂の番はなかなかまわってこなかった。だからその家のおじさんが「となりのトトロ」のビデオを観させてくれた。地震から何日間かはあまり楽しいことはなかったから、とても面白かった。しかし、テレビでやった「となりのトトロ」を録画したものだったから、CMの部分も録画されていたし、さらにおじさんは早送りが下手だったのでそこがちょっと不満だった。

兵庫県南部地震から何日ぐらいたったあとか覚えてないが、学校が再開することになった。しかし、1年生の校舎の床が一部壊れてしまっていたので、僕たち（たぶん1年生だけだったと思う）は福田中学校に勉強しに行くことになった。僕が当時通っていた上高丸小学校（現在は千鳥が丘小学校）から福田中学校まで集団登校するのだが、その道の途中、地震後初めて友達と話したので、どんな話も面白く感じてめちゃくちゃ笑った覚えがある。先生に何度も注意されながら福田中学校に行った。

福田中学校は、やはり中学校というだけあって当時小学校1年生の僕には、いすや机が大きすぎて床に足がつかなかったり、グラウンドの隅にある鉄棒にどんなにがんばってジャンプしても触ることすらできなかったりした覚えがある。その日は、休み時間はもちろんだが授業時間も今までの人生の中で一番楽しかった。おもしろすぎて逆に何をして何を話したかまったく覚えていない。その日はあっという間に授業が終わって、また集団下校で祖父の家に帰った。

祖父の家に帰ってからは、ずっとゲームをして遊んで、晩になってからやっと宿題をしていた。このころにはもう地震・震災の怖さを忘れてしまっていて、ただただ、今までとは違う毎日を楽しんでいた。今考えると、いくら小学1年生だからといって、昔の僕は本当に馬鹿な人間だったと思う。何日間も同じような毎日を送っていた。

福田中学校に集団登校している間に、グラウンドにプレハブ校舎が作られた。2年生になった僕たちは3年生になるまでこのプレハブ校舎で勉強することになった。プレハブ校舎の壁はとても脆そうで思いっきりぶつかれば壊せそうなくらいだったので少し心配だった。しかし、クーラーが備え付けられていたので、そこは嬉しかった。そんなプレハブ校舎で1年間勉強したのだが、日がたつにつれて僕は、このプレハブ校舎は地震のせいで作らざるを得なくなったものだということは忘れてしまった。

それから何年もの間、あれだけ怖い思いをした地震だったのに、1月17日だけしか震災のことを思い出さないくらいまでに僕の頭からは離れてしまっていた。しかし、舞子高校に環境防災科というものができると聞いてからはそんなことはなくなった。

一番初めに環境防災科に入ろうと思ったきっかけは、正直言うと家から近いし、机に向かって勉強する時間が少なそうだったからだ。でも、阪神・淡路大震災などについて勉強するうちに、液状化現象とはどういうところで起こってどんな被害があるのか、みたいに震災当時小学1年生だった僕が知らなかったことをたくさん知れて、災害や防災などについてどんどん興味がわいていった。そしていつの間にか僕は、防災のこと、もっとたくさんの災害のことが知りたいと思うようになり、少しずつではあるけど防災や災害のことについて勉強し始めた。環境防災科という名前だけあって、やっぱり防災のスペシャリストにな

りたいと思っている人ばかりが入るんだと思っていたので、少しでも早く、少しでも多くの知識を入れたいといけなかった。そこで僕がまずしたことは、防災に関する本を読んだりするのではなく、新聞を読むことだった。毎日、朝起きたらまず新聞に防災や災害に関する記事がないか探して、あればすぐ切り取っていつでも読めるようにし、もしなくても、それ以外の記事を読んで文章力をつける訓練と、早く読む訓練をした。これをし始めた最初のほうは、環境防災科に入るために「やらなければいけないこと」という感じだったのに、毎日これが続けていると次第に習慣になって、さらには趣味に変わっていった。しかし、このころ（中学校3年くらい）は防災や災害に関することにしか興味がなくなっていた僕は、一番肝心な学校の勉強を怠っていた。でも、防災や災害に関する知識がほかの人より優れていれば大丈夫だろうという甘い考えを持っていたので、それから勉強しない日は続いていた。

3者面談の日。最後の3者面談で進路を決めなければならなかった。僕はもう環境防災科に入ろうと決めていたので迷いはなかったから、はっきりと先生に、

「舞子高校の環境防災科に入りたいと思っています。」

と言った。すると、僕が予想してなかった事態が起きた。僕の決意に先生は、

「う〜ん、ちょっと厳しいかもしれん。もし落ちて、すぐ一般入試に切り替えられるんやったら受けてもいいけど・・・。」

この言葉に一瞬僕は気を失いそうになった。まさか、自分が行きたい舞子高校環境防災科を、落ちること前提で受験しないといけなかったとは思っていなかったからだ。でも、舞子高校（環境防災科）以外に入りたい学校はなかったので、なんと言われようと受験することにした。この意気込みのおかげか、入試当日は特に緊張することもなくしっかりできて、その結果なんとか合格することができた。

高校に入ってから、防災の専門家や、大学の教授、さらには自衛隊の方などたくさんのいろんな分野で活躍している方々の話を聞くことができた。そして、いろんな角度から見た防災を2年余り学んできた。そのおかげで、高校に入る前よりはだいぶ知識が増えたと思うし、発表することも多いおかげで自分の意見もはっきりいえるようになったと思う。

震災から10年。今考えてみるとこの10年間で本当にしっかりと災害に向き合えたのはここ2、3年くらいだと思う。阪神・淡路大震災が起こってからは、これ以上かこれに匹敵するほどの災害は経験しなかったからよかったが、もし、僕が災害について勉強しようと思う前に阪神・淡路大震災クラスの災害が起こっていたらおそらく今の僕よりは役に立たないと思う。ということは、災害に関する知識が多ければ、知識が少ないよりは被害が少なくなると思う。東南海・南海地震がそんなに遠くない未来に起こるといわれている今のうちに、少しでも多くの人々が今よりたくさんの防災に関する知識を学んで、どんな災害が起きてもビクともしない強い社会になってほしいと思う。

「震災を忘れない」

神戸市須磨区
吉田 ひとみ

【私の震災体験】

今から10年前の1月17日午前5時47分、阪神・淡路大震災が起こった。いつものように自分の部屋で寝ていた私は気がついたら母の腕の中にいた。なぜ、母が自分の部屋にいるのかわからないまま、私は母の腕の中で小さくなっていた。後から考えると、母と妹と弟は同じ部屋だったので1人で寝ていた私を心配して母と父が来てくれたのだと思う。母の腕の中で、私の頭の上を母と父の「懐中電灯！懐中電灯！」という声のとびかっていた。そして、父は「懐中電灯とってくるから、そこでおって！」と叫びながら部屋から出て行った。その時、私はなぜか父がどこか遠くに行ってしまうように見え、泣きそうになった。でも、私は恐怖から声を出すことも父を引き止めるために動くこともできなかった。今ではおかしい話だけれど、当時地震を知らなかった私には、何か未知のもの（宇宙人や怪獣）が私たちの家族を襲ってきているのではないかと思って疑わなかった。何か、目には見えない恐ろしいものが迫ってきているように感じた。地震が起こってから自分の行動はあまり覚えていないが、体を小さく丸め、恐怖から首が痛くなるほどひたすら下を向いていたことだけは覚えている。何度か揺れるたび、母の「大丈夫だから。大丈夫だから。」という言葉が聞こえたが不安でいっぱいだった。母も私たちをぐっと守るように抱え込みながら、父がなかなか戻ってこないのが不安になっているのがわかった。すると、また揺れがきた。私はこの部屋だけ、どこか違う異世界に飛ばされてしまったのではないかと思った。そんなことを思っていると、父が懐中電灯を持って無事に戻ってきた。私は、懐中電灯が家にあるかも知らなかったため父が懐中電灯を持っていた時は「本当にあったのか。」と驚いた。父が懐中電灯を点けた時、どこか知らない世界にとばされていた自分が一気に地球上に戻った気がしてとても心が落ちついた。

夜が明け、揺れもおさまったので他の部屋や近所の様子を確認しに行った。自分の部屋の中を見ると、何も変化はなくいつもの部屋に戻っていた。家中を確認しても食器が2、3枚割れた程度だった。私は、さっきの出来事は夢だったのではないかと思った。停電をしていたがすぐに電気は復旧したため、テレビをつけると夢ではないことを思い知らせるような衝撃的な現実を目の当たりにした。テレビでは、高層ビルのあちこちから煙が出ていて、駅の看板が斜めに傾いて地面の上に転がっていた。見慣れた風景が崩れていくのがわかった。後から、その駅は父が毎朝通勤している駅と知りぞっとした。どんなにチャンネルを変えても、建物がぐちゃぐちゃになっている映像ばかりだったので気持ちが悪くなった。

電気が復旧したため、祖父の家から電話があった。テレビで地震のことを知って、心配して電話を掛けてきてくれたようだ。私たちがみんな無事だと伝えたら「よかった。よかった。」と何度も繰り返し言っていた。私も、祖父と祖母の声を聞いて無事だとわかった時はほっとした。

家では、被害はほとんどなかったものの水道は止まっていた。始めは、お風呂の水でトイレや手を洗ったりしていた。しかし、それだけで足りるはずもなく、すぐに使い切ってしまったので水を調達しに行った。私の家の近くには山があり、そこから湧き水が出ていることは地域の人ほとんどが知っていた。まず、母と私とがポリタンクを持って山へ向かった。行く途中、多くの人に出会ったがみんな目的は一緒だった。山に着くと、ありの行列よりはるかに長い行列が並んでいたように思える。その最後尾につきながら、私はこんな多くの人がいるのに水は足りるのだろうかと思っていた。なぜなら、湧き水といってもホースが付いていてそこからチョロチョロとしか出ないものだったからだ。30分ほど経ち、やっと湧き水場がかすかに見えるぐらいのところまで進んだ。しかし、やはり水は少ししか出ていなかった。私は母に、「あれだけしか出てないけど水、大丈夫なん？」と聞いた。すると母は、「あれじゃないよ。あそこに蛇口があるでしょ。」と言った。私は、驚いた。以前行ったときにはなかった（気がつかなかった）蛇口がついており、そこから大量の水が出ていた。その蛇口から、タンクいっぱいに入水し、また来た道を戻った。家に着くまでに、何回休憩したのだろうか。水は、私が思っていた以上に重く、歩けば歩くほど重くなっていくような気さえた。水を調達したものの、いつになったら水道が出るのかわからなかった。そのため、次の日に兵庫県の美方郡にある祖父の家に避難した。まず、近くのガソリンスタンドがやっていなかったため開いているところを探しガソリンを入れた。そして、いつもなら車で3時間の道のりを、高速道路も寸断していた部分もあったため国道の通れる道を通っていった。そのため、いつもの倍の6時間もかけて、やっと祖父の家に着いた。祖父の家でも、揺れは感じた。しかし、水道もガスにも被害はなく生活できた。私は、学校が休めておばあちゃんの所にもこれとてとてもうれしかった。しかし、日がたつにつれて学校のみんなに会えなくて寂しく思うようになった。

祖父の家に来てから1週間が経った頃、小学校が開校になったということを聞き私たちは神戸に戻った。久しぶりに小学校に行くと、みんな元気そうにしゃべったり遊んだりしていた。友達の顔をみたら、とてもうれしくなった。会えなかった期間は少しだったけれど、とても懐かしく感じた。震災前までは、学校に行くのが当たり前で、知っている友達が当たり前のようについてあいさつして一緒に勉強してといった平凡なことがとても苦痛だった。しかし、震災で学校に来ることができなくなって友達と会えなくなったことで初めて自分から「早く学校に行きたい。みんなと会って遊びたい。」と思った。嫌いだった学校が少しだけ好きになれた気がする。

【仮設住宅】

私の家の周りは、お店もなく住宅ばかりの集合住宅地である。今では、小学校や中学校のクラスが年々減るぐらい子供が少なくなりつつある。しかし、震災当時は子供が多く、小学校のクラスは8クラスあったくらいだ。また、1人暮らしのお年寄りが住んでいるところは少なく、家族で住んでいるところがほとんどであった。子供が中心の町と言える。公園といっても、空き地や小さい公園から大きい公園までさまざまであったが、子供が多いためか公園が丁目ごとに最低2つはあるぐらい多かった。一番広い公園で、舞子高校のグラウンドと同じほどの大きさであった。そこでは、サッカーや野球、バドミントンなど休日になると家族や友達同士で遊べる場であった。夏には、夜店が20軒以上出されて、地域の夏祭りが年に一度そこで行われていた。私も、毎年お正月になると決まって父とその公園へ行き風揚げをしていたのを覚えている。

しかし、震災が起ってからそのようなことができなくなった。仮設住宅が建てられたからだ。始めは、公園に木の板を積んだトラックが次々に入ってきた。そして、公園の周りにオレンジの柵がつけられた。そんな中、学校が始まった。小学校の帰りその公園の横を通るので友達同士で「何ができるのかな？」と話していた。ある日、母とその公園の横を通った時「何ができるの？」と聞いたら「仮設住宅ができるんだよ。」と言われた。当時小学1年生だった私は、仮設住宅が何かは全くわからなかったが当分あの公園で遊べないことはわかった。でも、仮設住宅が壊されるまで6、7年間かかるとわかった時、本当にショックだった。私が、中学になったぐらいには仮設がなくなって公園で遊べるようになっていくなると言われた。今、例えばそんなに長い月日だったとは思わない。しかし、当時は中学生になる自分も思い浮かべられなかったもので、とても遠いとも思ったが、それ以上に永遠にもうあの公園では遊べないのではないのだろうかという気持ちが強かった。工事が本格的に始まってくると、トラックがもっと多くなってきて、工事の音が家にいても聞こえるぐらいうるさくなった。そんな中、親しみのある公園がなくなっていくのは、友達が引越してしまうような寂しさと悲しさが募った。完成した時、広がった公園に一面の四角い白い家が広がっていた。工事の人以外、住民の人が出入りしているのを見たことがなかったので、その白い家に人が住んでいると信じられなかった。それに、町の中にその場だけ違った世界のように、小さい頃から知っている公園が全く違うもののようで少し怖いと思った。

【父の話】

起きようとしたら、ぐらぐらと地震がきた。窓ガラスがビリビリと割れるほどの揺れだった。あまり時間がたたずに、始めの揺れと同じような2回目の地震がきた。揺れがおさまるまで、ずっと布団の中にいた。揺れがおさまると家族の安否を確認してから、外に出たが全く変化はなかった。そんなことをしていると、出勤時間になったので着替えて会社に間に合うように駅に行った。しかし、電車は動いていなかった。たので家に帰った。被害状況がわからなかった。テレビをつけようとしたが、やはりつかなかった。情報がなく全く何も分からない状態だった。蛇口をひねると水道も止まっていた。水道はそれからだいぶ止まっていたが、電気はその日のうちに復旧した。テレビをつけたら、長田や板宿の町から煙が出ていて燃えていた。外に出てみると、物の焼けた匂いが漂い臭かった。遠くのほうを見てみると、煙が上がり、炎もあちこちであがっているのがわかった。その時、初めてすごい被害だとわかった。

次の日、妻の友人にあらかじめ水道が復旧したら連絡してと頼んでおいて祖母の家に避難した。1週間ぐらい経ち、水道が復旧したので神戸に戻った。しかし、まだ電車は動いていなかった。そのため、大阪の兄の家から会社に出勤していた。月曜日の出勤に間に合うように、日曜日の午後から大阪へ行き月曜日から金曜日までは兄の家から会社に通った。そして、金曜日の会社が終わってから神戸に帰って来て土日を過ごし、また日曜日には大阪に行くといった生活をしていた。これが1ヶ月間続いた。地下鉄がやっと動くようになり、家から通えるようになった。しかし、JRや阪急電鉄がところどころ止まっていたため、朝早くおきて道のりを変え乗りついで通っていた。会社の通勤が一番苦労した。

【近所の人の話】

何が起こったかわからないまま目を覚ました。目を開けると、頭のすぐ側にテレビが転がっていた。今では笑い話だが、テレビが転がっているのはわかってはいたけれど、それでも私は何が起こったか確かめるためにテレビをつけようとしたがやはりつかなかった。

私の家の近くには寝たきりの祖母が住んでいたため、毎晩主人と交代で祖母の家に泊まりに行っていた。その日は、たまたま主人が祖母の家に行っていた。いつもは2人で寝ていた場所に1人だったから部屋の中心に寝ていた。そのため、ケガ1つせずすんだ。しかし、もしあの日、同じ部屋に2人で寝ていたら主人はタンス、私はテレビの下敷きになっていたと思う。そう思うとぞっとする。

周りを見たら、街灯も停電していて周りが真っ暗であった。何が起こったかわからなかったが、とりあえず布団を頭の上にかぶった。もう一度揺れがきて、そこでやっと地震だと気がついた。地震だと分かった瞬間、家が潰れると思った。家が潰れたら、布団をかぶっていたら窒息死すると思ったので、枕で空間をつくって息をしていた。後から聞いた話では、後2秒揺れていたなら私の家は崩れていたそう。それに、たまたま2年前大工さんに「基礎がなっていない。補強しないと危ない。」と言われ、200万円で基礎を補強していた。だから、家が半壊ですんだのかもしれない。

水、電気、ガスなどのライフラインはすぐに止まった。しかし、電気は1日でついた。たまたま、おばあちゃんの家がほとんど電気だったので助かった。冬だったから、石油ストーブが使いたかったけれど揺れがいつくるかわからないので床暖房で暖めていた。電気ばかり使うから、ヒューズがすぐにとんで困った。

家の被害状況は、柱と壁の間から、外が見えるぐらいのものであった。2階は大きく傾いていた。家の中を歩いたら、床がギシギシと音が鳴って揺れていた。ガラスがそこら中にあったのでずっと土足でいた。家の下には、大きな溝ができていて驚いた。それは、家の真下に2つの断層が通っていたことにより被害が大きくなったと思われる。家の前には小学校が建っていたが、被害は少なかったらしい。そのため、小学校は避難所としてすぐさま人々が行列になって並んでいた。しかし、管理していた人が近くに住んでいなかったため、なかなか開かなくて寒い中震えながらも多くの人はそれでも待っていた。家も潰れ、行くあてのない人たちはもうそこしか行く場所がなかったのだろう。やっと、自治体の管理者が来て開いたと思ったら、すぐに毛布や布団で体育館が埋め尽くされた。私は家にいたが、家ではテレビも電話も使えないため、情報が全く入らなかった。そのため情報を得るために3日間ほど体育館で寝泊りをした。その時、祖母の家の電気釜でご飯を炊き、避難所の学校の人たちに持って行った。そうすると、本当にみんな目に涙を浮かべて感謝された。避難所では、パンや水が配られていたらしいが温かいものは一切なかったようだ。また、栄養バランスも損なわれていたため、避難所では、風邪を引いている人やぜん息の人も大勢いた。その人たちは夜も咳をしていた。もちろん、しきりもないので夜は周りの音がすべて聞こえて、とても眠れる状態ではなかった。結局、3日間学校にいても情報は得られなかった。私は、3日間だけだったが避難所生活はとても疲れた。

祖母の家に帰る途中に井戸があった。何年も使われていないような井戸であった。井戸水があることを近所のひとに伝えたら、すぐに行列をつくって並んでいた。普段なら水を検査して伝染病の危険性などないかを調べないと井戸水は使ってはいけなかったが、水が止まっていてそれどころではなかった。近所の人たちも井戸水がどんだけ汚れていても全く気にせずいたように思える。あの時は、水が汚い、汚くないなど言っている状況じゃなかったため、みんなとりあえず水を確保するのに必死であった。

その井戸水もつきてきた頃、四国から水が届いた。砂漠の中で水がなくなった時もこんな気持ちになるのかと思うぐらい水が欲しかったので、神の水に思えた。今思っても、あんなにも水を必要としたのはあの時が初めてだったと思う。四国からのタンク車を筆頭に次々と各地から水が運ばれてきた。学校にもタンク車が到着したので、そこでもまた行列になって水をもらいに行った。みんな、家のあらゆるお鍋やバケツなどをたくさん持ち、ほこりまみれになり肌が真っ黒になりながら並んでいた。私も水をもらうために1日中並んだ。それから、近くの銭湯にもタンク車が来て水を貯めてくれた。そして、まきで沸かしてみんなで順番に入った。2週間ぶりのお風呂だったのでとても気持ちよかった。しかし、時間が決められていたし、お湯の量も使いすぎではいけなかったため、まだまだいつもの生活のようにはいかなかった。本当にどこに行っても並ばなくてはいけないし、プライバシーがない。それが日に日に疲れと、苛立ちに変わっていった。

少したつと、水道も復旧した。水道が復旧しても、いいことばかりではなく大変なことも多かった。例えば、トイレを流しても、マンホールに続いていなかったため溜まったままの状態、とても臭かった。また、地震で水道管が破裂していたため、あちこちで水が噴水のように漏れ出していた。そのため、家のいろんなところを修理しなくてはならなかった。

そんな中、電話が通じなくて情報を得るのに本当に困った。お世話になっていた人が家に来て、電話を借りに来たけどやっぱり通じなかった。後から聞くと、公衆電話は通じたみたいだ。その人にお茶を出した。すると、「避難所のおばあちゃんにあげてもいいかな？」と聞いてから、お茶をこぼさないように湯のみごと持って帰った。今考えるとコップ1杯のお茶なんか何でもないけれど、あの時は本当にその1杯のお茶がどんだけ貴重だったかがわかる。

救援物資の中には、古着や鉛筆などさまざまな物があった。しかし、本当に役に立ったのはタオルぐらいしかなく、あの時はとにかく水が一番必要だった。それでも、物貰いをしながら町中歩き回った。今ではゴミとしかならないものでも貰える物はできるだけすべてもらってまわった。疲れがピークを越え、震災からだいぶ経ち、少し落ち着いてきたところに自衛隊がやっと来た。あの時は、自衛隊はあてにしていけないと思った。

【震災を通して】

水道、ガスが出なかったら何もできないことが分かった。私は、神戸に地震が来るとしてもいなかったから備えなどなにもしていなかった。今では、いざという時のために寝る前に必ずペットボトル6本分を用意して寝ている。1日でも早く忘れたいと今でも思う。でもそれは、今が幸せだから思えることなのだった。

【これから】

阪神・淡路大震災から10年経った今、私は災害や防災のことを学んでいる。正直「環境防災科」に入り、阪神・淡路大震災のことを学んでいなければ震災のことは頭の片隅に忘れていたであろうと思う。震災時に強く印象を受けたことでも、あの頃のことには思い出せない。親に震災のときの様子を尋ねても昔のことだから思い出せないという言葉が出てくる。妹と弟（当時4歳と3歳）に聞くと、全く覚えていないどころか知らないと言っている。震災を忘れかけていっているのは、私たちだけではないと思う。確実に、震災での記憶が風化されつつある。震災を忘れるということは、震災で失われた尊い命やさまざまなものを無駄にすることになる。そんなことは、決してしてはいけない。そのためには、1人でも多くの人に震災体験などを伝承することが大切である。

遠くの地震

加古川市野口町
十倉 有希

■ 地震が起こった時刻

1995年1月17日午前5時46分52秒

■ 地震が起こった場所

明石海峡 北緯34度36分、東経135度03分、深さ14km

■ 地震の規模

マグニチュード 7.2

■ 地震のゆれの大きさ

淡路、神戸、芦屋、西宮、宝塚などで、最大震度7

■ 地震の被害死者 6433人

※約90%が家屋の倒壊による圧死、窒息死

- ・けが人 約35,000人
- ・全壊家屋 約10万棟 半壊家屋 約10万棟
- ・火災の発生 182件
- ・避難者数最大（1月23日）、32万人
- ・多くの人が小中学校の避難所で生活
- ・地盤の液状化 大阪湾にそった埋立地、海岸平野部で多数発生
- ・建物以外の大きな被害 新幹線橋脚の落下 8箇所

JR、私鉄などの高架の落下 12箇所

高速道路の倒壊・落下 5箇所

水道 地震直後の断水戸数 95万4000戸

ガス 地震直後の供給停止 86万戸

電気 地震直後に停電になった戸数 260万戸、

参考 『兵庫県南部地震データ』

1995年1月17日、私はこの日被災地にはいない。当時小学校1年生だった私は加古川市の野口町というところに住んでいた。父と母と弟と4人で暮らしていた。家の近くは小さな工業地帯で中小企業の工場がぼつぼつとあり、田んぼや畑が家の近くにもあるのどこかなところだった。それから桜の名所にもなっている日岡山が近くにあった。花見の季節には人がにぎわっていた。そこには公園もあって、日曜日によく遊びにいった。

地震が起こる前日、成人の日と日曜日が重なっていて連休だったので、いつものように寒い中近所の友達と遊んでいた。そして夕方になって、家に帰って夕飯をすませて、お風呂に入って、10時頃に寝た。いつもの休日と変わらない1日を過ごした。

次の日の早朝兵庫県南部地震が起こった。地震がおこる直前に近くに寝ていたまだ赤ちゃんの弟が大声で泣き出した。泣き声で目が覚めた。その次の瞬間ゴォという音と同時に天井に吊ってある電気が大きく揺れて、すごい揺れを感じた。とてもびっくりして怖かった。何が起きているのかわからなかった。父が地震やぁ！！と言ったときにはじめて地震とわかった。朝の緊急ニュースを見てみると加古川は震度4だった。その程度の震度だったらそれほど揺れてないはずなのだけど、とても大きな揺れを感じた。きっと家が4階だったことと、地震にあったのが初めてだったのが原因だろう。地震が起こって目が覚めてしまったが、学校に行くためにはまだ起きるのは早すぎるのもう一度寝た。

7時ごろ起きた。その日の朝地震というわけのわからない恐怖から、体調がすぐれず、朝学校に行く前に吐いてしまった。けれども少し遅れて、いつもと同じように学校に行った。学校に行くとみんな元気だった。私はとても安心した。学校内では早朝にあった地震の話でもちきりだった。その話は、とても怖かったという子がほとんどだった。地震は怖かったくらいで、大変な被害はなかった。被害といったら古い住宅や学校に少しヒビが入っていたくらいだった。学校が昼まで終わり家に帰った。給食があったはずなのだけれど、給食のおにぎりは被災地に救援物資として送られた。だからこの日給食はなかった。

帰宅後いつものようにテレビを見ようと思ってつてみると、そこには衝撃的な映像が映っていた。神戸の街が焼け野原になっている……。家がぐちゃぐちゃになっている……。

高いビルが倒れている……。高速道路が曲がってしまっていて、車が傾いている……。どうなってしまったんだろう。すさまじい光景だった。どのテレビのチャンネルを見ても同じ映像ばかり映っていた。本当に怖かった。こんなことが、同じ兵庫県のどこかでおこっているのはとても信じられなかった。それから3日間ずっとテレビは阪神・淡路大震災の関連のものばかりだった。そして夕方になり母と弟と買い物に行った。いつもより店に陳列されている品物がすくなかった。異様な感じだった。地震の影響からトラックで搬入される東方面から届く商品が届いていなかったからだ。けれど、商品を買占めるような人や、パニックはおこっていなかった。とりあえず今日の夕飯の材料は買えたのでよかった。買い物の帰りに下の階に住んでいたおばちゃんと会った。そのおばちゃんはスーパーに品物が少なかったのも、不満を言っていた。家に帰って夕飯の準備を母はしていた。私はいつもならテレビをみてボーっとして夕飯をまっているけど、震災のニュースばかりでうんざり。することがなくとっても暇だった。だから仕方なく弟と遊んでいた。そして父が帰ってきてからみんなでそろって食事をした。私の父は建築関係の仕事をしていてため地震が起こった数日後、明石や垂水被災地に毎日行っていた。あとから聞くと建物の被害が少ない家などの補修に行っていたらしい。中央区や長田区に比べると被害は少ないほうだったが、父のことが心配だった。父の仕事にまた地震がおこったらどうしようと思っていた。

地震発生から数日後、小学校では、救援物資を毎日被災地に送る活動をしていた。物資は毛布や、衣類、缶詰などの食料などで、全校生徒が自ら進んで持ってきていた。その活動は1週間ぐらい続けられた。朝会やお昼の放送児童会の呼びかけのおかげで、救援物資を集めるダンボール箱は毎日いっぱいになっていて、あふれていた。私はそれを見て、早く届いたらいいのになぁと思っていた。私は家にあった缶詰やお菓子を持っていた。毛布とかを保護者が学校まで持ってきていた。今思うと、人間は助け合って生きているんだと実感する。知らない人でも困っている人がいたらたすける。これは当たり前の道徳だ。でも、改めて感じることもある。いざとなったら、助け合えるということは、大切なことなんだと。

東灘の女の子で地震の被害にあった子が、転校してきた。その子はすごいおとなしい子であまり笑わないという印象だった。けれど、みんなで仲良くしていくうちによく笑うようになった。休み時間は外で大縄やゴム飛びをして遊んだり、あやとりをしたり楽しく遊んだ。すっかりクラスの一員として馴染んできた1ヶ月後、神戸の学校が始まり、元の学校に戻った。クラスの子のみんなの提案でお別れ会をした。その女の子が神戸に戻ってしまうのがいやだった。

震災から10年たった。私は環境防災科でこの10年という区切りの年を迎えられてよかったと思う。神戸の街は以前のような華やかな町並みで、震災当時の面影は何もない。神戸の人たちは地震で失った命や震災から得た教訓を忘れないように、1月17日に慰霊の催しを行っている。これからも毎年この日を忘れないための催しを行ってほしい。もし私が他の加古川の学校に通っていたら、10年めの1月17日を何の意識もなくすごしていると思う。神戸の街が全国に阪神・淡路大震災の教訓を発信していった、こんな悲劇を2度と繰り返さないでほしい、と私は強く願う。

阪神・淡路大震災

神戸市東灘区
魯山 香織

平成7年1月17日、5時46分、兵庫県南部に震度6、場所によっては震度7の強い地震が発生した。この地域としては、昭和27年に記録した震度4をはるかに上回る大きなものであった。

震源地 淡路島北部 北緯34度36分 東経135度02分

震源地の深さ 16 km

各地の震度 6（神戸・洲本）5（豊岡）4（姫路）など

マグニチュード 7.3

地震の特徴

人口350万人余が密集し、我が国の経済活動の中枢を担う淡路北部から神戸市及び阪神地域の直下で発生した内陸・都市直下型地震であった。

深さ16 kmという比較的浅い部分で発生し、断層が横にずれることにより起こったもので、大きなエネルギーが一挙に解放されるタイプであった。

被害の特徴

大都市を直撃した大規模地震のため、電気、水道、ガスなど被害が広範囲となるとともに、鉄道、新幹線、高速道路、新交通システム、都市間交通・地下鉄が損壊し、生活必需基盤（ライフライン）に壊滅的な打撃を与えた。

古い木造住宅の密集した地域において、地震による大規模な倒壊、火災が発生し、特に、神戸市兵庫区、長田区などでは大火災が多発した。

神戸・阪神地域という人口密集地で発生したため、多数の住民が避難所での生活を余儀なくされた。

淡路島北部では、今回の地震によって新たに生じたと思われる断層の露頭が認められた。淡路島から神戸、西宮にかけては無数の活断層が走っており、このうち、野島断層（淡路島北部）に新たな断層のずれが生じたことが確認された。

気象庁はこの地震を、「平成7年（1995年）兵庫県南部地震」と命名した。

さらに政府は、今回の災害の規模が特に大きいことに加え、今後の復旧・復興施策を推進する上で統一的な名称が必要となると考えられたことから、災害名を「阪神・淡路大震災」と呼称することを平成7年2月14日に閣議口頭了解した。

この災害による人的被害は、死者6,433名、行方不明者3名、負傷者43,792名という戦後最悪の極めて深刻な被害をもたらした（消防庁調べ、平成14年12月26日現在。）。

施設関係等被害の概要について、住家については、全壊が約10万5,000棟、半壊が約14万4,000棟にものぼった。

交通関係については、港湾関係で埠頭の沈下等、鉄道関係で山陽新幹線の高架橋等の倒壊・落橋による不通を含むJR西日本等合計13社において不通、道路関係で地震発生直後、高速自動車国道、阪神高速道路等の27路線36区間について通行止めになるなどの被害が発生した。

ライフライン関係では、水道で約123万戸の断水、下水道で8処理場の処理能力に影響が生じ、工業用水道で最大時で289社の受水企業の断水、地震直後の約260万戸の停電、都市ガスは大阪ガス(株)管内で約86万戸の供給停止、加入電話は、交換設備の障害により約29万、家屋の倒壊、ケーブルの焼失等によって約19万3,000件の障害が発生するなどの被害が生じた。

公共土木施設関係では、直轄管理河川で4河川の堤防や護岸等に32箇所の被害、府県・市町村管理河川で堤防の沈下、亀裂等の被害、西宮市の仁川百合野町において地すべりにより34名の犠牲者が生じるなどの被害が発生した。

農林水産業関係の被害については、農地、ため池等の農業用施設など各施設において甚大な被害が発生し、その被害総額は900億円程度であった。

1月17日、神戸は揺れた。

5時46分、私たち家族（父、母、私、妹・当時2歳）は寝ていて、父だけ仕事に行く準備をしていた。2つの部屋が襖で仕切られていて、当時はその襖をとって1つの部屋になって寝ていた。

ぐらぐら！！とゆれた瞬間目が覚めた。小さい子の地震の思い出して書いた作文とか見ると、「地震自体を知らないから怪獣がきたのかと思った」とかいろいろ思ったみたいだけど、そのころの私にはそんな

ことすらも思いつかなかった。何かもう、「何?！」と訳がわからなくてとりあえず怖かった。父の「地震や!! 布団かぶれ!」という声だけははっきり聞こえて、布団を頭まで思いっきりかぶって耐えた。その瞬間固くて重いものが私の上に落ちてきた。遠くのほうでガラスの割れるすさまじい音が聞こえてきた。

揺れがおさまって私はたまたまなくなって「助けて〜」と声を上げた。置き時計と大きい裁縫箱がタンスの上から落ちてきていて、私は身動きがとれなかった。私の声を聞いてお父さんはすぐ助けに来てくれた。上にのったものの全部どけてくれて私は起き上がることができた。

周りはとりあえず真っ暗だった。いつもつけている豆電球も消えていて周りが確認できなかった。少しずつ目が慣れてくるとタンス、仏壇が倒れて、上にのっている物という物が落ちていることに気づいた。

私はとりあえず眠かったし、布団の上で座っていた。そうしたら布団がじわじわ濡れてくるのを感じた。寝室の前には廊下を挟み、お風呂、洗面所があった。そこにあった洗濯機が倒れてためていた水が流れてきていた。そのせいでとりあえず私の布団は使えなくなって、親の布団のところに移動した。そのときにはもう眠気はなくなっていたけど親が「寝ときなさい」とうるさくてとりあえず布団の中に入ったり、もぞもぞしたりしていた。

親は居間の片付けに行くと言って、私と妹はスティックパンを渡され「絶対こっちには来たらあかんで」と強く言われ、待たされた。母はいつも布団の上で物を食べるとか絶対許してくれなかったから、なんか嬉しくて、けど父たちのことや隣の部屋の自分の机のことが気になっていた。

どれくらいたっただろう、だんだん回りも明るくなってきて、親が戻ってきた。「虫がひっくり返って死んでいた」と笑っていた。子供心に「虫もびっくりしたんやろなあ」と感じた。それからハッと思い出して「机は? 私の机は大丈夫やった?」と必死に聞いた。「倒れてなかったよ」と聞いてめちゃめちゃ安心した。今思えば固定されていたので強かったのだと思う。

テレビは動きまくって、食器は割れて足の踏み場がなかったことを聞いた。その時点で、今日学校はどうすればいいんやろう・・・という不安がでてきた。親は「そんなもん休みや」と言ったけど、すごく心配になった。今思ったらありえないことをずっと考えていた。

日が完全に昇って、カーテンを開けると電気なしでも部屋の中が見えるようになった。寝室が見えて唾然とした。親たちのところにたんすが2個、それと仏壇があって、たんす1個と仏壇は見事に倒れていた。誰も下敷きにならなくてよかったと心から思った。

親は力をあわせて仏壇とたんすを起こした。

それから上着を着て、外の様子を見に、知り合いの安否確認に行くことにした。いざ外に出ようとしたら玄関のドアがゆがんで開かなくなっていた。押したり引いたり、苦戦してやっと外に出た。外の様子はすさまじかった。私の住んでいた社宅の被害はほかに比べたらまだましなほうだったけど、階段のブロックがめちゃくちゃに壊れていたり、外壁に大きくひびが入ったりしていてショックをうけた。

ほかの社宅の様子も見に行った。私の住んでいた1号棟をはじめ、2号棟、3号棟、4号棟、5号棟の被害はそんなになかったけど、6号棟は見る限りでもう住めない様子だった。1階が2階につぶされてベランダの鉄格子が曲がっていた。1階に知り合いが住んでいたので本当に心配になった。そこのベランダ前に行くともベランダのドアが開いていて中が見えた。天井が落ちてきていて、ぞっとして早くそこから離れたかった。幸いにも知り合いは無事で本当によかった。

そこからまた違う知り合いの家に向かった。仲良しの友達のところだったのでとても心配だった。いつも通っていた道もまったく変わっていて、別の場所みたいに思えた。その友達の家の通りは本当にひどかった。木造の古い家が多かったせいか、つぶれている家も少なくなかった。亡くなった方もいたらしくて、4、5月になってその家を取り壊された後も母はずっとおまいりに行っていた。

友達の家は行ってみるともう誰もいなくて、車がなくなっていた。「車で避難したんだよ」と、親になだめられたけど無事なのか、無事じゃないのか、それも分からないまま家に帰ってきた。

相変わらず電気、ガス、水道は止まったままだったが昼食をとることにした。ご飯はあったみたいで、家族でりんご1個を分けて食べるとかいう惨事にはならなかったけど、余震が周期的に起こって、私は怖くて仕方なかった。ご飯も食べられなかった。親は「大きなゆれは来ない」とやけに落ち着いていたけど私は1人でびくびくしていた。

そこから会社の系統の近くの避難所に行った。そこで何人か友達にも会って、安心した。案の定すごい人で、トイレもすごいことになっていた。場所もとれて、狭いけど4人何とか寝れそうなスペースもあった。そこから妹の相手をしたり、塗り絵をしたり、お絵かきしたりして過ごした。夜はお弁当が配給されて、果物も食べた。だけど夜になるとかなり冷え込んで、余震も気になった。寒くて怖くて本当にいやだった。1日だけでもこんな風に感じたのだからずっとそこで生活していた人は、どんな気持ちだったのだろうと環境防災科に入り学んで感じた。父は寝ないでずっと守っていてくれた。家族でえびのように丸くなって寝た。

朝目が覚めて、着替えたりご飯を食べたり準備をして、大阪の祖父母の家に向かうことにした。電車は

通ってなかった。私たち家族は電車が通るところまでひたすら歩いた。私は毛布を両手で抱えて歩いた。2歳の妹は歩けるけど、まだ頼りない感じで、体力もないしすぐグズグズ言いはじめた。父が妹を抱いて、母が荷物を持って、交代して、の繰り返しだった。親は汗をかいて歩いているのに妹は抱っこされて、そのとき心から妹に腹が立った。私は不思議としんどいとは思わなかった。だけど喉が渇いて自動販売機のジュースを買ってといい続けていたのを覚えている。今思うと電気が通ってないわけだから冷えてないし、腐っていたと思うけど、買ってくれない親にも腹をたてていた。

何回か休憩しながら歩いたけど、私は親に食べ物を勧められても何も食べなかったらしい。そのことは覚えてないけどとりあえず冷たい飲み物がほしくてしかたなかった。

私たちは歩いて、歩いて歩き続けた。高速道路が倒れているのも見たし、ぐちゃぐちゃに壊れた家の前も通った。でこぼこの道をひたすら歩いた。道路はすごく渋滞していて車だらけだった。救急車、消防車、自衛隊の車を何度も見た。神戸の変わりように言葉が出なかった。そしてどこから電車に乗ったか忘れたが、祖父母の家に着いたときは、本当に安心した。祖母は大阪の徳庵というところに住んでいて、神戸からはかなり離れているが、こっちも少しゆれた、と言っていた。テレビで神戸の様子を見て、すぐ電話したけれどつながらなくて心配したと、いつも静かであまり感情を出さない祖母に涙目で言われて、自分も泣きそうになった。

この日から1ヶ月間こっちでの生活が始まった。

毎日、テレビでは亡くなった方の名前、安否確認がながれていた。落ち着いてくると学校のことや友達のこと、先生のこと気がなり始めた。みんな無事かなあと不安になった。そんな時担任の先生から手紙がきた。小学校の生徒、先生は全員無事だったこと、だけど6年の女子生徒のお母さんがなくなったことなどが書かれていた。私は先生に地震が怖かったこと、家族は全員無事だったこと、今大阪の祖父母の家に暮らしていること、を返事に書いた。クラスみんなが書いたのを編集して、文集という形で今も残っている。

お父さんは大阪から神戸の会社に通った。神戸製鋼所の煙突がこの地震で折れてしまったことを聞いた。会社自体にはそんな被害はなくて亡くなったかたもいなかったらしくよかったと思った。

お母さんは電車が走るようになってから妹を連れ神戸の家に毎日通って片付けをしていた。1度だけ私もついていったけど電車がすごい満員でお母さんとはぐれないようにしようと必死だった。私が行ったときはだいぶきれいになっていて、早くこっちに戻ってきたいなと思った。妹は幼いながらに体で覚えているらしく、お母さんが部屋を片付けている間も「早く出よう、早く出よう」とずっとぐずっていたのをすごく覚えている。

私はというと、大阪の小学校に通い始めた。集団登校をして毎日通った。1年1組になった。ランドセルがなくて代わりにリュックだったこと、神戸から越してきたことにたくさんの子が興味をもったらしく、最初の休み時間は囲まれて質問攻めになった。

1ヶ月という短い時間だったけど、友達もたくさんできたし学校にくる最後の日、みんなに手紙をもらったりして、今思い返してもいい思い出。

神戸に帰っていつもの家、いつもの学校に戻った。みんなや先生に久しぶりに会えて嬉しかった。学校は最初の何ヶ月間か避難所のままになっていて、教室や体育館には人が生活していた。それから仮設教室が建った。夏の間はそこで勉強した。ビンだった給食の牛乳はパックに変わっていて、少しの変化に戸惑いを覚えた。毎日たくさんの文房具の救援物資が届いた。それから少しして教室で勉強できるようになってある程度もとの生活に戻った。友達も戻ってきて安心した生活になった。

祖父母の家に向かう間見た神戸の町の崩壊のしように、もう二度と戻らないような気がした。だけど1年、2年たち神戸は震災前、それ以上の町になったと思う。

時がたち、私は小学校6年生になり小学校を卒業して長田区に引っ越した。

そこで中学3年間を過ごした。環境防災科のことを知ったのは近所の先輩が1期生だったからで、授業内容を聞いてすぐ入りたいと思って受験して、この学科で学ぶことができた。

南海大地震が来るといわれているが、阪神・淡路大震災を経験したものとして被害を減らすとか、あの地震のことを絶対無駄にしていけないと思っている。

今回卒業研究ということで、震災のことをまとめたが、このまとめは私がこの学科で3年間学んできたことのまとめでもあると思う。

「教訓」「語り継ぐ」が私たち環境防災科の一生のテーマだと今確信している。卒業して、防災関係の仕事に就かなくても、ここで学んだというプライドを持って生きていきたいと思う。

震えた1日

神戸市須磨区
脇田 英明

僕が地震という言葉を知ったのは、あの阪神・淡路大震災が起こった後のことだった。震災が起こってからの初めての学校で、教室に入るとみんなが口をそろえて「地震怖かったなー。」と、言っているのを聞いて、あのとてつもない大きな揺れは地震という名前だと初めて知った。僕が住んでいた地域は被害もたいしたことはなく、避難する必要もなく、比較的安全だった。あの頃の僕は地震が起こってから1週間くらいはさすがにあの揺れを忘れることはできなかったが、学校が始まり、友達とのうれしい再会があったからは、学校が休みになったことと給食が無くなって早く帰れることに大喜びをしていた。しかし、今こうして環境防災科に入って勉強していくうちにあの時おこったことはとてつもなく恐ろしいことだと思った。

震災当時、僕は小学1年生だった。昨日は垂水の祖父の家に泊まりに行き、今日家に帰ってきた。いつもどおり、普段と全く変わらない生活を送っていた。小学生だったので9時頃に就寝、またいつもと同じように朝が来るものと思っていたがこの日はそうではなかった。当時、2段ベッドの上に寝ていた僕は、無意識の内にベッドの柵をしっかりと握っていた。目が覚めるとなんだか体が金縛りにあったみたいに動かなくなっていた。いったいなにがあったかまったく分かっていなかった。その時、小さい揺れから急に大きな揺れに変わり、言葉では表現しにくいがとにかくすごかった。どれくらい揺れていたかはわからないが、自分の横にあるぶら下げ式の蛍光灯が大きく揺れ、台所の方からお皿が割れる音や食器棚の扉が勢いよく開く音など、うるさい音も聞こえてきた。かなり激しい揺れがあったと自分では思っていた。揺れが収まってから母の「下に降りてきなさい。」という言葉が聞こえた。急いで降りようとしたら、急に足が震えてきた。この時僕は初めて、まだ名前も知らないこの謎の揺れに対して恐怖を感じた。ベッドの階段を降りている時は、ずっと膝が震えてとまらなかった。それから妹と母が寝ていた布団に、妹と2人で懐中電灯をもちながらじっとしていた。両親は懐中電灯を持って家の中の被害を確認していた。僕が布団から見られる光景は、金魚の水槽が割れているくらいしかなかった。父親は消防官なのですぐに仕事に向かった。いつもなら父親が仕事に出かける時には誰も見送らないのに、その日だけは家族全員で父親を見送った。父親を見送ってから母親に「もう1回寝なさい。」と言われ、なかなか眠れないと思っていたのだが、恐怖を忘れるためにすぐに寝ようと努力した。

目が覚めたときには窓から太陽の光が差し込んできていて、時計を見ると9時頃だった。部屋の中が騒がしかったので、起きて様子を見に行くと、そこには祖父と祖母の姿があった。みんなで部屋の片づけをしている。僕は起きてまもなく食パンを食べた。震災後に知ったことだが、あの当時はコンビニやスーパーは食料を求める人が殺到していたとニュースで見た。しかし幸運なことに、僕の家には偶然にも食パンがあり、保存食があり、冷凍食品みたいなものもあった。現在は震災の教訓から非常食は必ず用意しているが、その当時はそんなこと全く行っていなかったで、この非常食があるのには大変助かった。そんなわけで食べ物に困ることはなかった、震災を振り返ってみてもこれは幸運なことだと家族でよく話し合ったりもした。

もう1つ幸運なことは、震災の日時だった。震災が起こった前日、僕は祖父の家に泊まりに行っていた。この時僕が寝ていたのは、テレビが足元にあるところだった。その当時は耐震補強やタンスやテレビを固定する金具をつけていなかった。もしあのまま祖父の家に泊まったままならばおそらく僕の足は折れていたという話を親から聞いた。もっとも、その当時の僕はまだその危機感をまったく知らなかったで、話を聞いてもあまり意味はわかっていなかった。その他にもガラスケースに入れられていた羽子板も落ちていなかった。これも固定する金具をつけていなかったと思うが、よく落ちなかったものだった。これが落ちていれば母親と妹の顔にガラスが降ってくる恐れがあったからだ。震災からずいぶんたった後にはなにか食事をする時、いかにもセットで売っていきそうな食器がひとつしか出てこない時があった。単に出していないだけかもしれないけれど、時々親が「この食器のもう1つは震災で割れてしまった。」と言っているのをよく聞いた。こんな風に色々なところに震災の傷跡があったのには自分自身驚いた。このように毎日の生活に様々な影響を与えた震災はとてもすごいものだったとあらためて実感した。

朝食を食べ終えた後は、家の片付けを手伝った。倒れていた本棚を起こし、本を入れる。割れていない食器を片付ける。給水車に水を汲みにいくなど、今までやったことのない仕事ばかりでとても大変だった。お昼ごろになると、突然ピーという音で電話が鳴った。電気が通った証拠だった。急いでテレビをつけるとそこにはもうもうと黒煙を上げて燃える住み慣れた神戸の町があった。僕はその光景をみて思わず息を呑んだ。どのテレビもこの震災のことを放送しており、僕はそのとき初めてこの得体の知れない何かが、

こんなにも被害をもたらしているものだと知った。僕の家周りはほとんど言っているほどに家が倒れている所はなかったので、家が倒れ、燃えている姿を見たのにはびっくりした。

ニュースを見ながら僕たちは昼食を食べることにした。しかし、僕はショックの余り食欲がなく、まったく食べなかったのを覚えている。午後に入ってから水がでた。しかし、まだなんか色が変わったような感じだった。お風呂とかに水は使ってはいけないみたいだったけど、親はそれを無視してみんなにお風呂に入るように言った。それから僕は家族と一緒にずっと家にいた。それから時々余震のようなものもあった気がするけどあんまり覚えていない。ひょっとしたら、僕自身が勝手に妄想しているだけかもしれないけれど。今でも電車が下を走っていたり、橋の上をトラックが通るとき、地面が揺れると地震がきたんじゃないかと思ってしまう。10年たった今でもそれは変わらない。やっぱり頭では忘れかけているけど体はしっかり覚えていると地面が揺れるたびに思った。

数日してから仕事に出かけた父が帰ってきた。かなり疲れた様子だった。たくさんの人を助けようとして、地面を掘り返したり瓦礫をどかしたりしていたが、もう手が冷たくなっている人もいたという。そんな話を聞きながら今はもう電気もガスも水道も普通に使えて、普通の生活とほとんど変わらない生活を送っている僕は、あの時はとても驚いた。まだ小学1年生でなんにもわからなかったけど震災の恐怖とたくさんの人が苦しんでいるのはよくわかった。

それからは祖父の家に手伝いに行っていた。部屋は僕たちが来る前にあらかじめ片付いていたので、僕はずっと水汲みをしていた。その時に団地の人と、色々なことを話すことができた。祖父の家に、昼間に行くことも珍しいのだが、こうして近所の人と話すことなどはじめてだった。ひとつの大きな壁にぶつかる人間みんな知らない人どうしても協力してやっていけるということを、今、昔のことを思い出しながら考えた。僕の家周りは結構知っている人が多かった。僕と同じくらいの子供を持った家族が結構いたし、団地だったけど結構みんな仲がよかった。被害が少なかったからそうなったのかもしれないけれど、協力する必要はあまりなかったみたいだった。

兵庫県立舞子高等学校

神戸市垂水区学が丘3-2

TEL: 078-783-5151

FAX: 078-783-5152

Mail: maiko-hs-ad@hyogo-c.ed.jp

HP: <http://www.hyogo-c.ed.jp/~maiko-hs/>